

---

# チートな俺は、Gクラス。

夜来

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チートな俺は、Gクラス。

### 【Nコード】

N2837W

### 【作者名】

夜来

### 【あらすじ】

死んだ 異世界で転生。 良くあるテンプレだ。 そんなこんなでチートな【チカラ】を貰っちゃった俺は、異世界の学園で二度目の学園生活を送ることになったちゃいました。 まあ、入ったクラスはアレだったけどな。 少年または青年の主人公チート系異世界学園物。 戦闘あり、笑いあり(?)、そして涙(笑)に恋愛(爆)と様々なフラグを連立&amp;回収しながら最強街道一直線。 そんなチート野郎の異世界生活記、とりあえず、ご覧あれ。 9/23:P  
V1,000,000&amp;ユニーク140,000越えキタ

！ありがとうございます！ これからも頑張ってください  
たいと思いますので、どうぞよろしくお願いします！

プロローグ：誰に向かって語ってたんだよ。

いや、正直ね。俺はあんまりこういうの信じなかったんだよ。幽霊が現れるとかさ、妖怪とか、鬼とか。勿論、魔法とか。転生とか。

「世界は物理法則にしたがって動いているのだー！ フハハー！」  
なんてことは流石に言っていないけれども。

でも、もう一度言うが、そういうオカルト系とか魔法系は、俺は信じなかった。

うん、過去形。「かった」なんだよ、俺の場合。

つまりさ、信じざるをえない場所に来ちゃったわけで。

良いかい、これを見てる読者達。よく考えろよ？

俺さ、日本から飛び立ってとある国に来てたんだ。何て言うかな

あ、休暇？ みたいな感じで。

あ、名前は言わないぞ？ どうせ、もう要らないだろうから。

そしたら、いきなりテロに巻き込まれたみたいで。比較的安心な

国って言われてたんだぜ。其処。

それでさ、多分だけでも、頭に鉛弾食らって。幸か不幸か、即死はしなかったんだ。

「他人のくっだらな争いに巻き込まれて死ぬのかよ……」って、  
人生の終わりにそんなこと考えて。其処で視界が真っ暗になった。

…でさ、目が覚めたら「赤ん坊」になってるんだぜ？

しかも、前世の記憶も完全に有る。これをさ、転生と言わずして何て言うんだよ。

さらにさらに、【チカラ】なんてのも有るんだ。俗に言う、特殊能力。ああ、もう疑うのは止そうと思ったよ。

というわけだ。え、全然分からない？

まあ、これを読んでけば自ずと分かってくるんじゃないか？

「これは、テンプレ世界のテンプレ男によるテンプレなお話」

「ただ、ちょっと男が強すぎるだけ。」

…それじゃ、ページをめくってくれ。無論、興味のある人だけで良いけどな。

…ん、「Gクラス」って何？ だって？

ああ、読み進めればわかってくるさ。俺の第二の人生を決める、重要なところだからな。

プロローグ：誰に向かって語ってたよ。（後書き）

夜来と申します。<sup>ヨライ</sup> 絶賛学生生活中です。

転生してチート野郎になるって良いよね…なんて思ったのが最初です。書き始めたらドンドンgggg。あら不思議。ま、読んでくれる方には最大級の感謝とお礼を。小説を書くのは下手。と  
いかどん底なので、アドバイスもドンドンお待ちしております。

第1話：アルトは、状況整理で大いに混乱した。

Side アルト

「……………ん」

…俺が目を開けると、いかにも西洋の小さな一軒家だなあという感じの天井が広がっていた。

…見知らぬ。見知らぬ天井だ…。

とりあえず、此処は何処だろう。そう思って体を起こそうと…起こそうと…

出来ない？

な、なんで出来ないんだ。混乱する俺。  
それではと、首を横に曲げようと…曲げ

出来ない…。

な、何がどうなって…て…手…？

あれ、俺の手はこんなに小さかったか。これではまるで赤子のようじゃないか。

…目を動かしてその付け根、腕の方を見る。  
…短い。異様に俺の腕が短いではないか。  
そして、見る限り俺は何かを着せられているようだ。白くて…この感覚は、タオル地？

…全く分からない。俺は今何がどうなっているんだ。もう一度言う、全く分からない。  
ああ駄目だ。状況を確認しようにも首が動かせないのはどうしようもない。

そんなことを思っていると、体の其処から、変な感覚が襲ってきた。それは顔に集中し、口や目に集まってきたようだ。いや、脳にも。

…く、何だこれは…此处で堕ちたら負け…負け？

…いや、堕ちなければいけないのか？ この変な感覚に？

理性では嫌だと、この感覚に負けたくないと思っているのに、本能はそれより強大な力を見せる。

…っ…だ、駄目だ…この…感覚に…

…負けっ…!!!

「オギャー!!!オギャー!!!」

口から出たのは、言葉、ではなく泣き声。  
目には、自然と涙が溜まって行き、小さな水玉となってツウツと  
柔らかな皮膚を滑っていく。

…は？

…本人、啞然。

無理もない。この奇怪な感覚に身を落とした直後、赤ん坊のよう  
な泣き声が喉の奥から遡って来るのだから。

「あらあらまあまあ！ ダーリン！ アルトが泣いちゃいましたよ  
！」

「何！？ …本当だな！ マイハニー！ もう食事の時間じゃないの  
かい？」

「あら、本当ですわ！ ドアーリン！ ミルクを作ってきて来るから、  
それまで愛しのアルトを見ててくださいな！」

「OKさムアイハニー！ アルトを見てるだけで10日はいけるさ  
！ ハッハッハ！」

耳に入ってくるのは、バタバタと床の上を走る音が2人分。 そし  
て人間の高い女の声1人分と低い男の声1人分。

その2人の声は、無駄にテンションが高い。 というか高すぎる。  
多分吹っ切れてる。

俺は、そのとき初めて男の声の主を見た。

「いつ見ても可愛い顔してるなあアルト！ 君を見るだけで大天使様が逃げ出そうかというくらい可愛いよ！」

どんくらいなんだそれは。

それはともかく、俺に顔を近づけてきた男声の主は、年齢50〜60ぐらいの男性だった。

髪は、白髪と金髪が混ざっていて、顔にはあちらこちら皺が寄っている。

鼻の下には、横に伸びた立派な髭が。 おお、漫画でしか見たこと無いぞ、こんなの。

声や口調は40代くらいかと思うほど張りのある声だったのだが。何時もこのテンションだから、声は若く聞こえるのかな。

そんなことを思い、ハンカチで俺の目を拭いながら先ほどのようなことを言っている爺さんを見ると、次に女の声の持ち主が。

「やっぱりアルトは可愛いわあ！ 貴方に見つめられると、悪魔王が消滅しかけそうになるくらい可愛いわよ！」

あ、消滅はしないんだ。 なんだか複雑な気分だな。

爺さんの次に顔を近づけてきたのは、やはり50〜60代ほどの婆さんだった。

やはり金髪と白髪が入り混じった長い髪。 これを後ろで1つに束ねているようだ。 顔にはやっぱり皺があつて。

しかし、にっこり笑うその顔は俺のお袋を思い出す。 優しい笑顔

だった。

声や口調も見かけより若々しい。　こんな2人が俺を見つめてい  
る。　優しい笑顔だが、何か怖い。

「ほら、アルトも自分の顔を見て、その可愛さに失神しちゃいなよ  
！」

…そう言って爺さんが俺に手鏡を近づけてくる。　其処に写ってい  
たのは。

紛れも無い。

赤ん坊だった。

…な、な・・な…

「オギャー！！！！オギャー！！！！」

「マイハニー！　アルトが激しく泣き始めたよ！　早くミルクをあ  
げてくれ！」

「俺は、全てを理解したと同時に、心の中で1人ごちた。赤ん坊って、大変なんだなあ」と。

第1話：アルトは、状況整理で大いに混乱した。（後書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第2話：アルトは、この世界の知識を10年で蓄えた。

Side アルト

.....。

「ラブリーなアルト！ 10歳おめでとう！」

「貴方が10歳になったということは、全世界に発信されてもおかしくないわ！！」

「そうよねダーリン！」

「そうさマイハニー！ 発信されないのが不思議なくらいだよ！  
ハッハッハ！」

…うぜえ。

「…あ、ありがとう」

というわけで、俺は10歳となった。つまりは、あの日から10年という月日が経ったわけで。

俺の容姿を説明しておく、赤茶色の首まで伸びた髪に、自分で言うのもなんだがキリッとした目。なんだろう、自分なのにカッコ良い。

元の世界でブサメンだった俺だから言えるセリフ・・・なのか？

この10年間、俺は「この世界」について…この爺さん、ナシズ、シューバと、婆さん、サナブ、シューバから色々と聞くことになっ

た。  
2人のテンションは10年間全く変わらず。 いや、それはそれで  
楽しくもあるんだけども。

10年も一緒に居れば話が聞けるのは明白で。 そうそう、外に連  
れて行ってもらったりもした。

……この世界。 【エンヴァー】と名の付いた大陸が陸地の殆どを  
占めている世界。 というより、大陸がエンヴァーしかないんだよ  
な。

その周りは殆ど海。 「殆ど」？ と思う人がいるかも知れないが、  
それは後で説明しようかな。

大陸は、幾つかのエリアに分かれている。

人間、または人形、人間に友好的な魔族が街を築く…通称「ヒュマ  
ン・エリア」 たぶん「ヒューマン」からとったんだと思うが。  
面積の割合は、ざつと55%。大陸はほぼ円形なのだが、そのほぼ  
右半分と、大陸の北に、左半分へとピヨコンと突き出た5%分。  
人間が住むだけあって、緑が一杯、資源は豊富、人間一杯。 元の  
世界みたいだ。

そのヒュマンも、幾つかの都市に分かれている。 多すぎて、紹介  
できないかもしれない。

左半分はといえば、魔族たちのご登場である。

…そうそう、魔族の説明をしていなかった。

みんな予想はついていると思うが、魔族というのは、この世界で人間  
ではない動物達の総称である。

それは殆どが動物型であり、そいつ等は「魔獣」。一部は高度に発達した通称「魔人」と呼ばれる。俗に言う、悪魔だったり。ヒュマンに居る人型の魔族は、魔人と呼ばれる、高度な知能を持った者たちだ。

…突然だが、ここはテンプレ<sup>ワールド</sup>世界。だから、やはりというか、人間と大陸左半分に居る魔族たちは対立している。

大陸左半分、上35%を占めるのは、人間に対立する魔族が住む、「サタナー・エリア」。悪魔：サタンからとったのか。

景観はというと、ヒュマンと対して変わらないらしい。意外や意外。

だが、一部は血の河が海へと流れていたり。「殆ど」海といったのはこれ。溶岩がどろどろと流れる高い火山が有ったり、まるで地獄のようだという。

そして、残り10%、大陸左半分、南はというと、密林があったり、草原があったり。

ヒュマンと変わらないが、そこに人間はあまり住んでいない。自然保護区のようなものだろうか。

比較的弱かったり、人間と比較的友好関係を結ぶ魔獣、魔人たちが其処に住む。名前は、「ジャンガー・エリア」。ジャングルからとったのかな。

「比較的」なので、中には強い奴もいれば、あまり人間と友好的でない奴も居るそうだ。

さて、俺がナシズ爺、サナブ婆と一緒に住むのは、ヒュマン南西部にある小さな村、ソツタと呼ばれるところだ。

自然豊かな村であり、河川や森、滝もあるらしい。

村と言っても、人が住んでいない村らしく…。住んでいるのは、俺たち3人だけらしい。

人が住んでいない理由、それは単に、ジャンガーに隣接しているからであろう。西を見れば、直ぐ近くに密林が見える。

ふう、こんなぐらいだろうか。

さてと、日常に戻ろう。

「なあ、爺ちゃん。」

「なんだいアルト！ 答えられることなら何でも答えちゃうぞ！」

「お…僕ももう10歳じゃん。やっぱり、15歳になったら学校へ行くんだよね。」

「勿論さ、愛しのアルト！ だからね、15歳になるまでの5年間、私達が教えられることは全部叩き込んでおこうと思ってる！」

「そうよアルト！ ダーリンは格闘術で鳴らした頃があったから、全部アルトに教えると思うわ！」

「私も教えられる魔法はすべて教えるつもりよ！」

「ダ　　リ　　ン！」  
「マイハニ　　！」

何故かひしと抱き合う2人。やはり、この2人のテンションには付いていけない。

へえ、爺さんは格闘家だったみたいだな。婆さんは、魔法使いか？どっちも使えるって、良いよな。この5年間で全部覚えられるのが不安だけど、教わることが出来る物は、全部教わっていかなきゃな。

「学校」は、皆さんご存知、教育の現場だ。この世界は15歳から、教育が始まるらしい。元の世界ではもう高校生だ。

それまでは、親が基本的なことを教えたり、ナシズ爺やサナブ婆みために、魔法や格闘術を教えたり。

そして学校へと入ってからは、勿論普通の授業、言語や数学、そしてこの世界特有、魔法の授業なんかもあるらしい。

…さて、ついに魔法だ。今までサラツと登場してて、あまり気付かなかつたかと思うけれども。

人間や魔族、ついでに植物にさえ、個体一つ一つの中には、「魔力」という不可視の力が存在する。見える人には見えるらしいが。

人間や魔人は、その魔力を繊細に扱うことが出来（個体差があるが）、魔力を「練り」、現象として「顕現」させ、「魔法」として扱うことが出来る。

勿論、魔法には色々な種類がある。

魔獣などの動物、植物などは、無意識に魔力を練り、魔法を使うことで角の攻撃力を高めたり、硬い皮膚の防御力を高めたりと、いろいろらしい。

そして、これは人間だけなのだが、魔法とは違う【チカラ】という  
ものがあるらしい。

例えば「火の玉を出現、操ることが出来るチカラ」だったり、「不  
可視の防御壁を出現させるチカラ」だったり。

人によって様々な【チカラ】、同じ【チカラ】を持つ者もいる  
が、は、まだ魔法とは違い、原理も全く分からない。  
だが、現象として其処に存在するのだ。確かに。

【チカラ】は、一般的に13歳前後で開花するらしい。なにそれ  
期待。とワクワクする気持ちも分からは無いだろう。

「さて、私は1から格闘術を教えるからね！ 学校へ行ったときに  
通用するかは分からないけど、教えて損は無いからね！」

「私も魔法を教えるわ！ 今の魔法のレベルがどんななのかはわか  
らないけど、教えておいて損は無いわね！」

「じゃあアルト！ 今日格闘だ！ 最初の最初から教えるからね  
！」

アルト「シューバ。 格闘術と魔法を教わる。

このとき俺は、5年間がこんなにも長い物だとは思わなかったんだ。  
つまり。かなり充実した5年間になったわけだ。

【チカラ】の開花もあったし、あの時驚いたのは、今でも記憶して  
いるよ。

さあ、次のページだ。

第2話：アルトは、この世界の知識を10年で蓄えた。（後書き）

本当は年齢を5歳にしようかと思いましたが、後々のことを考えて10歳に手直し。

どこか直されていないところがあったら、何なりとどござ。

勿論、感想やアドバイスもお待ちしております。

### 第3話：アルトは、この世界での「普通」を目の当たりにした。

Side アルト

さて、俺もあれから3年経ち、13歳となった。

赤茶色の首まである髪はそのままに、やはり少し大人っぽくなった感じがする。自分なただけけれども。

「一般的に【チカラ】が開花する歳」…。俺の【チカラ】の内容に、俺自身期待している。

俺は、未だナシズ爺とサナブ婆による格闘&魔法のレッスンを受け続けている。

…そう言っても、もう教えられることはほぼ教えたらしく、後は実践あるのみ、という感じだな。

「よしアルト！ 今日ジャンガーの、ミーモの森に行つて、実践だよ！」

「気をつけて行ってらっしゃいねアルト！ 心配ないとは思つけども！」

ミーモの森…このソツタ村から1番近いところに位置する、ジャンガー・エリアの森林地帯だ。

そこに住んでいるのは、鹿型魔獣のディアノ、猪型だが性格は温厚な魔獣、ボアーナ、その他たくさんの虫型魔獣が殆どだ。

稀に、凶暴な大型魔獣が出ることも有ると聞いたが：まあ、稀だ。

心配は要らないだろう：そう思って爺さん婆さんは其処を選んだのだろうと思う。

兩人曰く、「普通に教えたからだいじよぶ！」　だそうだが（兩人は何故か、この後抱き合っていた）、　普通に大丈夫なのか？　俺は軽く心配する。

そしてフラグにしか聞こえないのは、俺だけか？

ということ、やってきましたミーモの森。

ソツタに近いとは思えないぐらいの、深い森林が其処に広がっている。　所々、木々に遮られ陽光が当たらず、暗い場所もあるぐらいだ。

道らしき道も見当たらず、適当に進んでいる。

爺さんが俺に課した課題。　それは「ボアーナを5体狩ってくる」と。

その証拠に、ボアーナの尻尾を刈って持ってくるように言われた。

因みにだが、それは珍味として人気らしい。　どうでも良いが。

「・・・お

そうこうしていると、早速ポアーナ1体を発見。　どうやら、お食事中のようだ。　ちょうど良い。

ポアーナは、お食事に目がないらしいのだ。　そーっと後ろへと近寄り、その尻を…

「…オラアツ！」

「ブモオ！？」

蹴った。　思いつきり蹴ってやった。　それはもう清々しいくらい。　勿論驚いたのであるうそのポアーナは、クルツとこちらを向き、一瞬だけ俺の姿を確認した。　そう、蹴った奴の姿を。

…大切なお食事タイムを邪魔したクソ野郎の姿を。

ポアーナはお食事を邪魔されるとその温厚な性格は何処へやら、凶暴とは行かずに、好戦的な性格へと変貌する。　お食事中がちょうど良いといったのはその事もあって。　やっぱり、好戦的な相手と戦ったほうが実力付くと思うし。

そしてポアーナは、少しだけ前進、そしてこちらに振り返り。

「ブオオオオオオオオオ！！！！」

まさに「爆走」。　「猪突猛進」。　そんな勢いで、こちらへ向かってきたのだった。　よし、行くか。

「…ウラア！」  
「ブオオ！」

やはりというか、ボアーナの攻撃、突進は直線的だ、直ぐに曲がれないっぽい。

俺は、遠慮なく爺さんに教わった格闘術と、婆さんに教わった魔法を使わせてもらうことにした。

ボアーナの突進を左側に少しだけステップすることで回避。 あ、ボアーナと目が合った。

俺は、俺の右側を通り過ぎようとするボアーナに攻撃を食らわせるべく、右足を軸に反時計に回転。

回転する勢いを利用して左足を思い切り振る。 元の世界で言う、後ろ回し蹴りだ。

…ボアーナの弱点は、その柔らかい腹だ。 思い切り振った左足の踵は、丁度その腹へと直撃。

直進していたボアーナはその攻撃に対処することが出来ず、そんな鳴き声を上げながら奥へと吹っ飛んだ。

俺はというと、残心を決めながらも結構驚いた。 だって、猪を吹っ飛ばしたんだぜ？

…爺さん。 この世界じゃ、蹴りで猪を吹っ飛ばせるぐらいが普通なのか？

そして、驚きつつもボアーナに止めを刺すためにボアーナが倒れ伏

す場所まで走り、両手を体の前で合わせる。  
ボアーナは、先ほどの攻撃が効いたのか全く起きる気配が無い、チャンス。

「…スパークアロー《電矢》！」

厨二かよ…。 そう思いつつも魔力が矢になるイメージと共に魔法の名を叫ぶ。すると、俺の右横に電流を放つ黄色の矢が現れる。「行けっ！」とばかりに右手をボアーナに向かって振ると、それは俺の思い通り、ボアーナに向かって飛んでいった。

婆さん曰く、「魔法は、魔力がどんな形で顕現するのが大事なのよ」「だそつだ。

つまり先ほどのように、頭の中で魔力が矢になるイメージをすれば、矢が飛んでいく魔法になるという、シンプルな理論。かといって何でもかんでもイメージすれば良いわけでは勿論無く。

そこは、まあ修行によるんだと。詳しくはまあ、別の機会に話そうか。

さて、飛んでいった電流の矢は、見事ボアーナの頭に直撃した。「バン！」と音がし、その一瞬後にはボアーナの丸焼きが完成していた。

さすが電気。 しかし、電流で猪の丸焼きが完成するのが普通なのか、婆さん。 明らかに雷みたいなき音がした。

さて、証拠として集めるよう言われたボアーナの尻尾は強引に引きちぎり、「後4体か…」などと考えていると。

「…？」

それは、足音も無く接近してきた巨大な影。いや、こちらがボア  
ーナ狩りに夢中になって気づかなかっただけか。

黒い、ゴワゴワしていそうな体毛、3mは優に超すだろう体躯。

今にもギランと光り、狩られる者を見つめ殺そうかという、鋭い目。

「稀に、凶暴な大型魔獣が出ることも有ると聞いたが…」と、フ  
ラグ回収。

「…………ギャオオオオオオオオ！！！！」

俺が振り向き、ソイツの姿を確認した直後、ソイツは俺目掛け、突  
進して来た。

恐竜のような鳴き声と共に。

ソイツの名は、大熊型魔獣、ベアル。性格は、いたって凶暴であ  
る。

第3話・アルトは、「この世界での」「普通」を目の当たりにした。(後書き)

感想、アドバイスお待ちしております。

## 第4話：アルトは、その「チカラ」を発揮した。

Side アルト

大熊型魔獣、ベアル。

3mを超える体長と、300kgを超える体重を持つ、巨大な魔獣。元の世界での熊に似ている。

違うのは、切れ長の目。目を見るだけで、小魔獣は気絶するとも言われたり言われなかったり。

鳴き声はもはやゲームで言うラスボスの鳴き声であり、それを聞くだけで中型の魔獣が怯みあがってしまうとか何とか。

その歯は動物をかみ殺すために犬歯が比較的長く、少し口内からはみ出ているのが普通。それに噛みつかれると、大型の魔獣でもやばいとか何とか。

そのほか、鋭い両手の爪も、相手を引き裂くのに十分なほどだ。

性格は基本凶暴。狩れそうな相手を見つけると、所構わず狩る。

そんな性格をカバーするため、身体能力は高い。

深層魔法（魔獣が無意識に使う魔法、第2話参照）を使い、魔法攻撃を無効化する不可視の鎧を作り出すことがある。

そのため、「魔法使い殺し<sup>マシクキラー</sup>」と呼ばれたりする。サナブ婆は、倒すのに苦労したらしい。

基本的に黒い体毛だが（ブラックベアルと呼ばれる）、火山地域には深層魔法で暑さを遮断する、紅い体毛のレッドベアル。

雪原地域には、同じく寒さをシャットアウトする、白い体毛のホワ

イトベアルが居る。

…とまあ、ベアルとはこんな感じの魔獣である。

つまり、ブラックベアルに見初められた俺は、かなりやばい。やばいやばい。殺されるって。

「ギヤオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

と、突進してくるベアル。その速度は中々の物だ。だが、距離があるだけ避けられない事も無い。ベアルが近づくとつれ、ベアルの口元、はみ出した犬歯に、赤いものが付着しているのが一瞬見えた。

「食ってんのかよ…」

震え上がる俺。このベアルの体からして、ポアーナー一体で腹は膨れそうに無い。つまり腹がまだ減っている可能性が。腹が減った凶暴な魔獣より怖い魔獣は居ない。駄目だ、勝つ気はサラサラ無いが、逃げられる気が全くしない。

とりあえずベアルがギリギリまで近づいたときを狙って、横っ飛び、そして脱兎の如く逃げ出す…そんな理想を立てて、いよいよベアルが近づいてきた　　！！

「ギヤアアアアアオオオオ!!!」

「……うおおおおっ!?!」

近づいてきて分かる、圧倒的な威圧感、殺気、そして振り上げられた爪の鋭さ　　こんな物、受け止められるわけねえだろ！  
先ほどあんなに理想を描いていたにもかかわらず、俺はほぼ無意識に右に跳んだ。

ズバンツ！と、元の俺の位置、その後ろにあつた木の幹がベアルの爪によって直径の3分の2くらいが引き裂かれている。

あんな物俺が喰らつたら　　まだ格闘術と魔法しかない俺には、楽々とオレが血だまりの中で倒れているイメージが想像できた。

「グオオオオオオオオオ!!!」

「…あつ…やべえ!!!」

その光景に呆然としていた俺は、獲物を逃したことによる、ベアルの怒りの咆哮に正気を取り戻し、横っ飛びの体勢から急いで逃げ出そうとする。

…だが、現実はそう甘くも無く。

「うおおおおお!?!　速えええええ!!!」

決してベアルの身体能力を侮っていたわけではないが、先ほどの速さとはまったく違うその俊敏さに、チラリと後ろを向いた俺は度肝を抜かれた。

しかし、速い。　食い意地というものは、動物をこんなにも進化させるのか　　いやいや、違う違う！

もう少しで追いつかれそうだ。　そして、後ろから爪を振り下ろされては、対処できない！

…クソ、一か八か…ッ！

「…オラアアアアアアアアアア！！！！」

「グオツ！？」

俺が行ったのは、逃げる体勢から振り返り、爺さん直伝の正拳突きをベアルの腹へとお見舞いすることだった。

ベアルは俺の行為に驚いたようだが、今更防いでいられないらしい。　なんとたつて、俺とベアルの距離はベアルの速度で2秒もないだろうし、俺は振り向いて直ぐ正拳突きを放ったのだから。

「バアン！」と音がし、俺がベアルに向かって放った突きは

ベアルの腹、体毛で止まっていた。

やはり俺の突きはベアルにダメージを与える事が出来なかったらしく、俺は改めてやばいと感じた。

だが、ベアルからは一向に攻撃は来ない。

実はベアル、弱

点というか欠点がある。

それはリーチの短さ。3mという体長の癖に、腕はなんと1mほどなのだ。身長が1m50無く、しかもベアルの懐に居る俺に爪が届くことは無い。

しかし、懐に居れば安全というわけではなく、勿論ベアルは体重を掛けて俺を潰そうと仕掛けてくるだろう。これが、俺の恐れる理由。

それから逃れようと懐から脱出しても、爪の餌食。格闘は効かず、深層魔法で魔法は無意味。その身体能力で、爪を逃れても直ぐ追いかけてくる  
万事休す。

「グ……グア……」

今のは俺の呻きだ。そう、予想通りベアルは体重をかけ、俺を圧死させようとしている！  
もう俺は仰向きに押し倒されていた。

俺は、心からこう願った時は元の世界でもないだろう。

「怪力が欲しい……コイツを超えるような強さが欲しい……」と。

そして、その願いは叶うことになる。

…圧死する寸前だ。もう少しでも力が入れば、「潰れる」  
そう考えていた。

ああ、俺は転生しても、13年で人生を終えるのか　こうも思った。

しかし、神様はそれを許してくれなかったようだ。

「…グ？」

見事に、俺とベアルの声が重なった。どちらも、驚愕。

何か、俺の中から力が生み出されて各部位に補充されていくような、そんな感覚を覚える。端的に、力が漲ってきたのだ。

それは、俺の中にある考えを過<sup>よぎ</sup>らせた。「今なら、コイツを超えられるのではないのか」と。

グググツ…と、俺を圧死させるために掛けられたベアルの体が、押し返されていく。少しずつ。その間にも、俺の中の力はドンドン漲っていく。

ベアルの腹に当てられた俺の手は、再び押されること無く上へ上へと伸ばされている。立ち上がるために片腕を使ったが、そのもう一方の腕だけでも。

「う、おおおお…」

そして、元の…ベアルに突きをぶち込んだ時の体勢へと戻った。

だが、決定的に違うのは、俺が優勢であるということ。

何かが俺に教えてくれる。「もうパワーは十分溜まっている」と。

「…うおおおおおおらあああああ！…！！！」

渾身の力を込めた。先ほどと同じ、だがスピードや威力が段違い

だろっその正拳突きは、ベアルの腹にダメージを与えるどころか、吹っ飛ばした。しかも、拳で。その強さのため吹っ飛ばされたことなど無いベアルは、受身を取るなどできず、5mほど宙を舞い、ズドオオンと言う轟音と共に、地に堕ちた。

そして俺はベアルに止めを刺すべく、背中を強く打ちつけ、腕の短さも相まって動けないベアルへと近づくと、そしてその喉に狙いを定めた。

俺はその喉に向かって手刀での突きを放ち、それはいと容易くその強靱な喉を貫いた。骨が折れるグシャツという音。

…俺が手を引き抜いた時には、ベアルは目を驚愕に見開きながら、喉を真っ赤にして絶命していた。

「ハア…ハア…これが…これが…」

動かなくなったベアルを見下ろし、荒い息を吐き続ける俺。俺にはもう分かった。これが【チカラ】かと。人間にのみ備わる特殊能力かと。

嬉しいが、早く家に帰らなきゃな…そう思った矢先。…あれ、急に脚が崩れ落ちる…？

それだけでない、意識も急に朦朧としてきた俺は、あっけなく意識を闇に飛ばすのだった。

それはベアルと戦闘したことでの極度の緊張が解けたことによる積み重なった疲れもあったのだろうが、違う要因もあった。

初めて【チカラ】を使ったことで、体がそれについていけなくなっ

たのがそれなのだが、当時の俺がそれを知ることは無く。

後に心配した爺さん婆さんが絶命したベアルと共に倒れ伏す俺を見  
つけ、家で俺が目覚めるまで、俺の意識は何処かへと飛んでいたの  
だった。

こうして、アルト＝シューバの【チカラ】は開花した。

それは、俗にチートと呼ばれる物であり…転生した彼だか  
ら持てた物なのかも知れなかった。

第4話：アルトは、その【チカラ】を発揮した。（後書き）

【チカラ】 開花フラグ回収！。

感想、アドバイスお待ちしております！

第5話：アルトは、己にとって大事な場所へ行くこととなった。

Side アルト

……………見知らぬ天井だ…。

「何言ってるの愛しのアルト　ここは私たちの家よ　」

「思考読まないでよ婆ちゃん…」

「あら？　口に出てたわよ　」

目を開けた視界に入ったのは、俺の良く知った老婆の心配そうな姿だった。

見た目5・60台の婆さんが語尾に「」を付けてる風景は、俺の寝起きのぼんやりした意識を、シャキッとさせた。

心配そうな顔で「」をつけてるとかどういいう以下略　とかは気にしないで欲しい。　だって本当にそうだったんだから。

「それにしてもすごいわねアルト！　ベアルを倒しちゃうなんて！」

「え？…　あ、ああ、うん。　なんか…【チカラ】が発現したみたいなんだ」

「あ、やっぱり？　アルトがベアルを倒しちゃうなんて、【チカラ】を開花させる他に無いからね！」

…ああ、つまり俺はまだベアルを素で倒せるぐらい強くないんだよ

な…ちょっとショックだ。ナシズ爺は昔、素手で倒せたって言うし、でも、あの…俺の【チカラ】なら…。

「…あの現場を見る限り、アルトの【チカラ】は「ブースター身体強化系」って所かな！」

「あらダーリン！ 何時の間に？」

「さっきからさハニー！」

「ダア リイ ン！」

…ガシツと抱き合う2人。 ベッドでそれを冷めた目で見つめる俺。 勿論俺の目に二人は気づかない。

「…にしてもブースター身体強化系か」… と、俺は考え込む。

さて、今回は【チカラ】についてだ。

【チカラ】はこの前言った通り、人によって多種多様、様々な【チカラ】がある。

だが、様々な【チカラ】も大別すれば幾つかのカテゴリーに分けることができるのだ。

今日は、そのカテゴリーを紹介しようかな。

「ブースター身体強化系」…その名の通り、身体の一部、または全部の能力を強化する【チカラ】のカテゴリーだ。

この前の俺のように怪力になったり、腕を鋼鉄にしたり、とてつもない俊敏さを得ることが出来たり。特殊な例としては、体を煙に出来たりとかかな。

身体能力を強化するブースターので、「ブースター」と呼ばれるらしい。そのまんまだな。

「ネイチャリング自然操作系」…これもその名の通り。 自然の物体、または自然

現象を操る【チカラ】のカテゴリー。

雷を操ったり、木の根っこを触手のように操ったり…誰だ、触手プレイとかいった奴は。後は、水の三態を操ったりね。

これは結構強力な力の為、デメリット也多いらしい。まあ、それが世の常って奴だよな。無かつたらチートだし。

「召喚系」…<sup>サモナー</sup>いろいろな物を召喚する【チカラ】のカテゴリー。

魔獣を召喚するのは勿論の事、魔人を召喚したり、もしくは生き物ではない武具や防具を召喚できる【チカラ】もあるらしいな。

特殊な例を挙げるなら、自分の分身を召喚するって所かな。ドラゴンの召喚者なんかは、結構強力だ。

「他能力」…<sup>ジ・アサー</sup>上記3つに分類されない、特殊な【チカラ】のカテゴリー。

殆どの能力は上の3つに分類されるため、このカテゴリーの【チカラ】を持つ人は稀。かつ強力なのが多いらしい。

相手の精神を乗っ取るなんて【チカラ】、触れるだけで傷や病気を癒す回復系の【チカラ】もあるらしい。

RPGの勇者みたいな、光を操る【チカラ】みたいなのもあって、見ているだけではこのカテゴリーが1番面白いかも。

上3つは似たような【チカラ】が多いため、絶対数も多い。が、「他能力」の【チカラ】は似たようなのが少ないため、絶対数の割合は1:1:1:0.001ぐらいらしい。

「アルトの【チカラ】が開花したことだし！今日は3人でパーティとパーティーだね！」

「そうね！じゃあ私はチーキンの丸焼きでも用意するわ！ダー

リンは何を用意するの？」

「サクツとポテイターでも狩ってくるよ！　じゃあアルト！　まだ安静にしてるんだよ！」

「いつてきまーす」

…本当に仲がいいなあと今更ながら思いながら、ドアから出て行く2人を見送り、俺は再びベッドに横になった。

そうそう、チーキンとはその名の通り鶏型の魔獣だ。　姿形は鶏と同じで、やはりその肉は元の世界と同じで美味い。

ポテイターは植物型魔獣だ。端的に言うと、食人植物。

元の世界のハエトリソウみたいな二枚貝型の、しかし鋭い牙が付き、人を飲み込めるぐらい巨大な葉が印象的だ。

葉が生い茂る地域に住み着き、気付かずやってきた人間を食う恐ろしい植物だ。　根茎はそのままじゃが芋。　芋は勿論、葉もかなり美味い。

とまあ、2人は美味しい魔獣と植物を取りに行ったわけだ。2つとも一度食ったことがあるため、結構嬉しい。

俺は2人が帰ってくるまで、俺は先ほどの出来事を巻き戻し、再生していた。

力が漲り、あのベアルを押し返したときの感覚。今でも忘れられない。

そしてベアルの喉笛を突き破ったアレは、今でも鮮明に、網膜に焼き付いている。

あのタイミングで【チカラ】が開花したことは本当に幸運だった。

これも神様の悪戯だろうか。

そんなことを考えていたら、いつの間にか眠っていたようだ。

気がつくと、鼻を擽る良い香りが漂ってきた。　どうやら婆さんが既に帰ってきて、料理を作っているらしい。

考えていたことはひとまず胸にしまっておいて、今日は素直に、料理を楽しむとするかな。

「アルト！　ちょっと話があるんだけど、聞いてくれるかな？」

チーキンの丸焼きとポテイターのサラダ、コンソメのようなスープに、パンのような主食（あくまで『よくな』だが、食感は完全にパンだ）。

そんな、この家にしては（量だけは）豪勢な夕食だ。　香りだけでなく、味も申し分なく美味い。

そして、チーキンの丸焼きに齧り付くというワイルドな食い方をしながら、ナシズ爺が唐突に切り出してきた。　どうやって声を出しているんだ。

「いいえ…じゃなくて、何？　爺ちゃん。」

用事のない日曜の昼はいつも増刊号を見ていた俺。　画面に向かつて「いい　もー！」する癖が付いていた俺は、危うく恥をかく所だった。

気を取り直して、スープを静かにすすりながら（サナブ婆は食事マナーに厳しかった。爺さん以外には、だが）用件を尋ねた。

「うん、愛しのアルトももう13歳…いや、もう少しで14歳だよ

ね

そう、あと1年ちょっとで俺は二度目の教育を受けなければいけない。

元の世界ではそれはもう散々な学校生活を送ってきた俺。恐怖もあるが、期待はそれを大きく上回っていた。

「そうだけど…何？」

「15歳になっていきなり大きな街へと行くのはちょっとどうかなと思ってね。今度、私と一緒に学校がある街へと行かないかな？」

おお、それは良い提案。

確かに、下調べのなものをしておけば困ることは無いだろう。爺さんも、たまには良い事を言うな。

「何を言うんだいアルト。私が何時良い事を言わなかったんだい？」

「思考読まないでよ…。そうだね、一度行ってみたいかも」

「それじゃあ決定だね。それじゃ明後日。色々買出しもあるし、それを兼ねて行こうか」

このように、俺は爺さん婆さんが俺をやらせるだろう学校がある街、王都へと足を踏み入れることとなった。

この買出し兼下見はその目的だけでなく、俺の今後を決める、大事な物となるのだった。

第5話：アルトは、己にとって大事な場所へ行くこととなった。（後書き）

旅行中止（活動報告参照）でテンションがた落ち＼（＾o＾）ノオ  
ワタ

おかげで文も思いっきりグダグダになってしまいました。すみませ  
んorz

あ、老夫婦の思考読みは思いっきりネタですww 突っ込まないで

…ww

感想・アドバイスもどうぞよろしくです！

## 第6話：アルトは、王都エクシリア探索に出かけた。

王都エクシリア。

このエンヴァー大陸には、「四大国」と称される4つの大きな国がある。

そのうちの1つ、「ガフリヤ王国」の首都。それがこの王都、エクシリアなのである。

その大昔、テンプレ<sup>ワールド</sup>世界には良くある魔王軍の侵略がこのエンヴァーにもあつたらしい。

そして、これまた良くある勇者の活躍で平穏を取り戻したヒュマン・エリア。

その勇者：エクシルという名前だつたらしい：がその仲間と共に小さな町に住み着き、その町が次第に大きくなつた結果、王国となつたらしい。

王都と言っただけあつてそれはそれは繁栄しており、王族の住む「エクシリア城」を中心に、同心円状にひろがる都だ。

王城に1番近い円のエリアには、位の低い王族や富豪たちが住み、2番目の3分の2には平民、もう3分の1には貧民。3番目には商人、つまりは店が広がっている。

空から観察すると、綺麗に分けられているという。

これは、やはりと言うか外敵からの攻撃を防ぐためであつて、敵が王城へとたどり着く前に体勢を整え、迎え撃つということらしい。

「さーて、着いたよアルト！ 此処がガフリアの首都、王都エクシリアさ！」

「へえ…凄いな。…あの大きな城がエクシリア城だよな？」

「そうさアルト！ やっぱり大きいなあ…！」

王都に着いた俺とナシズ爺は、まずはその都の大きさと、1番城から遠い商人のエリアから見ても圧倒される城のデカさに驚いた。

正確には驚いているのは俺だけで、ナシズ爺といえはこの光景を懐かしんでいるかのよう。

エクシリアのエリア区分はかなり厳しいらしく。王城、王族・富豪、平民、貧民それぞれのエリアには全くお店というものが無いらしく。

つまりは、商人エリアには5つのエリアすべてから人が集まってくるのだ。1番面積が広い、3番目の円のエリアに陣取っているというのも頷ける。

周りを見してみる。人間が居る。蛙っぽい顔した魔人が魚っぽい魔獣を売っている。トラの魔人の女性がその子供(?)を連れて歩いている。

そう、色々な人が居るのだ。つまりは、めっちゃ平和。

「それじゃあ、まずはお店を見ていこうか！」

「うん、そうだね」

今日、このエクシリアに来たのは元々は買出しが目的。まずは買うべきものを買って、それからゆっくりと散策でもしようかな。

「うーん、アルトにはこれかな！」

「え、待った待った！ これ完全にメイド服じゃん！ 着れるわけないでしょ！」

「まあまあそう言わず！ これも体験の一部だから、さあさあ！」

「スパークアロー  
電矢！」

「Ohh！ …流石は八二一直伝の魔法だね！ かなり威力があるよ！」

…服屋に立ち寄った俺達は、店内でそんなことをやっていた。店長かな、エプロンをつけた綺麗な金髪の女の人は啞然としている。ほんとに何やってんだろうか。俺達。っていうかナシズ爺、俺の魔法喰らってピンピンしてるし。これがギャグ補正という奴か。結局、今着ているような茶色い服などを買って、俺達はそこを出た。

「爺ちゃん。お…僕、ちょっとエクシリアを散策してみたいんだけど」

「うん？ ああ、私なら勝手に回っていくから良いよ！ えーと、4時ぐらいになったら西門の出口に来てね！」

「…はい」

しかし、店めぐりは結構暇である。だんだんそう思ってきた俺は爺さんにそう提案した。

意外とあっさり、爺さんは了承してくれたのだが…。良いのか爺さん、知らない所に1人にして。エクシリア、結構広いが。

まあでも、許してもらったものは遠慮なくやるのが俺だ。今は1時。あと3時間はこのエクシリアを満喫できるわけだ。

…といってもお金があるわけではなく。ブラブラ歩くだけとなりそうさ。

俺はその後、王族・富豪エリア、平民エリア、そして商人エリアと好き勝手に歩き回った。

王族・富豪エリアでは、優雅にドレスを着こなす麗人や、漆黒のタキシードが似合うイケメンが闊歩していた。うわ、さすが富豪エリア。

平民エリアは、俺と同じような服装をした人たちがたくさん。公

園があつたが、子供が無邪気に遊んでいて、元気だなあとか思っていた。

商人エリアは少しだけ。アポロという、宇宙船のような名前で林檎のような形の果物を見ていると、店主(ライオン顔の魔人?)が一欠けくれた。

強面の癖に、性格は優しいなあとか思ってしまったな。あ、味は林檎みたいで、甘くて美味しかった。

…流石に城までは入れなかった。まあ、縁はないだろうし、良いか。

まあしかし、これ歩いてはまだ10分の1も踏破してないらしく(パンフレットより)。改めて「王都」と呼ばれる由縁を理解した俺だった。

さて、そんな時間もあつという間に過ぎ、もう少して4時だ。

平民エリアに居た俺は時計でそれに気付き、もう帰ろうかな…などと軽く欠伸をしながら立ち上がり、背伸びをした。

「キヤアアアアアアアアアアアアアア!!!」

…突然聞こえる女性の悲鳴。ああ、テンプレだから、良くあるよね…なんてことは当時思わなかったな。

でも、尋常ではないことは良く分かった。ちょっとだけその方へと振り向いた俺はその事を理解すると、急いでその声の元へと向か

った。

「…どうしたんですか？」

「あ、あそこにバーデインが2体…今、剣士のお嬢ちゃんが戦ってるっばいけど…」

その声の元へとたどり着くと、人がたくさん集まっていた。

適当に、近くにいた女性へと何が有ったか聞いていると、そんな答えが帰ってきた。

バーデインとは、鳥型の魔獣だ。体長は2mくらい。一応飛べるが、その主な攻撃方法は、異常に発達した脚で繰り出す蹴りである。

普段は鳥らしく、ジャンガーやヒュマンの空を駆け回っている。実際俺もソツタで見た。

だが、空から降りてくることは少ない。しかも、人と戦闘しているとなると珍しいことありやしない。

性格は基本穏やかなはずだが、今居る2体は凶暴な性格らしい。

しかし、そいつらの相手をしてる剣士のお嬢ちゃんとは、なんとも肝の据わった奴だな……と思ひ、その姿を見てみたくなる。

まあ、人の性<sup>さが</sup>つてやつだな。人を掻き分けながら、そいつの姿を目にしようとした。

「くっ、このっ！ たかがバーデインの癖にッ！」

ドーナツ状に広がる人の群れを押し退け、その5mほどポツカリ空いた穴の部分を見た俺。

其処では金髪の、俺と同じくらいの歳であろう少女が剣を振り回し、

バーデイン2体と戦っている光景だった。  
そんなことを叫びながら戦う少女。バーデインはそれを嘲笑うかのように強靱な脚を使って高く跳び、素早く動き、剣はまったく当たってない。  
それに全く気付かず、しかも、俺は爺さんに一応剣の振り方を教えてもらったが、その観点から行くと少女の剣の扱いは下手くそ。  
ただ振り回しているだけ。という感じた。「一応」教えてもらっただけの俺が言える立場ではないが。

しかし、此処の民衆は少女を助けようともせず、ただ見ているだけって感じた。そんなにバーデインが怖いのか。  
そういえば、よくよく見てみるとこの民衆の中には俺ぐらいの歳の奴と、40代以上のおっさんおばさん以上しかない。

なるほど、バーデインを倒せるぐらい強い奴がいないのか。ということは、この女の子は無謀にもバーデイン2体に挑み、苦戦しているのか。

これはひどい。

ザシュツッ！

そんな、物を切り裂く音がした。見ると、少女の放った一撃が偶然一体のバーデインの翼に当たったらしい。

「やった！」…そうやって小さく言う少女。いやそれ、Flag…。

…言わせねーよ！とばかりに、もう1体のバーデインは少女の隙を突いて背後に移動していた。

…これはやばくないか？

そう思ってる間にも、そのバーデインは右足を浮かせ、渾身のキックを放とうとしている。

うん、ヤバイね。女の子、その事に気付いてないし。余韻に浸る前にやることがあるだろうがッ！

自然に体が動いた。ああ、そのときは思わなかったが、きつと補正って奴だろうな。主人公補正。

しかし、もうバーデインがキックを放つまで0コンマ何秒しかないだろう。距離はおよそ5m。届きそうに届かない、そんな距離

間に合わないか…？ …くそ、俺にもっと速さがあれば…。

そう思った途端だ。そう、あれはベアルに押し潰されかけて【チカラ】が開花した時と同じような感覚。

その力の源みたいなのが、今度は脚に集まる。またも、直感みたいなのが俺の頭を過よった。

行ける！

途端、景色が溶けた。先ほどまで正常に見えていた周囲が微妙にぶれ、その一瞬後には目の前にバーデインが居た。

5mもの距離を、一瞬で詰めた訳だ。

「グエツ！？」と、俺が突然視界に入ったことによりバーデイン

が驚きの鳴き声を上げようとした。

しかし、その鳴き声は「グ」で止まった。何故か？ それは、そのバーデインの腹に、何か、深く深く沈みこむものがあつたから。

そう、それは俺の拳。バーデインが目の前に来た時点で右腕を引いていた俺は、バーデインの腹に向かって正拳突きストレートを叩き込んでやったのだ。

「ギヤアアアアア！」と甲高い声を上げながら、その大きな体は吹っ飛ばされる。その進行方向に居た民衆の目の前に落ちたそいつは、苦しそうに声を上げた。

む、気絶しなかったか…。 などと思っていると、先ほど剣で怪我したバーデインが立ち上がり、なにやら五月蠅く鳴き声をあげる。俺の拳に沈んだバーデインもギヤアギヤア五月蠅く鳴くと、シンク口したかのように2匹は立ち上がり、大空へと舞いあがっていった。

…骨を数本折った感触が有ったんだが、アイツ大丈夫かな…。

達者でな…と、もう既に見えなくなったバーデインを思い、脳内でハンカチを振っていると、後ろから何かが立ち上がるような音が。後ろを振り返ると、先ほどの少女が立っていて、体についていた砂を払っていた。

ん？ ああ、さっきのストレートで驚いて尻餅ついたのでね。健気だね。

「あ、あのー…」

「…何？」

「あ、えつとお…助けられてくれてありがとう…」

「ああ、良いって良いって」

なんだ、何か恥ずかしがりやな性格っぽいな。さっきの剣振つてるときとは大違い。もしかして、仕事になると性格変わるタイプだろうか。

「あの、私エイナって言います。エイナ＝ユーグリッド。…名前聞かせてもらっていいですか…良い？」

「ん、俺？…アルトって言うんだ、よろしく。…あつ、…あーち

クシヨウ！ 4時過ぎてる！…じゃあなエイナ！」

「えつ、ちよつと…」

同じくらいの歳だからだろうか。敬語かため口か迷っているようだ。俺は当然ため口。

何気なく時計を見ると、指しているのは4時10分。オーマイガッ！ ナシズ爺怒るかな…。

そういうわけで、その少女、エイナとの話を強引にぶっち切った俺は、エイナの困惑する声も聞きつつ、人を掻き分け、エクスリア西門へと向かった。

西門へたどり着いた俺は、やはり待っていたナシズ爺に怒られはせずとも、ちよいと注意させられた。気をつけます。

こうして、アルト＝シューバの一日王都探索は終わった。

第6話：アルトは、王都エクスリア探索に出かけた。(後書き)

ふう、文も気分も乗らない〜(^^)ノオワタ

感想・アドバイスお待ちしております！

第7話：アルトは、自分の【チカラ】を改めて実感した。

Side アルト

「うーん……」

「どうしたんだいアルト！ 元気無いじゃないか！ 風邪でも引いたかい？」

「全くよ！ そんな元気が無いアルトなんて、アルトじゃないわ！」

「……いやいや、別に違うつつ……」

「こつしちゃ居られないね！ 薬でももらってくるよ！」

「私も行くわ！ アルトはそのまま待ってて！」

「ハニー！」 「ダーリン！」

……はあ。

とりあえず、2人が抱き合いながら家を出て行ったのは無視しておこう。

…俺がこんなに落ち込んでいる…訳ではなく、考えているのは単に俺の【チカラ】のことだ。

前日、俺とナシズ爺はエンヴァー大陸のヒュマン・エリアの大部分

を占める四大国の1つ、ガフリア王国の首都、王都エクシリアへと向かった。

それは、単に服や生活必需品などの買出しと、王都という物の下見、散策を兼ねた物だったのだが…。

そこで偶然出くわした鳥型魔獣、バーデインとの戦闘(?)で、一瞬だけが凄まじい脚力を得たようなのだ。

アレは、どう見ても、どう感じ取っても【チカラ】なのだろうが…。俺はその数日前に、大熊型魔獣、ベアルとの戦闘で「怪力」という【チカラ】を身に着けたはず。

…不思議だ。

【チカラ】は、2つ身につけることは出来ない。 というより、それは無い。

ということは、これは1つの【チカラ】なのか？

ということは、「爆発的に体の一部を強化できる【チカラ】」か。 うん、そうに違いない。

…よし、ちょっと確かめてみよう。

とばかりに俺は立ち上がり、2人が飛び出して行ったまま開けっ放しだったドアをくぐり、家の前にある地面の上に立つ。

…お、手に収まるくらいの手ごろな石発見。 アレで良いや。

俺はそれを手に持ち、グツと力を入れてみる。 …まあ、そりゃ何も起きないよな。

さて、此処から本番だ。 グツと力を入れ、神経を集中させる。 体の中の【チカラ】を眠りから覚ますように…！ …さあ、来い！

怪力！

…バァン！

…そんな爆発したような、しかし硬質な音が響き、俺の手に収まっていた石は粉々に砕け散っていた。…うわ、すげえな。

飛び散った石のかけらで少々掌に傷がついたが、これは、結構楽しい。

なんとあって、元の世界で傷くらいが限界だった石が、粉々なんだぜ？ 13歳の俺にとっては（精神年齢はあれとしても）はしゃぐだろうよ。

それじゃ次は…脚力だな。

「脚力…来い！」とか思いながらクラウチングの姿勢をとり、走り出す…！

途端に、景色はあの時のようにぶれる。F1の選手は走行中、周りの景色が溶けて見えると聞いたが…まさにそれか。数秒走ったところで、はたと足を止めてみる。

…これはひどい…。

途端にそう思ってしまう。なんと、ミーモの森へと突っ込んでしまったらしいのだ。

後ろを振り返る。ソツタに一軒しかない俺達の家が、とても小さく見える。ああ、本当にとてつもない【チカラ】を手に入れたん

だな…。

鹿型魔獣のディアノが、いきなり、しかも尋常ではない速度で突っ込んできた俺を見て、逃げもせず、攻撃もせず、ただ俺を見ていた。たぶん、啞然としているのだろう。まあ、そりゃそうなる。

これ以上ミーモの森で力試し（という名の暴れ回り）をすると、またもやベアルが襲ってきてもおかしくは無い。

【チカラ】で自信はあるが、無闇に殺生はいけないな。 帰ろう。

…そして俺は、またもや凄まじいスピードで家に向かって走り出した。それでディアノ一体が気絶したのは、本人が知らない逸話である。

帰ってきた2人が執拗に勧める風邪薬を何とかやり過ごし、今は夕食時だ。

この前のチーキンの残りや、ご飯（のような物、味とか食感はお飯）を食べながら、爺さんはまたもや切り出した。

「アルト！ 15になったら学校に行くのはちゃんと分かってるよね？」

「勿論…。 何？ 今更そんなこと聞いて」

「うん、昨日までハニーと相談してたんだけど…」

「ついに、アルトの行く学校が決定したのよ！」

「本当？　へえ、楽しみだなあ…で、どんな学校なの？」

「うん、その事なんだけど…」

「いい？　アルトが行くのは、

ガフリア国立エク

シル魔法学園よ！」

…何…だと？

アルトは、その名を聞くと硬直してしまった。

第7話：アルトは、自分の「チカラ」を改めて実感した。（後書き）

何故かツイッター始めました。何故かこの名前で。

「Yorai | G」でお待ちしております。

感想・アドバイスドンドンお願いしますね！。

第8話：アルトは、ガフリア国立エクシル魔法学園へと向かった。

Side アルト

…待ちに待ったこの時がやってきた。そう、俺が学校の名を聞いてから1年程経ったのだ。

「さて、もう準備は出来たかい？ アルト！」

「寮生活で大変だと思っけど！ 頑張ってきてね！」

「うん。 もう何回も確かめたし。 大丈夫だと思うよ」

今日は生まれ育った家を発つ日。 ここまで15年。 長かった。

…0歳の頃から意識があるから、なお更だ。

俺が持つバッグの中には、2人に揃えてもらった衣類や、文房具、生活用品などが入っている。 多少の本と、そしてお金が少量。

まあ、先ほど俺が言ったように何回も確認したし。 何かを忘れる必要は無いかな。

「それじゃ、行って来るね」

「いつてらっしやーい！」

「気をつけるんだよー！」

「ハニー！」 「ダーリン！」

もはや恒例となった夫婦の抱きつき付きの挨拶を背中に受け、俺はソツタを後にした。

俺が向かうのは、ガフリア王国首都、王都エクシリアの郊外にある  
巨大学園都市。ガフリア国立、エクシル魔法学園である。

### ガフリア国立エクシル魔法学園。

首都名の元にもなっている、かつてエンヴァー大陸を救った勇者、  
エクシルの名が付いた教育機関。

その名に恥じない高いレベルを持つ学園であり、それは大陸中でト  
ップとも。

…そう、「トップ」なのだ。元の世界で言う、ハーバード？俺  
が初めてその名を聞いた時、戦々恐々としていたのはそのためだ。

勿論高いレベルのため、毎年多くの受験者がやってくる。  
しかし、受験で出される問題も、他の学園とは桁違い。総受験者の  
6分の5が落とされるらしい。難易度の高さが伺える。

…ここで、多くの読者様はちょっと疑問に思うだろう。「え、お  
前は受験してそれに受かったのか？」と…。

…アンサー、NOだ。  
いや、ちょっと違う。俺は、今…  
ッと滑ってもらっても構わない。ズコー

実はエクシル魔法学園、受験者に対する態度が物凄い良いのだ。  
知名度を保つためなのか、それは分からないが。

毎年受験になると、建築系の魔法を扱う者たちが総動員で、受験者の仮の寮を作ってくれるのだ。本当の寮と、瓜二つぐらいに。これは「自分が通うかもしれない学園なのだから、寮の雰囲気にも慣れていくべきだ」という学園長の計らいらしい。

ソツタの家から持っていた荷物が少なかったのも、もう受かったかのような雰囲気だったのも、このためである。紛らわしい。

ガフリアを斜めに踏破し、エクシリアに着いたのはその日の正午ほどである。

「速すぎ？ いや、俺の【チカラ】を使ったのだ。おかげで、普通に歩くより疲れたが。」

そのおかげで魔獣とエンカウントしなかったのだ。このぐらいは我慢しなければ。しかし、結構辛い。

試験日は、明日である。俺は適当に宿を取り 学園の仮の寮が使えるのは試験日からである 旅（笑）の疲れをとることにした。

エクシル魔法学園の試験日は、エクシリアではちょっとしたお祭り騒ぎである。

なぜかというヒュマン・エリア全土から受験者が来るのだ。普段とは比べ物にならないぐらいの集客が見込めるということで、商人エリアはかなり賑わうらしい。

そして学園に行くにはエクシリアを横断し、専用の出入り口から行かなければいけない。

何が言いたいかという。試験日当日にエクシリアに行くと、大変なことになるのである。主にもみくちゃ的な意味で。

それを避けるため、俺はその前日にエクシリアに入り、出入り口付近の宿を取る事にしたのだ。試験の直前に疲れるのは、是が非でも勘弁願いたい。

「…あ、アレがエクシルの出入り口か」

学園の出入り口がエクシリア内の1つしかないのは、単に防衛のためなのだろう。

学園の周囲では強固な壁がそり立っているし、上には透明ながらも強力な魔法壁<sup>バリア</sup>が学園直属の魔術師によって張られている。

それでも心配な学園長は、入り口をエクシリア内に作ることで、外敵の侵入を防ぐんだそうだ。だが、あまり意味が無いと思うのは、俺だけだろうか？

そして、宿を発見。 出入り口の目の前にある「Black Jack」という名の宿だ。 …そんな名前で、宿なのか？

名前に似合わぬ、質素な入り口から入ると、店主らしき人が、カウンターに座っていた。

「 おう、Black Jackへようこそ」

一瞬、帰ろうと思った。 だってさ、だって「黒い土佐犬のガツチムチな魔人」が、「エプロン（普通の灰色の奴だ）」つけて「ものすごい低い声」でようこそ、だぜ？

身震いがした。 だが、だがこういう人に限って良い人……

「お？ 学園の受験者か？ …なるほど、宿代半額にしてやるよ、

泊まっっていくか？」

…良い人だった。　　おー良かった。　　…しかし、よく俺が学園受験者だとわかったな…。　　観察眼パネエ。

良い人そうだったので、俺は早速泊まる事にし（幸運にも、俺の部屋で空き部屋はなくなったらしい）、その店主の魔人と話してみることにした。

店主の名前はジャック。　　店名は其処からつけたらしい。　　なるほど、毛色は漆黒だしな。

この店は数年前から開いており、学園の試験日前日になると俺と同じ考えを持った奴が拳<sup>こぶこ</sup>つて泊まりに来るのだそうだ。

ジャックさんは、そんな受験者に優しく宿代を半額にしているのだそうだ。　　強面な顔に似合わず、やはり優しいジャックさんなのだった。

…この後、「俺も半額にしてくれよ」とか言う酔っ払いの客が部屋から出てきたが、ジャックさんは「うるせえ！」と一喝。　　やはり怖い。

俺は宿代である銀貨1枚（元の世界で言う、5000円ほど）をジャックさんに渡し、とりあえず俺は部屋に行くことにした。

宿の二階に上がり、ジャックさんに貰った鍵で部屋を空けると、ベッドに柵やクローゼットが配置よく、それでいてシンプルな造りになっていた。

ベッドに横になる。　　おお、フカフカだ。　　きっとジャックさんが丁寧に干して……。　　身震いが。　　主にイメージで。

俺は持ってきたバッグから本を取り出す。　　といっても小説などで

はなく、受験のための勉強だ。

ナシズ爺とサナブ婆特製の、元の世界で言う暗記本。　かなり勉強してきたからなあ・・・としみじみ。

そうそう、学園の受験科目は基本科目の国語と数学、そして魔法学、そして、【チカラ】のレベル測定と続く。

学園は魔法と【チカラ】に文字通り力を入れているようで…

『「国語の点数」 + 「数学の点数」 + 「魔法学の点数×2」 + 【チカラ】のレベル×2』が受験での点数になり、合否とクラスが決まるらしい。

【チカラ】のレベルとは、その名のとおり、【チカラ】の強弱を数値化したもの。　最高は100。

例えば「火の玉を操る【チカラ】」なら40ほど。　「火炎を操る

【チカラ】」なら60ほどと、差はある。

平均は460点ほど。　入るには380点は取らないと…なんて、婆さんは言っていた。　よく知ってるな、婆さん。

…そのまま暗記本を見ていると、寝てしまっていたようだ。　もう夜は更け、辺りは段々と賑わっているようだった。

俺は金の入った袋をバッグから引っ掴んで夜の街へと駆け出した。

勿論夜飯を食ったためだ。

…適当な店で食おうと思っていた俺。　あ、ホットドッグ（らしき物体）を売る店を発見。　アレで良いか。

「らっしゃい！」と、魚の魔人が対応してきた。　「それ1…いや2つで」というと、すぐにホカホカのホットドッグ以下略が。　2つ

にしたのは、結構腹が減っていたから。  
銅貨10枚らしい。えーっと…あ、9枚しかない。

…あー…後1枚あったらな…仕方ない、1つにして他の店に行くか  
………と、俺はその魚人に1個にして欲しいと伝えようとしたんだ。  
すると、ふと見た袋の底にきらりと光る円形のメダルが。…銅貨  
だ。見落としていたのか？

これで10枚。やはり2つで良いや。結局俺は2つそれを買っ  
た。パン(らしき物)がちよつと硬かったが、まあまあ美味かつ  
た。

…やっぱり見落としていたのかなー…と俺は自己解決し、「Bla  
ck Jack」へと戻り、風呂齒磨き洗顔、すぐに寝た。

ガフリア国立エクシル魔法学園の試験日まで、あと1日。

第8話：アルトは、ガフリア国立エクシル魔法学園へと向かった。(後書き)

昨日何があったんだろうか

12000pvやら何やらありがとうございます！

とりあえずアルトの【チカラ】がブースターじゃないということは書きましたと。

うおお、サッカー見ないと！

感想・アドバイス、お待ちしております！

第9話：アルトは、続ける思いで最後の掲示を見た。

Side アルト

「…おっし」

AM7:30。

一晩ぐっすりと寝て、今日はエクシル魔法学園の試験日だ。徹夜よりぐっすり寝たほうがしっかり試験に臨めると、ナシズ爺からのアドバイスだ。

今日からは学園謹製の仮寮生活となるため、クローゼットにかけてあった服を取り、バッグに全ての荷物を入れ、部屋を後にする。

「…おはよう」

「…あ、おはようございます」

1階へと下ると、ジャックさんは既にカウンターに座っていた。…この人だけは、流石に敬語でしか喋れねえな…。

朝食を頼むと、ジャックさんはその強面とガチムチな体を動かし、裏へと入っていった。

「Black Jack」…夕食は出さないが、朝食は出してくれる。まるでホテルだなと思いつながら、ジャックさんを待った。

「お待たせ。 Black Jack 特製のウィッチサンドだ」

数分待つて裏から出てきたジャックさん。その手には、元の世界で言うサンドウィッチが皿に盛られていた。

…うん、美味そうだ。美味そうなんだが…なぜ挟まれている具がハンバーガーのようにとてつもなく厚いんだ…？

…ウィッチサンド。

その昔、高名な魔女がハンバーグ（のような物）とトマト（っぽい野菜）、レタス（に似た葉物）を食パン（みたいな物）で挟んで食ったのが始まりらしい。

ああ、だから「魔女サンド」なんだ。つまりサンドウィッチとハンバーガーを合わせた物だと。紛らわしいな。

「…美味しいですね」

「ハハ、だろ？ 此処らへんじゃ1番だと自覚してるからな」

ジャックさんはウィッチサンドのことを褒められると笑うのだろうか。今までいつも強面だったのに。

味のほうだかももちろん見た目通りに美味く、僅か数分で食べ終えてしまった。ちゃんと噛まなくちゃな。

…さて、行くか。

「よし、頑張つて来いよ」

「はい、行ってきます」

きちんと洗顔磨きをし、ジャックさんの声援兼挨拶を受けながら宿屋「Black Jack」を出たのはAM8:00だ。

表へ出ると、其処には試験を受けるのだろう、たくさんの少年少女たちと、その親だろう老若男女が集まってきた。

試験には受験者だけ居れば良いのだが、やはり心配なのだろう、多くの受験者に親が着いてきているようだった。

（俺の爺さんと婆さんは、全く心配じゃなかったらしい）

まだ比較的空いている時間帯だったらしく、「Black Jack」が学園正門に近い事もあって、楽に門を潜り抜けることが出来た。

そういえば、まだ学園全体を見たことは無いな…そう思いながら、俺は敷地内へと、1歩足を踏み入れた

エクシル魔法学園の敷地は広大だ。東京ドームが何個入るか分からない。

その中には一般の教室棟を始め、各種類に応じた道場（武術家も集まるのか…）や食堂、温・冷水プール、果てにはスタジアムまで

ありとあらゆる施設が有り、そのレベルの高さを窺い知ることが出来る。

制服はブレザーらしい。試験会場に行くまでの間、ありとあらゆるところでその紺色の制服を見た人物を見かけた。

私服なのは、俺達受験生だけだ。…まあ、紹介はこれぐらいにして、さっさと試験会場へと行こうか。

試験会場は一般の教室が立ち並ぶ一般教室棟。A・B・Cと3棟あるが、全てを使って試験を行うらしい。受験者数が多いためだ。俺は受付でエルフの姉ちゃんに俺が受ける場所が記載された紙を受け取り、その場所へと向かう。

場所は、「3・E」。どうやら3・Eというホームルームのようだ。案内板に従い、3・Eへと向かう。案

この学園は合否判定と共にクラスが決まる。点数によってG～Aクラスに分けられ、それは卒業までの間、維持される。勿論、点数が良く上位クラスに入ることができたならば待遇もよく、下位クラスならば待遇は低い。つまり、この入学試験で全て決まるわけだ。この制度作った奴、とりあえず出て来い。

兎にも角にも、俺は指定された3・Eへと着き、黒板(?)に掲示された席へと着く。

そして、俺が爺婆特製の暗記本を読んでいる間にも次々と受験者は席に着き、思い思いの方法で最後の追い込みをしている様だった。

そして、AM9:00。国語、数学、魔法学全ての試験用紙が配られると、スピーカー魔術式遠隔声波発信器で張りのある女の声が告げた。

「それでは、試験始め！」

俺は、少し緊張しながらも、一枚目…国語の用紙を表向きにしたのだった

それから、1週間が経った。今日は、エクシル魔法学園、合格発表の日。…え、早い？仕方ないじゃないか、本当にすることが無いんだから。

簡潔に言うと、試験は結構簡単だった。自分で言うのもなんだが、全教科90点以上は超えているだろうと思う。

お、これは上位クラス確定か？ フラグ？ またまた。

【チカラ】のレベル判定は、3教科が終わった後、最後に行われた。なにやら、深く帽子を被って濃紺のローブを着た男が3・Eのドアを開け、バスケットボールほどの大きさの黒い球を持ってきた。あれか？ ガツか？ と思っていると、男はそれを教壇に置いた。間もなく、試験開始の宣言をした女の声がスピーカーから聞こえる。

「今入ってきた男たちが持つ黒い球は「判定球<sup>レベル・ボール</sup>」だ。それに10秒手を付け、【チカラ】のレベル判定をしてから仮寮の受付に行きなさい。以上」

なるほど、これで【チカラ】のレベル判定をするわけか。納得。

俺達は一列に並び、順番に判定球へと手を伸ばす。

判定球は、手を付けるとその黒がいろいろな変化をするらしい。

俺が見ていた限りでは、ある者は触った途端にその黒が透明に変化し、その透明の球の中で雲丹のような棘棘が浮いていた。

ある者は、黒が透明に変化すると、その黒は漆黒の火炎のように球の中で逆巻き始めた。

と、ついに俺の番が来た。 神妙な面持ちで、判定球に触る俺。：

その黒が透明に変化し、どんな変化が起こったかという…。何も起こらなかった。

そう、何も起こらないのだ。 10秒経っても、同じ黒球のまま。

派手な変化を内心期待していた俺は、ちょっとがっかりしながら3

- Eを後にしたのだった。

とまあこんな感じだ。そして仮の寮（結構快適。こればかりはクラス関係なく同じ部屋だという）に登録し、今に至ると。さて、そろそろかな…とまっていると、スピーカーからまた同じ女の声。

「諸君、おはよう。午前9：00になった。仮寮の入り口に合格者の掲示をしておく。」  
「合格したものは、あわせて掲示されているクラスのHRへと向かいなさい。以上」

やっと来た。「行くか!」という自分を鼓舞させる声を出し、廊下を駆けていく同じ受験者達と共に俺は掲示へと向かった。

仮寮入り口、掲示近くへと来た俺は、張られている掲示に目を移す。「エクシル魔法学園 合格者掲示」という大きな文字が一番上に書かれ、その横には「合格者数 280名」と書かれている。  
G/Aの7クラスで280名なのだから、1クラス40名か。大きな学校だ。

そして掲示の方法は、「順位 名前 得点」の順で掲載される。得点も掲示されるとは中々鬼だな、この学園。

俺は、最高位クラスから俺の名前を探すことにした。

Aクラス

1 ダント・サステイフ 540

・

40 エリカ＝フレイユ 516

Aクラスには俺の名前は無かった。まあ仕方ないか。しかし、日本人っぽい名前を見つけるのはなぜだろうか。エリカとか、サトシなんてのも有った。

その後も、次々と掲示を見て回る俺だったが、俺の名前と俺がエンカウントすることは無かった。

そして最後、最下位Gクラス。俺は、縋る気持ちで掲示を見てみた。

Gクラス

241 ミリア・メテリア 400

・  
・  
・

280 アルト＝シューバ 380

……

……最下位……だと……？

こうしてアルト＝シューバは、ガフリア国立エクシル魔法学園に合格し、入学することとなった。

だが、入るクラスは最低の、Gクラスだった。

**第9話：アルトは、続ける思いで最後の掲示を見た。（後書き）**

はい、Gクラスはここで出ました。最下位クラスの最下位、アルト君。

感想・アドバイス、お待ちしております。

第10話：アルトは、Gクラスからの痛い視線を受けた。(前書き)

ランキング55位だった件について。

何はともあれ、ありがとうございます。

今回は、1番goodですorz

## 第10話：アルトは、Gクラスからの痛い視線を受けた。

Side アルト

Gクラス。 エクシル魔法学園の1学年全7クラスのうち、最低位ワーストのクラス。

だが、総合得点が低いだけであり。中には一教科が出来なかっただけで其処そこに落とされる秀才が居たり、天才が居たり。 Gクラスの面々は、何時まじも個性的である。

Gクラス掲示の前で280人中280位という結果に沈む俺は、項う垂なれる中で近くにある魔術式遠隔声波発信器スリーカーから流れる声に気づいた。

「 繰り返す。 合格した者は、速やかにそのクラスのHRホームルームに入りなさい 」

「 …あ、やべ… 」

悲しみの中、急いで俺は1 - GのHRへと向かった。

…その面積だけでも広大な一般教室棟。 その1階で俺は走っていた。

1 - Aから1 - Gまでは順番にクラスが並べられ、当然のように1 - Aは玄関から1番近く、Gクラスは1番遠い。

そのお陰せいで、俺は1 - Aの設備の良さをまじまじと見せ付けられる

こととなった。

…あえて言うなら、大学の講義室を普通の教室用に改造した物。全ての者が黒板を見やすいように、後ろへ行くに従って机が一段高くなっている。

高校生なのに大学レベルかよ…。俺は泣きたくなる。これから考える1-Gの姿を想像するとな。

その他にもまだ設備はありそうだが、深くへ突っ込めば本当に泣いてしまいそうだ。

そして1-B、1-C…と過ぎていき、ついに俺は1-Gのクラスの前へとたどり着いた。

「…うわ、開けにくっ…」

早速欠点発見。窓はすりガラスだが、如何せんドアが開けにくい。これはひどいな。

しかし、開けられないというわけではない。力を少し入れて、ドアを開け切った。

……。

後ずさりし、ドアをもう一度閉めたくなった。

ああ、設備はボロ臭い学校机と椅子だ。まあ酷いにしても良かった、段ボールとかじゃなくて。

しかし、それよりも。…クラス中から、視線が飛んでくるんだぜ？ 多分俺が入る前までは談笑してた男子、女子、突っ伏してた男子までもが。

もう俺以外は揃っていたのであろう。78個の突き刺さるような目が痛い。ああ、俺が座る席が何処か、わくわくしてるわけだな。

この学園では、縦5×横8席。計40個の机と椅子が1クラスに並べられている。

上から見て、1番左上がクラス1位。其処から右へと2位、3位と続き、1番右下が40位だ。

……この空気の中で、俺は1番右下の席へと座らなければいけないのか。

…意を決して。

ガタツ…ガタツ

座ったさ。ああ、座ったとも。……チラリと、周りの様子を見た。

談笑してた男子A「…フ…ガヤガヤ」  
突っ伏してた女子B「…フフ…」

…俺、皆から笑われたよね。微笑ほほえみを受けたよね。主に哀れみの…それで先ほどの動きを再開させたクラスメイト達に、俺はさらにさらに憂鬱となり、机へと突っ伏したのだった。

「…おーい」

…トントンと、肩を叩かれた。男なのか女なのかわからない声だな。

…ほっとしてくれよ、俺は皆から笑われて憂鬱なんだ、お前も俺をからかいに来たんだろ……。

「おーい！」

「…ガツ!? 痛え…！」

ドン！ と、肩を叩なぐらかれた。そんな声と共に、起き上がりたくない意思に反して反射的に思わず起き上がる俺。そして、殴った奴のほうを向いた。誰だよ、俺にこんな仕打ちをする奴は！

…其処には、黒いローブを着た赤金色の髪を持つ女が居た。端正な顔で、とても殴る奴の顔とは思えなかった。

…多分俺がこの女の方を向いたからだろうがニコニコしており、やはり殴る奴の顔とは思えない。聞いてみた。

「……何だよ」

赤茶の髪を掻きながら尋ねる俺。するとその女は、思いも寄らぬ事を口走ってきた。

「……」

「やっぱりだ。……久しぶりだな、アルト」

…は？　　一瞬、思考が止まった。　　え、俺はこんな美少女を  
ナンパしたことなんてないぞ？  
…ああ、同姓同名の人違いかな。　　同じ名前を持つ人はこの世に3  
人いると言っし。

「……………人違いじゃないか？」

これでこの女が去ってくれば、俺はまた憂鬱感に浸れる…ウッフ…  
しかし、女はまたも予想を裏切り、思いも寄らぬ事を口走った。  
この言葉は、俺がこの日衝撃を受けた言葉、第2位だ。

「<sup>まち</sup>違いよ。　　…覚えてないか？　　エイナ＝ユーグリッドって  
言う俺の名前をさ」

…またも思考が止まった。　　…エイナ＝ユーグリッドって言えば  
……………！！！！  
思い出した。　　一年前のあの日、そう、エクシリアに下見に出た  
日だ。そこで、バーディン2体と果敢に戦っていたあの少女。

「…は、お前…本当にエイナか？」

「正真正銘、本物だ」

震える声で聞くも、即答された。　　…だが、確かエイナは恥ずか  
しがり屋で金髪、そしてこんな男勝りな口調じゃなかったはず…。

「…いやな、お前とあの日会ってから自分が情けなくなっ  
てよ。　　…そんなで日々鍛えてたら、こんなになっ  
た。」

俺の考えを見透かすように、その女…エイナ「ユーグリッドは言った。

…：エイナによると、あの日バーデインをぶっ飛ばした俺に近づぐために猛烈に特訓したらしい。髪色は俺に似せるよう魔術で変えたとか。あんまり似てないが。

そして、自分の年齢と同じ『様』だった俺を『勝手に』エクシルに入ると確信し、猛勉強した結果。

背は俺よりも頭1つ小さいが、赤金の髪を持つ男勝りなエイナ「ユーグリッドが完成したらしい。

…：何たる執念だろうか。あの時の俺がそんなにかっこよかったのだろうか…。俺としては、バーデインをぶっ飛ばしたに過ぎないのだが。

…：しかし、知り合いが居た。

「よろしくな、アルト」

「…ああ、よろしく！」

ちよつと元気が出た。エイナはこのクラス39位。つまり、俺の隣。知り合いが隣に居ると、こんなにも安心感が出るのだろうか。

「しかし、アルトが280位ワーストとは思わなかったぜ…。  
掲示を見たときは、嘘かと思つたよ」

あの時を思い出しているのだろうか。エイナが言う。確かに、3教科は多分90点以上、【チカラ】もそれなりにあると思つたん

だが。

「…俺も嘘かと思ったが…どうやらホントみたいだな。おかしいな…上手く出来たと思ったんだが…」  
「なった物はしょうがないさ。これから取り返していけば良いだろ？」

「…俺も頂垂れる俺に、エイナは笑みを投げ掛けてきてくれる。あ、男勝りな女神様か。納得。」

「…そこで、音がした。まずは廊下から、ドドドドッ!という、ポアーナが大軍勢で爆走するような音。話していた俺とエイナは、何だと首を傾げる。」

「…そしてこのクラスの前でキキキイイ!と車の急ブレーキのような音。最後に、廊下側、クラス前のドアが「ガララッ!」では無く、

「ピシヤアアアン!!!」と開けられ、「ピシヤアアアン!!!」と閉められる音だった。俺ら40人、絶句。よくドア壊れなかったな。」

「…そして、その音を出した張本人はといえば。」

「…よし、ちょっと遅れた。すまん。はいはい、席に着けよ。」

「パンパンと手を叩き、そんな抜けた声で席に着くよう指示する…碧の髪で、同じ色のジャージ、そしてメガネをかけ、ファイルを持った…「女性」だった。」

「…俺たちは、その言葉で絶句状態から抜け出し、席から離れていた」

ものは席へと座り、座っていたものは身なりを正しくするのだった。

「はい、Gクラスの皆、おはよう。私が1-Gの担任を務める  
…ジェイ・クロウスだ。よろしくなー」

黒板に「Jay Crows」と書いたジェイ先生は、癖だろうか、  
抜けた口調でこう続ける。

「それじゃー、今日は顔合わせということで、皆に自己紹介をして  
もらって、解散、その後は外で寮の登録して寮に入れよー。その  
後は自由だー」

「じゃー、1番の…メテリアー。名前とか趣味とか得意な事とか  
なんでも良いぞー。では、どうぞー」

メテリア：…そういえば掲示の一番上だったから名前は知ってたな…  
と呼ばれた長い銀髪の少女は、席を立って、こちらを見た。

「ミ、ミリア・メテリアです…。…えと、趣味は読書、得意なこ  
とは…お菓子作りです。…よろしく」

へー、可愛いな。特にお菓子作りのところが。

しかし口調が昔のエイナに似てたので思わず口にする、エイナか  
ら「思い出させるな」と軽く頬をぶたれた。痛いんだが。

…さて、ほぼ皆の自己紹介が終わった。次はエイナの番だ。

「エイナ＝ユーグリッドだ。趣味は鍛錬かな。剣技の。得意な  
ことは…無い！…よろしくー！」

元気はいいけどさ、「無い」で締めくくるって…えええええ…  
…まあ、でもこの男勝りな感じは一部の男子にもてそうだな。ど  
うでも良いけど。

「よーし、最後だなー。 シューバ。 どうぞー。」

「…アルト」シューバ。 趣味は料理。 得意なことは格闘術。  
ワーストだけど、よろしく」

俺がそう言いきって席に座ると、今度はエイナが「えええええええ」という顔をしていた。何か悪かったかな。

ああ、言い忘れてたけど俺、結構料理が得意だ。 自称料理の達人であるサナブ婆に鍛えさせられたからな。

…しかし、俺がワーストと言った途端、笑いがどこからかちらほら聞こえたのは気のせいだろうか。

「いやー、しかし今年も個性的な奴らばかりだなー」 …唐突にそう言っ、ジエイ先生が語り始める。

「二つ名持つてる奴らばかりでなー。 《獄焔》のメテリアにー、《爆速》のヨハンー、《金剛剣士》のユーグリッドとー」

「今年のクラス対抗は、番狂わせが起こるかもなー」

フフと笑うジエイ先生。 二つ名？ ああ、厨二の証…ではなく、強さの証みたいなもんか。 …って、エイナが二つ名持ちだと！？ さっきのメテリアも？

「ああ、なんか剣技の鍛錬してたら、二つ名付けられた」 軽くサラツというエイナだが、俺は驚きが隠せない。

「クラス対抗」というのは、いわゆるクラス同士での戦闘の対決なのだが、それは別の機会に話そうかな。

「それに、アンラッキー・パーフェクター《不運な天才》のシューバも居ることだしー。あー楽しみだー。」

…ん？　なんか変な二つ名を付けられたような。　…あれ、クラス中の視線が俺に…痛い…。

「え、お前も二つ名持ちなのか？」　とエイナに尋ねられる。…いや、貰った覚えはないんだが。

「じゃー、今日はこれを配っておしまいなー。あ、外で寮の登録しとけよー。其処で必要な制服とか教材も貰えるからなー。」

そう言つて配られたのはプリントだ。　ああ、明日の持ち物とかが書いてある。　「それとー。」　ん？

「シューバはこれが終わつたら学園長室に行くようにー。学年最ト高位のダント・サステーフと一緒に呼ばれてるみたいだぞー。」

…ええええ！？　学園長室に行くと言われた時は「何したんだ」みたく鼻で笑つてたクラスメイト達も、「トツプと共に」で一斉に振り返つた。

…いたつ、視線が痛い。　あ、エイナも見てる。　…痛いぞ…やめてくれ…。

「それでは今日は終わりー。　じゃあなー」　…そう言つとジエイ先生は、先ほどの入り方とまるで違う、のろのろした歩き方から出て行つた。

エイナに「何したんだよ。」と尋ねられるも、「いや、わからん」

としか答えられない。俺自体、全く心当たりがないのだから。皆が次々とクラスから出て行き、俺も同じように1-Gから出た。そして学園長室に行こうとし、気付く。

「…学園長室って、何処だ…？」

こうして、アルトとシューバは知り合いも増え、1-Gでの学園生活が始まった。

学園長室に呼ばれたアルトは、その日、一番の驚き様を呈する事となる。

第10話：アルトは、Gクラスからの痛い視線を受けた。（後書き）

もう一度、ありがとうございます！

これからはggggしないように気をつけないと…。

第11話：アルトは、勝手に宿敵扱いになったようだった。

Side アルト

ジェイ先生から「その通告」を受けた10分後。

俺は、【学園長室】と刻印された金属のプレートが吊るされた重厚な造りの木の扉の前に立ち、何を言われるのかと内心ビクビクしていた。

「…ふー…よし」

Gクラスでの顔合わせが終わった直後、俺はとりあえず、学園長室の場所を探していた。

「……あー…案内板があればな……。直ぐ分かるんだけども……」

と、そこでちょうど案内板が。急いで駆け寄り、学園長室を探す。

……お、有った。どれどれ…「特別教室棟、5階」？

……確認してみよう。今俺がいるのは一般教室棟の1階。そして、学園長室は特別教室棟の5階。

……それぞれの距離は、およそ100m。

……え？

という訳で、急いで100m+の距離を【チカラ】使用で走破し

た俺は、やっとその扉の前にたどり着いたのだった。

コンコン、意を決して、俺はその扉を軽く2回、ノックし、声を掛ける。

「1-Gのアルトシューバです」

「入りなさい」

聞こえてきたのは、ナシズ爺よりも歳を召してそうで、ふんわりとした優しい男性の声。いや、アレは40代位の声だったけど。ドアノブを握り、グツと回してドアを開けた。

開けた先には、扉と同じく重厚で豪華な部屋が広がっていた。

床には赤いカーペットが敷かれていて、両側の壁には何かの大会で優勝したのか、トロフィーが30個ほど並べられていた。

奥の窓近くには、剣と盾を交差させたような配置の、学園章が刺繍された校旗が立てかけられていた。

そして、1番早く目に付く、高そうな机と椅子。学園長と書かれたプレートが置かれたそこには、声と同じく優しそうな表情の、白髪の老人が座っていた。

その手前、俺から見て左側に、「ヤツ」は立ち、首を回してこちらを見ていた。

長身瘦躯だが、捲くつた腕は明らかに筋肉がついていて。俗に言う「細マツチヨ」かとそう思う。

白と黄色を基調にした、まるで騎士のような姿をし、腰には細い剣

が。レイピアだった。

金髪で無表情な、だが口元に少し笑みを浮かべたヤツの表情は、今でも忘れない。…アレは完全に、馬鹿にしたような顔だ。

「…さて、2人揃ったところだ。話を始めようか」

ファルモート・ガインと名乗ったその老人…学園長は、そう言うてから話し始めた。

「まあ…2人には話すことが違うからのお…まずはサスティーフ。お前からじゃ」

「はい。…して、なんででしょうか」

学園の長と、1年最高位が、話し始める。

「なに、毎年最高位の奴にはワシから1回話すことにしているんじゃないよ。…しかし、流石若くして《聖騎士》と呼ばれる男じゃのう」  
「お前さんが此処エナシルに来ると分かった時から、上位に食い込んでくることは分かっておったよ。とりあえず、おめでとう」

「はっ、ありがとうございます」

…どうやら、トップのサスティーフは《聖騎士》の二つ名を持ち、その能力も他の奴らより頭1つ抜けているという。その名は王都では広く知られており、能力もさることながら、その美貌で多くの女性を虜にしているらしい。

なんだ、頭脳明晰、眉目秀麗、おまけに運動も出来る。そしてリア充。パーフェクト人間じゃねえか…。

…で、最低位の俺が何でそんな人間と並んでるんだよ…。落ち込む俺。

「…して、なぜ私がこのようなGクラスの、しかもワーストの奴と並んでいるのでしょうか」

こっちが知りたい。後、その馬鹿を見るような目はやめてくれ。

「…さて、次はシューバ。お前じゃよ。…実を言うと、こちらがメインだったりするものでお…」

…え？　こちらがメインだと？　…サスティーフも、無表情の中に驚いた感情が見え隠れしている。

「…それで、なんででしょうか」

俺がそう問うと、ガイン学園長は…なんと、頭を下げた。

「まずは謝らなければならん。本当にすまなかった」…そういう学園長。俺は、驚きのあまり声が出ない。

「…時にシューバ。お前は、自分の能力を理解しているか？」…顔を上げた学園長は、続いて俺にそう尋ねた。

「…自分の中では、『爆発的に体の一部を強化できる【チカラ】』と捉えていますけども…何か？」

「ふむ、家庭の事情で、そんな風に捉えることも仕方ないじゃろう。実はな、お前の【チカラ】はそんな小さいものではないぞ」

…え？　違うの？　聞けば、あの黒い球…「判定球」には、【チ

カラ】の種類を測定する機能も付いているらしい。  
意外とハイテクだったんだな、あの球。

「…で、俺の【チカラ】はどんなものなんですか？」 俺がそう尋ねると、ガイン学園長は、口を開く。

「…ああ、お前の【チカラ】は…」自分が望んだモノを創り出し、手に入れる【チカラ】。…通称『クリエイター創造主』じゃ」

…読者の皆様にとってはもう予想済みだろうが、その当時俺といえ  
ば、硬直していた。まさに「はっ？」って感じで。

そう、これこそが、俺の1番驚いた様子。俺の思っていた【チカラ】  
が違って、しかもチート能力…？

…そう考えると、確かに…と思える部分がある。

ベアルを押し返したとき、俺は「怪力が欲しい」と願った。バー  
デインを吹っ飛ばしたときは、「脚力が欲しい」と望んだ。

そういえば、夜店でホットドックもどきを買ったとき、明らかに1  
枚銅貨が足りなかったが「もう1枚銅貨があれば」と望んだら袋の  
底に1枚出現した。

先ほど「案内板があれば」と望んだ時、偶然にも近くに案内板があ  
るように思ったが、あれももしかして。

「…ホントなんですか？」

「ああ、本当じゃよ。」  
「レベル・ボール判定球」に狂いはないわい」

マジかよ…そう単純にそう思っていると、サステイーフが突然喰らいついてきた。

「『クリエイター』…？ 俺より強い【チカラ】だと…？」

…しかし学園長、それだけで合格してきたGクラスのワーストに、何があると言っんですか？」

…驚いた表情のサステイーフ。ああ、コイツ負けず嫌いっぽいな。あるある。

まあ、言っている事は確かだろうな…そう思っていると、学園長は言い返すように返答する。

「何を言っている、サステイーフ。シューバはな、【チカラ】のレベルが『0』と測定されたというのに合格してきたんじゃないぞ？」

「…なっ!？」

今度はサステイーフが驚いた。 ついでに俺も驚いている。…つまり俺は、「国語」+「数学」+「魔法学×2」『だけ』で合格してきたのか？

「サステイーフ。 お前は確か、学力も【チカラ】のレベルもバランスよく、平均は90だったのう」

はい、とサステイーフは返す。しかし平均90とは…、並大抵の男じゃないな、コイツ。

「クリエイター【創造主】は非常に強力な【チカラ】でのう…あまりに強力で、

「<sup>レベル・ボール</sup>判定球」が機能しなかったようじゃな。よってレベルは0」

「それが無くとも380という点数を出したのなら、シューバの学力の平均は、95点じゃ」

「それだけではなく、シューバの「クリエイター」はレベル0と判断されたのじゃが、多分「クリエイター」のレベルは98くらいじゃのう」

「それを2倍して、シューバの点数にあわせると…」

「576・・・」

俺とサステーフ、2人の声が合った。簡単とは思ったが、そこまで高い点数とは…。しかも、レベルが超高い【チカラ】だったなんて…。

「普通ならば、サステーフの点数を軽々超えていたんじゃないよ。シューバは」

「だかのう…クラスはもう変える事は出来ぬ。待遇もそのままじゃ。…シューバは、それで良いかのう？」

ああ、そういう話か。だからガイン学園長は頭を下げてきたわけだ。…ふむ。

「ああ…俺は良いですよ。Gクラスで知り合いも出来たので…」

そんな理由かと思うかもしれないだろうが、俺としては学友の存在ほど大切な物はないと確信している。知り合いなら、尚更。

しかも、Gクラスは何か面白そうだし。Gより良い物は無いんじゃないか…。俺はそう思ったのだ。

「1-Gのジエイも言っておったが、今年のクラス対抗は面白いこ

とになりそうじゃのう。 まあ2人とも、仲良くするんじゃない」

「…冗談じゃ有りませんよ。 俺より強い奴なんて居ないです。  
…クラス対抗で、潰して見せますよ」

そう、悔しそうにこちらを見ながら言うサスティーフ。「多分負けず嫌い」が「確実に負けず嫌い」へとシフトした。

「…Aクラスは強い奴ばかりですからね。 頑張りますよ」

俺はそういっただけ。 ガイン学園長は、笑いながら最後に言った。

「とはいえ、お前達が卒業するまで面白いことになりそうじゃな。  
私の話はこれで終わりじゃ。 早う寮の登録ほよと必要な物を貰いに  
行って来るんじゃない」

「…お前の名前覚えておくぞ。 とはいえ、ワーストと当たること  
など無いだろうけどな…ハハハ。 それでは学園長。 失礼します」

うざったい笑みと共に名前を覚えられ、何か宿敵扱いされたような  
俺。 ん、これは死亡フラグか？

そう言っつて勢いよく扉を開け、歩き去るサスティーフ。 まあ…ア  
イツの名は「負けず嫌い」っていう渾名あだなと一緒に覚えておくか。

「…えっと、それじゃ失礼します」

そう言っつて俺も扉を開け、一礼してから学園長室を後にした。

扉の先にはサスティーフが歩いていると思っただが、もう居なかった。  
最後に見た後、走ったのだろうか。

まあ、俺にはどうでもいいことだし。 歩いて帰ろう。

…そう思って、俺は歩き、寮の登録、必要な制服や教材などを貰って、登録された寮の部屋へと入った。

こうしてアルト＝シューバは、自分の【チカラ】の全てを知った。

それは、これから始まる学園生活の、ほんの序章に過ぎなかった。

…まあ、まだ1日目だしね。

第11話・アルトは、勝手に宿敵扱いになったようだった。(後書き)

ありがとうございますありがとうございますありがとうございます…

マジでマジで、マジで。

ありがとうございます、これからも読みやすい小説を目指して頑張るので、お願いします！

## 第12話：アルトは、唯一の知り合いの【チカラ】を知った。

Side アルト

ガイン学園長から衝撃の事実を叩きつけられ、学年トップのダント・サスティーフから勝手に宿敵な感じにされた俺。寮登録をするため特別教室棟の階段を下りながら、俺は考える。

「…つまり、俺が何か望めばそれが叶うってことなのか？」

思わず口にしてしまうが、気にしない。それほど、俺にとって驚いた事実だったのだ。誰だってそうなるだろう。

「……………」

ちょっと試してみよう。金を入れる袋を開け、何も入っていない事を確認する。

そして、「金よ来い！」と願ってみた。……………何も起こらない。

やっぱり何か制約g

途端、俺の袋には一瞬の内に金貨が半分ほど入っていた。呆然とする。夢かと思ったが、振るとちゃんと音がするし、しっかり触れることも出来る。

金貨は一枚で銀貨の200倍、日本円で100万相当の値打ちがある。銀貨は一枚で5000円だからな。

この世界の硬貨は、全部で3種類。銅貨が100円相当、銀貨が5000円相当、金貨が100万相当。相当幅がある気がするが、

気のせいだ。

そんな金貨が、目測30枚ほど。

総計、3000万…。

やはり、夢ではなかった。しかし、大金を持って歩くのは幾らなんでもやばい。学園でもやばいかもしれない。

俺が消えると念じると、金貨は跡形も無く消えた。

やはり、本物だ。

俺は、内心ビクビクしながらエクシル学園寮へと向かうのだった

「はい、1・Gのアルト＝シューバさんですね？ 部屋番号は280番となります」

「あ、ありがとうございます」

「1・Gのアルトさんですね、制服はこちら、教材等はこちらとなります」

「はい、ありがとうございます」

寮の前へと来た俺は、これといった問題も無く、普通に寮登録を済ませ、制服と教材を貰うのだった。

眼前に広がるのは、これまた巨大な学園寮。生徒は全員、寮に住まなければいけないらしい。近くに住むやつは涙目かもな。

しかし、俺の順位と同じ280という番号は偶然だった。本当は

1番だったらしいのだが。　どうでも良いか。　寮は同じなのだから。

本当はAクラスだったらしい俺。　だが、Gクラスのほうが良かった感じもする。

唯一の知り合いであるエイナと出会えたとし、今年のクラス対抗戦は番狂わせになるかも、とジエイ先生も言っていた。

なんか面白そうな奴らもちらほら居るし、明日にでも話しかけてみようかな。

寮の中に入ると、幅3mほどの広い廊下の両壁に扉が付いている。

廊下は結構長く続いており、100m以上はあるだろう。

1学年1階らしく、1年は1階だ。そして280番は廊下の一番奥。くそ、やっぱり1番の方が良かったかも。

…ん？　…ああ……「脚力」！

…面倒臭くなった俺は、その場で【チカラ】を発動。　一瞬で奥へとたどり着き、扉の前に立つ。

そして、鍵を取り出す…のではなく、ただドアノブを握り、回すだけ。　それだけで、閉ざされて居たドアは開く。

貰ったパンフレットによれば、ドアノブには『認証』と『開錠』、『施錠』の魔術が掛かっており、触れるだけで本人を認識、鍵を開け閉めするらしい。

だからドアには鍵穴らしき物が無い。　因みに自分の情報は『判<sup>ル</sup>定球<sup>ル</sup>』で入手したらしい。　本当にハイテクだな、あれ。

「おお…」

部屋に入った俺は、まずは目を上下左右に動かし、全体を見渡してみた。

前方は、ベッドや机、本棚…一見すると、ちよつと豪華になったビジネスホテルみたいな感じだ。

左を向くと、クローゼット。やっぱり服を良く買っおしやれな奴も居るんだよな。俺はあんまり服は買わないだろうけど。

右にはキッチン。そしてその奥に風呂 & トイレだろうか。

…なるほど、アパートをちよつと豪華にした感じか。ベッドもしっかりしてるし。

…突然だが、こういう時にはやる事があるんじゃないだろうか。

「おお、フカフカ!!」

勿論、ベッドにダイビングである。良いのを使っているっぽい。

さすがトップと呼ばれる学園だ。

何回もダイビングし　　なんか、ストレスが溜まっていたのだからか　　漸く気が済んだところで

コンコン、ドアをノックする音が。　　ベッドダイビングで気分が良くなっていた俺は、「はいはい」とドアを開けようとし、

「……………」

ドアを開けた先、目の前にあった、巨大な剣の切っ先に、思わず硬直してしまった。

「…おーい？」

10秒ほど経つただろうか、その声で、漸く硬直から脱した俺。  
この声は、エイナ・・・？

…大剣がゆっくりと下がっていく。その先に居たのは、紛れも無い、赤金色の髪を持った少女、エイナ・ユーグリッドだった。

「…いやーすまねえすまねえ。ちょっと驚かそうとただけだけだぜ。許してくれよ」

「……ああ、大丈夫」

此処は俺の自室。

明るい声でそう言ったエイナだったが、このときの俺は「大丈夫」と言いながらも顔がちっとも笑っていなかったらしい。

顔が青ざめたエイナ。 はなし すぐさま別の方向へと軌道修正する。

「そつえば、学園長に呼ばれてたろ、何だったんだ？」

「…まあいいや。んー、とりあえず…俺の【チカラ】がチートで、トップに勝手に宿敵認定された」

簡潔すぎるにも程があるだろうというほどの分量で俺は話した。

当然、エイナは訳がわからず。

「チートって何だ？」

…あ、其処からか。

その後、詳しく訳を話した。俺のチカラが【創造主】クリエイターだったということ。『レベル・ボール判定球』が原因で、俺はGクラスになったこと。つまり、学年最高位トップのサステーフは実は2位。負けず嫌いのサステーフはそれを認めず、俺を宿敵扱いしたこと。

ひとしきり話した後、エイナは俺の【チカラ】を見たいということで、先ほどの「何も入って無い袋に金貨出現」をやってみせた。エイナはテレビのマジックショーで大げさに驚く客の如きオーバーアクションをやったのけた。（くれとせがまれたが、断った。それは、本当に必要な時な。と言って）

「…ところで、エイナの【チカラ】は？」

「あぁー…これだ」

エイナは立ち上がり、俺のベッドへと足を向ける。そして、掛け布団にちよんと触れた。

「触ってみる」 とエイナが言うので、俺も立ち上がり、エイナが触れた俺の布団にちよんと触ってみる。

…硬い？ …なんだこれ、さっきまでフカフカだったのに滅茶苦

茶硬いぞ？

「俺の【チカラ】はな、条件付だが【触れたものを硬化させるチカラ】。《金剛剣士》って二つ名貰った理由は、これらしいぜ？」

自分の体も硬化できるそうぞ（むしろソツチがメインらしい）、分類としては「<sup>フースター</sup>身体強化系」に属するらしい。その硬度は、鋼鉄を軽く超えるとか。

なるほど、ダイヤモンドみたいに硬くさせるから金剛な訳だ。 納得納得

……………ん？

「ちょっと待て、俺の布団はどうする？」

「大丈夫だ、ちゃんと戻せる」

そう言っつて、エイナが触れるとフカフカに戻った布団。 ……そういうのは、ちゃんと言っつてからにしましょう。

…「じゃあなー」とエイナは向かい側の部屋（エイナは279番だからな）へと戻り、そういえば、1回しか会った事無いのになぜいぶん普通に喋ることができたなあと思う。

まあクラスで、いや学年で唯一の知り合い（と言っつても1回しか会った事無いが）だからか。 しかも、出会いがあれだからな…。

…ま、仲良くしよう。 仲良くしといて悪い事は無い！（一部例外を除く）

その後は、やはりエイナと共に夕食をとったり、行った食堂で、俺

が料理好きだということを知った食堂のおばちゃんとは仲良くなった。り。  
そのおばちゃんから幾つか料理のレシピを教えてもらったり。今度作ってみようかなとか思ってみたり。

…あれ？ 何か料理人小説へと変貌してないか？ しかも、どこから突き刺さる視線が痛いんだが。

冗談はともかく、寮でエイナと別れた俺は、部屋で風呂、洗顔、歯磨きの3段コンボ。そしてベッドに横になり、あっという間に眠ってしまった。

こうして、波乱のエクシル魔法学園、1日目は終わった。  
しかし、明日からはもっと多くの驚きがアルトを待ち構える。  
無事に過ごしていけるのか？

…俺は、1つだけ忘れていたことがあった。

…時間割り決め忘れたのだ。 そのおかげで、明日は忙しく朝を迎えることになった。

第12話：アルトは、唯一の知り合いの【チカラ】を知った。（後書き）

感想ご指摘ありがとうございます。

国語的な知識がまるで無い自分ですので、とても役に立ちます。

この小説を書き終える頃には、ちょっとでも自信が付けばなと思っております。

感想やアドバイス、ドンドンお待ちしておりますよ！

そして、俺、啞然です。今すぐ皆さんに土下座して感謝したい。

皆様の需要に偶然合ったというのが理由は定かでは有りませんが、とりあえず、お読みしてくださる皆様に、最大級の感謝を。

第13話：アルトは、王国騎士団と戦うことになった。(前書き)

いや、別に反乱起こした訳じゃないですよww

### 第13話：アルトは、王国騎士団と戦うことになった。

Side アルト

「…まー、今までは時間割を決めるなんてなかったもんな」

「おかげで朝飯抜きだよ、全く…」

机に突っ伏す俺。

エイナが、俺の先ほどの慌てっぷりを思い出し、そう言った。

今は、始業の1分前。

…昨日、時間割を決めずにそのまま寝てしまった俺は、朝から大慌てとなった。

まだどれがどの教材か知っているなら問題は無いだろう。だが、貰って間もないそれをどれがどれか判別する技術は、俺にはない。そのせいで、俺は朝飯を食いぞびれた。…俺がちょっと長く寝てしまったと言うのも問題なんだが。

…この世界には目覚まし時計がない。…普通の時計に機能でもつけようか。

「おーっす、皆おはよう。 今日も頑張るぞー」

ガラガラと、今日は普通に扉を開け、ジエイ先生は入ってきた。なんだ、普通に入れたのか。

「…皆ー？ 今、「なんだ、普通に入れたのか」とか思わなかったかー？」

！？

「まー、どうでもいいけどなー。よし、1時間目始めるぞー」

皆がそう思っていたらしい。当たり前か、昨日あんな入り方をしてきたんだもんな。

さて、1時間目は…。「実技」？ 実技って、あの？

「よし、実技だなー。 実技場に向かうぞー」

実技。 え、初っ端から何すんだ？

エイナに聞いても、「俺も分からん」と。 まあそうか。 …なんか、嫌な予感がするな。

実技場。 日本の学校の体育館4つほどがすっぽり入るくらいの、簡単に言えば馬鹿でかい体育館。

この「実技」の授業のほかに、武道場の予備としても機能しているそうだ。

床や壁は日本の体育館とほぼ同じ。 ただ、よくあるバスケットボールとかのラインが無い位だ。

俺たちは実技場の真ん中に集められる。

「1時間目は実技だー。 実技って言うのはー、簡単に言うと戦闘訓練のことだなー」

…やっぱり、悪い予感的中した。1時間目から、しかも今日は朝飯抜きの俺にとっちゃ、これより辛い物はないな…。この実技場が馬鹿でかいわけは、40人に1人ずつ相手がつき、それぞれ同時に訓練を行うからだという。

「せんせー。このブレザーのままそういうことをするんですかー？」

男子の1人が、そんな声をあげる。あ、そういえば。大丈夫なのか？

「ああ、大丈夫だぞー。皆が着ているブレザーはなー、防水、防汚、対傷、復元の魔術が掛かっているからなー、汚れなんか、振ったら落ちるしー」

「あと、今日やるのは魔法抜きの特訓だー。そこんところは気にしないでいいぞー」

ジエイ先生が冷静にそう答える。なるほど、これもハイテクなんだな。汚れが振ったら落ちるとか、元の世界より強力だし。…ん？ いやいや、そういう問題か？

女子のスカート？ …知らんよ、そんなもん。中に短パンでも穿いてるんじゃないか？

「…え、えと…女子もやるんですか？」

若干恥ずかしそうに手を上げて尋ねるのは、1-Gの1番、《獄焔》の二つ名を持つ銀髪少女、ミリア・メテリアだ。いまだに、その二つ名の意味が分からないが。

「おー、勿論だ。…あー、メテリアがそんな質問をするのも当然かー。安心しろー？ちゃんと相手も女性だから」

「安心できるか！」…突っ込むのは俺の隣にいたエイナ。…いや、その性格からして大丈夫だろ、お前は。

しかし、女性と言ってもめっちゃ強い奴もいるわけで。それは15歳相手にやらせるとかやっぱり鬼だな。エクシル魔法学園。と、そんなことを思っていると実技場の金属製の扉がゆっくりと開き、ぞろぞろと、場内に入ってきた。

「おー、丁度来たみたいだなー。みんなの相手をしてもらうのはー、ガフリア王国騎士団の兵士さんだー」

「失礼の無いようにしろよー。…それじゃ、お願いしますねー」

入ってきたのは、20代から30代くらいの男女、40人ほどいる。ちよつと痩せている人から、ムツキムキの人までいる。

1人に1人ずつ相手がつく、って言ってたから、男女比は1:1か。あ、言い忘れてたが1-Gの男女比も1:1だ。

「おーっし！ 今日お前らの相手をさせてもらう王国騎士団第7歩兵部隊だ。俺は歩兵長のラウング。よろしくな！」

「今日は格闘訓練だ。魔法は一切なし。【チカラ】の使用も不可だ！ 条件はこちらも同じだから、全力でぶつかって来い！」

…暑い。

兵士長のラウングと名乗ったのは、先ほどの、筋肉ムキムキの男だ。身長は190cmくらいだろうか。

黄色に白の線が入ったピチピチのTシャツと黒いパンツをはいている。

口調がやたら暑苦しい。 ……この人とは戦闘したくないな。 主に  
雰囲気的な意味で。

兵士達はみな私服のようだ（これも大丈夫か？）が、肩や胸に王国  
騎士団の紋章の刺繍が入ったワツペンが付けられている。  
アレが騎士団員を表すマークって訳だ。

戦闘訓練が騎士団とか…。 何この鬼軍曹的授業。 俺らを殺す気  
か？

「さて、今から訓練を始めるが…。 その相手はくじ引きで決  
めさせてもらうー！」

そういうと、何処からか籤くじが入っているであろう箱が2つ。 男  
子用と女子用か。

籤は兵士達が引き、其処に書かれた生徒が訓練相手となる。  
とりあえず、あのラウングとか言うおっさんとは一緒にやりたくね  
えな。 ま、20分の1だ。 当たるわけが…。

「じゃ俺から引かせてもらうぞ！ ……アルト＝シューバ！ 俺  
が訓練相手だ！ 出てこい！」

…フラグ回収…。 いや、もう当たるだろうなーって予想してた  
けどな？ 本当に当たるとは思いもよらなかつたわけよ。

だからそういうことはフラグにするなど何回言えb「早く出てこい  
！」 ……はいはい。 行けばいいんだろ、行けば…。

…というわけで、フラグ通りにラウング歩兵長と訓練することになった俺。

皆はそれぞれ離れて、元の世界で言う、組み手？ を行うらしい。

「よし、それじゃあ時間は今から10分間だぞー。兵士さんたちには手加減してもらおうからなー」

「倒せるように、努力」は「しろよー」

…それ、明らかに「確実に倒されるだろうけど頑張れ」って言うてるような物ですよ、ジェイ先生。

いや、当たり前か。歩兵といつても騎士団だし。15歳に倒されるようじゃ、面目立たないもんな。

「それじゃあ始めるぞー。 よーい、スタートー」

先生がホイッスルを鳴らし、それと同時にラウングはこちらへと走る。

「ははは！ お前のようなヒョロい奴が、俺を倒せるのか！？ 行くぞー！」

…え、何も指導とかなしなの？ ちょっと、ガチで戦闘じゃねえか…。

…ってか、別にヒョロくは無いと自負している。むしろそっちが筋肉の塊なだけじゃ…。

…うおっ！

俺が考え事をしている最中にもかかわらず、突っ込んでくるラウング。 こういうときには止まるのが礼儀おやくそくじゃないのか？

ラウングは右腕を引き、走りこんでのパンチを繰り出した。 …速

いつ！ 後ろにステップして、避ける。

…これで本気じゃないのか？

…あれ、最初は速く見えただけど…、其処まで速くない？

「ハハハ！ どうした！？ ビビッて避けてるだけじゃ話にならんぞ！ このチキンが！」

…ちょ、良いのかよ、そんなこと言つて。 主に指導方針的な意味でさ。

…チキン？ …ちよつとむかついたな。

そう考えている間にも、ラウングはさらに間合いを詰め、また同じ右腕でのパンチ。 …攻撃方法それだけじゃねえよな？ もしかして。

しかし、俺からすると隙が多いような…手加減だからか？ いや、でも倒されて元々だから、行ってみようか。

俺は、体を沈めて相手のパンチをかわすと、鳩尾に照準をセットし、右腕の肘を突き出す。そして、衝突のタイミングにあわせ、一気に突いた。 肘打ちだ。

ラウングは、待ってましたとばかりにそれを

「ゴツ！？」 …あれ？

ラウングは、肘打ちのをモロに喰らい、場所がちょうど鳩尾だったことも合わさったのか奇声と同時に膝をついてしまった。

…あれ？ こんな弱いはずないよな。 …ああ、元気出すためにあえて受けたのか。 騎士道精神(?)に感謝だな。

「やるじゃねえかアルト＝シューバ…。　だが、このぐらいで俺を倒せたと思うなよ！」

結構苦しそうだな、おっさん。　どうしたんだ？　調子悪いのか？  
…そう思っているうちにも、ラウングは立ち上がり、後ろに離れていた俺に向かって突進。　そのまま跳躍、右足を突き出した。  
…飛び蹴りだ。　…隙多い技を良く使うよな。　しかし当たったら大惨事。　右にステップして避ける。  
着地したラウングは、そんな俺に向かって旋回し、リアアットを繰り出した。

「…うおっ！？」　…思わず声が出る。　咄嗟にしゃがんで避けた。

「ハハハ！　隙ありだーっ！」　と、ラウングはそんな俺に向かってもう一方の腕、右腕でのアッパー気味のパンチが。

…やっぱり遅いような…。　右に最小限動き、ラウングのパンチを避けると、俺は左の拳を握り締める。

「…ううおらアー！」

…しゃがんだ体勢から、半ばラウングに突進するように立ち上がり、左ストレート。

「…あっ！？」

あれれっ？　…ラウングは、またもそれを鳩尾に喰らい、今度は後ろに倒れこんだ。

左だし、流石に吹っ飛ばなかったか。　とか思っていると、　…ん？

おっさんが起きてこない。

「おーい、歩兵長？」

…え、まさか、気絶したとか、ないよな？

……………え……………え？ ええええ？

見ると、全員が俺とおっさんを見ていた。 そりゃ、15歳相手に歩兵長がやられちゃ驚くだろうけど…

…え？

その後、ラウング歩兵長は10分後に目を覚ました。

「アレは…ちょっと油断してただけだ！」と言っていたが、

その真偽は不明である。

第13話：アルトは、王国騎士団と戦うことになった。(後書き)

多くの「指導」「指摘」ありがとうございます！

受けた「指摘」は今後に生かそうと思しますので、よろしくお願いします！

第14話：アルトは、《獄焔》の意味を知った。（前書き）

注意。 今回は、何時にも増してggggです。

その理由も、自分がうつらうつらと書いてたのが原因なので、お許しを。

第14話：アルトは、《獄焔》の意味を知った。

Side アルト

「…おい、アイツだぜ」 「おお、本当だ」

「歩兵長をぶっ飛ばしたんだって」 「ピョロそつなのになー」

…。

「おいおい、気にすんなよアルト。 其処まで悪い印象じゃないんだろ？」

「…俺はな、こつ周りで俺のことを話されること自体が嫌いなんだよ…」

今日は学園が始まり4日目。 ……どうやら、俺が左ストレートで  
ガチムチのおっさんをぶっ飛ばした話は早くも噂となっラウンジているらしい。  
学園中の。

（俺の【チカラ】が【クリエイター】というのは、クラスだけの秘密だ。 と言っても、このクラスにはジェイ先生が教えたのだ）  
現に、今は休み時間な訳なのだが、廊下からヒソヒソと、明らかに俺を見てそんな会話が聞こえているのだから嫌になる。  
エイナが、心配をしてくれる。 うん、ありがとう。 だけど、俺はどうしてもこつというのが嫌なんだ…っ…。

「…た、大変だね…」

…頭を抱え、軽く鬱状態になっていると背後から声が。少女の声。  
…振り向くと、長い銀髪を揺らす少女、メテリアであった。

「…ああ、大丈夫大丈夫。大丈夫だから…」

ククク・・・と死神のように笑う俺。エイナとメテリアは、そろって引いている。…いや、正直すまんかった。

え？ 今まで接点なかったのに、何気さく(?)に話しかけられてんだ、だって？

…俺に彼女が声をかけてくれる理由は、少し前…そう、あの時<sup>じじきのじかん</sup>まで遡らなければいけない。

ラウングのおっさんをぶっ飛ばしたその授業の後。教室に帰ろうかと1-Gまでの道を歩いていると、背後から声が出た。

「…ね、ねえ、アルトくん」

「……………ん、何？」

恥ずかしがりやっぽい口調でそう俺に声をかけてきたのは、メテリアである。そういうえば、話したことが無い。

その声に振り向いて立ち止まるうとするが、メテリアは「…あ、歩きなからで、良いから」という。あ、そうですか。

「…ア、アルトくんは、どうしてそんなに強いのか？」

数歩歩いたところで、彼女から唐突に質問された。

…んー……

「…んーと、ちょっと親に格闘術を教えてもらったからかな…？」

…なんで疑問系なんだ、俺。 ……あれ、メテリアも何で納得してんの？

「へー…つ、強いんだね、アルトくんは」 ……いや…あれはラウ<sup>おっ</sup>ングが弱かっただけ…いや、言わないでおこう。

「そんなことないよ。 5年ぐらい練習してこのぐらいだから」…謙遜とかではなく、正直に。 だってあれ結構手抜いたし。 左ストレートの時点で。」

「つ、強いよ。 5年でそんなレベルになるって、教えた人がとっても上手かったんだね」

「俺の親だけだな。 14になったら倒せたし、まああつちは歳が60代位だから、妥当な線？」

「す、すごいね。 ……そういうえば、料理が好きなんだよね。 よかったら、私のお菓子を食べて欲しいなー…、なんて…」

…ん、ああ…アレか。 ネタがなくなっただか。 だから両方の得意な調理の方向にシフトしたと。

そういうえば、メテリアの趣味はお菓子作りだったはず。 なるほ

ど、だからそんな提案を…。

「良いよ。それじゃあ…俺も時々レシピとかを貸してあげるから」

「あ、ありがとう…」

回想終了。 まあ、ざっとこんな感じだ。

イタ

夕、石とか岩を投げるな！

同じ調理好きということがあって、それからは普通に話せるようになった。 エイナとメテリアは、俺の友達ということで友達に。 あ、そうそう。 メテリアの作るクッキーはやばい。 アレを食ったら他のクッキー食えなくなるぐらい美味しい。

「よーっし、3時間目始めるぞー。 実技だー。 グラウンドに向かえよー」

ガララツと扉が開き、何時もの口調でジエイ先生が入ってきた。 ……実技か…。 また、あれみたいなことが…。

「今日は魔法訓練だー。 杖とかいる奴は持っていけよー」

……今気付いた。 ……先生に言われてからしか動かない オレたち 1 - G  
は、駄目な子だろうか。

さて、やってきたのは元の世界より数倍は広いだろう広大なグラウンド。

トラックのラインも引かれているが、これ、明らかに400m以上あるな。どんなレースをするんだろうか。

「今日は模擬戦だー。私が召喚する魔獣を倒す訓練だー。魔法に関する【チカラ】なら、使ってもいいぞー」

……この前も思ったんだけどもさ、初っ端から模擬戦やら訓練やらせるのは鬼ですぜ。ジェイ先生。

そんなことは口に出せず、次々とジェイ先生の説明は続く。

「よーし、じゃあ早速行くぞー。1番、メテリアー」

呼ばれたメテリアは「は、はい！」と返事をして前方へ向かう。

大丈夫なのか？ メテリア。

しかし、これで俺はやっと《獄焔》の意味を知ることとなる。

ジェイ先生は【サモナー】らしく、「行くぞー」とのんびり言うと、メテリアの前方に光が現れる。

それは段々何かを形作って行き、その光が弾けて消えた先にいたのは、3匹の狼のような魔獣である。

狼型魔獣のウルフィートは、爪が狼よりも特化した形の魔獣だ。

勿論運動能力は高い。素早さが飛びぬけている。

ジェイ先生が「行けー」と指示すると、ウルフィートはその素早さで、30mほどの距離をすぐさま詰めていく。地味に左、中央、

右と散開して。

対してメテリアは目を閉じている。精神統一…かな。

あんな感じのメテリアに大丈夫なのか？ …俺がそう思った途端だ。

「………《焰波<sup>フレア</sup>》！！」

メテリアが目を開き、そう言っただ両手を前にかざすと、其処から大量の炎が溢れ出す。

その炎は左から迫っていたウルフィート一体を判断する暇さえ与えず、燃やし尽くした。

…その光景に、一同啞然。ジエイ先生だけは、「良いねー」とか言っただ頷いていたが。

《焰波<sup>フレア</sup>》は、炎の波で相手を燃やし尽くす炎属性の中魔法である。

因みに、1年生なら結構使えるレベル。

だから、普段ならこの程度で驚いたりしていない。そう、普通なら。

俺たちが驚いている理由。それは、左だけではなく、「右と中央でも同じ光景が起こっているから」である。

普通、魔法は同時に2個使えない。なぜだか知らないが、この世界ではそうなのだ。

だが、メテリアは違う。2個どころか、3個も同時に、しかも詠唱から発動までのラグがほぼ無いといって良い。普通ならば、1



頭が着いている。犬の頭だ。

…その魔獣は、咆哮を上げてこちらをギリリと睨む。あの時の、  
ベアルと同じだ。

…その魔獣の名は、ケルベロス三頭狗。大型魔獣。性格は凶暴。

えっ、え！？ ちょ、ジェイ先生これはどういう「行けー」…ああ  
やりますよ、やれば良いんでしょうが！

幸いにもこれは訓練だ。このケルベロスを倒しても悪い事は無い  
し、先ほど思いついた「アレ」をやらせてもらおう。

俺は目を閉じ、【チカラ】で魔力を強化する。ブースト 2倍、3倍、4倍

…… 10倍。これぐらいか。

…… よし、行くぜ！

俺が目を開けると、ケルベロスは俺との距離を10mにまで詰めて  
いた。だが、俺は焦らない。

「……展開」

短くそう言うと、俺の目の前に複雑な模様が描かれた魔法陣が姿を  
表す。直径は俺と同じくらい。だが、これでは終わらない。  
ブウン、ブウンと、俺の前方に、一気に魔法陣が展開されて行くの  
だ。その数、実に「10個」。

全てが、ケルベロスの方向を向いて。

ケルベロスはというと、ドンドンこちらに迫ってきている。怖くないのか？

まあそれはともかく、全ての魔法陣を展開し終わると、俺は叫ぶ。

「バースト発射！！」

一斉に魔法陣が輝き始める。そして俺が右腕を振ると、そこから様々な形のものが発射され、ケルベロスを襲った。

ある魔法陣からは《炎槍》フレイム・スピアが。

別の魔法陣からは《氷隕石》アイス・メテオが。

また別の物からは《雷波》サンダー・シュートが。

またまた別のものからは《土棘》アース・ニードルが。

ズドドドドドドドドドドドドドドド！！！！

ただ俺に迫ることしか出来ないケルベロスはその攻撃をすべてもろに受け、その攻撃が終わって魔法陣が消える頃には、跡形も無くなっていた。

そして俺は、メテリアと同じように何事も無かったかのように元の場所へと戻る。

「いやーお見事。【クリエイター】で魔法同時展開の上限を引き上げたのかー」

ジエイ先生は褒めてくれているが……。あれ？ な、なんだ？  
……なんか、おかしい。

「……アルト。いや、凄かったぜ。やっぱ【クリエイター】だ

なつてとこなんだがよ……」

気付いていない俺のために、エイナが助け舟を出してくれる。

「……ちと、やりすぎじゃね？」

エイナが指差す先、ケルベロスが俺の魔法を全弾喰らった場所には、大きく、広範囲に穴が開いていた。

……あつ。

次は4時間目である。俺は、その大きな穴が埋まるまで【チカラ】で砂を入れ続けていた。

遅刻はしなかったが……今度からは、やり過ぎないようにしようと思心に誓った、出来事だった。

第14話：アルトは、《獄焔》の意味を知った。（後書き）

すみませんでした。主にggdgd感的な意味で。

そして、今回はアルトのチートっぷりがよく分かる話だったかと思  
います。

…さて、次からはクラス対抗戦編かな？

第15話：アルトは、クラス対抗戦へ出場することとなった。(前書き)

ネタバレ？ テンプレどおりだから気にしない。

あ、そうそう。 友達のプリントとか挟むファイルを偶々チラとみたら、

「テイルズ・オブ・エクシリア」

エクシリア…だと！？ …と、マジでビビりました。

俺そんなつもりで街の名前決めたんじゃないのに…。

## 第15話：アルトは、クラス対抗戦へ出場することとなった。

Side アルト

「さてー、今日はクラス対抗戦についてだー」

入学から10数日が経った。俺も、結構学園に慣れてきたところだ。

今はLHRロングホームルームの時間だ。時間は、7時間目。眠い…。

この世界にもLHRあるんだな…と思っていると、ジェイ先生はそう話し出した。

「お前ら知ってるかもしれないがー。この学園には1年生だけのクラス対抗戦があるんだー1年恒例だなー」

「1クラス5人でチーム組んでー、トーナメント方式で優勝を争う…簡単に説明すると、そんな感じだなー」

…簡単に説明しすぎじゃね？

その後続けられたジェイ先生の説明によると、1年だけのクラス対抗戦、エクシール・クラスマッチ『XCM』のルールは、こんな物だ。

先ほどジェイ先生が言ったように、1クラス5人でチームを組み対抗戦に挑む。

トーナメントはAクラスがシードで2回戦から登場することになり、それ以外のクラスはくじ引きで相手が決まる。

5人は1〜5番手に分けられ、相手の同じ番号と1対1で直接対決

することとなる。

格闘、魔法、【チカラ】の使用なんでもOK。「ただ、相手を倒すことだけを一番に考えるー」だと。

ただ、あくまで対抗戦なので殺すような攻撃はNG。致死攻撃防止用魔法が掛かっているらしい。

とまあ、説明はこんなもんだ。

因みに、『XCM』という通称はあまり使用されず、「クラス対抗戦」が一般的である。じゃあなぜ作った。

「こんな感じだなー。…まあ当たり前のようにだがー、毎年Aクラスが優勝しているなー」

やっぱりか。

「だがなー？ 私はー、このクラスで優勝できると思うぞー？」

…確かに。エイナやメテリア、そして《爆速》の二つ名を持ったお坊ちやま風の少年、ヨハン。

二つ名を持つ奴が3人もいるんだ。勉強は知らないが、戦闘では意外と上位に食い込めるかもしれない。

だが、Aクラスの精鋭5人は、格闘か魔法、【チカラ】に関してはトップクラスの実力だろう。あの負けず嫌いも入ってるだろうし。幾ら3人だからといって、勝つのは難しいか。…いや、というよりこの3人が選ばれるかも分からないし…。

「というわけでー、私が1-Gのメンバー5人を選んで作ってきたぞー」

…こういうのは、皆で話し合って作るもんじゃないのか？  
…えーっと？

「メンバー表 1、アルト⇨シユーバ 2、ミア・メテリア 3、  
ザリアント⇨ヨハン 4、エイナ・ユーグリッド 5、アリス・ロ  
ーマイ」

…うん。見事に全員入ってますね。 ちくしょう。 別に参加して  
戦うのは良いんだけどさ…。

何かめんどくさいことになりそうだ。 …うん、なんかだけど。

「お、俺？ 俺で良いのか、先生？」

エイナは驚いたように、ジェイ先生に尋ねた。 自覚無いのか？

「なーに言ってるんだーユーグリッド？ お前、この前の実技で岩  
巨人をスパツとやってたじゃないかー」

「あのくらいの剣士が居ればー、戦力になることは間違いないだろ  
ー」

…そうだった。 この前の実技でのこと。 内容は、武器を使っ  
ての戦闘だった。

杖を持つ者は魔法で、拳でなら接近戦で先生の生み出す魔獣を倒し  
ていく、というものだったのだが…。

エイナの相手になったのは、身長5mほどのゴーレム。 もう明ら  
かに体格が違う。 大丈夫かと思っただが、エイナの《金剛剣士  
》は、それほど甘くなかった。

エイナは向かってくる敵に、剣を振るだけ。 勿論普通の刀身では  
一刀両断なんてすることが出来ず、最高でも傷がつくだけ

ズドオオオオン！ ……えっ？

エイナが横に薙いだ剣は、ゴーレムを楽々上と下にお別れさせ、ゴーレムはその場で硬直、僅かに角度のついた切り口で滑ったのか上半身は地に落ち、そのまま消えた。

…後で聞いた話によると、エイナは剣士として一流になるべく、人が使うにはあまり効果が無いだろう魔法も覚えているらしく。

先ほどの伸長<sup>ストレッチ</sup>。刀身を延ばし、【チカラ】で最高硬度にし、スパツといったわけだ。

俺は、エイナに《金剛剣士》が付いた理由のもう一つに『「金剛」のように強いから』というのがあるんじゃないかと思った。

…俺？ 全長10mぐらいのワーム（顔が龍の大蛇魔獣<sup>ドラゴンモンスター</sup>）を蹴りでぶっ飛ばしてたな。【チカラ】で威力を増強させて。

「んでー、メテリアは皆知ってる通り、あの魔法の威力でクラス対抗戦に出ないほうがおかしいよなー」

「は、はあ……」

メテリアは困惑気味だが、確かに先生に一利ある。 ……でも先生。

そのセリフは脅迫に聞こえますよ？

「ヨハンは二つ名持ってるのもそうだがー。 ……チームに女ばっかりだとアレだからー、出してもらっぞー」

「僕、そんな理由で出るんですか…？」

お、喋った。ヨハンは黒髪で…なんていうんだろう、お坊ちゃまカットの少年だ。  
メテリアに聞いたんだが、女子の間では可愛いと人気らしい。ま、どうでもいい話だな。  
半分理不尽な理由で出場させられるヨハんに、人知れず、心の中でサムズアップした。 頑張ろうぜ。

「んでー、ローマイは別に二つ名とか持ってないけどー、ネイチャリ自然操作系の【チカラ】が凄かったから、入れさせてもらったー」  
「なんだっけー、その【チカラ】…」

「……………【密林地獄】……………です」  
ヘル・ジャングル

……………おお、怖すぎる名前だ。 声は可愛いのに。

名前を呼ばれた途端に体をビクツと強張らせたアリス・ローマイは、長いストレートの黒髪を持った背が小さい少女だ。縁が緑色のメガネをかけている。  
前髪は目にかかるほどで、クラスではあんまり目立たない風だ。

しかし、彼女の持つ【チカラ】、【密林地獄】は名前と比例した恐ろしい【チカラ】なのだ。

彼女の試合が来たら、教えることにしようかな。

「…でー、シューバ」

「…お前は問答無用でキャプテンだなー。 【クリエイター】で、何でも良いから敵潰して来いよー」  
「それがトップでも誰でもだー」

ええええ…いや、自覚はしてるけどね、この【チカラ】。ただど其処までぶつきらばつにしないで良いんじゃない…。俺にだってモチベーションが…。

「いいかー?」

「…はい」

俺は、断る事をせずにすぐ返事をしたのだった。

「というわけでー。今回は終わりだー。他のみんなは応援を一生懸命するんだぞー」

…テンプレ通りのメンバー発表が終わった後、メンバーの俺達5人は、顔を合わせた。

「あと2週間か? それまでに順番やら決めなくちゃいけないな。それに、実力アップのために特訓もな」

エイナが声を上げた。 そうだな、親睦も深めないといけないし。

「…が、頑張りましょう」

メテリアが恥ずかしそうに声を上げた。 …大丈夫か?

「うん、上位に入ることが出来るように頑張ろう」

ヨハンがメテリアの声に反応するように言う。 …そういえば、コ

イツの《爆速》ってなんだっけか。

「……………がんばる……………」

…そんな小さい声で言うのはローマン。　か細い声だけど、何か不安。

「…よし、優勝だな、目標は。　頑張ろうぜ、皆」

俺がそういうと、皆が一瞬「え、優勝なの？」という顔をしてから頷いた。　「お、おお……………」みたいな感じで。

…え、優勝ちゃうの？

それはともかく、クラス対抗戦でのチームが決まり、動き出す俺達だった。

此処からクラス対抗戦まで、その道のりは苦難の連続だった。　い  
るんな意味で。

**第15話：アルトは、クラス対抗戦へ出場することとなった。（後書き）**

近々、別キャラでのサイドストーリーを作中にはさみたいと思います。

そのキャラですが、候補として

ナズシッシュューバ、エイナ・ユークリッド、ダント・サステイーフ  
の3人のうち誰かにしたいと思うのですが、…決まらない。

誰が良いか感想にでも書いてください。多いキャラに決めたいと思います。

第16話：アルトは、箱から運命のクジを引いた。（前書き）

今日は対戦相手決めです。　ちょっと一休みみたいなもんですかね。

次からは…多分、大会本線本選へと入れるかと思っています。

…うーん、始まるまでの内容がちょっと薄いかな・・・？

## 第16話：アルトは、箱から運命のクジを引いた。

Side アルト

クラス対抗戦まで、後1週間。

俺達1-Gの出場メンバーは、この1週間の間に順番決めやら各々での対人訓練など、色々と準備してきた。さて、今日は何があるかというと、クラス対抗戦のトーナメント表を決める、そして運命をも決めるくじ引きである。

「それでは、XCMのトーナメントくじ引きを、今から行いたいと思います」

5時間目。 体育館ステージで、1年の学年集会である。

「各クラスのキャプテンの方は、ステージに登壇してください」

俺は1列に並ぶGクラスの中で1番後ろ。 其処から立ち上がり、壇上へと向かう。

∴ 周り、他クラスの生徒からは馬鹿にしたような視線が俺に送られる。 そりゃそうか、最下位ワーストがキャプテンなのだから。

少し【チカラ】で聴力を強化し、周りのヒソヒソ声を聞いてみよう。

「∴ え、ワーストがキャプテンかよ。 流石Gクラスだな、こんなのもうでも良いってか」

「勉強が出来ないから、大会に割いてる時間ないんじゃない?」

「そーだよな、勉強しないと落第食らうかもしれないしな」

「Gクラスに当たったクラスはラッキーだな。余裕で勝ちあがるぜ」

……思ったとおりの反応だ。少しその声が聞こえるのだろうか、Gクラスの数人がガンを飛ばしている。

いやいや、そんな事しなくて良いから。ちょっと周りビビッてるし。何か黒いオーラが立ち上がってるし。怖っ。

そんな事を思っている間に、俺は壇上に上がり、他のクラスキャプテンたちと並んでいた。

… Aクラスのキャプテンはやっぱり負けず嫌いか。…しかし、他のクラスのキャプテンも強そうだな。

Bクラスのキャプテンは、長い金髪をクルクルのカールにした女子生徒だ。所謂、お嬢様って感じか。

指には指輪がいくつもはまっているし、首にはネックレス。…こんな生徒を野放しにしておいて良いのか。

Cクラスのキャプテンは、白髪の背の高い男子だ。俗に言うイケメン。

……あれだ、髪をさつとかき上げるポーズからして、きっとナルシストだ。絶対ナルシストだ。

Dクラスのキャプテンは、根暗っぽい男子。濃紫の髪は肩まであり、所々跳ねている。

黒縁のメガネをかけていかにも根暗なのだが、俺は見た。ソイツが一瞬、藁人形を持っているのを。呪い？

Eクラスのキャプテンは、金髪の女子だ。髪は真っ直ぐで短く、後ろには真っ赤な小さいリボンが、多分チャームポイントとして付いている。

見た目は普通に可愛い女子だが。 やはりキャプテンだ。 何かあるに違いない。

Fクラスのキャプテンは、ぼさぼさの短い黒髪で、額に鉢巻をした男子生徒。 ブレザーの上からでも、筋骨隆々なのが分かる。 スト？（スーパーファミコンの有名なゲームだ）のリユ をそのまま小さくした感じである。 格闘家だな。 あれは。

そしてGクラスのキャプテンは、赤茶の髪の男子生徒。 俺だ。 今更説明するのなんだが。

……なぜ説明したんだ。 俺は。

「それでは、Bクラスキャプテンのエリヴァン〓シャルロットさん、籤を引いてください」

「わかりましたわ。 それでは……」

俺達7人の前には籤箱が置かれている。 シャルロットと呼ばれたその女子はいかにもお嬢様という口調で籤箱の前に立つ。そして、手を箱の中突っ込むと数秒手を動かし。

「……これですわ！」

箱から勢いよく引かれたその手の中には、4つ折りにしてあるのだらう、紙。

司会者がそれを受け取り、中身をステージ下の奴らに、次に俺達に見せる。 見せられた紙には、大きく「1」の文字が。

「Bクラスは1番です！ それでは続いて、Cクラスのキャプテン

」

さて、4人がくじを引き終わり、残りは俺と ユウ系男子の2人となった。

そうそう、このトーナメント表はAクラスを1番左側のシードにし、その隣から右に1〜6の数字が振ってある。

つまり、1対2、3対4、5対6 というのが1回戦の組み合わせな訳だ。 2回戦ではAクラスと1対2の勝者 そして1回戦その他2戦の勝者同士が戦う。

「残り2人となりました！ それではFクラスキャプテンのケン・フォロウさんとGクラスキャプテン、アルト「シューバさんは同時に籤を引いてください」

同時なのか。 あ、そういえば確かに穴が大きめに作ってあるみたいだな。 …それより、リウだと思ったのに名前はケンなのか。

まあ、どうでも良いが。  
俺とソイツは籤の前に立ち、先にソイツ…フォロウが箱に手を入れた。 同時に、なので俺も手を入れる。

そして、2つしか紙が無い事を確認してから、俺とフォロウは同時に手を上げた。

司会者に、同時に紙を手渡す。 さて、何処に行くか…

「決まりました！ Fクラスは2！ Gクラスは5です！ これにより、1回戦の組み合わせが決定しました！」

「第1試合はBクラス対Fクラス！ 第2試合はCクラス対Eクラ

ス！ 第3試合はGクラス対Dクラスとなりました！

「よっしゃあ！」「キタ　　！」などと、Dクラスのステージ下の面々が小さな声を上げる。

「やっぱり、何回もそう聞かされるとむかつくな。見てろよ、絶対倒す…。」

「それでは1回戦の相手同士で、握手をしてください！」

あー、高校野球とかでよくあるよな。あれか。

…あれ？ あの根暗は？

「…こつちだよ」

うおお！？ ……ビビった。居ないと思ったら急に背後から来るんだぞ、怖いわ。

「よろしく、アルト＝シューバ君。…正々堂々、良い戦いをしようね…」

ビジュアルもさる事ながら、口調も怖い。まあそれはどうでもいいや、硬く握手した。「絶対倒す」と念を込めて。

その時、ソイツの口が僅かに歪んだのを、俺が捉えることはできなかった。

「相手はDクラスかー」

ジェイ先生が、声を上げる。　　只今、帰りのショートホームルームSHR中だ。

「Dクラスはー、あのキャプテン…セルニータ〓モザが二つ名持ちだなー」

やはり、二つ名持ちは1クラスに1人は居たりする物なのか。　学力はAクラスに劣るかもしれないが、戦闘能力はAクラス並みとか。

「んでー、モザの二つ名はー……………」

「《奇術師》だー。　5人とも頑張れよー」

奇術師…？　　あのビジュアルで？　名と顔は一致しないな、本当に。

まあ、誰が来ても潰すけどな、【クリエイター】で。

…しかし、俺達は1回戦、その軽い気持ちを改めさせられる事となる。　　続きは次回だ。

第17話：アルトは、XCMに出場した。 (1) (前書き)

「Class B vs Class F」

さて、やっとこさXCM本選に入ることが出来ました。  
アルトたちの戦いは次か、その次位ですかね。

第17話：アルトは、XCMに出場した。(1)

Side アルト

さて、今日はエクシル魔法学園、クラス対抗戦の日だ。クラス対抗戦当日は学園の授業は無し、なので、上級生はエクシリアの街に出たりしている。だが、そんなことをするのは僅かで、大多数はクラス対抗戦を観戦するようだ。

会場は、グラウンドの傍にある実践戦闘用闘技場、通称「コロッセオ」。その名のとおり、円形の闘技場だ。本物よりは一回り小さいが、ちゃんと観戦席もあるし、戦闘するには十分に広い。

開幕式直前には、多くの生徒や教師が観戦席に座り、開幕の時を今か今かと待っている。

あ、この対抗戦は部外者も見に来ることがあるといわれる。なぜ見に来るのかは不明だが。

「あー……………良いよね、こうやって目立たなくて」

「いや、目立ちまくってるぞアルト。大丈夫だ」

「君みたいな「有名人」がいるんだ。視線が動かないほうがおかしいと思うけれど」

「だ、大丈夫だよ、やっぱり目立ってるけども……」

「……………そんなに目立ちたくない……………」

一番先にエイナ、そしてヨハン。メテリア、アリス。一斉に俺に反応して来た。

……クラス対抗戦の開幕式は、参加者の入場が無い。

その代わりに、「開幕戦」があるのだ。金髪のお嬢様系女子がキャプテンのBクラス対、ユウ風格闘男子がキャプテンのFクラス。どちらも実力が分からないだけに、面白そうだ。

……あれ、話が逸れたな。えっと？参加者の入場が無いところまでだったか。

入場が無いので、出場者でも俺のように観客席で試合を見ることが出来る。

ましてや俺達は第3試合。遅くても第2試合の2、3試合が終わってから行けば間に合うのだ。

……つまり、俺達は観客席にいるわけで……俺の傍にいる生徒達は闘技場内に殆ど視線を行かせながら、チラチラと俺のほうを見てくるのだ。

見てくる理由は、単に俺が王国騎士団歩兵長のおっさん、ラウングをぶっ飛ばしたことによるのだろう。

そのせいか、いやそのせいだろう。俺はちょっとした有名人となっているのだ。

はっきり言ってこうチラチラ見られるのはあまり好きではない。

……よし。

俺は普通に闘技場内を見ている。だが、さっきからチラチラと、

悪く言えば小刻みにグサグサ来る視線は一斉に散った。  
いや、特に何もしてないよ？ 【チカラ】で見ている奴をこの体勢で把握し、見ている連中だけに威圧感を与えてやっただけ。【チカラ】乱用とかは気にしない。  
威圧感のレベルは…そうだな、こっちを見てると数秒でダウンするような奴かな。

「……アルト、今1人倒れたんだがお前のせいかな？」

「そんなわけ無いだろ。 おつ、始まるぞ……」

サラッと嘘をつく。 ……何か、嘘がうまくなった気がする。

「それでは、第142回、エクシル・クラスマッチの開催を宣言いたします！」

「司会わたくしは私、モデラ・トーがお努めいたします！」

…流石大陸一の学園。 第142回とか、年季が違う。 かなりの伝統行事だっということがわかるな。

トーと自己紹介した司会の言葉の後、観客席から大きな歓声と拍手が、沸き起こった。

「ファルモート・ガイン学園長より、開催のお言葉をいただきます！」

大きな拍手が沸き起こる。 そう、入学当日、トップと共に話したあの男だ。

「皆さん、御機嫌よう。 学園長の、ファルモート・ガイン

です」

学園長が円を中心に立つ。そして、威厳があるその声で話し始めた。

「今年は、最高位で《聖騎士》の二つ名を持つダント・サスティーフをはじめ…多くの優秀な生徒が入学してきました」

「Aクラスだけではなく、他のクラスの生徒の中にもAクラス生徒に勝るとも劣らぬ生徒が在籍しております」

…！？

…今、一瞬学園長が首を動かした。大多数には、ただ首を動かした「だけ」だと思われるだろう。

だが、俺には「学園長がこちらを見た」ように見えた。目が合ったのだ。……なんだ、このプレッシャーは。

「非常に見ごたえのある試合となることを、期待しております。これにて、ご挨拶を終わらせていただきます」

マイクがあるわけではないのに、あんなに大きな声になるのはなぜだろう。「拡大」の魔法でも使ってるのかな。

大きな拍手と共に、学園長が中心から歩き、闘技場内から消える。

どうせ、この観客席の何処かから見つもりだろう。

「それでは、早速第1試合と参りましょう！ Bクラス対Fクラス！ 各クラス1番手の方は入場してください！」

…さて、始まるぞ。



先程のは、ルビーから出た火炎が暴風に巻き込まれ、暴熱風としてFクラスキャプテン、ケン<sup>II</sup>フォロウを襲う。

…と同時に、観客席の俺達をも襲っているのだ。これが悪い意味。

「熱っ、熱いつ！」 「焼け死ぬー！」

周りから、そんな声が聞こえる。…地獄絵図かよ…。

そう言っても、ここまで来る物は体に深刻なダメージを与えるほどでは無さそうだ。

俺は【チカラ】で【熱さに物凄く強い体】を望み、涼しげな顔でそれを見ていた。…うわぁ、それにしても巻き込みようがひどいな。

(…俺の隣にいるメンバー4人はモロに喰らったみたいで、俺は《<sup>アイスベール</sup>氷膜》と《<sup>ヒール</sup>治癒》の魔法を人知れず掛けていた)

「ウゴアツ！…！」

ドサツ…と、フォロウが闘技場の壁に衝突、呻きながらそのままグツタリとした。気絶したようだ。

「決まったー！ 《<sup>ジャイアント・ハンマー</sup>巨人の槌》と《<sup>サファイアウエーブ</sup>蒼玉の津波》を組み合わせ、

巨大な水の槌でケン<sup>II</sup>フォロウを吹き飛ばした！」

「戦闘不能により、エリヴァン<sup>II</sup>シャルロツテが勝利！ よって2対3で、Bクラス勝利！ 2回戦へと駒を進めましたー！」

「ウオオオオオオオ！」と歓声が上がる。やはり、予想通りBクラスが勝ったか。手を振りながら出口へと歩くシャルロツテ達Bクラスは、2回戦、もとい準決勝でAクラスと当たる。楽しみだな。フォロウ（アイツは、【氣を生成、色々な形で現出させることが出来るチカラ】だったな。多分だが。）達Fクラスも善戦したみたいだったが、闘技場から姿を消した。

「アルト、そろそろ行くか？ まだ余裕はあるけどよ」

「…ああ、…もう行くのか。ここで体調が悪くなるのはもう避けたいからな」

皆が頷く。どうやら同じ気持ちだったようだ。

次は白髪ナルシスト風男子がキャプテンのCクラス対普通っぽい金髪女子がキャプテンを務めるEクラスだ。楽しみだな。

まあ、魔法の余波が来ないように遠くから観戦していよう。

## Side ヨライ

「…よし…《浄化》系魔法は使われていないようだね…皆、これは勝てるよ…」

モザは、出場者の控え場所へと歩みを進めるアルトを見て「いや、正確にはモザにしか見えない黒い霧（てや）が未だアルトの手を覆っているのを見てそう言った。

1番前にモザ、その後ろにその他のDクラスメンバーが隠れている。アルトたちに見つからないように隠れて見ているDクラスたちは中

々に不気味である。

「歩兵長を殴り飛ばしたとはいえ…所詮最下位ワーストだね…。 注意する  
必要も無かったかも…」

「じゃ…僕達も行くこうか…」

Dクラス5人は、アルト達とは反対側の控え場所へと向かう。控え  
場所は2つ有るのだ。

…顔に、不気味な笑みを浮かべながら。

第17話：アルトは、XCMに登場した。 (1) (後書き)

うわぁ、何というテンプレ。 コンセプトだから良いには良いんだけども。

そして最後にはモザが不気味に笑ってます。 怖い。

あ、「Side ヨライ」のヨライは自分です。  
つまり第三者的視点ですので、ご了承を。

感想・アドバイスお待ちしております！

第18話：アルトは、XCMに出場した。 (2) (前書き)

「Class C vs Class E」  
「Class D vs Class G」

今日はアルトくんがとことんチートになります。  
モザ君には犠牲(笑)になっていただきましょう。

はっきり言って、寝ぼけて書きましたorz

第18話：アルトは、XCMに出場した。(2)

Side ヨライ

XCM1回戦第2試合。Cクラス対Eクラス。  
この戦いも両者一步も引かない物で、ついに5番手、キャプテン同士の試合となった。

Cクラスキャプテン、白髪で背が高い男子、コルモ・ヒューリス。  
対するはEクラスキャプテン、小さなリボンがチャームポイントの金髪女子、マリン・ブルーミア。

カーーン！ とゴングが鳴り、先に動いたのはヒューリスの方だった。

Side コルモ

へへ、あの女子可愛いけども…やるからには倒さなきゃなあ。  
まあ…俺の【翼を操るチカラ】で、サクッと勝っちゃおうかなあ！  
…いや、やっぱり女子だから、羽はちょっと掠るぐらいで…。

そんなことを考えていた俺、コルモ・ヒューリス。  
俺はゴングが小気味よく鳴るなり、銀色の翼をバサツと生やし、相手の女子…ブルーミアとか言ったか、に襲い掛かる。

俺が翼を広げるなり、Cクラスの女子だろう、ほぼ悲鳴とも取れる  
歓声が沸き起こる。

「キヤー！ ヒューリサー！」 「翼が綺麗よー！」 「貴方は私  
が育てたー！」 「ワッショーイ！」

…へへ、なんか違う物が混ざってた気がするけど、まあいいか。  
気分が良いから。

何時もの癖で、襲い掛かりながら髪をサツとかきあげる。 …にし  
てもあの女子、全く動かねえなあ…。

…！？

な、何だ？ ブルーミアが突然消えやがった。 フツと、風に溶け  
たみたいに。

急いで辺りを見渡すと、いた。 俺の右後ろツ！

ババツ！ 俺は3枚ほど羽を射出。 速度はベアルが全力疾走する  
ぐらい…必ず当たる！

…しかし、ブルーミアはまたもフツと消え、キョロキョロと辺りを  
見渡すと今度は俺の真後ろ。

クソがつ！ 俺はもう一度羽を、今度は多く…30枚ほどを一斉に  
飛ばす。

次こそ、範囲を広めに飛ばしたので一枚ぐらいは当たるだろう。

……な、なぜだ。 なぜ当たらない！ ブルーミアは三度フツと消  
え、今度は俺の左前！ なんなんだよ！

くそ、今度こそ、今度こそ…俺の顔が歪んでいるのが自分でも分

かる。　だが、今は勝たなきゃいけない！

…すると、俺の左前にいたブルーミアはその場で体がボロボロと結構なスピードで崩れていき、最後には塵となる。

なんだと考えて、その塵に触ろうと屈んだまさにその時、俺の後頭部に強い衝撃が走った。　ガッ！…と、殴り飛ばされるような衝撃。

俺がそれをブルーミアの蹴りだと認識したのは、控え場所で目を覚まし、メンバーから説明を受けた時。

その時の、蹴られた時の俺はというと、いきなりの出来事にあっけなく意識を飛ばしてしまったのだった。

…ああ、女子の歓声が…聞こえる…。

## Side アルト

「なるほど、あの女子は幻覚使いか。　幻覚系の【チカラ】…」

「幻覚の【チカラ】！？　…何で分かるんだ？」

「あの白髪は周りをキョロキョロ見渡してたろ？　アレは、あのブルーミアとか言う女子が周りのどこかに居ると白髪が認識してたわけだ」

「ブルーミアは目の前に居たというのにさ。　ということは、ブルーミアが《幻視》の魔法を使ってる」

「だけど、《幻視》の魔法は常時目を見ていないといけない。　白

髪はあちこち見ていた。つまり、そういう制約を取っ払った幻覚系の【チカラ】というわけだ」

「なるほどな…あの女子には気をつけなくちゃな」

控え場所、戦闘がよく見える場所でエイナの疑問に俺は答えてやった。闘技場の真ん中ではあの白髪がだらしなく倒れており、観客席の一角では

「キヤー！ ヒューリスー！」 「倒れた姿も綺麗よー！」 「ドスコイ！」 「（ボソツと）ざまあみろ…」 「（爆笑中）」

といった黄色い歓声とも悲鳴とも取れるそんな声が聞こえる。一部男子生徒の歓喜の音が聞こえているから、男子の中では評判良く無さそうだな。

コルモ・ヒューリスは最後までだらしなく倒れていて、担架で向こう側：多分Dクラスの、根暗達が居るであろう控え場所がある出口へと消えた。

「さあて！ キャプテン同士の戦いはマリン・ブルーミアがその【チカラ】でコルモ・ヒューリスを攪乱！ そのまま一気に勝負を決めました！」

「これによりEクラスが2回戦進出！ 今から行われるDクラス対Gクラスの勝者と決勝行きを賭けて戦います！」

「それでは、Dクラス対Gクラス！ 1番手の方は入場してください！」

…よし、俺達の出番だ。 1番手は、若干緊張気味のメテリア。

「頑張つて来いよ、メテリア。 … ああ、そんなに緊張しなくていいから。いつもの実力が出せるようにな」

「は、はい！ それじゃあ行ってきますっ！」

俺の声に少しだけ緊張がほぐれたかその分だけいつものメテリアらしくなって。

出入り口、闘技場の向かい側から歩いてくる敵を見つめて、こちらも入っていく。

「それでは1番手対決……始めッ！」

カーンッ！と甲高くゴングが鳴り、メテリアは1度に3つの魔法陣を展開した

4番手対決までが終わってみれば、なかなかいい試合だった。

1番手メテリアは、高火力×3の鬼畜魔法で敵を圧倒。 (《煙幕<sup>スモーク</sup>》からの《追尾<sup>ホーミング</sup>》、《隕石落とし<sup>メテオストライク</sup>》は、さすがの俺も中々に鬼畜だと思っただ) )

2番手ヨハン。相手は格闘系だったらしく、良い勝負を展開するも、後一步で敗れた。

3番手のアリスは、恐るべき【密林地獄<sup>ヘル・ジャングル</sup>】無双。 たった数秒で、相手を戦闘不能にまでした。

…やはりヨハンとアリスは、また今度説明することになりそうだな。

そして、4番手エイナは…

「…ああ、クソッ」

「いい戦いだっただじゃなか。そう気にするなって、俺が取り戻すから」

「…絶対勝てよ。…いたたた…」

剣士のエイナとはあまり相性が良くない魔法使いが相手。

エイナが剣士と見るや、遠距離魔法をバンバン打ち込んでくる。

戦略には戦略だがズルにしか見えない。殴り飛ばそうかと思った。エイナはそんな状況でも果敢に剣を振り続ける、しかしそれにも限界はあるようで、最後には力尽きたのだった。

というわけで、4番目を落として、2対2。 流石テンプレ&am

p・主人公補正だ。絶対回ってくるのか。

「なんとこの試合も最終対決、キャプテン同士の戦闘となりました！」

「それでは！ Dクラスキャプテン、セルニータ〓モザとGクラスキャプテン、アルト〓シューバは、入場してください！」

そして、俺の出番が来た。

「フフ、最下位ワーストがキャプテンだから…てっきり勝負を捨てたんだと思っただけだ…」

「そうじゃなかったみたいだ…まさか僕が出ることになるとはね…」  
俺と同時に出てきたモザは、不気味な笑みをそのままに俺に話しかける。

「フフフ、君は絶対勝てないよ…もう、その段階まで来ちゃったんだ…」

…根暗だなあ…。

「それでは、5番手。始めッ！」

ゴングが鳴り響き、モザは、手を上げた。

S i d e    ヨライ

フフ…《浄化》の魔法は未だ使われていないね…勝った。

セルニータ「モザの【チカラ】は、「触れた相手の体の部位に自分以外に見えない「種」を仕込むことが出来るチカラ」。

「種」は、黒い霧のようなもので、その効力は「仕込んだ相手の体の部位と同じ自分の部位の動きをリンクさせる」こと。

仕込んで直ぐには簡単に抵抗され、霧は振り切られてしまう。だが

時間が経てば経つほどその効果は大きくなり、1日も経てば、並の大人は抵抗できない。

1週間前、対戦相手決めるときアルトに仕込んだ「種」は、どれだけ怪力の人間が抵抗しようと、なす術が無い位だ。

デメリットはまだあり、リンクさせた相手の部位は超人的なパワーを得る。だが、これはモザにとって好都合だったりする。

なお、この「種」は《浄化》の魔法を使えばあっさりと消える。だが、ここまで大きくなれば浄化するのにも相当時間がかかるだろう。

勝った…。

「アルト君、君に握手した時、僕は「種」を君に仕込んだんだ…」

「その種はもう、握手した右手を支配しているんだ…。もう引き剥がすことは出来ないだろうね…」

「アレからすぐ《浄化》の魔法を使えばこんなことにならなかったのに…流石ワースト…」

「それじゃ、僕の勝ちだね…自分の右手に負けなよ」

モザは、アルトの右手とリンクさせた自分の右拳を自分の顔に向けた。

そのまま拳を放てば。自分は軽いダメージで済むが、相手にとってはそのパワーで重たい一撃を喰らうことになる。これこそ、モザの考える戦略。

そして、モザが拳を放とうとしたそのときにはもう、『アルトはモザの目の前にまで迫っていた』。

……え？

そして、モザの体は鳩尾に拳を入れられながら吹っ飛び、壁に衝突した。

S i d e    アルト

「アルト君、君に握手した時、僕は「種」を君に仕込んだんだ……」  
「その種はもう、握手した右手を支配しているんだ……。もう引き剥がすことは出来ないだろうね……」

……なるほど、さっきから右手が自由に動かないと思っただらこういうことか。

あの根暗、自分が勝ったと思って慢心してるみたいだな。    全部言  
っちゃったし、あいつが今から何をするか、予測はつくし。

「アレからすぐ《浄化》の魔法を使えばこんなことにならなかったのに……流石ワースト……」

って事は、あいつはこれをするためにわざわざキャプテンになったわけか。

色々考えて、とりあえずアイツは馬鹿ということとで結論がついた。  
「それじゃ、僕の勝ちだね……自分の右手に負けなよ」とか言っていたので、俺は【チカラ】でその種を消滅させ、脚力を要求。

あ、ちゃんと「支配された真似」はしたぜ？    その方が気付かれにくいかもしれないからな。

え、それだと【クリエイター】だってばれないかって？ …大丈夫、表には出してないから。あくまで「裏」で種を処理したんだから。アイツはまだ気付いていないらしい。んじゃ、行くか。

そう思っただけ俺は右手を下げ、それが相手に認識されないうちにその脚力で10mほど離れた距離を一気に詰める。そして、腕を一気に引き、

「ウオラアツ！」

<sup>ストレート</sup>正拳突き。俺が最も得意とするそれは、易々と根暗の鳩尾に突き刺さり、根暗は吹っ飛ばされて壁に激突した。

まるで人形みたいにぶっ飛んでいったモザ。もう気絶したか？ …ん、まだ意識があるか。結構入ったと思ったんだけども。

俺はモザが立ち上がるうとする場所まで跳ぶ。ちよつと脚に力を入れただけで、20mほどジャンプした。

「グ……なぜ、なぜ君は自由に動けるんだい……」  
「《浄化》も使ってない、期間は1週間…。普通なら、全く抵抗できないはずなのに……」

ああ、迷ってる迷ってる。こつ迷ってる顔、好きだな。ざまあみろ的な意味で。

「そつだな、まあ…俺だからじゃないか？」

最高に理不尽な言葉を吐きつつ、俺は首筋に手刀を当て、モザを気絶させた。

くさいセリフだなあ？ ああ分かってる。だってテンプレだからね。

俺は、歓喜と驚嘆と落胆が同居する歓声を聞きながら、1-Gメンバーが待つ控え場所まで戻る。

しかし、やっぱりチートだな……これ。

こうして1-Gは、1回戦でDクラスを破り、2回戦へと進出した。

2回戦相手は幻覚使いのマリン・ブルーミア率いる、Eクラス。

第18話：アルトは、XCMに出場した。

(2) (後書き)

感想・アドバイスお待ちしております！

第19話：アルトは、XCMに登場した。 (3) (前書き)

「Class A vs Class B」

アルト「何か今日はやけに早くないか？ 投稿するのヨライ」気分「

第19話：アルトは、XCMに出場した。(3)

S i d e    アルト

さて、XCMも2回戦：もとい、準決勝になった。  
勝ち残ったのは、Bクラス、Eクラス、俺達Gクラス。そして、  
シードのAクラス。

Bクラスキャプテンのエリヴァン<sup>II</sup>シャルロツテは、「宝石を魔法  
として使えるチカラ」でFクラスのキャプテン、ケン<sup>II</sup>フォロウを  
圧倒。

Eクラスのキャプテン、マリ<sup>II</sup>ブルーミアは幻覚系の「チカラ」  
でCクラスキャプテンのホルモ<sup>II</sup>ヒューリスを一発で仕留めた。  
そしてGクラスキャプテンの俺は、Dクラスキャプテンのセルニ<sup>II</sup>  
タ<sup>II</sup>モザの姑息な戦法を「チカラ」<sup>クリエーター</sup>で破り、殴り飛ばして勝利。

Aクラスはシードだから各々実力は分からないが、きっとBクラス  
より強い。いや、絶対強い。

「さてさて！ XCMも1回戦が終わり、準決勝へと移ります！」  
「ここからはシードのAクラスが登場します！ 一体、どういった  
戦いを見せ付けるのでしょうか！」

司会であるモデラ・トーの興奮した実況。もう慣れたけど、何時  
聞いてもウザったいな。

でも、Aクラスの実力が未知数なのは事実だ。あの負けず嫌いが

キャプテンだから・・・相当手強いな。

「・・・・・・・・ト」

うーむ……多分当たるのは負けず嫌いだろうし……

「・・・・・・・・ト」

奴の【チカラ】はまだ分からないが……とても高位のものだろうな。

【召喚系サモナー】なら【ドラゴンを召喚するチカラ】ぐらいか。

「・・・お・・・い・・・ルト・・・」

《聖騎士》の二つ名だ。相当高い戦闘能力に違いないな。気を

付け・・・ん？なんだ、さっきから耳元で・・・。

「おーい！ アルトオ！」

その声が聞こえてきた時には、俺の頬には鈍い衝撃が加わっていた。  
即ち、拳。

エイナの【チカラ】…物資の硬質化を使ったのだろう、人間とは考えられない硬さだった。

「いってえ・・・・・・・・！！ 何すんだエイナ！」

「何じゃねえだろうが！ さっきから話しかけてるっつのによお！」

あ、あの声はエイナだったか。「……………すまんすまん……………」と  
平謝り。暴力には勝てないな。

「で、なんだ？」

「・・・っておいおい、もう1番手が始まつてるじゃねえか！ どうして早く呼んでくれなかったんだよ！」

「だからさつきから呼んでたんだろっが！ もう始まるぞーって！」

「・・・うるさいですわ。 Gクラスのその2人。 ・・・静かにしてくださいさる？」

俺とエイナがいみ合う其処に、凜とした声が割り入った。

Bクラスのキャプテン、金髪のクルクルカールがトレードマークのお嬢様系女子、エリヴァンⅡシャルロットである。

・・・え？ なんでエリヴァンがここにいるのかって？ 答えは簡単だ。 ここが控え場所だからである。

そう、Bクラスの控え場所とGクラスの控え場所は同じ所。 同じように、AクラスとEクラスの控え場所は同じだ。

これは、闘技場の出入り口が2つしかないからであり、現在の対戦者と次の対戦者の控えが、必然的に同じになるのだった。

「す、すまねえ。 ちょっと熱くなった」

「すまんな」

やはり、対戦前だから緊張しているだろう・・・悟った俺（と、アルトは気付かなかったが同じ事を悟ったエイナ）は（同時に）謝った。

エリヴァンは、「ふん・・・これだからGクラスは・・・」と、イライラするが言い返せそうに無い言葉を浴びせ、闘技場の方向を見た。

それに釣られ、俺達もその方向を見る。  
今はAクラスの1番手、青髪の爽やか系男子と、Bクラス1番手、茶髪の筋肉質な男子が戦っていた。

Side 「青髪」

「ウオラアアッ！」

茶髪の力強く、それでいて隙の無い回し蹴りが僕の頭部を狙う。だけど、まだ甘い。

それを屈んで避けると、予想通り。茶髪は強引に回し蹴りを中止し、もう片方の足でのローキックを狙う。奇襲。

だけど、予想済み。屈んだところから左に大きく転がって避け、直ぐに立ち上がる。

「どうしたあ！ 避けてばかりかゴルア！」

「・・・生憎、避けないといけないんでね」

相手は脳筋のようだ。全く、敵と拳を交し合う事だけが戦闘じゃないのに。避けることも戦術の一つだというのに。

Bクラスだと思いたくないね。…………後1つだ。

「それなら喰らえゴルア！ 【発動】！」

その声と同時に彼の右腕は黒ずんでいく。闇に侵食されるかのよう  
に。

そして、完全な漆黒となった彼の右腕。彼は振りかぶって・・・

何か来るのか？

「《エア・シュート空気の弾丸》！」

右腕で、何も無い虚空にストレートを繰り出した。それは一応僕  
の方向を向いてはいるけど10mほど離れた僕には当然当たらない。  
・・・でも、小さく何か聞こえる。・・・コオオオという音、前  
からだ・・・なるほど。

僕は其処から右に駆け出す。ドオン！という音。前に僕がいた場  
所は、硬い地面のはずなのに「何かで大きく砕かれていた」。

「ガハハハアツ！俺は【右手なら何でも殴り飛ばすチカラ】の持  
ち主だ！当然、空気だつて殴り飛ばせる！」

「体に穴開けたくないなら、無様に避け続けなあっ！」

・・・確かに強力だ。だが、それを把握した以上当たらない。(  
脳筋の証拠だね。)そして、僕の【チカラ】も見抜かれにくい！  
僕は逃げる。正確には、ある一点に向けて走る。そして、たど  
り着く。1番最初に「点」を置いた場所！

其処の地面に手を置く。茶髪は「諦めたかあ！？」などと言っ  
ているが・・・よし、準備完了。

「というわけで・・・」

「なんだあ！？まだ何かやる気がゴルア！」

「発動」

青髪が何か言った後、茶髪はまた空気を打ち出そうとしていた。  
……アイツの声は良く聞こえたからな。何するのか予想はつく。  
しかし、茶髪は振りかぶった体勢のまま動かない。……いや、  
少しずつ動いてはいるが……遅すぎる。

その間に青髪は蚊が止まるほど動きが鈍くなった茶髪に近づき

問答無用のフルボッコを始めた。

……うわあ、ひどい。殴る蹴る打つ突く叩く……それ  
は、20秒間にも続いた。

不思議なのが、あの茶髪はどれだけ攻撃を加えられようと、あまり  
動かないのだ。アイツだけ、動きが鈍くなったように……。

……青髪がまた何か言うと、茶髪は開放されたように倒れこむ。  
……気絶しているようだ。

「な、何ということだ！ カノンがボコボコにされて負けるなんて  
……!？」

Bクラスのメンバーだろう、黒髪で杖を持った男子が、信じられな  
いといった表情で闘技場内を見る。

「……くそ……次は……フウカ！ 貴女の番ですわ！」

「はっ、はい！ 行って参ります！」

何時もとは違い、小さく震えた声でエリヴァンが次の命令を下す。

立ち上がったのは、剣を持ち、黒髪でおかっぱ（に似たヘアスタ

イル)の女子。

日本人らしい名前。 剣もよく見れば刀身が細く、日本刀のようだ。

フウカと呼ばれた女子は、自らを鼓舞するかのように「おー！」と声を出し、闘技場内へと入っていった。

結果。 そのフウカ・エーリルという女子は負けた。

相手は、長い白髪の女子・・・ウエスレイ・リスニル。 背には、3mを越すだろっ刀身を持つ、大剣。

エーリルは待よろしく素早い動きと精密な刀捌きだったのだが、相手の女子はひどかった。

なんせ、その大剣を片手で持ち、片手で振り回すのだ。 リーチの差は歴然。

その大剣は地面を砕くと共に地面を進む衝撃波も備え、最終的にはエーリルにそれが当たったのだ。

これはひどい。 力の差がありすぎるのだ。

ポロポロになって帰って来たエーリルを見て、エリヴァンが震えてるのが分かる。

「・・・私が行きますわ」

すっと立ち上がったエリヴァン。 先ほどの杖を持った男子が「私が行きます！」というも、エリヴァンの足は止まらず。

「私は、何としてでも勝ちますわ。 だから、其処で黙って見てい

なさい」

男子は引き下がった。俺達はそんなエリヴァンに何の声も掛けず、いや、掛けられず。その背中を見送った。

Side エリヴァン

・・・強い。

・・・確かに強いですわ。Aクラスの名は伊達じゃないって事ですわね。

でも、でも私は勝つ。何としてでも勝ちますわ！

あちらから出て来たのは、私より背が低い男子生徒。黒髪で、特に何も身につけていない。

何も付けていないということは、格闘・・・？ 悩むも、それは戦ってみないと分かりませんわ。静かに、気合を入れる私。

「それでは、3番手・・・始めッ！」

ゴングが鳴り響き、私は一気に攻勢を掛ける事にしましたわ。

「トルネード《竜巻》！！ ダイヤモンドカッター《金剛の刃》！」

私がそう叫び、左の人差し指にあるダイヤの指輪を突き出すと、突如、闘技場内に大きな竜巻が巻き起こりますわ。

2つの魔法で、その竜巻に触れようものならたちまち切り裂かれる・・・いわば鎌鼬の竜巻版ですわ。本体に触れなければ大丈夫だけ

ども。

今ので、ダイヤが半分ほど減りましたが…大丈夫。

それはゆっくりと彼に近づき、彼は動こうとしない。

…でも、それは怯えてるのではなくて。

「面倒だなあ…消えろよ」

彼はすつと右の人差し指を竜巻に向けましたわ。そして、それが竜巻に当たって

パシュン！ という小さな音と共に、その竜巻は「消え去りましたわ」。

え？ その時私は、あまりの驚きに身動きが取れませんでしたわ。

そして彼はというと、

「っ…っ…良い魔法持ってるじゃん…。まーでも、残念でしたということぞ。バイナラ」

彼はそういうと、その人差し指（よく見ると、細かな切り傷が出来ていましたわ。）をこちらに向けて、何か、黄色い球体を発射。

先ほどのことで放心状態だった私は初動が遅れましたわ。そして、それが当たると…

「……！！」

声も出せない、切り裂かれるような痛み。

私は何も言えず、その場に崩れ落ちて……。最後に思ったのは、悔しさと、Bクラスの皆に対する謝罪でしたわ。

## Side アルト

「い、一撃！ エリヴァン！！シャルロッテの竜巻がいきなり消えたかと思うと！ テミニル・ラートの黄色い球体がエリヴァン！！シャルロッテを一撃で倒したー！」

「これにより、3対0でAクラス快勝ー！ 決勝進出を決めましたー！」

「強<sup>つえ</sup>え……」

「なんだあれは……見たことがないぞ、あんな物」

「……な、なんですかあの人達」

「……………」

エイナ、ヨハン、メテリア、アリスと続く。

4人は、あまりの圧倒振りに驚いているようだ。そして、俺も驚いている。

運ばれていくエリヴァン。あのラートとか言う奴、チート臭いな。

だが、1人目のからくりはある程度分かったし・・・2人目も多分行ける。そして、俺は負けず嫌い。

俺は、燃えていた。確かにAクラスは強い。だが、そんなAクラスに、勝ちたい。

幸い、俺には対抗できるぐらいの「力」はある。そして、この4人にも。

「よっし・・・皆、次は俺達だ。勝つぞ。絶対・・・」

4人は、戦々恐々としながらも頷いた。よし、意思さえあればこの5人なら行ける。

次の対戦は、Eクラス対Gクラス。

「サクッと勝って、早くAクラスの奴らを潰しにいこうぜ！」

Aクラスが圧倒的な力で勝利した。

他4人が軽く戦意喪失する中、アルトは1人、まるで明日遠足に行く子供のように　　ワクワクしていたのだった。

第19話：アルトは、XCMに登場した。 (3) (後書き)

アルト君 みなぎってきてます

ごめんなさい、何か面白くしようとしたらいつの間にかアルト君がハイになってました。 イメージ崩れたかも ( ^ o ^ ) / オワタ

アルト君LOVEな方と読者様には焼き土下座してお詫びします。

第20話：アルトは、XCMに登場した。 (4) (前書き)

「Class E vs Class G

修正しました。 物語に影響ありませんので、しっ心配なく。

第20話：アルトは、XCMに出場した。(4)

Side アルト

XCM準決勝、第2試合。 Eクラス対Gクラス。

第1試合では、AクラスがBクラスを3対0とストレートで下し、決勝進出を決めた。

その圧倒的な力に、他のメンバーが恐れ戦く中……俺はとても興奮していた。

早くあいつらと戦いたい……。そのためには、Eクラスを下さなければ。

皆には、まだ戦う気は残っている。

団体戦ゆえ、俺1人がやる気になっていても皆に戦意がないならその戦いに勝ちは無いだ。

「さて……1番手は……アルス。行ってくれるか？」

ストレートの長い黒髪が目立つ少女、アルスは、若干俯きながらもコクンと頷いた。よし、決定。

アルスは立ち上がり、皆に向かって一言。

「……………勝ってくるから……………」

何時ものアルスの口調だ。一見暗いような。だけど、その言葉に確かな意思が宿っているのは、誰の目にも明らかだ。

そしてアルスは、闘技場の中へと踏み込んだ。

「それでは始めましょう！ 1番手……始めッ！」

ゴングが鳴り、アリスは何時ものように両腕を突き出し、両手を広げた。

「……………【発動】」

ボソツと言うと、アリスの近くから円状に、地面を押し退けて、ドバンツ！と大小様々な木や草が溢れ出し、其処に密林ジャングルを作り始めた

Side ヨライ

アリス・ローマイの【チカラ】は、【密林を作り、支配するチカラ】。通称【密林地獄ヘル・ジャングル】

其れはまさに名の通り、アリスが【チカラ】を発動すると、まずアリスを中心にジャングルが出来上がる。

元の世界であったような、そしてこの世界にもあるだろうジャングルを超短時間で作り出すのだ。

「木には火を……ファイアーボール《火球》！！！」

アリスのジャングルは、闘技場を埋め尽くすには十分だった。相手もそのジャングルの中に飲み込まれる。

その相手、杖を持った魔法使いだろう男子生徒が、杖を両手に持ち

詠唱。バスケットボールほどの大きさを持つ、煌々と燃える火の球が作り出される。

杖を前面に振ると、其れが手身近な巨木に向かって飛翔した。

……どうせ本人には当たらない。この目障りなジャングルを燃やすことが先決だ。その男子は、そう思ったらしい。

考えは正解だろう。だが、アリスの能力は【「木」を「操る」】のでなく、【「密林」を「支配する」】事だ。

地面は土である。その土が突然盛り上がり、巨大な壁を作り出した。当然、火球は壁に阻まれ、消滅。

その後、同じく《雷矢》<sup>サンダーアロー</sup>、土に効きそうな《水球》<sup>ウォーターボール</sup>を連発するも、前者は土壁に、後者は動く蔦が寄り集まった壁にそれぞれ阻まれた。

男子が「くそっ！」と思わず口に出すと同時、何処からかアリスの声が聞こえる。天から、地から、右から、左から……全方向から。

「……今度は……こっちから……」

男子生徒は声に警戒し、杖を構えた。そしてその数秒後、男子の前から高速で、さながら槍の様に先端が鋭くなった蔦が3本、飛んできた。

「く……っ……」男子生徒は中々身体能力が良い様で、体を捻り、ステップし、時には杖で蔦を叩き落したりもするが、段々とその動きは鈍くなる。

急激な運動に加え、時々体を掠る蔦の傷が、ドンドンと体力を削っているのだ。血で、彼の制服は段々と赤く染まる。

「クソが……ッ！ なめるなよ！ 【大熊四重奏】<sup>ベアル・カルテット</sup>！！」

ついに切れた男子生徒は自らの【チカラ】を発動する。彼の【チカラ】は「召喚系」<sup>サモナー</sup>。

「グオオオオオオオオ！！」と彼の周りに現れた4体の黒大熊が<sup>ブラックベアル</sup>雄叫びを上げ、彼に襲い掛かるうとした鳶をその鋭利な爪で切り裂いた。

一方、アリスは腕に現れる切り裂かれるような痛みを堪えていた。

この【チカラ】は、操作している物と四肢とでダメージが共有されるのだ。

先ほどの鳶は油断した。其れは切り裂かれて先端が千切れている。つまり、その痛みがアリスの腕にのしかかっているということ。

これが、【密林地獄】<sup>ヘル・ジャングル</sup>のデメリットである。

だが、チームのためにも負けられない。特に、赤茶の髪をした少年のためにも。

「行けっ！」 男子生徒がベアルたちにそう命令する。ベアルたちは忠実に動き、目の前の鳶や木を切り裂きながら突進、アリスに迫る。

対してアリスは力を溜めている様で、ドンドンとベアルたちとの距離は縮まる。

そして最初のベアルが、アリスに半ば倒れこむようにその爪を振りかぶり 爪がアリスに到達する前に、「ベアルの腹を、何かが貫いた」。

腹をぶち抜かれたベアルは叫び声を上げることすら叶わず、光の粒子となって消えた。その後ろには地面に突き刺さるこれまた巨大な「木の杭」が。

ベアル達のおかげで視界が開けている。男子生徒はその光景を見て、思わず息を呑んだ。

その男子が、生き残るベアル達に命令を下すその前に、アリスの前方から現れる木の杭はアリスが腕を引き、再び突き出すたびに次々とベアルを打ち抜き、光の粒子へと変貌させていった。

そして。最後の1体を消滅させたアリスは、男子生徒に照準を合わせた。こればかりは、鋭い杭ではなく、破壊力の槌であるが。

「ぐっ……」男子生徒は後退あしずみりすることも出来ず、その場で小さく震えながら立ち尽くす。

アリスは、容赦なく右腕を引き、そして突き出す。槌は先ほどまでの杭と同じように飛び出した。

そして男子生徒は、先ほどのベアルを次々と打ち抜くアリスの獰猛な笑みを思い出し、其れに強烈な恐怖を抱きながら、意識を失った。

## Side アルト

「よし、まずは1勝だな」

エイナが言う。アリスなら勝つだろうって感じてたが、やってくれた。

帰ってきたアリスに、労いの声を4人で掛けた。其れに対してもアリスは俯き、無表情かと思っただ顔を見込みむと、顔は少し笑っていたようだった。

「……次は……ヨハンか」

「うん、僕だ。さてと……行つて来るかな」  
「……リーチ、かけてくるよ」

男ながら、かつこいいなと思った。主には厨二的な意味で。少しは本気で。

お坊ちゃま風のヨハンだが、実力は本物だ。どうせ他人の試合中には何も出来ない。黙って見守ることにした。

ヨハンの二つ名は《爆速》。

その由来はヨハンの【チカラ】であり、1対1のこの大会では多大な効果を発揮する【チカラ】だ。

相手は、拳にガントレットをつけた女子。どうやら拳で戦う格闘家のような。アレに当たると、痛そうだが。

しかし、ヨハンは其れに掠ることすらもない。

「く、ちょこまか動きやがって！」と、相手の女子は拳を振り回しながら叫ぶが、其れに応じるヨハンではない。

女子が叫ぶ間にもヨハンは、拳や足で少しずつ相手の体力を削って行くのだった

ヨハンの【チカラ】とは、簡単に言うと「瞬間移動」である。細かく言うと、【脚力を超人レベルにまで上げるチカラ】。

その上げた脚力は、俺の【チカラ】クリエーターで出来る脚力増加とほぼ同じぐらいだ。いや、俺よりも上かもしれない。

俺の脚力はモザ戦で明らかだろう、アレより上の速度で人が迫ると

なると……其れは相手から見ると、瞬間移動というより他ならないのだ。

「遅いよ、君……」

そうヨハンは言うが、その速さのために相手には途切れ途切れにしか届いていない。

今、ヨハンは相手の周りをぐるぐると回っており、相手の女子を十二分に混乱させていた。アレは目が回るな。

そして、早すぎるヨハンの機動はあたかも分身しているかのように見えているようだった。

「ちくしょうっ！」

少々目を回しつつも、倒れないのは流石格闘家だ。俺なら、【チカラ】を使わなければぶっ倒れそう。

女子は苦し紛れに、渾身の右ストレートを分身しているように見えるヨハンの1人に叩き込もうとした。だが、其れは当たることなく、虚空を殴るだけ。

分身は消え、彼女の後ろにヨハンが現れる。其れに気づいた彼女は振り向きざまに裏拳を叩き込もうとするが、ヨハンの脚が先に、彼女に到達した。

女子でも容赦なく、腹にトキックつま先蹴りを打ち込んだヨハン。振り向きざまということもあって彼女は後ろに吹っ飛び、あっけなく意識を飛ばしたようだった。

「勝負ありだああ！！ ザリアント！！ヨハンの蹴りがヒット！  
これで2対0！ Gクラス、決勝に王手を掛けましたああああ！  
！！」

トーの実況も、なんだか心地よく感じてきた。 ……毒されてきたの  
かな。

「よくやったヨハン！ 結構かつこ良かったぞ！」

エイナが、戻ってきたヨハンに話しかける。 そのヨハンはという  
と。

「「結構」はちょっと気に食わないけど………そ、そうだった？」

顔が赤いぞヨハン。 どうした？ そりゃ運動後は顔赤くなるけど  
さ、其処まで赤くなるか？

「そりゃもう！ 「結構」かつこ良かった！ ……さて、次はアル  
ト、お前だな！」

追い討ち掛けるなよエイナ。 「結構」は使つてやるなつての。

……ふう。 俺は、一度深呼吸して、決着を付けに行く。

「ああ。 じゃ、行ってくるわ」

相手は、多分Eクラスキャプテン………幻覚使いのマリン・ブルーミ  
ア。

さて、「決め」に行きますかっ！

マリン・ブルーミアの【チカラ】は【強力な幻覚を与える】……だ  
けではない。

彼女の力は【幻覚・幻聴・幻痛を与えるチカラ】。 1回戦では、  
相手が単純すぎた故に後2つは使わなかったのだ。

今回は、Gクラスといえども油断できない相手。 ……だと思っ  
ていた。

だが相手の赤茶色の髪を持つ少年は、まんまと自分の策に嵌ってい  
るではないか。

…一応、「自分が相手の周りを相手が敵わない速度で跳び回る幻覚」  
と「それに付随する幻聴」は使った。  
こう見えて、意外と調子に乗りやすいタイプのブルーミアは、策に  
嵌ったアルトを嘲笑うかのようにゆっくりと近づく。

ブルーミアの幻覚は、1回30秒で消えるというデメリットがある  
が、それでもゆっくりと近づき。  
ちょうど20秒で其処にたどり着いた。 さて、そろそろあの白髪  
を沈めた蹴りを放とうと言ったときだ。

「悪いなッ！」

そんな声が「後ろ」から聞こえた。アレは、あの少年の声ではなかったか。思わず、後ろを見た……だけど、誰もいない。なんだと思っただけでまた前を見る。すると、幻覚と戦っていたはずのあの少年は、忽然と姿を消していた。

「ど、どこに……！」

消えた？ そう発音する前に、彼女の首筋に一発、トンツと軽い衝撃が加えられた。

其れがアルトの手刀だと気付くにはそうそう時間は掛からず、だ  
が気付く前に、彼女の意識は闇へと落ちてしまっていた。

S i d e    アルト

よっし、気絶したな。

俺がブルーミアに手刀を入れ、ブルーミアが崩れ落ちると、トーが  
血管がはち切れるんじゃないかと思うような声で叫ぶ。

「一撃で沈めたああああ！！    アルト！！シューバ！！    幻覚使い  
のマリリン・ブルーミアを打ち破ったの勝利だああああ！！」

観客席が沸く。

ああ、あそこで狂喜乱舞しているのはGクラスの皆かあ……と思っ  
ていると、またトーは血管が以下略の声で叫んだ。

「これで3対0！！！！    なんとGクラスも、ストレートで決勝に

進出だああああ……!!」

再び観客席が沸く。そうか、もう進出決定だった。俺はゆっくりと控え場所に戻り、4人と喜びを分かち合う。

「よくやったアルト！ 決勝進出だ！」……と、エイナ。 「ああ、ありがとう」と笑顔で返す。

「やっぱり敵わないね。 幻覚使いを破るなんて」……と、ヨハン。 「そりやどうもだな」と、こちらも笑顔で。

「や、やったねアルト君！」……メテリア。 「ああ……って痛い痛い。 振り回すなって……」 握力強すぎだろ……やめて、痛いから。 喜んでもらえるのは嬉しいけど。

「……」……アリス。 何も喋ってないが、グツ！とサムズアップをしてきた。俺はそれに、同じくサムズアップをトンツとくっ付けることで喜びを共有した。

「……やったな。 でも、まだ準決勝だぜ？」

そう、メインはここからだ。

学年最高位<sup>トップ</sup>の負けず嫌いを始め、敵の動きを急激に遅くする青髪、大剣使いの白髪女子、魔法を吸収した黒髪。そして、もう1人。まさに最強と言って良い5人だ。

だが、こちらもみすみすやられに行くつもりじゃない。

全力を出して倒す。ただそれだけ。この大会では、俺達はGクラスじゃない。

「よっしゃ！ 全力出して倒すぞ！」

俺の右手が一番下、そしてエイナ、メテリア、ヨハン、アリスを順番に右手を乗せていく。  
そして俺の掛け声と共に、「おう！」と右手を掲げた。

Gクラス、決勝進出。

決勝の相手は、最強Aクラス。

第20話・アルトは、XCMに登場した。 (4) (後書き)

感想・アドバイス、ドンドンよろしくお願いします！

第21話：アルトは、XCMに登場した。

(5) (前書き)

「Final」

「Class A vs Class G」

やっとたどり着いた…。

第21話：アルトは、XCMに出場した。(5)

S i d e    ヨライ

「さあ！！　いよいよXCMもクライマックス！　決勝戦です！」  
トーの司会と共に、観客がワーツ！と盛り上がる。　時は、決勝進出を決めてから2時間後。  
俗に言うお昼休みを挟んで、クラス対抗戦は一番の盛り上がりを見せる。

決勝に進出したのは、学年最高位のダント・サステイフを筆頭に、それぞれ強力な4人を揃えた最強、Aクラス。  
対するは、無敵とも言える能力を持ちながらGクラス入りを果たした《不幸な天才》、アルトアンラッキー・バーフェクター。シューバをキャプテンに据え、他の4人もAクラスに劣らない力量を持つ最弱、Gクラス。

本当なら交わることの無い2クラスが、1人のイレギュラーを中心に、交わったのだった。

……くさい事言ってしまったが、後は彼に任せよう。

S i d e    アルト

……いよいよだ。　いよいよ、Aクラスとの決勝が始まる。  
しかし、当たるのは最高位の負けず嫌いだろう。  
アイツが最後に出てくるように、俺は、皆の勝ちを唯祈るのみ。  
運を天に任せるってやつか。

「それでは！ Aクラスは1番手の選手を選んでください！」

このクラス対抗戦決勝には、1つルールがある。其れは「上位クラスの順番決め」。

決勝に進出した2クラスのうち、上位のクラスのほうが先に選手を決めて、闘技場に行く。下位クラスの方は、それを見て選手を決めるのだ。

これは所謂ハンデであり、今までの戦いを見て【チカラ】の概要を分かっている両クラスだから、こんなルールが設定されているのだ。言い忘れていたが、両クラスの選手決めは決勝以外相手クラスに見えないようになってる。どうなっているかは推して知るべし。

……説明している間に、Aクラスの選手決めが終わったようだ。どうやらアイツは……準決勝に出て来た、黒髪だ。

あの黒髪、Bクラスキャプテンのエリヴァンの強力な魔法を指一本で消し去り、尚且つその指から黄色い球体を発射、エリヴァンを一発で沈めた。

……それなら……。

「……メテリアかな。アイツに勝てるのは」

「わ、私？」

メテリアが、素っ頓狂な声を上げた。うん、メテリア。

「そう。たぶん、アイツに勝てるのはメテリアしか居ないな」

俺がちよつとオーバーに話すと、メテリアの意味も固まったようだった。

よっし、OKだ。

「じゃ、よろしく頼む。……勝つて来いよ」

「……うん」

俺は最後に少し、メテリアに耳打ちした。メテリアが軽く頷くと軽く背中を押して、メテリアは闘技場へと入っていった。

「……メテリアに何話したんだ？」 ……とエイナが尋ねた。

其れに対し俺は、「ちよつとな」 ……と言い、静かに見守ることにしたのだった。

## Side ヨライ

Aクラス1番手…テミニル・ライト対、Gクラス1番手…ミリア・メテリア。

「それでは、1番手……始めッ！」

トーは何時もより多く間を取り、そして開始の宣言をした。……  
最初に動いたのは、メテリア。

「《<sup>フレア</sup>焔波》……！」

メテリアはそう言って片腕を突き出し、魔法陣を展開させる。メテリアの【チカラ】、【スベシャルイズ・マジック魔術特化】によって強化された3つの魔法陣。

其処から、ポオツ！と3つ大きな炎が溢れだし、津波の様にラートを襲う。

其れに対しラートは、全く動かず。いや、右腕だけを炎を津波に向け、言う。

「……さっきの、見てなかった？」

炎の津波に、人差し指でちよんと触れるだけ。3つが同化していった《フレア焰波》は、一瞬にして消えた。

メテリアは、「やつぱり……」とその現象を見て微かに歯軋り。自分の得意魔法がかき消されるのだ、悔しさも半端ではない。

「つつ……良いね、でも俺には敵わない。……バーン」

ラートも一瞬辛そうな顔をするがそれはすぐに消え、右手で銃の形を作ると、弾丸を撃つように上げた。

其処からは、黄色い球体。あのエリヴァン＝シャルロツテを倒したそれがメテリアに襲い掛かる。

メテリアはというと、こちらも動かなかった。そのままの姿勢で、堪えるように立つ。

そして、その球体がトンツとメテリアに当たった。…瞬間。

「……ぐあぁっ!?!」

メテリアが思わず呻く。その球体に当たった瞬間、皮膚から燃え

るような痛みが体の奥へと突き抜けたのだ。  
《焔波》<sup>フレア</sup> 1つ分どころではない、フレアの上位魔法、《龍焔》<sup>フレス</sup>に匹敵するその熱さ。

しかし、その痛みに関わらずメテリアは立っていた。そして、あの助言に感謝していた。

(アルト君の、言ったとおりだ) …と。

メテリアは痛みには堪え、魔法陣を3つ展開させる。中身は回復魔法ではなく、攻撃魔法だ。

「《雷波》<sup>サンダーシュート</sup>!!! 《焔波》<sup>フレア</sup>!!! 《葉刃》<sup>リーフブレイド</sup>!!!」

3連発。左の魔法陣からはバチバチと小さく放電する雷が、中央からは先ほどの炎が、右からはいかにも鋭そうな大量の葉が、それぞれ溢れる。

メテリアが右手を振ると、それらはラートに向かって飛んで行き、途中炎が葉を「食い」、より強大な炎へと変化していた。

ラートはあることを思いながらもそれに人差し指を向け、一瞬にして消し去る。指先に、ジンジンと痛みが。

しかし、ラートが顔を歪ませた時には、メテリアはもう次の魔法陣を展開していた。

「《天からの贈り物》<sup>プレゼント</sup>っ!!!」

メテリアが詠唱したのは1つの呪文。だが、空からは3つ、別々の物がラートに向け降ってくる。

魔法で言う《雷波》サンダーシフト、《水槍》ウォーターランス、《氷岩》ロックアイスが、1つの呪文で。

これは、メテリアが考え出した3つの詠唱を1つに纏める詠唱方法。メテリア曰く《三位一体》トリプルマジック。

そして、それらは狂いも無くラートに襲い掛かる。あの球体を発射できず、やむを得ず魔法の対策に回った。

「ぐう……！」と、ラートが呻く。人差し指は、冷たさや痺れで若干震える。

そして、やっと球体を発射できると思った頃には、メテリアは右腕を既に構えていた。

(…………開放する余裕が無い…………ツ！？)

ラートがそう思った頃には、メテリアは詠唱を終わらせ、発射準備に入る。

「《焰波》フレア……！！」

思えばこれも《三位一体》トリプルマジックなんだろうか。3つ同時に繰り出される炎はラートに向けて遡る。またも、魔法の対処に指を回すしかないラート。

「ちくしょ…………ガアアアアアアア！！！？？」

巨大な炎に指を触れさせれば消える。それは変わらないが、唯一変わったのはラートの反応だ。

先ほどの《焰波》<sup>フレア</sup> 3連発とはまったく違う、苦しい表情のラート。  
そして、確信した顔のメテリア。

メテリアは右手を突き出し、唱える。　メテリアが覚えるもので、  
敵への到達が最速を誇るそれ。<sup>まほう</sup>  
普段は威力が小さすぎて使わないが、今この場では、それが役に立  
ったようだ。　唱える。

「《風針》<sup>ウィンドニードル</sup> つー！ー！」

風を纏った一本の針は、それこそ風でラートへと飛んで行き、  
何時もの癖で人差し指を前に出してしまふラート。

何百回も、もしくは何千回も指先を前に出して魔法を吸収している  
ラートだからこそ、ミスだった。

「しまっ……………」 ……そうラートが思ったのと、針が指に触れる  
のはほぼ同時だった。

ラートの指先から体にかけて灼熱というか、電撃と言つか、氷冷と  
いうか。　なんともいえない感覚が遡る。

それは先ほどまで受けていたメテリアの魔法そのものであり、もち  
ろんそれは、1つ1つが高い威力を持つものだった。

「がっ……………」 ……そんなつめき声に似た声がラートの口か  
ら出て、ひとりでラートの体が後ろへ飛ぶ。

まともな着地ができず、仰向けに倒れるラート。　彼はもう意識を  
失っていた。

Side アルト

「……決まったな」

それがそうというのが早いか、エイナは立ち上がって興奮したように叫ぶ。観客席も大分ざわついているようだ。

「すげえ！ Aクラス相手に勝っちまったよミリアの野郎！」

「おいおい、落ち着けて・・・」と俺は言うが、エイナは聞く耳を捨ててしまったようだ。

あーあ、こりゃメテリアが帰ってきて十数分はこのままだな。ま

あ、メテリアにはゆっくり休ませてやりたいんだが……

「ミリアアアア！！ すげえじゃねえか、勝っちまうなんてよ！」

言ったそばから。帰ってきたメテリアに抱きつくエイナ。今のメテリアの状態考えてみ……と言いつうになっただが、まあ、止まらないか。

メテリアは足取りがふらふらしているものの、まだ元気そうだった。まあ、《焔波<sup>フレア</sup>》3発分一気に喰らって、そして魔力を大量消費だもんなあ……そりゃ脚がふらつくよな。

「ア、アルト君……」と、メテリアが話しかけてきた。なんだ？

「あ、ありがとう。アレのおかげで、勝てたから……」

ああ、アレね。エイナが「何だ？」と聞いてくるので、ちょうど良い機会だ、俺の作戦を教えることにした。

俺は、あのラートとか言うヤツが魔法を消しているのではなく、吸収していると見た。

何かラートとエリヴァンの戦いで、あの消える感じがどうしても指先に吸い込まれる感じに見えたからな。

それで、その吸収した魔力はどこへ行くのか。多分、あの球体だろうな。

人間が魔力を許容値より多く得ると、その魔力に耐えられずに暴発する。だから、人間は無意識に出る魔力と生み出す魔力をコントロールしている。…っつてのは学園の授業で習った。

だからラートはあの球体に魔力を込めることで体内の魔力の量をコントロールし、ついでにそれを攻撃に利用していた。撃った魔法と受けたダメージが同じだったのは、そのためだ。

俺はそのことから考えた。それなら、ラートに球体を発射させる暇を失くし、魔法を次々に受けさせれば勝手に自滅するのではないかと。

最初にわざとメテリアに球体を受けさせたのは、ラートが受けた魔力をそれに転化させているというのを確認させるためだ。ごめんな、メテリア。

そして、それで確認が取れたら後はメテリアの豊富な魔法で相手の暴発を待つだけ。ここで【スペンチャリス・マジック魔術特化】が役に立ったな。

3つ同時展開、マジックラグ（魔法陣展開から魔法が出るまでの時

間のことだな」がほほ。この作戦にピッタリだ。

そしてアイツは魔法を受け続け、最後でボン！だ。アイツは今までに喰らった魔法の全ダメージを1回で受けて、気絶したわけだな

俺がメテリアに耳打ちしたのは「1回《焰波<sup>フレア</sup>》で様子見して、黄色い球体を受けてくれ、それがフレアのダメージと同じなら、間髪入れずに魔法を叩き込め」

そして、「勿論これは俺が勝手に考えた作戦だから、無視して良い。てか、ヤバイと思ったら無視してくれ」と。

「ありがとう…アルト君が考えてくれなかったら、私、負けてたかも」

そこまで言われる覚えはないんだけど…でも、素直に受け取っておこう。

「……質問」 ……アリスが手を上げた。 ……なんだろう。

「……それなら、格闘のヨハンを出したほうが、良かったんじゃないの……？」

……ふむ、確かに。まだ選手決めの段階では魔法だけを吸い取るなんて分からなかったけど、ソッチのほうが良かったかもな。……でも。

「それは個人戦の話だと僕は思う。 ……なんせ、まだ4試合も残ってるわけだからね ……そうだろう？」 ……ヨハンが言う。俺

の言いたかったことを……。

「……ああ、個人的には、Aクラスのコイツには誰々っていう風に、出来るだけ有利になるような決め方をしてるからな」……俺は、それに続けて言った。

「理由が……あるなら……良いけど」ん、アリスも分かってくれたようだ。

さて、ともかく1勝はした。後2勝で、優勝だ。

1番手終了 勝者、Gクラス ミリア・メテリア。  
Aクラス 0 - 1 Gクラス

第21話：アルトは、XCMに出場した。 (5) (後書き)

ヨライ「何で送り出す時に嘘ついたん？」「メテリアしか勝てない」  
って」

アルト「嘘っていうか、勝てる確率が高かったのがメテリアだったからな」

ヨライ「じゃあそう言えば良かったじゃん」

アルト「ソッチの方が気分乗るかなーって」

ヨライ「……コイツ……まあそれはともかく、感想・アドバイスお待ちしております！」

第22話：アルトは、XCMに登場した。 (6) (前書き)

2日ぶりの夜来です。

今日は少々goodな気分。 日が空いたからね。 ( ) 言い訳 ( )

第22話：アルトは、XCMに出場した。(6)

Side ヨライ

XCM決勝戦。

1番手は、Aクラス：テミル・ラート対Gクラス：ミリア・メテリア。

ラートの【魔法を吸収するチカラ】に対し、メテリアはその【チカスベンチャライズ・マジックラ】…【魔術特化】を駆使し、1勝をもぎ取った。

さて、次は2番手である。先に選手を出すAクラス。控え場所から出てきたのは……

2回戦で、Bクラスの男子生徒をフルボッコにして勝利した、青髪の男子だった。

Side アルト

……む、アイツか。

「……あいつがなんか言った後に、あの茶髪の動きが遅くなったんだよな……」

エイナが言う。……とまあ、つまりは相手の動きを遅くする【チカラ】なわけか。《減速》の魔法はあそこまで遅くならないし。あそこまで遅くするには、恐らく5〜6回掛けなければいけないかな。そもそも、あの青髪が魔法を掛けている様子は無かった。

……「ヨハ」それじゃ、僕が行くよ」

……

「……そうだな、ヨハンが1番適正だと俺も思う」

出鼻くじかれたが、まあいいか。自身に意思があるなら、尚更良  
いよな。

「それじゃ、行って来る」とヨハンは言って、闘技場へと出て行  
った。

……少しだけフラグになれば良いと思う俺がいるが、それも行かな  
いのがこの世界なのは、今まででよく分かっている。  
何より、Aクラスに勝ちたいのだ。それは、譲れない。

## S i d e    ヨライ

決勝2番手は、Aクラス：アグスⅡレイアン対、Gクラス：ザリア  
ントⅡヨハンの対決となった。

「2番手、始めッ！」…トーの声とともに、動いたのはヨハンだ。

…元々ヨハンは、速攻で相手を倒すスタイル。【脚力を超人レベ  
ルにまで上げるチカラ】で、瞬間移動じゆんかんし、相手を蹴りで仕留めるの  
だ。

なので、今回も素早く相手を倒そうと思ったヨハンだった……のだ  
が。

「グツ……そんなんでは倒せないよ〜」

「……くそ、ふざけやがって……」

ヨハンの回し蹴りは、体を後ろにずらしたレイアンの腹に掠るのみで終わる。一旦距離を取り、直ぐに攻撃に移るヨハン。

どうやら青髪は、避けることにも特化しているらしい。当たるには当たっているが、その殆どがクリーンヒットには程遠く、ダメージも少しいだ。

ヨハンがその卓越した脚力で瞬時に近づき、直蹴りを放つ。威力は脚力と筋力に比例し、筋力を脚力でカバーしているにしてもクリーンヒットすれば数m吹っ飛ばせるレベルだ。

それに対しレイアンは、僅かに体を傾けたり、動かすことでクリーンヒットを悉くかわしている。

その華麗かつ正確な動き。ヨハンは、次第に体力を削られていった。

その攻防が数分続き、ヨハンはまだまだ素早い動きが出来るようであるが、体力は確実に減っている。

レイアンは、時々バランスを崩したかのように地面に手を付ける。すぐに体を起こし、ヨハンの蹴りを避け続ける。

どちらも、他人の目から見れば疲れているのは明らかだ。

「くそっ……」

「そんなんで終わりなのか？ やっぱりGクラスだね」

ヨハンは一寸息をつき、それを茶化すかのようにレイアンが声を掛ける。再び「クソっ……」と呟き、蹴りを再開させるヨハン。右足で前蹴り、それから1秒も経たず、左足で上段の回し蹴り。ハイキックそして右足で下段の横蹴り。

そんな連続技にも、レイアンは冷静に対応していく。

前蹴りを右に体をずらして避け、避けた方向から来る左足は上半身を僅かに逸らし、掠りながらもスレスレで避ける。

ヨハンが「回し蹴りをしゃがんで避けるだろう」と思い放った下段横蹴りは、レイアンのアクロバティックなバク転でブレザーに掠り傷をつける程度に終わった。

焦り、イラつき、ヨハンをこの2つが苦しめる。

だが。

レイアンはバク転で距離を取った後、ガクツと膝を突いた。観客

席、Aクラスがひしめくエリアが、どよめく。

対し、Gクラスのエリアは一瞬ワツと沸いた。直ぐに収まったのはまだ決着がついていないからなのだが、それはともかく。

歓喜したのはヨハンも同じである。そう、相手は疲弊している。

その疲れた体を奮い立たせ、「チカラ」を発動。……未だ膝を突くレイアンに、近づくヨハン。

この時、ヨハンが相手の【チカラ】を冷静に分析していれば、まだチャンスはあったのかもしれない。

いや、疲れて思考が「相手を倒す」事しか考えることが出来なかったヨハンに、それは過酷だったのかもしれない。

そして、ヨハンがレイアンに止めの回し蹴りを放つ際、ヨハンは気がつかなかつた。

レイアンが微かに笑っている事。そして口元で呟いていたことに。

「お・馬・鹿・さ・ん」

レイアンの頭部まで後数cmというところだった。いきなり、何かに押さえつけられるかのようにヨハンの蹴りの速度が遅くなる。それを認識するのに、ヨハンは少しの時間を必要とした。

それをレイアンが見逃すはずも無い。常人より遅いその脚。避ける必要も無い。

いつの間にか立ち上がっていたレイアンは、その脚ではなくヨハンの腹部に向け前蹴りを放った。拳でのストレートと同じ。威力は、絶大。

蹴りが遅くなったという現象、そして蹴りの速度が加わって、避けることもできない。

いや、レイアンの【チカラ】上、直ぐに避けることなど、できるはずも無かつた。

「ゴッ………！！？」

ヨハンは元々、身軽なほうだ。その体は、いとも容易く宙を2m

ほど舞い、倒れこむ。 距離を取ったレイアン。  
何が起きたか、ヨハンはこのときに、その腹に来るズキズキとした  
痛みで認識した。

レイアンは演技をしたのだ。 こちらにおびき寄せるために。

「アツハツハ！！ 見事に騙されてやんの。 あー、おつかしい  
！」

ヨハンを指差し、笑う。 その姿は、まさに悪魔。 相手を嵌める  
ことにも、レイアンは抜きん出ていた。

「……………がああああああ！！！！」

しかし、まだ余力はあったらしい。 ヨハンは立ち上がり、笑うレ  
イアンを睨みつける。 「お？」といった感じのレイアン。  
そんな声を発して飛び出すヨハン。 今度こそ、決めるつもりで飛  
び出した。

だが、レイアンは最後まで笑う。

ヨハンの動きは其処で遅くなる。 先程よりは早い。 だが、常人  
よりも遅いその動きに、レイアンは笑うことすらやめる。

「それじゃ、1から出直して来な」

そんな気の抜けた声とともに、ヨハンの左から脚が迫る。レイアンも決めに入ったらしく、狙いは頭部のようだ。ガンツ、と脳を揺さぶられ、レイアンの【チカラ】である【超鈍化結界を張るチカラ】を破ることが出来ず、ヨハンの意識は刈り取られ、体が地に突いた。

……観客席のAクラスから、歓声が沸いた。

S i d e    アルト

……今更分かったところでどうしようもないか。……アイツの【チカラ】……。

「あ、あの膝を突いた時は流石に勝ったと思ったけど……演技だったなんて……」

メテリアが、意識を失い運ばれてきたヨハンを心配そうに見つめながら言う。

「あいつが張った結界に誘い込ませるためだったか……」

クソツ、早めに気付いてりや良かった。……思えばアイツは、2回戦でも度々地面に手を突いていた。アレは避けて疲れていたわけじゃなく、結界を形作る点を置いていたのか。

点を結び、結界を作る。……多分、いやテンプレだが……置く点が多ければ多いほど、面積が狭ければ狭いほど結界の力は強くなるんだろうな。

ヨハンは多く蹴りを繰り返してたし、その分、置ける点の数も増えたんだろう。

「……まだ1敗だ。ヨハンは頑張った。次は俺達だぞ！」

そう、自らに言い聞かせるように、皆に話す。

俺とエイナ、そしてアリス。必ず、勝たなければ。

2番手終了 勝者、Aクラス アグスIIレイアン。

Aクラス 1 - 1 Gクラス

第22話：アルトは、XCMに出場した。 (6) (後書き)

感想・アドバイスお待ちしております。

追記：一部修正しました。基本的に、「着いた」を「突いた」にしたのと、

ヨハンが蹴りで吹っ飛んだ距離を長くしたことですかね。

第23話：アルトは、XCMに出場した。

(7) (前書き)

godった。 やばいほどgodった。

っていつか100万PV……？  
目が毒されたかな、ゴシゴシ。

第23話：アルトは、XCMに出場した。(7)

Side ヨライ

XCM決勝戦。試合は、2番手まで終わっている。

1番手は【魔法を吸収するチカラ】を持つAクラスのテムニル・ラート対、【スベンヤライクス・マジック魔術特化】で魔法を強化するGクラスのミリア・メテリア。

メテリアは、アルトの助言もあってラートの【チカラ】の弱点を見抜き、その豊富な魔法力でラートを破った。

2番手は、【超鈍化結界を張るチカラ】で相手を殴り倒すAクラスのアグスIIレイアンと、【脚力を超人レベルまで上げるチカラ】を使い、速攻で相手を蹴り倒すGクラスのザリアントIIヨハン。

勝負は、攻撃を避け続けるレイアンに対し、焦りから「相手を倒すこと」しか考えられなくなったヨハンがまんまとレイアンの罠にかかり、敗北。

これで勝負は1-1の同点。イブシ

さて、次は3番手対決だ。先に選手を出すAクラスが闘技場へと送り出してきたのは……。

2回戦では出場しなかった相手。しかし、学年最高位トップのダント・サステーフではない。

そう、唯一今まで顔を見せず、1番読みにくい相手。その姿は、金髪に赤のメッシュを入れた短い髪に、ブレザーを着崩した……女子だった。

……つと、アレは、2回戦で出て来なかった残りの1人だな。 負<sup>サ</sup>  
けず嫌<sup>ステイフ</sup>いは除けて、な。

さて、こちらの残りは俺、エイナ、アリスだ。 負けず嫌<sup>サ</sup>いが出るのは最後だとして、俺が出るのも最後だな。 展開的に。そして、Aクラスのもう1人は大剣持ちの白髪女子……えーつと、リスニルとか言っただか。

……アイツは、何となくエイナと当たらせて見たいよな……しかも、アリスと当たらせたら、地面砕かれたりしてゴリ押しで負けそうだと、なると……あのメッシュ女子と当たるのは……

「……………私？」

俺が言う前に、アリスが言う。 ……そうなりますね（泣）

……冗談はこの辺にしておいて、そういう理由があるからアリスに決定かな。

「そういう風になるな。 ……あと、俺の思考読んだりした？」

「……………何のこと？ ……それじゃ、行ってくる……………」

……ナシズ爺やサナブ婆と同じように、俺の思考を読むヤツが3人も現れたら、それはそれで厄介だな。

アリスが本当に知らないことを祈りつつ、俺達はアリスを送り出した。

Side ヨライ

「アンタね、私の相手は」

アリスが闘技場に姿を表すなり、自信満々といった表情で言うAクルスのメッシュ女子。名前はフィンル・エレンス。

「……………そうだけど」

「……………くつらいなあ！ もっと明るく行くこうぜ！ せっかくの試合なんだからさあ！」

自分が暗いのは自覚してるアリス。お前は明るすぎだると心の中で毒づきながら、開始位置に立った。

「それでは始めます！ 3番手、始めッ！」

トーの絶叫とも言える開始宣言。先に動いたのは、アリスだ。

「……………【発動】」

アリスの【チカラ】、【密林を支配するチカラ】こと【密林地獄】ヘル・ジャングル。両手を突き出してそう言つと、1回戦、2回戦と同じように、アリスを中心にして円状に密林が広がる。

大小様々な木、草、そして土。確かに密林といえる場所が、闘技

場を覆っていた。アリスの準備は完了。

……対し、エレンスは動かない。しかし、怖がっている様子はない。むしろ

「ほー、すごいいじゃん。ジャングルだジャングル！」

珍しがって、普通でも高いテンションがさらに上がっているようだ。手を大きく振り、本当に楽しがっているようだ。小さくそれを見たアリスは、小さくハアとため息を吐いた。だが、これは試合だ。負けられない戦い。アリスは、すっと右手を引き、少しの間を開けてから再び突き出した。

そうすると、エレンスに向かって、バシユンツ！と鋭い蔦……槍蔦と言ふべきだろうか……が飛ぶ。

エレンスは、動かない。勿論、怖がっている訳ではないが、蔦に当たると確実にダメージを受けるのは明白のはず。それなのにどうして動かないのか、というところ。

「!? あつぐ……?」

エレンスではなくアリスが苦しみだす。突き出した右腕が、灼けるように痛い。思わず左手で右手を押さえた。まともに前を見てられない。

もう、手首から先の感覚はない。つまり、千切られたか切り落とされたか……。しかし、そんな感覚ではない。切られた感覚ではないのだ。

反射的に鳶を引く。戻ってきた鳶を見ると、先端がドロドロに溶けていた。

その鳶の操作をやめ、段々と戻ってきた手の感覚。前を見ると、アリスは目を疑った。

「あははっ！　どうしたの、ほら、かかってきなさいよっ！」

その声は変わらずエレンスの物だ。だが、そのエレンスには左のわき腹がなかった。文字通り、ごっそり抜け落ちたかのように。よく見ると、わき腹があった場所ではその断面がジユウジユウと音を立てている。

アリスが、エレンスの【チカラ】を正に見破ろうとした瞬間。その考えはエレンスの声で断ち切られた。

「行かないなら私から行くよッ！」

ゾツとした悪寒が走り、ほぼ無意識に今度は大木を操って木の槌として振るう。エレンスはまたも避けようとしないう。槌が当たる。だが、人を殴ったような感覚は無いし、鈍い音もしない。ただ、其処に響くのは

「ああああがああっ……！！！」

突き出す左手から灼ける痛み。 今度こそ、アリスは大きな呻き声を上げた。

エレンスとは言えば、その木の槌がある場所から居なくなっていた。大木は、表面が溶けてまるでマグマのようになっている。

そして、地面の土も大木の表面のようにジュウジュウと音を立てているが、それはアリスのほうにゆっくりと、確実に迫ってきていた。強大な熱量を持つ見えないマグマの塊が、地面を這っているかのよう。

もう、アリスには分かっていた。エレンスの【チカラ】。大まかにだが……その予想は当たっている。

弱点までは分からなかった。しかし、それがアリスの希望になった。

眼前にまで迫った「それ」に、アリスは一縷の望みをかけて、四肢全ての力を込めた、4つの大木を「それ」に向かわせた。

ダガアンツ！と轟音がし、其処には4つの巨木が突き刺さっていた。

……そして、倒れたのは四肢全てに激痛が生じ、ショックで気絶したアリスのほうだった。

「それ」……ぶくぶくとあわ立つ液体は瞬く間にブレザーを着たエレンスの姿へと変わり、一瞬にして消えていく密林ジャングルに背を向けて、ゆっくりと控え場所へ帰還していった。

またも、観客席で歓声が上がったのはAクラスの方だった。

S i d e    アルト

「……………チツ……………」

俺は舌打ちした。　何故かって、あのメッシュ女子とアリスとでは相性が悪いからだ。

【自身を強酸に変えるチカラ】……………ブクブク泡立ったり、大木とカマが溶けたりしたところで分かった。

「アイツに勝てそうなの……………ミリアとアルトだけじゃねえか」

「ごほっ……………さすが……………Aクラスだね……………」

エイナが、もはや諦めとも取れる発言。　それに乗じて、段々と回復してきたらしいヨハンが言う。

「アレは王水か……………？　もしそうじゃなくとも、濃硫酸とか濃硝酸とかありえるな……………」

……………王水。　濃硫酸でも溶けない金やプラチナを溶かす、超強力な酸性の液体。　人間の皮膚など、瞬く間に溶かしくす危険なものだ。

「……なんだそりゃ？」

「……いや、なんでもない」

多分、この世界では硫酸やら硝酸やらは無い。王水なんてもつてのほかだろつ。

ここではああいう酸のことを別の呼び名というらしい。(その呼び名をエイナは知らなかったらしいが。) メンドクサイからこれからも強酸と呼ぶが。

俺はこの時、少しだけゾツとした。残りは俺とエイナ、あちらは負けず嫌い<sup>リズミル</sup>と白髪の女子、大剣使い。

Aクラスとは、「こういうもの」なのかと実感した俺だった。

3 番手終了。 勝者、Aクラス フィナル・エレンス

Aクラス 2 - 1 Gクラス

第23話・アルトは、XCMに登場した。 (7) (後書き)

ありがとうございます！x100程。

これからも精進していきますので、よろしくお願いします！

第24話：アルトは、XCMに出場した。(8)

Side ヨライ

XCMも、いよいよ終盤だ。早くて後1戦。遅くても後2戦。

決勝は3番手までが終わり、2-1でAクラスが1歩リード、そして、優勝へとリーチをかけた。

1番手、Gクラスのミア・メテリアがその魔法でAクラス、テミニル・ライトを破り、Gクラスがまず1勝。

2番手、【超鈍化結界を張るチカラ】と罫を最大限使ったAクラス、アグス<sup>ブ</sup>レイアンが、Gクラスのザリアント<sup>イ</sup>ヨハンを圧倒して同点。

3番手、Aクラスの【自身を強酸に変えるチカラ】を持ったフィンル・エレンスが、【密林地獄<sup>ヘル・ジャンケル</sup>】のアリス・ローマイに勝った。

試合は4番手対決。

Aクラスからは、大剣を持った白髪の女子、ウエスレイ・リスニルが闘技場へと出て来た。

それに対し、Gクラスの控え場所から出てきたのは、やはりというか：【金剛剣士】の二つ名を持つ赤金色の髪を持った女子生徒。

今まさに大剣を召喚し、ブンブン振り回しながら出て来た、エイナ<sup>イ</sup> ヌーグリッドだった。

Side アルト

……あっちがリードか。

まあ……あの強酸女子が出てきたところでやばいとは思ってたが……予測通りになったか。

「……じゃ、次は勿論俺だな。 だろ？ アルト」

と、俺が考え込んでいる時に立ち上がったのはエイナだ。

……もう何も言うまい。 どうせあっちも白髪の女子だし。 あっちが白髪女子出てきたら、こちらもエイナを出そうかと思っただし。

「……ああ、そうなるな」

「今回はガチで負けられない。 頑張れよ」

「……任せろ」

エイナはそう言って、急に目つきを変えた。 ……戦闘の目だ。 女剣士としての、それ。

俺は、他の3人とともにエイナを闘技場へと見送った。 エイナの気迫に賭けたかったし、賭けざるを得なかった。

## Side ヨライ

「さあ！ XCM決勝戦も、ついに4番手となってまいりました！」  
「Aクラスからはウエスレイ・リスニル！ Gクラスからはエイナ  
II ユーグリッド！ 女性剣士対決です！」

「それでは4番手、始めッ！」

トーがそう叫ぶとともに、両者は同時に駆け出した。

リスニルは片手で軽々と、エイナは両手でそれぞれの太剣を持ち、相手へと駆ける。……そして先に剣を振ったのは、リスニル。

「グラウンド・ウェーブ《波立つ大地》！」

そう詠唱し、エイナから少し離れたところで剣を下へと振り下ろす。

勿論エイナには当たらず、太剣はガツ！と地面に突き刺さった。

しかしその瞬間、その剣を起点に突然「ドバンッ！」と衝撃波が発生する。指向性なのか、それは一直線にエイナへと向かう。

……ウエスレイ・リスニルの【チカラ】は、【『クラッカー』を扱えるチカラ】。

『クラッカー』とは、まさしく今、彼女が持っている太剣のことであり、所謂「魔剣」というものだった。

『クラッカー』には、かつて「地の王」と呼ばれた魔人……いや、魔神の魂が宿っており、魔力を剣に「食わせる」ことで、高威力の技を繰り出せるのだ。

魔力は常時食われており、そのせいかリスニルは魔法を上手く扱えないのだが、それ以上に剣の存在は大きい。

勿論彼女にとっては、【チカラ】である『クラッカー』の重さなど気にならない程度であり、最早体の一部と言って良い物だった。

今しがたリスニルが出した《波立つ大地》もこの技の一種であり、実質『クラッカー』に魔力を食わせて発動させる種の技しか、リスニルは出せない。

「はっ、舐めんなよ！」

だが、一直線で動きが読みやすかったのか、エイナは右へステップ、衝撃波を避けつつリスニルへと向かう。

「喰らえッ！」 とばかりに、リスニルに向けて斜めに振り下ろした。

リスニルは、それを片手で受け止め、鏢迫り合いに持ち込む。両手で持っているエイナのほうが、優勢のようだ。

「ちっ、その左手は使わないのか？」

「両手で持ちながら、片手に直ぐ勝てないとは……拳はこう使うのだ。エイナニユーグリッド」

落ち着き払った声で、そう告げるリスニル。顔も、あまり焦った表情をしていない。無表情だ。

エイナが「何？」という前に、リスニルの左手が握られ、少し弓なりにエイナの腹目掛けて飛んだ。言うなれば、ボディーブロー。

両手で持つエイナにとっては、防ぐのは困難だ。だから、当たってしまった。

「……アグアッ！」 ……拳によってエイナは少しよろけながら離れ、一瞬の間が出来る。見逃すほど、リスニルは甘くなかった。

もう一度、《グラウンド・ウエーブ波立つ大地》を繰り出し、衝撃波がエイナに迫った。それを、咄嗟に大剣を盾にして防ぐエイナ。バンッ！と、重た

い物が金属に当たる、鈍い音がした。

「ほお、鋼鉄をも引き裂く私の《波立つ大地》を受け止めるとはな

「……残念だったな。 そんなんじゃ俺の剣は壊せねえよ」

にやりと笑うエイナ。 リスニルが言ったことは本当なのだが、衝撃波を受け止めたエイナの剣には傷1つついていない。  
リスニルの口が、僅かに歪んだ。

「……《硬化》魔法か」

「……違うな、俺の【チカラ】だ。 ……今、俺の剣は鋼鉄よりずっと硬いんだよ。 ……さあてと、次はこっちの番だぜっ！」

言った途端にエイナは駆け、リスニルに向けて連撃に走る。

相手に向かって切り下げ、切り上げ、横に薙ぎ、また逆に薙ぐ……1つ1つの斬撃が重く、1つでも直撃すれば重大なダメージになる。リスニルも、細かく『クラッカー』の向きを変えながら、一撃ずつエイナの大剣を捌いていく。 縦に振れば横で、横に振れば縦で、斜めに振れば斜めで。

そして攻撃も忘れていないリスニルは、隙を見つけてはその小さな隙に剣撃を入れていく。

キンツッ！ ガキンツッ！ といった、鋭い金属音が闘技場に響き渡り、いつの間にか、歓声は止んでいた。

観客の全員が、その剣技の華麗さに言葉を失っているかのようだ。

「……………ぐっ……………」

だが、エイナの気迫がリスニルの剣技に勝ったのか、段々とリスニルのブレザーに傷が1つ、また1つと増えていく。そして、段々と血も染み出てきたようだ。それはエイナも同じで、段々切り傷が増えてゆく。

ここで、少しリスニルは焦った。ここで状況を上手くひっくり返さなければ、負けてしまうと。剣士の勘という奴だろうか、それが告げていた。

そして、エイナに隙が出来た瞬間にリスニルは動く。大きく剣を振り上げながら、後退したのだ。

「どうした、ビビったか？」 というエイナの声と

「《グラウンド・スピア天高く突き上げる大地》！」 というリスニルの詠唱はほぼ同時だった。

剣を突き刺し、それを起点にズダダダダッ！と大きな土の槍が地中から天に向かって次々と突き上がった。巨大な棘が次々と突き出てきた感じだ。

それは、エイナに向かってやってくる模様だ。構えたエイナだったが、それはエイナではなく、剣の方に向かう。

ダアン！と、エイナの少し手前で突き上がった槍は少し地面とは垂直ではなく……………一直線に、エイナの剣を狙った。

「グッ！！……………」 剣に直接槍をぶち当てられ、思わず呻き、手を離してしまうエイナ。

エイナの剣は天高く舞い上がったのだ。……微笑み、いや、先ほどとは違う意味で僅かに歪んだりリスニルの口元。アレが落ちてくるには、時間がかかるだろう。僅かな時間だが、……それは敗北への時間を指し示すカウントダウンタイマーだ……とばかりに。

剣を抜き、構え、そして駆け出す。そして、振りかぶるために一瞬エイナから目を離し……視線が戻るころには、『エイナは既に剣を持っていた』。

アレは間違いなく、先ほどまでエイナが持っていた剣であり、自分が突き飛ばした剣。リスニルが何故だと思っ前に……相手が構えた。

「はああああああっ！」……エイナが叫んだ。

「ああああああああっ！」……リスニルも、咆哮した。

ガキーンッ！ と2つの大剣が交差し、片方は片手で、もう片方は両手で目一杯振り抜いた2人。

バタツ……と、闘技場の中で人が倒れる音がした。闘技場内

にいるのは2人だけ。

なお振り抜いた体勢。しかし、直ぐに体を戻し、大剣を鞘にパチンと収めたのは 赤金の髪を持った女子生徒、エイナニコ

ーグリッドだった。

観客席、Gクラス生徒が詰め掛けるエリアの歓喜の声が爆発した

Side アルト

……なるほどな、《伸長》<sup>ストレッチ</sup>で剣を延ばして強引に柄を掴んだのか。

……は、エイナらしいな。

俺がそう言っただけ笑っていると、足音が。

「……勝ってきたぜ」

エイナが意気揚々と戻ってきたのだ。 体には、やはり傷が目立つ。

出血もあるようだ。

「ああ、よくやったな。 ……大丈夫なのか？ ……特に胸の大傷」

どうやら、最後の交差でリスニルの剣が当たっていたようだ。 それはブレザーもシャツをも切り裂き、皮膚を薄く、だが長く斬っていた。

だから、血が出ているのは別としてエイナの皮膚が露出している形となっている。 ……こんなところで言うことではないのだが、 ……うん、やっぱり、ちょっとアブナイ感じに ……ブレザーやシャツは回復魔法によって段々直っていくだろうが ……でも今はやっぱりアブナイ ……。

「ん？ ……こんなもんかすり傷だ。 痛くねえよ」

それもそうだけど違う、そっちじゃなくてもつと別！ ……周りを  
見ると、ミリアとヨハンはシラーツとこちらを見る。 アリスは…  
…ああ、無表情ですね分かります。

健全な読者に言っておきたいが、俺は胸ばつか凝視してるわけじゃ  
ないからな？ 別に常にどこか見てるって訳でもない！ 石を投げ  
るなツ！

「何はともあれ、2 - 2 ……次勝てば優勝だな」

「必ず勝ってこいよ。 アルト」

投石が収まったところでエイナが言う。 そのつもりだ。 あの負  
けず嫌いをぶつ飛ばして、ここに笑顔で帰って来られるようにする。  
それが目標。

「……勿論。 トップが何だ、勝ってくるよ」

俺は、其処で言い切った。

Gクラス全員の思いを受けて、俺は闘技場へと歩き出す。

相手は、学年最高位<sup>ト</sup>、ダント・サステーフ。

4番手終了。 勝者、Gクラス エイナⅡ ユーグリッド。  
Aクラス 2 - 2 Gクラス

第24話：アルトは、XCMに登場した。 (8) (後書き)

さてと、テンプレどおりの展開ですね。

しかし、感想でのアイデアでXCM後にやる事が多くなったな…。  
ま、ゆっくりやって行こう。

第25話：アルトは、XCMに出場した。 (9) (前書き)

考查期間を挟んで、お久しぶりの夜来です。  
お待ちせしました！ g d g d 感MAXの、決勝キャプテン対決で  
す！

第25話：アルトは、XCMに出場した。(9)

Side アルト

2対2か。 やっぱり、こういう物語はキャプテン対決に必ずなるよな……。  
おっと、メタが過ぎたな。                    とうわけ、XCM……クラ  
ス対抗戦も、最終戦だ。

Aクラス、1年最高位トップのダント・サスティーフ。    そして、Gクラ  
ス、1年最低位ワーストの俺、アルト＝シューバ。  
一番上と、一番下が、XCMの最後を飾るのだ。

……いや、勝てるだろうけどさ。    自分の事だけど、全く負ける要  
素無いし。  
問題はさ、終わった後だよな。                    だって、GクラスがAクラ  
スに勝つんだぜ？ ……俺、あんま人に目立ちたくないし。  
でも、ここまで来たからには勝ちたい。    っていうか、負けず嫌ダントい  
をボコボコにして教室に帰りたい。

うーん、矛盾。

「必ず勝って来いよ！！ 此処まで来たからにはな！」

……エイナが言う。    ああ、まあそのつもりだけども。    そのつも  
りだけども……。

「く、暗いよアルト君。 此処で勝って、明るくGクラスの皆に報告しよ?」

……メテリアが言う。 ああ、氣遣ってくれるのは嬉しいけどさ。  
明日から大変なことになりそうな……。

「君のおかげで此処まで来れたんだ。 君に勝つ氣が無くてどうするんだ」

……すっかり回復したヨハンが言う。 勝つ氣はあるに決まってる。 だけど、「(自分の中では)決められた勝負」ってのがなあ……。

「……(グツ)」

……何も行って無いが親指を上サムズアップするアリス。 え、それマイブームなの?

……よし決めた。

このなんだか分からないモヤモヤは、アイツにぶつけるとしよう。  
明日からの事? んな物もう知らない。 明日は明日、今は今だ。

「よっし、勝ってくるぜ、皆」

軽くそう言つて、モヤモヤを相手にぶつけるといふ理不尽な宣言を心の中でしつつ、俺はダントまげすみのが待つ闘技場へと向かった。

明日の事なんざもう知らない。 軽く放り投げた形になったな、俺。

「それでは、決勝戦5番手、最終戦を始めたいと思います!!」  
「Aクラスからは、学年トップの実力を持つ、自他共に認める最強、ダント・サステイフ!」

……観客席、Aクラスのエリア始め、殆どのエリアから歓声が上が  
る。上がっていないのは、2回戦でAクラスに負けたBクラスと  
Gクラスぐらいかな。  
Bクラスはアレか。相当根に持つてるみたいだな、負けたこと。

「対するGクラスからは、1回戦・2回戦と並み居るキャプテン達  
を格闘術で破ってきたダークホース! アルト!! シューバ!」

残りから歓声が沸く。いや、残りつて表現しちゃ悪いけど、だっ  
て本当に残り物だもんな……。  
でも、さっきの歓声に負けない大きい応援に、俺も内心嬉しい。  
絶対勝つて帰るぜ。……いや、必ず勝つけども。

「本当に勝ち上がってくるとはな……。恐れ入ったよ、アルト!! シュ  
ーバ」

「だけど、此处で君は私に負ける。……最初から決まっているこ  
とだ。Aクラスの私が、Gクラスの、それも最低位ワーストに負けるはず  
が無いだろう?」

「君はこのXCM、身体能力の強化しか使えないみたいだが……。私  
は全力だ」

「ま、精々勇気を振り絞つて……。あ……。ちよつと黙れ、負けず

嫌い」

いい加減グダグダとウザくなってきたので、ちょっとキレ気味に、割り込んで言う。

そうしたら話を止めてくれた。お、良い所もあるじゃん。

「誰が負けず嫌いだ！ 私にはダント・サスティーフという名前があるから……」

「たかが【チカラ】がちよっと下回ったぐらいでさあ、何？ そんなに負けたくねえの？ オマエは、まけず嫌いそんなだから「負けず嫌い」なわけ」

ちよっと文法におかしくなった気がするが、まあ良いや。

あ、今の話は俺とダントにしか聞こえないように細工して、皆にはちよっとだけ幻覚に掛かってもらったから大丈夫。「対峙してるだけ」ていう幻覚な。

「キ、サマ……！！ 実力の差を思い知れよ……ッ……」

そしたら、テンプレどおり見事にプツンしてくださいました。

小刻みに震えてやがる。お見事なぐらいの震え具合だな。……

幻覚解除っつと。

さあて、決勝戦兼イライラ放出試合、始めますか。

カアーン！と、ゴングが鳴った。 試合開始だ。

「セイント・サモン《聖召喚》！！ エクスカリバー《聖剣》！、 セイント・ドラゴン《聖龍》！！」

開始の合図とともに、ダントは何か詠唱する。 ……魔法の詠唱じゃないな。 アイツの【チカラ】か？  
それとともに、ダントの右手、そしてその前方にそれぞれ、光の粒子が集まり始めた。

時間の経過とともにそれは何かの形をとり始め……。 数秒経つと、完全にその形になった。

ダントの右手には、細い刀身に、白く、細やかに装飾された鍔や持ち手。 最高の剣といわれるソレ。

そして、前方には西洋龍の形を取り、白い鱗に覆われた美しい体と、厳しく、それでいて優しい目。 ドラゴン類最強と謳われるソイツ。

どちらからでも、離れた場所からでも分かる、圧倒的な聖属性の魔力。

「エクスカリバー……セイント・ドラゴン……」

「そつだ、私は【聖属性を操るチカラ】。 ……さあ、ケリをつけてやるッ！」

なるほどな、つまりアイツは「聖」と付いてれば何でも操れるし、何でも創り出せる……みたいな感じか。

結構チートじゃねえか。悔しがる意味が分からないよな。

まあー、とりあえず。

今ダントが作り出した2つは、その道で最強といわれる2つ。  
普通なら結構面倒だな。

普通なら。

「さあ、飛べ聖龍！！」  
《セイント・プレス聖龍焰》！！」

そうダントが言うと、龍はコチラに向かって大きな翼を羽ばたかせ襲い掛かってくる。そして口からは光の粒子が漏れ出した。

メテリアの得意魔法《焰波》の上位魔法、《プレス龍焰》。その聖属性系が《聖龍焰》だ。

そういえば言ってなかったな。「聖」属性の魔法は、一部の限られた人しか使えない。

その使える素質がある人でも、多くはその事を知らずに人生を過ごすらしいのだ。もつたいない。

聖属性の魔法は、他の属性の魔法を「セイント聖」と呼ばれる粒子で再現する物で、威力は桁違い。つまり、ダントは結構凄い奴なのだ。

いやあ、近くで見ると絶景だな。でも、アレが当たると酷い事になるのは確実だな。

……そろそろ潰そう。

「そこ、あぶねえぞ？ ……逃げたほうが良いんじゃないか？」

俺は、親切にもダントにそう注意をした。

ダントはソレにまた激昂したようで……まあ良いや、ほつとじつ。

俺は、脚力を強化、半分クラウチングみたいな姿勢から駆け出す。

勿論、脚力を「超」強化しているのだから、其処からは文字通り「消える」。

龍は、いきなり俺が消えたことで混乱している模様。ダントも同じよう。

そして、龍の懐へと飛び込んだ俺は、右手を一杯に引いた。

後は分かるな？

「……うづらあああああつ……!!」

龍の腹に正拳突き。<sup>ストレート</sup>もうすっかりおなじみになったな。

その巨大な体ゆえ、いかに身体能力が優れていても避けることができない龍は、俺の拳をモロに喰らった。

……筋力⇨威力超強化と、見た目には分からないが反発力を滅茶苦茶強くした、チートパンチを。

「グオオオオオオオオオオッ……!!」……という龍の呻くような

叫び声と、

「何いつ!?!」「………というダントの、信じられないと言う感じの聲は同時に聞こえ。」

ドゴオオオオオオオオオオン!!! と、数10m吹っ飛ばされた龍が、闘技場の壁に掛かった防御魔術を突き破って大きな凹みを作ったのはソレより2秒ほど後だった。

闘技場が揺れた。ソレこそ地震かと思うほどに。

龍は、グツタリとしたまま動かなくなって、やがて元の光の粒子、「聖」<sup>セント</sup>になり、消えた。

……俺が言うのも何だが、龍<sup>ドラゴン</sup>ってこんな易々と吹っ飛ぶ物だったっけ?

聖龍が壁に衝突したときの衝撃は凄まじい物だった。土煙がモクモクと上がり、一向に晴れる気配が無い。

俺が居る闘技場の左半分は綺麗だが、右半分には土色の霧<sup>もや</sup>がかかっている感じた。多分、凹んだ所の地面は、大きく削られてるんだろっな。

……あ、そっいや負けず嫌いは?

俺がそう思ったとき、ズバツ! といきなり霧が晴れる。その次の瞬間には、ダントは聖剣を構えてコチラへと飛び掛っていた。その距離は20mほどだが……。

「セイントカッター・ダブル《聖双刃》!!!」とダントが詠唱。ダントが剣を振ると、その軌跡の形をした白く大きな刃がやいほコチラへと飛来する。うお、中々に速いッ!

咄嗟に左に避ける。俺の右横を刃が通り抜け、後ろには地面に横一文字の大きな傷が入った。当たったら風穴開くな、アレは。

そして、一瞬後ろに気を取られた俺は、前から来る第二陣に、直前まで気付かなかった。

「うおっ!?!」

またもや咄嗟に、今度は体を反らして……マトリックス的な動きで避ける。……ダブル、ね。なるほど。

あ、因みに……この刃の速度、尋常じゃないからな? 常人だったら、多分上半身と下半身がおさらばしてる。

「く、クソ……っ! クソがああああ!!」

おーおー、相当怒ってんな。別に、怒らせたりする行動はしていないけど……。

プライド高すぎだろ。カルシウム取れよ……っ。

セイントフルアーマー「聖装!」……もう何度目かの「聖」属性魔法。

ダントが詠唱を終えると、「聖」はダントの体を囲む。……ああ、そういうことね。

光が形作るのは、白い盾であり、白銀の頭鎧<sup>ヘルム</sup>であり、同じく白銀の  
鎧<sup>アーマー</sup>。フル装備のダントが其処にいた。

「うおおおおおおおー!!」

ダントが叫び、コチラへと駆ける。……本気になったか。  
剣を振り、《<sup>セイントカッター</sup>聖刃》などなど出しながら、俺に切りかかってくるダ  
ント。

ソレに対し俺は、ソレをただただ脚力と反射神経を超強化し、避け  
るだけ。……いや、ふざけてる訳じゃない。けっこう隙が無い  
のだ。

一方は剣を振り、もう一方はソレを避け続ける。……いつの間に  
か、歓声は止んでいた。

「オオオツ!!」……ダントが大きく剣を横に振った。後ろにス  
テップして避ける俺。

……なんか、ダントは今まで小さな声で詠唱してるみたいだ。聴  
力を強化してやっと分かったんだけれども。しかし、ソレは間違い  
だったみたいだ。しかし、ソレは間違い

「……………!!」

その場で剣を縦に構え、短く唇を動かし、長い長い詠唱を終えたダント。

何が来るのか……と思ったら、俺の頭上に何十本もの白銀の矢が。

……《セイントアロー聖矢》ってやつか？

よく周りを見渡せば、周りは白銀で多い尽くされている。右には剣が、左には爆弾っぽいものが、前には槍が。

「終わりだアルト＝シューバ！

《シャイニング・ワールド輝く世界》！！」

おお、何時にも増して厨二。……とか思ってる場合じゃないんだよな。

なぜか？ そりゃ、四方八方を白銀に囲まれ、ソレが一斉に高速で向かってきてるんだからに決まってるだろ。

……うん、まー、あれだ。此処はちょっと……。

ドオオオオオオン！！ ……そこで、ちょうど着弾した爆弾が爆発したのか、俺の居る場所は白銀の光に包まれた。

Side ダント

「ハア……ハア……」

やった、やったぞ！ あのアルト＝シューバを倒した！

自分が超大型呪文《輝く世界》を出そうとしていたのは、どうやら気付かなかつたみたいだ。おかげで助かった。

白銀の「聖」達が向かっていった彼の居た場所は、土煙がもうもうと上がり、彼の姿は確認できない。

だが、倒したことは確実だろう。今の彼では、アレを突破できない。

彼の性格やあの【チカラ】の強大さから言って、彼は「クリエイター」でだせる単一の「チカラ」しか出せないと私は推測した。

1回戦2回戦と、彼は身体能力の強化しか使ってこなかったことも、予測できた理由の1つだ。

ワアアアアアアツ！ と、大きな歓声が聞こえてきた。どうやら、今まで聴覚が麻痺していたみたいだ。

《輝く世界》の威力は、他の魔法を軽く超えるからな。

しかし、聖龍を体1つでなぎ倒すなど、この世の人間とは思えない奴だった。

彼は、一体何者なのだ。その疑問が浮かんだが、直ぐに掻き消えた。声援が聞こえる。

私は、手を振ってその声援に答えようとした。

その時だ。土煙が、いきなりバツ！ と晴れたのは。

歓声が、一斉に止む。土煙が有った場所の中心に立っていたの

は 紛れも無い、アルト＝シューバだった。

「な……………」

言葉が出ない。……なぜだ、何故アレほどの攻撃を受けていながら、無傷なんだっ!？

私がそう考えているうちに、彼は私の元へと歩み寄ってくる。その一步一步は、私を震え上がらせるのには十分な「何か」を持っていた。

私は、細かく震えながら彼に尋ねた。

「貴様……っ、何者だっ!」

彼は答えた。困惑しつつ、言葉に迷ったような『笑顔』で。

「何者って聞かれてもな……アルト＝シューバ位しか答えられないし」

「まー、さっきの種明かしは、また今度な。それじゃ」

そう言う彼。その右手は、大きく振りかぶっていた。

刹那、ドンッ! と腹への衝撃。私は、一瞬「誰」に「何をされた」のかさえ分からなかった。

再び、今度は背中に大きな衝撃。其処で始めて、「彼」に「渾身の一発を加えられた」のだと認識した。

薄れ行く意識の中。先程よりも大きいだろう歓声を聞いた。

「ああ、私は『負けた』のだな」と、人生で初めての思いを感じつつ、私の意識は、闇へと堕ちていった。

第25話：アルトは、XCMに登場した。 (9) (後書き)

はい、マジゴメンなさい。 bag bag です！めんなさい。  
日にちが開いちゃってマジゴメンなさい。！めんなさい！めんなさい  
い。。。。

次は、種明かしと表彰式です！



第26話：アルトは、XCMに出場した。(10)

Side アルト

ワアアアアア!! と、大きな歓声が観客席から聞こえる。  
ダントの腹に正拳突きをぶち込み、ぶっ飛ばした後。 ダントは気  
絶し……つまりは。

「決まったああああああ!!!!」

「Gクラス、アルト!! シューバ!! 《聖騎士》ダント!! サステイ  
ーフの猛攻を耐え凌ぎ、見事拳一発!!!!」

「この瞬間、勝ち数2 - 3で…… Gクラスの優勝が、決定しました  
ああああああああ!!!!!!!!」

トーのその叫ぶような声で、俺達の優勝が告げられた。 再び、沸  
きあがる歓声。

少しだけ観客席に手を振って、俺は控え場所に戻った。 ……まあ、  
大きく手を振るタッチじゃないし。

「アルトオオオオオオツ!!!!!!!!」

控え場所に戻り、最初に俺が聞いたのは、そんなエイナの絶叫だっ  
た。

エイナは、そう叫びながらコチラへと駆け寄ってくる。 ……全力  
で。

「ウゴアアー!!」 …… 少なからず疲れていた俺は、タツクルのよ  
うに駆けるエイナに押し倒され …… 有らぬ間違いが生まれそうだか  
ら言い直そう …… 押し潰され。

「やったな、アルト!」 …… などと俺の上から言葉を掛けるエイ  
ナに、「お、おう ……」 と曖昧な返事しか出来ないのだった。

…… エイナ。 お前は斬られた胸元 (のブレザーとシャツ) がま  
だ治って …… いや、直ってないのを覚えていないのかい? …… 見て  
られない。

他のメンバー3人は、俺に白々した視線という名の贈り物をありが  
たくも送ってくれた。

…… どうしてこうなった。

…… そして、戦い終わったときに、【クリエイター】で疲れ取つと  
けば良かったじゃんと思っただのは、GクラスのHRホームルームに戻ってからだ  
った。

「君達Gクラスの栄誉を、此処に称えよう」

「エクシル魔法学園、学園長。 ファルモート・ガイン …… おめで  
とう」

「 …… ありがとうございます」

ワアアアアア!! 歓声が響く。 まんざら、悪い気はしない。

晴れ渡る青空の下、表彰式が始まった。 …… 表彰されるのは、優

勝した俺達、2位のAクラス、そして準決勝で敗れたBクラスとEクラスだ。

勿論、俺達の表彰は1番最後。

最初はEクラスキャプテン、マリリン・ブルーミア。そしてBクラスを率いたエリヴァン・シャルロッテ。

Aクラスは、負けず嫌いが代表して受け取ったのだが、まだ結構痛そうにしていた。……おい、こっちを睨むな負けず嫌いよ。

準優勝の盾は、決勝4番手でエイナと斬りあつたウエスレイ・リスニルが恭しそうに受け取つた。

そして、Gクラス。俺が代表して賞状を受け取つて、今に至る、というわけだ。

ガイン学園長の、その何か画策しているかのような視線が気になるが。……まあ、ソレは良いや。

賞状を受け取り、優勝トロフィーはエイナが受け取つて……元の位置へと戻る。

そして、完全に俺達が戻り、教頭（……この世界にも居るんだな。

結構若い）が「……次に、学園長からお言葉を……」と言うと、会場は一気に静まり返つた。

呼ばれたガイン学園長はその場で1歩前に出て、《拡大》の魔法を使っているだろう……マイク要らずの、それでいて威厳ある声で話し始めた。

「……今年のクラス対抗戦も、無事に終わることが出来ました」

「……今年は、《聖騎士》のダント・サステイフ始め、強力な5人を揃えるAクラスを破り、アルト・シユーバ率いるGクラスが優勝しました」

「此処50年ほど、XCMはAクラスの優勝が続いていただけに……」

…、このGクラスの優勝は、大変良いことと思います」

「皆さん、優勝のGクラスを始め、参加した全ての選手に盛大な拍手を送りください。……以上で、終わります」

そう締めくくったガイン学園長が1歩下がると、三度大きな歓声が起こった。……てか、50年間Aクラスの優勝かよ。逆に50年前何が起こったんだ。

さて、もう割愛しても良い頃だろう。

「……これで、第142回クラス対抗戦、XCM全行程を終了します」……教頭が締めくくった。

終わった。あー、疲れたな。まったk「……アルトIIシューバ」……ん。

呼ぶ声に反応し、振り向くと其処には……金髪の細マッチョな体つきをし、整った顔を持つ「負けず嫌い」がそこに居た。……何。

「……さて、教えてもらおうか。《シャイニングワールド輝く世界》を無傷で潜り抜けた、あの種をな」

あー、そついや言ったな、殴り飛ばす時に。「種明かしは、後でな」って。すっかり忘れてたぜ……こつちを睨むな。

「……早く帰りたいから簡潔に言うけどさ。……簡単な。《サンク聖域》チュアリを使って防いだだけ」

俺が簡潔に言うと、ダントは一瞬「はっ?」と言いたげな顔をして、すぐさま信じられないといった様子になる。

「馬鹿を言うな! 《聖域》は聖属性防御魔法の最上位!! お前に使えるはずが……」………「忘れたか? 【クリエイター】をなめるなよ?」

………属性魔法には、相性がある。火属性魔法は水属性魔法に弱いし、水属性魔法は雷属性魔法に弱い。

しかし、例外がある。聖属性魔法と、もう一つ………闇属性魔法は、互いには相性が良く、その属性同士では相性が悪い。

ケモンで、炎タイプの技は炎タイプのポケモンに効果はいまひとつだろ? あーいう感じだ。

だから、俺は【クリエイター】で聖属性防御魔法《聖域》を使い、同じ聖属性である(と勝手に思った)《輝く世界》を軽減するどころか、打ち消したわけだ。

ちなみに、この真実はダント他、一部のヤツにしか教えない。他のヤツには、「気合で全部ぶっ飛ばした」とか言っておこうかな。それはそれですごくいいけど。

「グツ………」………苦虫を噛み潰すだけでなく、潰した後飲み込んだような顔をしているダント。………そんなイライラすんなって。カルシウム

「次は………次こそはっ!! お前を倒すぞ、アルト!! シューバ!! それまで覚えているんだな!!!」

………昭和の悪役かよ、お前………。

ダントは、そのまま闘技場から出て行った。……さて、Gクラスの皆ももう帰ってるだろうし。俺も行くか。……脚力強化！！

「いやー。5人とも良く頑張ったなー。他のみんなも応援ありがとー」

GクラスのHR。ジェイ先生が話す。

「シューバは勿論凄かったがー、他の4人もものすごく格好良かったぞー」

「メテリアは魔法、ヨハンは脚技、アリスは【密林地獄】にー、エインは剣技とー……。勝ち負けあったがー、良い試合をしたと思うぞー」

うんうん。俺はどうでも良いとして、4人がものすごい頑張ってくれたからGクラスが優勝できたと思う。

やっぱり、Gクラス最高だな。

「何はともあれ、頑張った5人も応援した皆も、今日はもう終わりー、明日明後日と休日だからー、しっかり体を休めろよー」

「それじゃー終わりだー。……あ、アルトー。「あれ」頼むぞー」

「あれ」？……ああ、そういうことね。

理解した俺が「あれ」を行い、GクラスのSHRが終了した。長い長い、とてつもなく長い一日が、今、此処に終了した。

……そうそう、XCMが終わった後。優勝した俺達を見ようと詰め掛けてくると思われた大人数の人間は、そんなに来なかった。なぜか？「あれ」だよ「あれ」。……「見に来る人数は適度で頼む」と望んだからだよ

まだ、学校が始まって1ヶ月も経っていない。コチラの暦で言う  
とわかりにくいので日本の暦で言うと、まだ4月である。

此処は学園なので、考査があれば夏休みもある。3期制なので、  
1学期が終わるのはまだ3ヶ月ほど後の話だ。

XCMを制し、エクシル学園生として上々……かな？ 良いスター  
トを切った俺は、学園生活をエンジョイしつつ、何かと頑張っ  
て行くのだった。

夏休みが始まるまでの3ヶ月。……色々あったよ。うん。

第26話：アルトは、XCMに出場した。 (10) (後書き)

はい、XCM編終了でございます！ 応援してくださった皆様！  
誠にありがとうございます！

稚拙な文ですが、これからも続けて行きます。 感想、アドバイス  
等……感想欄に書いていただけると、そして応援してくださると更  
に嬉しいです！

さて、次からは閑話としまして、番外編、人物紹介等を書いていき  
たいと思います。 どうぞ、期待しないで楽しみに。 それでは  
！

Side Story 1

エイナ＝ユーグリッド編

(前書き)

どうも、夜来です。

今回はサイドストーリー、エイナ編。

……エイナがアルトに会う少し前に遡って、エイナの視点でユーグリッド家の様子や、「あの時」、そしてそれから書きたいと思えます。

何か、適當になったなあ……

Side Story 1 エイナ「ユーグリッド編

これは、アルト達がエクシル魔法学園に入る、1年前の話である

「…………ふう」

はあ…………秋って言っても、さすがに何冊も本を読み漁るのは疲れるなあ…………。  
…………うわ、もう4時間も読書してる。読みすぎたかな。

4時間、かあ…………。そろそろ、声がかかる頃だと思っけど。

「エイナー！ ちょっと手伝ってくれー！」

「はい！」

ほら、やっぱり。意外と私、【人の心を読むチカラ】の持ち主かも。

私を呼んだのは、若い男の声。…………私の父親だ。持っていた本を本棚に戻して、その声の元へと向かう。

私、エイナ「ユーグリッドの父親…………エイト「ユーグリッドは、王都エクシリアにある鍛冶屋兼武器屋の主だ。

それなりに繁盛していて、今日も結構鍛冶の依頼が入っていたり、剣や盾を買いに来るお客様は多い。まあ、人気という訳じゃない

んだけど。

だから私や、私の母親……キイナ「ユーグリッドは鍛冶の仕事や、  
武器屋での支払いのほうを手伝ったりしている。

鍛冶の方の手伝いって言うても、熱して槌で叩いた鋼を水で冷やし  
て純度の高い鋼にする……えーっと、水滅しっていう作業ぐらいだ  
けど。

鍛冶屋のほうで私を待っていたのは、私と同じ金髪で、頭をバンダ  
ナで覆った若い男性。……言うまでもなく、私の父親だ。確か、  
35歳。

「それじゃ、何時もの頼む」

「うん、わかった」

鍛冶場は結構広く、父は火床に入れられた鋼を出して槌で叩いてい  
た。私の役目は、それを水に入れること。

これによって余分な物が鋼から剥がれ落ちて、良い鋼になる……ら  
しいんだけど、あんまりわからない。

父が、叩き終わった鋼を置く。私はそれを火ばさみで掴み、近く  
にある鉄で作った水槽に張られた水の中に入れる。

ジュツ……と音がして、鋼が急速に冷やされる。再び火ばさみで  
それを掴んで、近くにある台に置いた。これは、後に父が再び火  
に入れ、剣を作って行くのだ。

この作業を10回ほど繰り返し、父から「もういいよ。じゃ、次  
はカウンター行って」と声が掛かる。鋼が結構重いので、この作  
業は疲れるのだ。

だから、何時も10回ほどで私の作業は終わり、次は武具屋の方。今は母がカウンターで接客をしているだろう。

「分かった」と返事をして、今度は平民エリアの大通りに面する、武具屋のほうへ向かう。

……武具屋に入ると、カウンターでは予測通り母が接客をしていた。……今のお客さんは、剣を買っていったので剣士だろうか。カウンターの近くに行き、母に話しかける。

「お母さん、私がやるよ」

「あ、エイナ。もうこんな時間かー……、じゃあよろしくね」

母は長い金髪で、父と同じく頭にバンダナを巻いている。父と同じ35歳で、街で歩いていると、良く綺麗といわれるそうだ。

「うん」と返事をする、母は店の奥、鍛冶場の方へと消えた。さっきも言っただけど、母も鍛冶の手伝いをするのだ。

「エイナちゃん、この剣結構良いね。……魔力を感じるけど、やっぱり高いかな?」

「えーっと……そうですね。風の魔力を込めてあるので、小さいかましたり鎌鼬位なら放てます。銀貨50枚ですね」

しばらく支払いに来るお客さんもいなくて、たっぷり1時間は経っただろうか。声が掛かった。

父は、魔力を込めた剣……魔剣を作ることが出来る。魔剣は込め

た属性によって色々な付加効果があつて、今の「風の魔剣」なら鎌  
鼬が放てるのか。

私に話しかけた茶髪の若い男性は、金額を聞くと、うーん……と考  
え込んで、言った。

「やっぱり高いなあ……ま、今日は止めておくよ。　また来るね、  
エイナちゃん」

「はい、また来て下さいね」

そう言つて、その男性はドアを開けて店を出て行った。……それ  
と同時に、父が奥から出て来た。

「今日はもう閉めるよ。　もうキイナが晩御飯を作り終えてる頃だ  
ろうから、早く行くんだよ。　先に食べててもいいからね」

ふと店の外を見ると、もう真つ暗だ。　お店の中にお客さんもいな  
かった。　時間は早いなーと思いつながら、鍛冶場の奥のテーブルへ  
と向かった。

母はもう料理を作り終えたらしく、テーブルにはおいしそうな料理  
が並んでいた。

父はああ言つていただけ、私は3人で食べたい。……母も同じ気  
持ちのようで、10数分ほど待つて、父が姿を現した。

「何だ、やっぱり待つてたか」と笑いながら席に着く父。　いつも  
こんな感じなのだけだ。

「エイナ、お前も14歳だな。……学校はどこに行く？」

父が話しかける。料理に伸ばしていた手を一旦止めた。

「うーん……私、やっぱり騎士学校に行きたいかなあ……」

少々考えて、私はそう答える。騎士学校とは、その名の通り騎士を養成する学校で、各国に1つはある。卒業すれば、その国の騎士団に配属されるチャンスがある。

ガフリアにも騎士学校は勿論在り、エクシル魔法学校には及ばずともそこそこレベルが高い学校だ。勿論、女性も入ることが出来る。

今の騎士団長は女性だって言うし、私でも騎士団には入れるかも……。

父は「なるほど……」と喋って考え、向かい側に座る私を見て微笑んだ。

「そうか。それなら、たくさん勉強しなきゃな。剣技は十分強いから大丈夫だけど、勉強はちよつと心配だからな」

「そうね、バシバシ教えていくから、覚悟しておきなさいよ」

フフと笑って、母も言う。父は剣士であり、剣術を覚えてくれたので、私はそこそこ剣を使えるほうだ。今でも稽古を積んでもらってる。

騎士学校に入るには、やっぱり多く勉強しなきゃ。私は1人、気合を入れるのだった。

……翌日、人生の大きい転換点が訪れることになるとは思わずに。

その次の日。 昼下がりの3時ごろで店内には誰もいなかった。そんな中で1人カウンターに座っていた私。おやつを食べた後で、うつらうつらとしていたのだが、次の瞬間。

「キヤアアアアアアアアアアアア！」

そんな、女性の悲鳴が店の外から聞こえた。一瞬で私の眠気は覚め、反射的に店の外へ飛び出す。

周囲を見渡すと、東側に多くの人たちが。そして、そんな人だけが突然左右にパツクリと割れる。間からコチラへと駆けて来たのは、……バーディン！？

基本的に、王都には魔獣は入ってこない。頑丈な外壁で囲まれているから。 だけど時々、空を飛ぶ魔獣たちがエクシリアに侵入してくる。

そういう時は、その魔獣たちを倒すなりして追い出さなくてはいけない。 店や家に損害が出る可能性があるからだ。

そして、エクシリアの住民には、そういった魔獣たちを倒す義務があるのだ。 倒すのは専らエクシリア内を巡回警備する騎士団の人だけど、今は近くにいないみたいだ。

私は、エクシリア内に侵入した魔獣を見るのは初めて。 …… だけど、コチラに駆けて来るのなら、倒さなきゃ！

直ぐに店に戻り、私が愛用する大剣を持ち出してまた表へ出ると、バーディン2体はもう近くにまで来ていた。 さすがバーディン、素早い。

そう思いながら、近くに来たバーディンに向かい、剣を斜めに振る。

「たああっ！」

だけど、素早いバーディンはそれを右にステップして避ける。その後も次々に剣を振るが、跳んだりステップしたり……全て避けられてしまった。

まさに翻弄されてしまう。剣術を教えてもらったとはいえ、バーディンの動きはあまりにも素早すぎて。

「くっ、このっ！ たかがバーディンの癖にッ！」

思わず声を漏らしてしまう。バーディンは、結構低級な魔獣だから、簡単に倒せると思っていたのだ。

……あたりに、さっきの位置から移動したのだろう人ばかりが出来るが、助けてくれる人は1人としていない。

まあ、どうせおじさんおばさんや私と同じぐらいの子ばかりだろうし、期待はしていなかったけども。

「ザシユッ！」……次々に剣を振っていると、偶然だろうけども私の剣が1体のバーディンに当たった。切り裂かれるバーディンの翼。

「やった！」……と思わず口に出してしまう。それだから私は油断し、背後に迫るもう1体のバーディンに気が付かなかった。

その時だった。あの人……あの人がまさに風のようにやってきたのは……。

突如、背後から「グツ……!!」というバーデインの鳴き声が聞こえた。

後ろを見ると、私と同じぐらいの歳の男の子が、バーデインを「拳」で「吹っ飛ばしている」ところだった。驚いて、思わず尻餅をついてしまった。

バーデインはパンチで飛ぶほど軽くない。大柄な人がバーデインを持ち上げ、投げ飛ばしたところで2mほど飛ぶだけだろう。それを、この少年は拳で5mほど吹っ飛ばしたのだ。

……カツコいい……。そんな感情を持った。鋼を打つ父ぐらいにしか、そんな感情は湧かなかったのに。

私が翼を斬ったバーデインは、吹っ飛ばされたバーデインに向かって鳴き声を上げ……。何か意思疎通を取っているのだろう……。すぐさま翼を広げ、飛び立った。

呆然としている場合ではない。私は直ぐに立ち上がって、その少年に話しかけた。お礼を言うために。

「あ、あのー……」

「…何？」

「あ、えつとお…助けてくれてありがとう…」

「ああ、良いって良いって」

こういう時に、私のちょっと恥ずかしがり屋な性格が憎い。上手く話せないのだ。

少年はやっぱり私と同じぐらいの年齢みたいで。敬語で話すべきか、話さないべきかわからなかった。

「あの、私エイナって言います。エイナ＝ユーグリッド。…名前聞かせてもらっていいですか…良い？」

「ん、俺？…アルトって言っただ、よろしく。…あつ、…あーチクシヨウ！ 4時過ぎてる！…じゃあなエイナ！」

「えっ、ちょっと…」

少年…アルト君と言っらしい…は、そう私に自己紹介。そして、何か約束があったのか人の輪を抜けて走り去って行ってしまった。

…家の名も聞けなかった。でも、探す術も無い。…それで、あの少年に憧れた。

「…エクシルに行きたい？ どうしたんだ、昨日までは騎士学校に行きたいって言ったのに」

「ちょっと言い表せないけども…魔法学園に行きたいのッ！ どうしてもッ！」

「そう言ってもなあ…あそこはトップクラスだぞ？ それでも行きたいのか？」

「しかも、魔法学に重きを置いてるから…それも追加されるし…」

「絶対に行きたいのッ！」

「……………うーん、……………分かった。その分、勉強は厳しくなるぞ？ 良いな？」

「うんッ！」と元気良く返事した。その日の夕食での会話。いきなり路線変更した私に父は驚いているようだったが、最終的には良いと返事してくれた。母は……………ニコニコこちらを見てるだけだから、良いのかな。

なぜか、あの少年がエクシル魔法学園に行くと思った。だから、私は行くと決めた。 たったそれだけの事。

騎士学校では魔法学に重きを置いていないから、魔法があまり得意ではない父は渋ったんだと思うけど……………でも良いと言ってくれたのだ。絶対に合格してみせる。

……………あの少年を追いかけて。

それから私は猛烈に勉強し、今までの数倍、剣術の稽古もした。勿論魔法の練習もしたけど、やっぱり剣術が性に合ってるみたい。その内に「触れた物を硬化させるチカラ」を手に入れ、髪の色も、あの少年に少しでも近づくように、赤く染めた。……………尤も、赤金になっただけも。

段々と、何かが変わっていくような感じがしてきて。そして

そして「俺」は、1年前から、確実に変わった。自分でも分かるほどに。

今、俺はエクシル魔法学園の合格者掲示の前にいる。そう、今までに、合格者の発表がされているのだ。

「……………あ、あつた！ 279番！」

Gクラス、最低位のクラスだが、大陸内トップクラスの学園に入学が決定したのだ。嬉しい……………のだけど、俺の、下の名前。

「アルト＝シューバ？ ……アルト……………？」

アルト。その名前は、今でも心に深く刻まれていた。自分を此処に導いた、その名前。

急いで1-Gのクラスへと入る。瞬時に数えた結果、38人いた。だけど、40番の席は空いていた。

……………その直後。

ガラスとドアが開き、こちらを見る目は、その少年を見る視線で若干怖がっているようだ。

でも、その顔立ちや眼差しはまさしく、1年前の「あの時」と同じ。

そう、それは

「俺だったわけか」

「そういうことだよ。最後のセリフ取るな馬鹿野郎」

エイナに頬をぶたれた俺。地味に痛い、止めてくれ。

XCMが終わった後、昼休みでの1コマだ。エイナの昔話が聞きたいと言うと、なぜか話してくれた。

こう言った俺も、何故そう言ったのか分からなかったが。多分神様が言えと命令したんだろう。

……なぜか、メテリアやヨハン、アリスも聞いていたのだが。

「へえー……すごいなー……」メテリアは感心してその話を聞いていたようだ。

「奇跡的な再会だね。最下位だけに」……とりあえず寒いダジャレを言ったヨハンには頭に拳骨を落としておいた。弄られキャラ確立だな。

「……（グッ！）」……分かったからアリスはマイブーム（？）のサムズアップを止めてくれ。

それにしても、そんなことがあったんだな。

……改めて思う、やっぱりすげえな、この世界。

鍛冶屋の所は、思いつきりウィキから引っ張って、できるだけ安全  
そうな工程を選びました。

という訳で適当なので、見逃してくださいお願いします。

そして、ヨハン君のダジャレは漢字変換で思いつきました。 寒ッ。

さて、明日は番外編です。

「アルトは、夢の中転生神に出会った。」あまり期待せずに、お楽  
しみに！

番外編：アルトは、夢の中転生神に出会った。(前書き)

今回は番外編です。

感想にあった「主人公と転生させた神様」のお話を書いてみました。

番外編：アルトは、夢の中転生神に出会った。

Side アルト

「……さてと、寝るかな」

XCM後のある日。

何時ものように1-Gで勉強し、実技（今日は魔法訓練だったな）をし、夕食を食べ、エイナたちと別れて、此処は俺の自室。

そして、何時ものように入浴洗顔歯磨き。 ほんでもって時間割決めの4連コンボを決め、颯爽とベッドインする俺。

違うからね、卑猥な意味じゃないからね。 と、一応断っておこう。

あー……眠くなって来た。

そうして、俺は安らかに意識を飛ばした。

……はずだった

のだが。

「……んあ？」

変な声を上げてしまった。 なぜかって、寝たと思ったのに何故か真っ暗な空間にいるんだぜ？

一応地面はあるけど、それも真っ黒。 見える景色も漆黒に包まれ、いったい何かあるのかわからない。

その内、どこからか光が差し込んできた。 ようやくその空間の様子  
子が分かってきた。

それなりに整理された、少しだけ広い部屋だ。　しかし……本棚に、  
ベッドに、テレビに、パソコンに……。  
……これって、もしかして……！！

「　　そういこと。　　やっと分かったかな、シューバくん  
？」

俺が答えを思う前に、これまたどこからか、やたらふざけたような  
若い女性の声が聞こえてきた。　　いや、「く〜ん」とか絶対ふざけ  
てるだろ。

何処からだ、と辺りを見渡す。　　ベッドを見る、誰も居ない。テレ  
ビの前を見る、誰も居ない。　　デスクの前を見る、やっぱり誰も居  
ない。

そして、本棚のほうを見る、女神がいた。　　そしてそして、もう一  
度ベッドのほうをm「おーい！」　　……ポケットコミ兼用か。

……本棚の前にいたのは、若い……20代位の女性の「神」だった。  
いや、俺が思い描く女神様だったから、女神って表現したんだけ  
ど。

頭には何か天使の輪みたいなものがかんでおり、長い金髪（とい  
うかクリーム色？）に、名前分からないけど神様が着る服。

「いや〜？　　女神で合ってるよ。　　ボクは女神ユース。　　無念のう  
ちに死んでいった魂を異世界に移す、俗に言う「転生」の神さ」

よろしく、とその女神様は言う。　　……転生の神……って、もしかや。

「んじゃ、俺を転生させたのもアンタか？」

「もちろん。なんせ、全ての世界の転生を司ってるからね。君もボクによつて転生した1人さ。」

「……あー、そうですかい。それじゃもう1つ。何で俺を元の世界に連れてきた？」

どうせファンタジーなテンプレ世界だ。<sup>ワールド</sup>受け入れるようにしているから全く問題ない。

そして、此処は元の世界、日本の俺の部屋だ。転生したら全く覚えてなかったけど、この配置を見た瞬間に思い出した。

……死んだ瞬間にテンプレみたいに出てこなかったくせに、今頃何用だよ。

「ん、……………何となくかな」

……猛烈に殴りてえ。

「って言うのは冗談で」

……冗談かよ。

「転生させるとき、私はその魂が1番心に残っている場所でその魂に会うことにしてるんだよ。一番多いのは、やっぱり自分の家とか、住処とかだね」

「やっぱり、心残りがあると、嫌じゃない？」

「確かに。でも、死んだ時に俺はアンタに会ったことも、まして

や自分の部屋でアンタと話したことは無いぜ？」

「……それだよ、それ。」……俺が転生した瞬間を思い出して言うど、女神ユースはそう言っつて、俺を指差した。

「その日に会えなかつたから、今会いに来たんだよ。ずーっと忙しかつたからね。」

「だからボクは君の生前のお部屋に、君を招待したつて訳さ。」

「君はもう転生して、アホみたいにチートな【チカラ】を手に入れて、この世界の重要な人物になつてるから、お話しすることは少ないけどね。」

あー、なるほど。死んだ時は忙しかつたから、今会いにきたつて訳ね。一発殴らせる。

「このいたいけな女性を殴るなんて。暴力反対だよ、シューバ君？」

「時にシューバ君。君は生前の名前を覚えているかい？ 忘れてるなら、思い出させてあげるよ。」

うわあ、やっぱり殴りたい。コイツ、絶対ふざけてる。

……名前は、覚えてないな。転生したときに忘れたっぽい。

「思い出させて、何かメリットでもあるのかよ？」

「うん？ ……ぶつちやけちゃえば、無いね ……まあ、初夏の特別キャンペーン、みたく？ 時々思い出して、元の世界を想つてしみじみするとか？」

ぶつちやけたな、無いのかよ。 ……でも、ちょっと名前を思い出

したくなるときも、合ったには合った。  
……頼んで、みようか。

「はい、注文入りましたー！」……思考読むなよ。ユースはそ  
う中華料理店みたくなふざけて声を出し、そして、俺に言う。

「でも、普通に教えるんじゃないから……パーツだけ教えて  
あげる。並べ替え問題だね」

……えー……、何だそのクイズみたいな問題。いや、でも漢字と  
か平仮名だろっから簡単に分かるかも……。

「A、A、I、U、O、B、T、Y、K さて、これを並べ替えて  
貴方の名前を作ってください」

ローマ字かよ！……くそ、記憶に無いから【クリエイター】でも  
わかんねえ……。

「考えるのは元の世界に戻ってからで良いでしょ？ とりあえず、  
君が元の世界を見るのはこれが最後。……見納めだから、しっか  
りと目に焼き付けておくと良いよ」

俺の生前の名前であるパーツをすっかり記憶した俺。  
ちよつとは真剣になったユースは、「これとか、これとか……」と  
言っつて、次々と自室の物や、窓の外を指差す。

……ああ、これあつたなあ。俺、これが気に入ってたんだっけ。  
窓の外は、夜にも関わらず多くの車が走っていて、ビル街ではまだ  
灯が付いていて。なんか、余計綺麗に見えた。

ここに住んでいた時は、そんな物を見ても全く興味が無かったのに。

「……もう、良いかい？」 ユースが聞く。

「……ああ、もう良いよ。この目に焼き付けた景色、あっちでも大切に保管しておく」

「え、何言ってるの？ ……名前のパーツとボクと話したこと以外は自動的に消去されるよ？」

「……え？ ……ちょ、ちょっと待った、それじゃ景色の記憶消えるよね？ 俺に見させた意味は!？」

「待った、それじゃもう少したか」「さようなら、シューバ君。あっちで頑張ってるね」！? ……」

俺は、ユースが何か呪文のような物を呟くのを見たのを最後にして、その元の世界を離れた。

俺の中では、10分ほどの短い時間だった。

全く心残りが無いわけじゃない。でも、俺はアルト＝シューバであり、こっちの世界の住人だ。

もう、元の世界に干渉することは出来ない。絶対に。だから、唯一残った名前のパーツを持って、俺はこれから頑張っていく。



そして俺は、2回目の安らかな睡眠に入っていた。  
その4時間後、エイナに「朝飯あさめし一緒に喰おうぜ　！！！」「とド  
アを「大剣で」超連打され、最悪な目覚めとなってしまうのは、ま  
た別のお話。

番外編：アルトは、夢の中転生神に出会った。(後書き)

アルトの名前当て、出来たらやってみてくださいね W W

人物紹介、多分半分も出来てねえ……。  
急がないと……。

「チートな俺は、Gクラス」編 人物紹介（前書き）

はいどうも、ギリギリ終わりました夜来です。

今回は、今まで出て来たキャラたちの紹介です。

「外見をkws k!」なんて言われましたが、自分にそんな想像力も、文章構成力もありません。 orz

とりあえず名前が出て来た人たちは網羅したつもり。

長いので、軽く読み飛ばしてください。

居ないとは思いますが、全部読んでない人には軽くネタバレになりますので、1〜29部読み終わってから見てください

書き忘れた！ 名前／性別／年齢／身長／体重 となっております！

## 「チートな俺は、Gクラス」編 人物紹介

アルト<sup>II</sup>シューバ（秋葉<sup>あきは</sup>有斗<sup>ゆうて</sup>） / 男 / 15 / 168 / 57

転生者。もう色々とチート。チートすぎてヤバイ。

1人の男が休暇で訪れた国でテロに巻き込まれ、死亡。

神様の計らいか、生前の記憶を殆ど受け継がせ、アルト<sup>II</sup>シューバとして異世界に生を受けた。

15年間、後述のナシズ<sup>II</sup>シューバ、サナブ<sup>II</sup>シューバによって育てられた。その間に一般常識も習得。

両人が教える格闘術と魔法を悉く覚え、さらにチートな【チカラ】を授かり、さらにさらに学業も優秀。

そのおかげか、学園入学試験の筆記科目は全てトップ。ただ、【チカラ】のせいで最低位のGクラス入りを果たしてしまう。

だが本人はそれを全く気に留めず。むしろ唯一の知り合いであるエイナ<sup>II</sup>ユーグリッド（後述）に出会えた事で良かったと感じているらしい。

赤茶の肩まで伸び、所々に跳ねた髪に端正な顔立ち。要するにイケメン。ファッションには無関心のように、いつも茶色いローブを着用する。

性格は明るく、相手にその気があれば誰とでも仲良くなれるタイプ。フレンドリー。XCM後には、1-Gの殆どの生徒が友達に。

そのせいか、情には厚い。テンプレだが、仲間を理不尽に傷付けられた時の怒り様は、修羅を思わせるほどだとか。

【チカラ】は【自分が望んだモノを創り出し、手に入れるチカラ】

……通称【創造主<sup>クリエイター</sup>】。

なんでもできる（キリ　望めば世界を支配する事  
だって出来るが、本人曰く「死んでもやらない」そう。  
色々と自分でつけた制約があるが、日常生活や戦闘ではほぼ無敵の  
チートとなる。　これはひどい。

戦闘では、主に格闘技を良く使う。　その為、「チカラ」をばらし  
たくない相手には【身体能力を超強化するチカラ】と名乗ることが  
多い。

得意技は正拳突き。<sup>ストレート</sup>　【クリエイター】で強化すれば、分厚い鉄板  
をティッシュ同然のように打ち抜くとか何とか。

魔法は、格闘の手助けに少し使う程度。　だが本領を發揮すれば、  
最上級魔法をバンバン打ち込む事だってできる。　魔法陣10個展  
開からの一斉攻撃なんて、楽勝楽勝。

XCM1回戦では相手を操作するDクラスキャプテンの操作系の【  
チカラ】を、2回戦ではEクラスキャプテンの幻覚系の【チカラ】  
をそれぞれ悉く破り、勝利。

決勝でも、相手のダント・サスティーフを圧倒（後述）。　無傷で  
勝利した。

料理が得意。　これはサナブ婆のおかげだけではなく、本人は忘れ  
ているようだが元の世界で料理が趣味だったことに基づく。

ナシズ「シューバノ男／？／166/65

アルト育ての親。　そして格闘術を教えた張本人。　格闘術の達人  
という説あり。

声は40代なのに体は60代という、異様な雰囲気醸し出すおじ

いさん。口癖が「〜ね」なので、余計に異様。

日常生活では、何時ものように妻であるサナブ「シューバとイチヤイチヤ（？）」している。人目なんて気にしない。

そしてアルトにも甘い。完全に親バカ。

だが格闘術の腕は本物らしく、アルトに拳、腕、脚などの格闘術を万遍無く教え込んだ。

そのおかげでアルトはこの先、魔獣を廻し蹴りで倒すなどの荒業を成す事となる。

金と白が混ざった薄い髪の毛に皺の寄った顔、いつも薄汚れている洋服。曰く、「いつも薄汚れてたほうが多分良い」

【チカラ】は不明。

サナブ「シューバノ女ノ??ノ152/53

ナシズと同じく、アルト育ての親でありアルトに魔法を叩き込んだ張本人。まったり系老婆。大魔導士という説あり。

概要や容姿はナシズと殆ど一緒なので割愛。ただ、髪はナシズより長く、首で纏めている。顔はナシズより優し気。

魔法魔術の腕は半端じゃないらしく、アルトは全ての知識を脳に刻み込んだ。

そのおかげでアルトは、受けた試験の魔法学に関する項目が全てトップとなり、実技でも高い評価を得ることになる。

ナシズと同じく、【チカラ】は不明。

ジャック・カウエード／男／32／185／79

エクシリアにある宿屋「Black Jack」の主。土佐犬（つばい犬）の魔人。ガチムチ。だが本人にソツチの気は無い。実は妻子持ち。

アルトが魔法学園を受験しに行く時、学園の門に近いからという理由で泊まった宿屋。それが「Black Jack」。

その主である彼は、強面だが実は優しいという一面を持つ。しかし、酔っ払いにはとことん厳しく、怒った時の声はヤバイほど恐ろしい。

サンドウィッチに似た食べ物、「ウィッチサンド」作りの名人であり、アルト曰く「他のウィッチサンドが食べなくなるほど美味しい」らしい。

エйна＝ユークリッド／女／15／160／？

王都エクシリアでの、アルト最初にして最高の友人。俺っ娘。作者が好きなタイプを出してみました。

アルトがエクシリアを下見に行ったとき、平民エリアにて魔獣バーディン2体と戦っていた女子。

その時は長い金髪で、恥ずかしがり屋な感じの普通の女の子だった。しかし、バーディンに倒されそうになったところをアルトに助けられ、その姿に感動する。

そのときから剣技を前より数倍鍛え始め、同時にアルトが入学する

と勝手に予測したエクシル魔法学園に入学するため、猛勉強。

この2つのせいか、口調は男勝りに、髪色はアルトに似せて魔法で変えたらしく赤金に、学力はエクシルでギリギリ通用するだけの物に。

性格は明るく、そして剣技が師範代レベルになり、《金剛剣士》の二つ名を貰ってエクシルの1-Gに在籍している。

赤金のボーイッシュな髪型（イマスの真みたいな）。顔も中性的で、一見するとどちらの性別か見分けは付かない。アルト曰く「昔の面影は残っている」そう。

アルトとは入学当時までに1回までしか会っていないにも関わらず、明るい性格から最初から砕けて話すことが出来た。

アルトに（こういうときにはテンプレの）何ともいえない感情を抱いており、彼女にそれが分かる日は遠い・・・のか？

【チカラ】は【触れたものを硬化させるチカラ】。メインは体を硬化させることなので、カテゴリーは身体強化系になる。

エイナはそれを剣に応用し、剣をもものすごく硬くしている。その技量と合わせ、結構強い。【チカラ】とその強さ故か、《金剛剣士》の二つ名を持っている。

XCM決勝4番手では、同じ大剣使いのウエスレイ・リスニルと対戦し、その剣術を目一杯使って勝利した。対剣士には強い。

剣技に関して負けたくないために、伸長<sup>ストレッチ</sup>など、人にはあまり使えない魔法を覚えている。勿論剣用。

ジェイ・クロウス/女/??/165/?

アルトやエイナが在籍する、エクシル魔法学園1-Gの担任。　ジヤージ先生。　実は怖い説あり。

アルト達1-Gとのファーストコンタクトで、壊れそうな教室のドアを「ピシヤアアアン！」と開け閉めした、インパクト抜群な先生。

碧色の髪とジヤージ、メガネをかけているため、ヤンク　系先生の疑いがある。　髪もポニーテール。　髪を纏めている点でシンク口率高め。

だが、いざ話し始めると「……ぞー」やら「……なー」やら、間延びした口調で気が抜ける生徒が居たり居なかったり。

初めての授業では皆に自己紹介だけさせて帰らせたので、単にやる気のないだけと思われるかもしれない。

しかし、やるときは彼女の【チカラ】…【魔獣を召喚するチカラ】で、徹底的に生徒（の体）に教え込む。　主に戦闘訓練で。

因みに、この【チカラ】は結構レベルが高いらしい。　つまり、結構エリートだったのでは？　謎が多い先生だ。

ミリア・メテリア/女/15/157/?

1-Gに在籍する女の子。　恥ずかしがり屋。　隠れきよぬーの噂あり。

1-Gの1番。　つまり、イレギュラーのアルトを除けばGクラスで最も頭が良い。

銀髪の長い髪は自然に内側にカールしていて、小動物のような可愛らしい顔からして癒し系。　中身もそれに準拠。

ただ、恥ずかしがり屋な一面もあり、特に知らない男性と話すときにテンパリ出す。あわあわ。

得意科目は魔法学、苦手科目は国語。前者は入学試験でトップ20入り。後者はワースト20入り。両極端。

そんな彼女だが、実技の魔法に関しては天才クラス。彼女の【チカラ】である【スペンチャライズ・マジック魔術特化】は、彼女の放つ魔法に特典が付け加えられる。

例えば、魔法陣の3つ同時展開。魔法陣展開から魔法発動までのラグがほぼ0。そのおかげで、XCMの決勝では1番手対決を見事制する。

得意魔法は、火属性中級広範囲攻撃魔法、《フレア焰波》。【チカラ】でこれを3つ同時に繰り出すことが出来、それ故か《獄焰》の二つ名を持つ。

お菓子作りが趣味である。アルト、エイナと仲良しになったのは、これが間接的な原因でもあったりする。

ザリアント＝ヨハン／男／15／161／50

1-Gに在籍する少年。お坊ちやま風。少々いじられキャラになりつつある。

1-Gのちょうど真ん中、20番の男。本人曰く、「自分でセットしている」という短い金髪は、どう見ても無造作でクシャクシャ。セット何たらは多分嘘。

だが、かっこいいと可愛いの間的な顔で、Gクラス的女子からは結構人気がある。好意を持っている女子がいるが、本人が気付く

ことはまず無いだろう。  
というのも、彼が一人の女子に好意を持っているからで……、それ  
以外は鈍感。ここに鈍感キャラがいました。

【チカラ】は、【脚力を超人レベルにまで上げるチカラ】。本気  
になれば、超強化したアルトの脚力でも敵わないかもしれない。  
この【チカラ】と、彼が得意とする格闘技、脚技で敵を翻弄。そ  
の脚力故、《爆速》という二つ名が付いた。  
XCM決勝2番手では惜敗するも、【チカラ】と脚技を上手く使い  
こなす、見事な戦いぶりだった。

アリス・ローマイノ女ノ15ノ155ノ？

1-Gに在籍する少女。 ちよつと暗め。 というか、無口。

1-Gの10番。 長いストレートの黒髪で縁が緑のメガネをかけ  
る。 前髪が目少し掛かっているので、それが暗いイメージを醸  
し出しているのかも。

しかし、前髪を左右に分ければ見える顔は結構可愛い。それが殆  
どの1-G男子（アルトやヨハン除く）に伝わってないだけで、そ  
れが知れば逆ハーレム有力視。

性格は外見と同じく、無口であり喋りたがらない。 だが、声  
も可愛い。それが（ry

彼女の【チカラ】は【密林を支配するチカラ】、通称【密林地獄】。

名前からして怖い。

名は体をあらわす。 ……彼女が【チカラ】を発動させると、彼女  
を中心に、数秒のうちに一定領域内が密林と化す。

その土や草木、蔦や大木などを彼女は操れるのだ。……土の壁や、蔦の槍、大木の槌など、攻撃方法は様々。

操作は四肢で行い、操った物がダメージを受けるとその四肢も同じ痛みを受ける。ハイリスク・ハイリターンな【チカラ】だ。

XCM2回戦では、【チカラ】を最大限利用し、相手に圧倒的な恐怖を植えつけながら勝利した。怖い怖い。

……余談だが、この【チカラ】を発動させている間、彼女の性格は攻撃的になる。それはもう、普段の彼女とは大違いだ。

ファルモート・ガイン／男／59／159／68

エクシル魔法学園の最高責任者、学園長の男。見かけや口調は優しい白髪のお爺さん。ちょっと髪は薄い。

学年最高位<sup>トップ</sup>、ダント・サステーフと、最低位<sup>ワースト</sup>のアルトを一緒に呼び出した人。これによって、異様な宿敵関係が成立した。

アルトに何か期待のような物を抱いており、言外にAクラス入りを進言するも拒否され、それでもまあいいかと放置している。

同時にダントについても期待しており、今はそちらのほうが期待値が大きいらしい。XCMで大幅に針が動くのだが。

いずれは何かしら行動を起すらしい。何をやらかすかはまだ分からないが。

ダントⅡサステーフ／男／15／171／62

エクシル魔法学園、今年度の最高位トップに君臨する男子。細マツチヨ。  
負けず嫌い。

1 - Aの1番<sup>11</sup>年生の最高位である彼。金髪を前髪を少しだけ残してオールバックにしている。ナルシストと見られそうな髪形。顔は俗に言うイケメンであり、長身痩躯。だが、筋肉は十分すぎるほど付いているので、これまた俗に言う「細マツチヨ」。

格下の相手には視線から言動まで全て見下し、上の相手には丁寧な言動を心がける。そういうタイプの典型。

学力も、トップらしくずば抜けて良い。但し、アルトには及ばない。

トップだからか、その顔のせいかは分からないが、休み時間となるとその顔を1目見ようとたくさんの女子が1 - Aに詰め寄ってくる。

……彼が知る良しも無いが、密かにファンクラブが結成されていたりする。会員？1は、1 - Aのとある女子。

【チカラ】は、【聖を操るチカラ】。「聖」が付く魔法、技は何でも使える。聖属性魔法は殆どが強力な物なので、【チカラ】も、とても強い部類に入る。

《セイント・サモン聖召喚》や、《セイント・カッター聖刃》等々。呼び出せる魔獣……聖獣や、放つ技の威力は、他属性のそれとは桁違い。

特に、聖属性最上級一点攻撃魔法《シャイニングワールド輝く世界》は、呼び出せるだけの聖属性魔法を、相手を取り囲むように出現させる。

それを相手一点に集中して放つ、凶悪かつ準チートな魔法。XCMまでは、避けた相手というよりも、使ったことが殆ど無かった。その騎士の様な振る舞いと【チカラ】によって、《聖騎士聖騎士》の二つ名が授けられている。

XCMでAクラスキャプテンとして出場。2回戦では出番も無く、

決勝に進出。その決勝5番手での相手がアルト「シューバ」。学園長室でのこともあり、やる気満々だった彼。  
だが、《聖召喚》で出した聖龍はアルトの正拳突きで吹っ飛ばされ、  
聖剣は悉く避けられる。

終いには《輝く世界》で仕留めようとするが、アルトの出した聖属性最上級防御魔法、《聖域》で打ち消され、正拳突きで昏倒、敗北した。

アルトに「負けず嫌い」と言う渾名を付けられた、多分この小説で「可哀想な奴ベスト10」に入るだろうお人。ダントさんに、敬礼！

モデラ・トー / 男 / 25 / 180 / 63

XCMの司会兼実況を務めた学園の教員。展開が熱くなってくる  
と声が五月蠅くなる典型的な松木 太郎みたいな人。意外と若い。

XCMでの名司会（笑）が心に新しい、実況も出来る学園の教員。  
3年の数学を教えている。

彼の黒髪は7：3分けで、ガッチガチに固めている。3年の中で  
は、「不動の7：3」なんて名前が付いてたり。XCMの時は、  
シルクハットを被っていた。

顔は、普通のサラリーマンみたいな感じ。性格も堅実。だがXC  
Mの時は、それを感じさせないはっちゃけようだった。  
仕事になると性格変わるタイプなんだ、きつと。

ケン＝フォロウ／男／15／170／68

1 - Fに在籍する男子。 リウ。

XCMでFクラスメンバーのキャプテンを務めた男子。 短いボサボサの黒髪、ハチマチ、いかつい顔。 どう見てもスト？のリュを小さくした感じだ。

性格も準拠し、それなりに明るいらしい。

【氣を生成、現出するチカラ】を持つが、1回戦でBクラスのエリヴァン＝シャルロットに圧倒され、【チカラ】を大きく表すことはできなかった。

ダントとは違う意味で可哀想な人。（空気的な意味で） キャラは良いんだけどなあ……、パクリだけど。

マリン・ブルーミア／女／15／156／??

1 - Eに在籍する女子。 準ヒロイン説が囁かれていたが、そんなこと無かった。 多分。

XCMでEクラスキャプテンを務めた女子。 彼女の金髪はストレートのショートカットで、頭の後ろに付けた赤いリボンがチャームポイント。

顔もEクラスの中では1番可愛いらしく、性格もおしとやか。 キャプテンになったのは絶対人気からだろうなあ……と、キャプテン決めの様子が窺える。

しかし実は腹黒く、調子に直ぐ乗ってしまう。 そんな人間である。

戦闘となると彼女の【チカラ】である【幻覚・幻聴・幻痛を与えるチカラ】で相手を翻弄。混乱した相手を蹴りで沈める戦闘スタイル。

1回戦ではその【チカラ】で快勝するも、2回戦でGクラスキャプテン、アルトと当たる。

同じく1回戦で圧勝したアルトを警戒し、何時ものように蹴りでフイニッシュしようと、幻覚と幻聴を使っている間にアルトに近づくしかし、彼女が見ていた「幻覚と幻聴に嵌っているアルト」は幻覚。調子に乗りやすい彼女は、嵌めたつもりが嵌められてしまったのだ。

それに気付かず、あっけなく首に手刀を入れられて気絶し、敗北。

お粗末さまでした。

セルニータ・モザ / 男 / 15 / 167 / 58

1-Dに在籍する男子。典型的な「クラスに友達居ない」タイプ。根暗。

XCM1回戦5番手でアルトと対戦した、Dクラスメンバーのキャプテン。学力そこそこ、運動神経まあまあと、中途半端な男。

紫の長いのか短いのか良く分からない髪はボサボサで、いかにも異臭を放つてそうだが、そんなことは無く。いたって清潔である。でも根暗。

というより、クラスにもちゃんと友達はいて、キャプテンには自分から立候補するほど決断力はある男。だけど根暗。

【チカラ】は、【触れた相手に「種」を仕込むチカラ】。長いので省略しました。

触れた相手の部位に「種」を仕込み、それを媒介に自分の手で相手のその部位を操る。時間が経てば経つほど、干渉力は増す。自分以外に「種」は見えない。

その【チカラ】故、《奇術師》の二つ名を持っている。

XCMでは、1回戦で対戦するキャプテンが握手するトーナメント決めの時を狙って、アルトの右腕に「種」を仕込んだ。

それから1週間で干渉力はMAX。勝ちを確信したモザは自分の力のことをベラベラ喋ってしまう。

それで自分の右腕の違和感に気付いたアルトは【クリエイター】でそれを消滅させ、拳一発。簡単に吹き飛んで意識が飛び、敗北した。

簡単に言うと、テンプレ通りの馬鹿。ダントと同じく、「可哀想な奴ベスト10」に入るかも。

コルモ・ヒューリス/男/15/173/58

1-Cに在籍する男子。イケメンでナルシスト。爆発しろ。

XCMでのCクラスキャプテン。首まである白髪と、ダントをも上回るかつこよさの顔を持つ。顔面リア充。

そのため、Cクラス内の女子(と一部男子)は彼にぞっこん。ダントとか、彼女達にはアウト・オブ・眼中のようだ。

極度のナルシストであり、自分カッコイイだけではなく、かつこよさを追求するために相手の事を気遣うほど。もう病気クラス。

【翼を操るチカラ】を持ち、銀色の翼を生やしたり、羽を飛ばして相手に攻撃したり。その戦闘する姿は美しく、見とれる気持ちも

わかるほどだと言っ。

だが、1回戦では幻覚使いのマリン・ブルーミアと当たり、相手が女子のため手加減の心配をしていたら簡単に幻覚に嵌った。そのままブルーミアの蹴りでKOされ……幻覚に慌てる、美しいとはとても言えない姿を曝け出してしまった。

だが、倒れる姿がまた美しかったのか、Cクラスの女子（と一部男子）はまだまだ彼に釘付け。彼は1人、嫌われなくて良かったと思っっているそうだ。

やっぱり爆発しろ、リア充が。

エリヴァンⅡシャルロツテ/女/15/162/?

1-Bに在籍する女子。　ただひたすらにお嬢様。　絶対奴隷とかいる。

XCM、Bクラスキャプテン。　長い金髪はクルクルとカールしており、いかにもお嬢様というそういつた髪型。

顔は可愛いと言っか綺麗。　少し吊り上がった鋭い目が、お嬢様らしさを加速させる。　首にはネックレス。　指には大量の指輪を装着している。

性格は、やはりお嬢様らしく高飛車で、自分が絶対。　でも敬意が必要な人にはちゃんと敬意を持つて接するので、別に嫌な人じゃない。

逆に、仲間思いな面もあつたり。

【宝石を魔法に変えるチカラ】<sup>ジュエルマジック</sup>で、身につけた宝石を消費して、通常の魔法とは別に「宝石魔法」を放つことが出来る。

彼女は、2つを組み合わせで強大な攻撃を仕掛けたり、別々にして相手を翻弄したり。この【チカラ】をおかげで、ネックレスなどの着用が認められている。

XCMでは、1回戦でFクラスキャプテンのフォロウを圧倒して勝利した。しかし、次の相手はAクラス。

自信を持っていた魔法を相手に悉く吸収され、ショックを受けた彼女は数秒動けず。その間にその魔法を跳ね返され痛みで気絶。敗北を喫した。

魔法の技術ならAクラスにも引けを取らない、なかなかの実力者である。

カノン・レアトリア / 男 / 15 / 176 / 72

1 - B在籍、XCMのBクラスメンバー。フルボッコされてた人。

無造作な短い茶髪、それなりに整えられた顔、そして有り余る筋肉を持つ格闘家体質なBクラスの男子生徒。

言動は激しく、相手にムカついてくると「ゴルア！」とか使ったり。要するにキレやすい。現代の若者。

しかし性格は明るく、ムカついてなければフレンドリー。クラスの中でも人気者らしい。

【何でも殴り飛ばすチカラ】の持ち主。その名の通り、魔法でも幽霊でも空気でも、殴ろうと思えば何でも殴り飛ばすことが出来る。劣化KJさん。

特に、空気を殴って相手に向けて飛ばす《エア・ショット空気の弾丸》は、硬い闘技場の地面の一部を粉碎するほど強力である。

しかし、XCM2回戦では相手の素早い動きで攻撃を全て避けられ激昂。まんまと相手の策に嵌りフルボッコ、敗北した。作中では名前しか呼ばれていないのだが、とりあえず入れておいた。

フウカ・エーリル / 女 / 15 / 155 / ?

1 - B 在籍。 シャルロット、レアトリアと同じくXCMのBクラスメンバーの女子。 あれだ、妖 みたいな人だ。

黒髪で、おかつぱに良く似たヘアスタイルの女子。 大和撫子的な可愛さの顔から言って、日本の何処かに1人は似た人がいる。一般的な日本刀（のような片刃剣）を持ち、性格は物静か。 XCMで自クラスキャプテンだったシャルロットには、敬語で話す。

【チカラ】は不明。 しかし、素早い動きと精密な刀さばきで戦う所、刀に【チカラ】の秘密があるようだ。

XCM2回戦では、大剣使いのウエスレイ・リスニル（後述）と対戦。 リーチの圧倒的な差が響いたのか、惜敗。サブキャラで個人的に好きなキャラ。 後々再登場するかもね。

テミニル・ライト / 男 / 15 / 158 / 48

1 - A 在籍のXCMメンバー。 Aクラスらしく、かなり強い。

短い黒髪で、適当に固めたと思われるヘアスタイル。 童顔なのでちょっと可愛いAクラスの男子。

なれなれしい物言いとその【チカラ】で、相手を精神、身体的に叩き潰すことが大好きと言うドS人間だったりする。

【魔法を吸収、発射するチカラ】を持っていて、相手が放った魔法を一旦体に溜め、黄色い球体に変換して相手に発射する。

XCM2回戦では、Bクラスキャプテン、シャルロツテの強大な魔法を悉く吸収し、跳ね返して勝利した。

しかし決勝1番手では、アルトの観察眼と対戦相手メテリアの豊富な魔力の前に魔法を跳ね返せず、自爆。敗北した。油断って怖いね。

アグスIIレイアン/男/15/169/59

1-A在籍。XCMのメンバー。学力はAクラス上位らしい。

首まである青髪。常に笑顔で、何を思っているのか読みにくい。

傍から見ると優男。

とぼけたピエロのような言動で相手を逆上させ、自分の罠にかけるのが基本的な戦法。そのため、普通に喋っていてもちよつとイラつく。

【チカラ】は、【超純化結界を張るチカラ】。地面に手を付き「点」を置き、それを繋ぐことで結界の面とする。

その結界に入った者は動きが蚊が止まるほど遅くなり、アグスは其処を見計らって敵をフルボッコにする。

XCM2回戦ではBクラスのカノンを、決勝2番手ではGクラスのヨハンをそれぞれ同じ戦法で破った。

倒せるのはアルトか、魔法を多用する魔法使いだけじゃないかと思う。でも格闘も得意らしいので、地味に万能である。

フィナル・エレンス/女/15/160/?

1-A在籍。 決勝まで正体を表さなかつたくせに、地味に強いXCMのAクラスメンバー。

所々跳ねたショートカットの金髪に赤いメッシュが入り、肌も他の大勢とは違ってちょっとだけ黒い。ブレザーも着崩して着るギャル(笑)系女子。

性格は明るく……というか戦闘狂の疑いがある。 冷静なアリスに、お前は明るすぎと思わすほど。

【チカラ】は【自身を強酸に変えるチカラ】。 その名のとおり体を王水のような強酸に変え、相手に襲い掛かる。

XCM決勝3番手では、Gクラスのアリスと対戦。 アリスが打ち出す鳶の槍や木の槌を、体を強酸に変えて無効化するばかりか、木を溶かしてダメージを与える。

最終的には、アリスが痛みによるショックで気絶。 完璧なまでの勝利を収めた。 チームはその後負けるのだが。

ウエスレイ・リスニル/女/15/170/?

1-A在籍。 ダントのファンクラブにこっそり入っていたりする女流剣士。 XCM、Aクラスメンバー。

脇付近まであるストレートの銀髪に、きりつとした綺麗な顔を持った美人さん。  
性格は冷静沈着。いつも無表情で、戦闘するときさえも声に感情がこもっていないという生粋のポーカーフェイス。  
カジノではぼろ儲け出来そう。

【チカラ】は『クラッカー』を扱えるチカラ。彼女が持つ魔剣『クラッカー』に自身の魔力を食わせ、強力な地属性の攻撃を出せる。

デメリットは他の魔法が上手く出せなくなることだが、それを『クラッカー』でカバーしているため、余り気にはならないらしい。

XCMの2回戦ではBクラスの刀使い、フウカ・エーリルと対戦し、『クラッカー』の力を最大限発揮して勝利。

決勝4番手では、同じく大剣使いのGクラス、エイナ・ユーグリッドと戦った。

2回戦と同じく『クラッカー』を使って地属性の攻撃をするも、エイナの剣技に少しずつ押されていく。

最後は、エイナの剣を弾き飛ばし油断して斬りかかった所、《ストレッチ伸長》により戻ってきた剣でエイナがカウンター。防ぐことが出来ずに敗北した。

これまたサブキャラの中でお気に入り。再登場あるかも。

「チートな俺は、Gクラス」編 人物紹介（後書き）

過去最多文字数です。 やばい、4日ほど掛けた甲斐があった。

さて、明日か明後日かは分かりませんが、次からは新編です。

舞台は、XCMの3カ月後。 現代の暦で言うと、7月中旬頃から始まる予定です。

「チートな俺は、ネームレス」編、期待しないで、楽しみにしてくださいな。

第27話：アルトは、今後の計画を決めようとした。（前書き）

さて、今日から新編、「チートな俺は、ネームレス」開始です！

お待たせしました。今日は短いですが、どうぞ読んでいって下さい！

第27話：アルトは、今後の計画を決めようとした。

Side アルト

俺達GクラスがXCM優勝を果たした、その3カ月後。 日  
本の暦で言うと、7月下旬。 そして、季節は

「（……………あぢい……………」

夏である。 何故、こういう所だけは日本に似るのだろうか……………俺は、夏の暑さが大嫌いだったのだ。 もうムシムシとか言うレベルを超えた熱気の中で、俺は心の中で呟いた。

此処エクシアの夏は厳しく、普通でも30度以上、酷い時には40度以上になると言う……………俺にとってこっちの方が魔王のような気がしてきた。

……………ああ、ソツタは涼しかったんだ。 あの頃が懐かしい。

入学当時は、A〜Gクラスの待遇の違いが机の違いだけかと思っていたが、なるほど。

Aクラス含め、上位クラスには、魔術で室外の空気を冷風、温風に変えて室内に送る……………「魔術式<sup>エアコン</sup>温冷変換送風機」が設置されている。 Gクラスには勿論無く。 ……手で扇ぐしかないのだ。

……………え、【クリエイター】で対策すればいいじゃないか。 って？

実は、それが無理なんだよね。 ……今の状況が原因で。

……キーンコーンカーンコーン……

「はい、用紙を前に回してー。 名前はちゃんと書いてあるなー？」

お馴染みの学校のチャイムが鳴り響き、前に立って手で顔を仰ぐジエイ先生は、かつたるそうにそう言った。

同じようにぐったりする俺含むGクラスの面々は次々にテスト用紙を前に回し、仕事を終わるとまた同じように脱力する。

……今は期末考査中。 そう、所謂定期テスト。 此处は教育機関であるから、当たり前のようにテストはある。

そして、教室内では問題を解くこと以外何も出来ないように……つまり、【チカラ】や魔法魔術を使えないように、それを無効化する結界が教室棟全体に張られているのだ。

だから、氷属性魔法を使ったり、【暑さにものすごい強い体】を作り出すことが出来ないのだ。 熱気が直撃。

何かで氷作って持ち込めばいいんじゃないかって？ はは、出来たら苦労しないさ。

【チカラ】や氷属性魔法で作る氷は、水で出来てるんじゃないで魔力で作られた氷だ。 持ち込もうとした瞬間、魔力の粒になって消え去るな、多分。

【チカラ】は分かる。 特に俺みたいな感じのヤツ用だろうな。

それは分かるが、何も魔法まで無効化すること無いじゃねえか…

「きりーっ、れい、ちやくせー……」

こんな時でも真面目な男子生徒の号令。ソイツが「き」を言う前に、大半の生徒は教室外へと駆け出し、外を目指す。

結界が掛けられているのは教室棟の中だけなので、外に出ちまえば魔法使い放題だ。……男子生徒の多くは、窓から外に飛び出す。

1階でよかった。

俺も当然その中の1人であり、出た瞬間に【クリエイター】発動。

全身の汗を飛ばし、暑さに強い体にした。あースッキリ。

……あ、窓から飛び出す女子が一人いた。……エイナだ。

「あちいー！ アルト、なんか出してくれー！！」

ちよ、出て早々それかよ……。まあ、エイナは氷属性魔法が扱えないそうだから、仕方ねえか。

俺は【クリエイター】でエイナの周りに冷気を纏わせた。……ここ数日、何時もこれだ。どうせ便利屋だよ、俺は。

「ふいー、サンキュー、アルト。早く飯喰いに行こうぜ！ テスト終了記念だ！」

今日で、4日間のテストは終了。全日昼食前に終わるので、飯を食って寮へと帰る生活も今日で終了だ。

そんなわけで、エイナが言うようにテスト終了記念にと、食堂に向かった俺。

そこで、俺の夏の生活が決定する事となった。

何時ものように食堂へと向かい、何時ものように日替わり定食Aセットを選ぶ俺。

日替わり定食Aセットとは。学園の食堂で一番早く出て来て、しかも一番美味しい定食のことである。

今日はチーキンの塩焼きと葉物のサラダ、コンソメ（つばい）スープに、（俺がおばちゃんに教えた）パスタである。おばちゃんと仲良しでよかった。

エイナも同じものを選んだようで、適当に席を取って座り、食べ始めた。……うん、美味い。

「……そういえば、アルトは夏休みどうすんだ？」

「……あー、もう夏休みか。考えてねえな」

エイナの突然の問いかけに一瞬驚くも、そう答える。……夏休み、かあ。何年ぶりだ？

エクシル魔法学園にも、夏休みはある。やっぱり、暑いからね。因みに、夏休みが始まるまで後2日。

学園生徒が夏休みにやることベスト3は、補習、課題、そして夏休みの敵である課題を押し、ナンバー1は

「やっぱりさ、ギルドに入って狩獵ハントでもしたいよなあ……」と、エイナの声。ナンバー1はテンプレ、ギルド登録である。

15歳になると、エクシリア内のギルドに登録、クエスト依頼を受けることが出来るようになる。

尤も、夏休みまでは暇が無いので、夏休みに入ってからギルドに登録し、依頼を受けるのだ。勿論、報酬も貰える。

「でもよ、ギルダールになったとしても俺らGクラスだぞ？ どうせDランクからのスタートだぜ？」

そう俺が言うと、エイナは「……そうだよなあ……」と首を傾げる。

ギルドにおいて登録者は「ギルダール」と呼ばれ、自分に合ったランクでクエストを受けることになる。

ランクはS、A、B、C、Dの5段階。Sが最高ランク。Dは最低ランクだ。ランクは1カ月ごとに更新され、一月で成功した依頼の数とタイムでランクが上下する。

そして、通常は登録時でランク決めクエストを受け、そのタイムでランクを決めるのだが……。

俺達学園生徒の場合、今のクラスでランクが決まる。そして、Gクラスのスタートランクは、勿論Dランク。最低位だ。

Aクラスの連中はAランクからスタートできるらしい。羨ましいな。

クエストの難易度は、当たり前のようにだがSに行くほど高くなり、Dランクは「何とかの採集」とか、「超」弱い魔獣の狩猟」とか。要するに、手ごたえが無い。

……つまり、1カ月ほどの夏休みでDランクから2ランク以上上に行くのは不可能であり、XCMで見たようにDランクでは収まりきらないであろう強さのエイナは、それを不満に思っているようなのだ。

ギルダーたちがチームを組んで専用依頼を受ける「ギルダーズ」という制度もある。勿論、チームにもランクが存在する。

だが、チーム1人1人のランクでチームランクが決まるため、Gクラスにしかチームが組めるほどの友人が居ない俺達は、頭を抱えるしかなかったのだ。

「ま、休み毎にでもまた行けば良いじゃねえか。今はDランクだけど、冬休みにはCランク、春休みにはBランクってさ」

「だけだよお……やっぱり」　エイナは呟く。　あ、もう食い終わったぞ？

どうせやること無いし、俺もギルダーになってみるか……ランク関係無しに、楽しめりゃ良いや。

そう思っていた矢先だった。

俺とエイナは向かい合って座っているのだが、エイナが先に彼女に気付く。

「あつ、お前……!!」

エイナがそう言う。　確かに何か影が落ちているので、振り返ってみると。

「　少し、君達と話がしたい。　良いか？」

XCMから少し伸ばしたのか腰まであるストレートの銀髪。　キリリとした瞳が印象的な、俺より背が高い女子。

XCMの時と同じで、無表情・冷静な口調の彼女は、XCM決勝でエイナと激戦を演じた大剣使い。

Aクラス、ウエスレイ・リスニルがそこにいたのだ。

俺とエイナは、XCMであっただけ。俺に至っては其処で話す機会も無かったので、「会った」というか「見た」というほうが正しいのかもしれないが。

「……なんだよ」……エイナが言う。別に敵対意識とかを持っているわけでは無さそうだが、つつい少強口調になるようだった。

俺は特に言うことも無く、エイナをなだめる事もせず、リスニルの次の言葉を待った。

そして、次にリスニルが発したのは、エイナにとっては歓喜の言葉。俺にとっては

「それでは簡潔に言おう。夏季休暇中にギルド登録するのなら、是非とも私が作るチームに入り、一緒に依頼を受けてくれないか？」

夏の生活を決定付ける、言葉だった。……これ、喜んで良いのか？

第27話：アルトは、今後の計画を決めようとした。（後書き）

さっそくりスニルを出してみました。

自分、やっぱり剣使いが好きなのかな……などと思っ今日この頃です。

第28話：アルトは、Aクラスの1人から勧誘を受けた。（前書き）

はい、1日ぶりの夜来です。

うとうとと書いて文章崩壊してますが、できる限り手直ししました。

何かありましたら、感想欄にお願いします。

## 第28話：アルトは、Aクラスの1人から勧誘を受けた。

Side アルト

「それでは簡潔に言おう。夏季休暇中にギルド登録するのなら、是非とも私が作るチームに入り、一緒に依頼を受けてくれないか？」

そんな言葉を、Aクラスのウェスレイ・リスニルから突きつけられた俺とエイナ。

俺はただただその言葉を頭の中でリピート再生し……3秒後。

「……はぁ？」

偶然にも、エイナと声が重なった。

因みに、俺は語尾を下げ調子。エイナは語尾を上げ調子。

つまりは、俺は「ああ、そうですか」的な感じで言ったのに対し、エイナはマジで驚いているようだった。

そりゃそうだろうな、XCM以来一度も会った事が無いAクラスのエリート中のエリートに、いきなり「チーム作るから入れ」と言われたんだから。

まあ、チームにAクラスが入っているのと入っていないのでは大きな差だろう。ランク的にも、戦力的にも。

「お、俺が？ 良いのか？」

「良くなかったら此処に来ていないだろうに」

エイナの問いに即答するウェスレイ・リスニル……長いな……リスニル。確かにそうだな。

ギルダースのクエストは、チームプレイが必要な代わりに難易度が跳ね上がっている。やはりエイナは、手応えが有れば有るほど嬉しいんだろう。

簡単に言えば、ギルダースクエストの難易度 $\parallel$ 同じランクの個人クエストの難易度 $\times 3$ 位か。

ランク的に言うと、ギルダースでのDランククエストが個人のBランクに相当する。3つほどランクが上がるんだな。

まあ、そうは言っても所詮Dランク。手応えが無いに等しい。

因みにこれ、学園の「ギルド活動部」なるクラブの顧問から聞いた話だ。

……この先生、元は有名なギルダースだったらしく。俺が質問すると懇切丁寧に答えてくれたのだ。

……しかし、その先生はどう見ても、口調からも察するに「オネエ」であり……質問し終わると、俺は逃げるかのようにその場を去った。ちよっと、そういう系の人が苦手な俺だった。

「よっしゃあつ！ ……そっぴや、「君達」って事はアルトもか？」

「当然だ。どうやら、納得していないようだがな」

ああ、俺の存在は「そっぴや」で片付けられるんだな。

エイナが歓喜する中、俺は1人考える。

「……俺とエイナを何故アンタのチームに入れる？」

「逆に問おう。XCMで1人は私を倒し、もう1人は最高位のダント様を倒した。そんな人材を、何故見逃す？」

やはり即答された。……頭の回転速いな、何でそんな早く答えが出てくるんだか。……「ダント様」とかは、仕方ないから今日は見逃すとして。

だが、俺が言っているのはそういうことではなく。

「違う。俺達とアンタは1回しか顔を合わせていない。……ギルダーズはチームプレイが基本だろ？」

「生憎、友人を作るのに物怖じしない性質タチでな。それとも君は、男の癖にそんなことを気にするのか？」

言外に「ほぼ初対面で動きを合わせ難いと思うが、そんなチームで大丈夫か？」と質問すると、速攻で「大丈夫だ、問題ない」と答えられ、逆に質問された。

ちよつとネタが古いと感じるが……まあ良しさ。とりあえず、Aクラスには口喧嘩で勝てないということはわかった。

「いや、ちよつと聞いてみたただけさ。エイナが良いなら、俺も良いぜ」

「俺は勿論OKだ。アルトがいれば、心強いからな」

「決まりだ。終業式の日午後2時、寮前に集まってくれ。顔合わせをしたい」

え、今じゃ駄目なのか？　と思いきリスニルに質問してみると、他のメンバーの都合が合わないらしい。

終業式は2日後。2日も都合が悪くなる用事が何なのか非常に気になるが、とりあえずはそれまで待とう。……俺の前に座る少女エイナ

は、待てないらしいが。

その日の夜。俺の部屋にやってきた赤いハート柄の寝巻きを着た  
エイナは、興奮冷めやらぬ様子で話す。

……いや、美少女だから目の保養になるのはどうでも良いとして、  
俺に心を開いてるからこそその行動だと思うけどさ。  
男の部屋に寝巻き姿で入るのはどうかと思うぞ。  
男は、  
きっかけがあれば何時でも野獣に進化するからな。

……俺の頭の片隅に有った馬鹿な思考は放つといて、本題に戻ろう。  
「あー、待ちきれねえよ！ なんだって、AクラスのXCMメンバ  
ーからスカウトされたんだからよ！」

「とりあえず落ち着け。周りに声が響く。それと只今午前2時だ。  
早めに寝かせてくれ」

「……っ、すまねえ。でも、アルトも嬉しくないわけでは無いだ  
ろ？」

「勿論。強い魔獣と殺れあえるなら、ちょうど良い暇つぶ……格  
闘術とか魔法魔術の練習にもなるしな。そして早く寝かせてくれ」

「だろ？ だから

「……以下、「寝かせてくれ」

を無視したエイナの独壇場の為、割愛。

エイナが俺の部屋に入ってきて喋りだしてから、早4時間。ね、眠い。

……前に言ったように、俺も手ごたえあるほうが嬉しいし、別に見知らぬ相手でも仲良くできるとは思っぞ？

だから、早く寝かせてくれよ。……………明日も学校、有るんだぞ……………。

結局、3時まで続いたエイナの語り。俺はエイナが帰ると半ば倒れるようにベッドへダイブし、直ぐ眠ってしまった。

時は飛び、今日は終業式の日。細かく言つと、終業式が終わった後ショートホームルームのSHR。

あ、そうそう。一昨日おっすい期末考査が終わったばかりなのに、昨日全ての教科で帰ってきたのには驚いた。

現代国語、古代国語、数学1、数学2、地理、世界史、魔法社会学（現代社会みたいな感じ）、生物、魔獣学、そして実践魔法学のをわせて10教科。合計1000点。

俺は964点と、妥当な線だった。

内訳？ 先ほどの順に、98、95、99、96、95、98、97、89（生物は苦手だ……………）、97、100。

……痛い痛い、止めるッ！！

……因みに、エイナは新しく加わった教科の殆どが苦手らしく、4  
61点と撃沈。メテリアは670点、ヨハンは597点、そして  
アリスは600点ちょうど。

さて、今の状況に戻ろう。　只今午前11時30分。　SHR中だ。

「それじゃ、SHR始めるぞー」

「さて、明日から……という言うよりー、今日の昼から夏休みだー」  
「エクシリアのギルドでギルダーになるもよし、海やら川やら山や  
らに行くもよしー。楽しんでくるんだぞー」

「でも課題はちゃんとやってー、危険なことには首突っ込まないー。  
これ約束なー」

「それじゃ、解散ー」

早っ。　開始13秒だ。　ショートすぎにも程がある。

ま、短いのは良い事だな。　ジェイ先生グツジョブ。

「きりーっ、れい、ちやくs「あざっしたー」……グスッ」

勿論、真面目な男子生徒の号令は最後まで言われること無く。

挨拶もジェイ先生率いる「あざっしたー」族が、メテリア率いる「  
ありがとうございました」族を人数と音量で上回っていた。　俺？  
勿論「あざっしたー」だけど？

挨拶から数秒でワイワイガヤガヤ賑やかになる教室内。　……1学  
期、長かったな。　皆にとっては4時間ちよつとだろっけど（読破  
時間的な意味で）。

メタ発言はさておき。　その後は普通に食堂で昼飯を食べ（エイナは興奮しっぱなしだったな。　それを俺とかメテリアとかがいるんな目で見てる感じ）、  
そして、午後1時59分。　場所は、エクシル魔法学園、学園生徒寮前。

「ああ、誰がくるんだろうなあ、アルト！」

「俺と、エイナと、ウエスレイは確定だろ？　やっぱり、ウエスレイが連れてくるんだったらAクラスの奴らじゃねえか？」

「だよな、ワクワクするな！」

ああ、エイナはもう課題とか吹っ飛んじやつてるんだろうなあ。

さすが元気っ娘。　元気の塊だな。

とか言っている、来たみたいだ。　1番先頭はウエスレイ。

彼女に続くように視界に入ってきたのは、碧色短髪の男子と、黒髪を首で1つに纏めてある女子。

そして

金髪をオールバックにした男子。　……<sup>まげずきらい</sup>ダント・サスティーフが視界に飛び込んできた。

……ええええええ……

。

第28話：アルトは、Aクラスの1人から勧誘を受けた。（後書き）

そうそう、【クリエイター】なんです。何でもできるとやっぱアレですね。

なので、デメリットとか欠点を決めようと思うんですが、何もアイデア浮かばないですねww

そついうわけで、ちょっとデメリット募集したいと思います。何か案がありましたら、ご気軽に書いてください。 何

皆さんの力が、小説の運命を変える……かも。

第29話：アルトは、学年最高位と再会した。(前書き)

更新速度ががた落ちの夜来です。 1ヶ月はほぼ1日1更新したから、いいんだもん。

サブタイトルは「ダントとの再会」ですが、物語はギルドに行くまでに進みますよ。

## 第29話：アルトは、学年最高位と再会した。

Side アルト

目に飛び込んできたのは、見たことが無い2人と、確実に見たことがある金髪の男、ダント・サステイフ。  
ほぼオールバックは健在のようで、XCMから殆ど何も変わってねえな。リスニルは結構変わってたというのに。

ダントは、視界に俺達を捉えたのかその瞬間だけ石像のように固まり。

「き、貴様ツ！ 何故貴様が此処に居る、アルト<sup>ワースト</sup>！ シューバ！

最下位はさつさと寮の中に入っているツ！

其処の大剣女も同じだっ！ 私の視界から失せるツ！ 今すぐ  
ツ！」

……ちよ、感動（笑）の再開なのに、其処までまくし立てるか。

っていうか、XCMで負けたことを根に持っているようだな。未だに。……しつこい。

「なっ……、いきなり何なんだテメエはっ！ それがアルトに負けた奴の言うセリフかっ！

っていうか大剣女って何なんだよ！ せめてアルトみたいにフルネームで呼べよ！」

エイナ、お前もか。感想で指摘されたばかりなのに、酷くなって

る感がするぞ。

まあ、名前で呼んでもらえないのはちょっと可哀想な感じがする。

……「お前が言うな」って聞こえたけど、無視。

「落ち着いてください、ダント様。美しいお顔が醜くなっており  
ますから」

リスニルがダントを宥めようと、そんな言葉を口に出した。……  
貶<sup>けな</sup>しては……ないよな？

「まあまあ、落ち着けて。 あいつもエイナの名前知らなかった  
だけかもしれないだろ？」

そして俺も、エイナを落ち着かせようとそう言葉にする。 まあ、  
ダントは頭に血が上ってエイナの名前が出てこなかったことは明白  
だが……気にしない。

しかし争いはすぐには収まらず、5分後。  
ダントとエイナは幾分落ち着いたか、まだ相手を睨んでいるが（ダ  
ントは俺を、エイナはダントを、だな）口喧嘩をすることは無さそ  
うだ。

それを見たリスニルは、息を小さくつきながら話し始めた。

「……えーっと……。 この6人で、夏季休暇のギルドースクエス  
トを受けたいと思う。」

6人は結構多めの人数で依頼<sup>クエスト</sup>も難しいものになると思う。 だが、  
このチームで頑張っていきたい。

まずは自己紹介と行こう。 私はウエスレイ・リスニル。 この  
チームのリーダーを務める。 よろしく」

あ、「私が作るチーム」って言ってたからやっぱり、ダントじゃな

くてリスニルがリーダーなんだな。

リスニルは、次に「よろしくお願ひします」と隣のダントに言う。

「……ダント・サスティーフ。……よろしく」

頭を掻きながら、渋々といった表情で自己紹介するダント。何か、調子狂うな。

次は、多分ダントの右隣にいる黒髪の女子だろうか。

「……Bクラスのソフィ・マクエルです。よろしくお願ひします」

丁寧な自己紹介をした黒髪の女子、ソフィ。ニコニコ笑う姿は可愛らしいな。何も持って無いから、武器とかを使う感じじゃ無さそう。

いや、こんなか弱そうな子には武器は扱えないか。……ソフィは、次の碧髪の男子に回した。

「同じくBクラスのラウス」ガレーダ。あんまり活躍できないかもしれないけど、よろしく」

軽くお辞儀をした碧髪の短髪男子、ラウスはそう自己紹介。こっちも目立った武器は見当たらない。

細身だけど、何かしら武器を扱えるだけの筋力があるのは、腕からチラツと見える筋肉から明らかだ。

……次は、エイナか。

「Gクラスのエイナ」ユークリッドだ。よろしくな」……何時もと同じ男勝りな、もう男同然の口調で話すエイナ。説明は不要

だな。

……それで、次は俺か。

「同じくGクラスのアルト＝シューバ。俺もあんま活躍できないかもしれないけれど……よろしく」

「……やっぱり、貴方がシューバさんだったんですね！ XCMの決勝戦見ました！」

「最高位のサスティーフを殴り飛ばした時は凄いと思った。全く、憧れる」

俺の自己紹介に、ソフィとラウスが食いついてきた。ラウスがダントの名を出した途端、ダントはあの時を思い出したのか、胸に手を当てる。

小さく、「……く、くそ……」なんて呟いてる。……なんか、すまん。

「……っ！ サ、サスティーフさんも凄かったですよ！ あんな強い魔法を使えるなんて！……ラウスッ！」

「……！……確か、《輝く世界》だったか。最上級魔法を一個でも使えるだけでも凄いのに」

ダントが苦しむ姿（……正確には、苦しむダントを心配し、2人その鋭い瞳で睨むリスニル）に気付いた2人は、慌ててダントを褒めるが、もう遅い。

「……はあ……」と1回大きなため息を吐き、「もう良い」と2人とリスニルに言った。

「リスニル。何故コイツらをメンバーに選ぶんだ。……仲が悪  
いのは目に見えていただろうに」

「……すみません、ダント様。しかし、アルト「シューバとエイ  
ナ」ユーグリッドの力は強力な物というのも、お分かりいただける  
かと思います」

「……まあ、だが……」……リスニルの的を射た（？）意見に、ダ  
ントは納得しながらもまだ不満があるようだ。

……此処で俺がなんか言うと、またダントは怒り狂うだろうから、  
口出しはやめておこう。

まあ、チームを組むんだから仲が良いのが1番1番。

「……いい加減納得しろよな。負けたんだから」

……あつ。

隣から聞こえた一言。俺がそれをエイナの放った一言だと認識し  
た時には、それは的確にダントの耳を通り抜けていて。

今度こそダントの心は折れたようで……バタツと。その場に倒れ  
伏したのだった。

俺がエイナを少しばかり強い調子で叱り、リスニルはその場に崩れ  
落ちるダントを支え、ソフィとラウスはその場で立ち尽くす。  
そんな構図が、数分続いた。

「……それで、もうギルドに行くのか？」

意外にも10数秒で復活したダント。リスニルにそう尋ねる。

……ん？俺はちよつと疑問が。

「負けず嫌い。お前、リスニルから何も聞かされて無いのかよ？」

「くつ、だからそう呼ぶな……ああ、私はリスニルに『お願いですから入ってください』と数時間前に言われたばかりだからな」

……お前も苦労人だな。少しは計画性持て、リスニル。

「まだ日は高いですから。ギルドに行って、今日のうちにギルダ―登録を済ませてしましましょう」

その計画性が無いリスニルは、そう提案する。まあ、まだ2時30分にもなっていないしな。そのほうが良いか。

リスニルは俺達に良いかと確認を取り（ダントに確認を取らない辺り、強制的なんだな）、全員が良いと言つと……

「それでは、早速行こうじゃないか」

そう言い放ち、学園出口へと向かうのだろうか、歩き出した。…

…案の定、その予想は当たり、出口から商人エリアへ出た俺達は、そのままギルドへ向かう。

出口からエクシリアギルドでは十数分しかないので、特に話すこともなく。……まあ、ちよつと外へ出るのは久し振りだった為、少しばかり懐かしい。

そんなことを思っていると、着いてしまった。早ッ。  
俺達6人が立ったのは、まるでサーカスのテントのような丸い外壁  
にでかでかと掲げられた看板、その下の扉の前。

看板には、赤字で「Heroes Blood」と、書いてあった。

王都エクスリア公認ギルド、「Heroes Blood」

。「勇者の血」の由来は、「勇者の血によって出来た国」という意味  
と、「勇者の血が流れる国」という意味が有るらしい。

勇者の活躍で出来た王都、そして国。そして、今でも勇者の子孫  
が暮らし、ギルダーにも、少なからず勇者の力という物が流れてい  
る……そういう意味。多分。

此処で言う「勇者の力」とは、別にエクスリア都民全員に血が流れ  
ていることではなく、あくまで雰囲氣的なものだろうが。

扉を押し、中に入った俺達。中は、そのちよつと怖い名前とは違  
い、白と黒と赤を基調とした、小綺麗な内観だった。

1階は受付らしく、中央には受付らしきカウンター。可愛い3人  
の受付嬢が、それぞれ屈強なギルダーの応対をしていた。

右を向くと、様々な依頼が書かれた依頼書が張られた壁。何人も  
のギルダーが、SとDに分けられたその依頼書の内容を、しっかりと  
吟味している。

此処から依頼書を取り、受付嬢に持っていく。そして予定時間と  
なると、クエストスタートとなる。

クエストは指定時間内に目的を達成できれば、クリアとなる。

まあ、これは当たり前か。

クエストには大別すると【コレクト採集】、【ガード護衛】、【トランスポート輸送】、【サーベイ調査】、【アサラーその他】の5個に分けられる。

【採集】は、魔獣の討伐や捕獲、植物などの採集が混ざった物。

討伐しても、どうせ魔獣の毛皮とか、良いものは貰っていくから採集に入ってるらしい。

【護衛】。国の主要人物などを護衛する仕事。立ちふさがる魔獣や賊はすべて排除する。大物が依頼主のケースが多い為、報酬が弾む物が多い。

【輸送】は国跨ぎの配達だな。時にはサタナー・エリアに入ることもあるらしい。配達品は絶対に壊してはいけない為、高ランクが多い。

【調査】、遺跡の調査とか、魔獣がいるかもしれないエリアの調査とか。遺跡調査は、思わぬ発掘品があるかも。

【その他】はその名のとおり。雑用（窓拭きとか、迷子とか）をするのが多い。故に、Dランクが多いな。

ま、色々クエストがあるのだ。それだけの話。

左側には、ギルダーたちの交流の場である酒場が設置されていた。

ギルダーたちは、此処で交友関係を持ったり、チームを組んだりするのだ。

酒場と言っても酒だけ置いてるわけではないのが良いな。

リスニルは登録を行うのだろう、受付へと向かう。それに付いていく俺達。

「……エクシル魔法学園の生徒だ。ギルダー登録、及びチーム登録をしに来たのだが」

「学園生徒の方ですか！ 分かりました、それでは生徒証をお見せ

ください。直ぐにギルダーカードを発行しますよ！」

そう言われ、俺はポケットから、事前にリスニルに言われ、持って来た学生証（紙製だ……）を取り出す。他の5人も持ってきているようだ。

ギルダーカードは、ギルダーの証明証のような物。いろいろな情報<sup>レベル・ボール</sup>が其処に入るらしい。

受付嬢は6枚の学生証を手に取ると、奥から何か黒い物が中で渦巻く、ガラス球のようなものを持ってきた。大きさは……「判定球」<sup>レベル・ボール</sup>ぐらい。

「……なんですか、それ？」……ソフィが受付嬢に尋ねた。

「これはギルドボールといって、ギルダーカードの発行からクエストの依頼記録まで何でも出来ちゃう優れものなんですよ！」

受付嬢はそう言って、ギルドボールと同じく持ってきた名刺サイズの鉄板と、リスニルの学生証を、ギルドボールに触れさせる。途端、ギルドボールはその2枚を飲み込み、数秒したところでその2枚がゆっくりと吐き出された。2枚を手に取る受付嬢。

「はいどうぞ、ウエスレイ・リスニル様」……そう言って、2枚をリスニルに手渡した。

ちよつと近づいてよく見ると、リスニルが受け取った元鉄板……ギルドカードは金色に変化していた。

表面には、Aランクを示しているであろう「A」が左上に大きく、そして中央には「ウエスレイ・リスニル」と刻印されている。

そして下部には一見ランダムで打ち込まれたと見える、ドット模様。多分これが、ギルドボールだけが読み込める、個人情報なのだろう。

う。

……判定球レベル・ボールといい、これといい、この世界のボールハイテク過ぎだろ。

その後も次々にカードは発行されて行き、俺にもギルドカードが手渡された。

「はいどうぞ、アルト＝シユーバ様」

Gクラス＝Dランクのギルドカードは、元のまま鉄板の鈍い輝きを放っている。左上には、「D」の文字。

うーん、まあエイナと俺以外の4人は金色だからちよつと見劣りはするけど、まあいいか。

「そのギルドカードは絶対に失くさないで下さいね。失くして再登録しても、此処での活躍は元には戻りませんから。」

それでは、次にチーム登録ですね。全員のギルダークードをお預かりします」

そう注意してから、受付嬢は横に退けていたギルドボールを正面に動かし、6枚のギルダークードを受け取った。

「……チーム名はどうされますか？ チーム名はそのチームを表す大事な物ですから必ず決めていただきます」

……チーム名？ そんな物決めるのか。……リーダーであるリスニルはというと……。

「……」

……今考えるのかよ、計画性持てッ！

そこから、俺達は数分唸っていた。

「The Dant」とか……「と言っのはリスニル。」「M<sup>わ</sup>  
たしのチーム  
y Team」とかか？」と、ダント。……こいつら……。

……うーん、下手な名前じゃアレだよな。……決めろって言われ  
ても。……もういつそ名無しで良いんじゃない……！！

そのとき、俺に電流走る。

「……「Nameless」って、どうかな。今は名無しだけど、  
後々今よりも強くなる、みたいな」

……反応は……

「……良いですね。響きも気に入りました！」……ソフィ。

「良いと思う」「ラウス。

「アルトにしちゃ、いいアイデアじゃねえか」……余計なお世話だ、  
エイナ。……反応は上々のようだ。

あとの2人はまださっきのアイデアでもめていた。そしてこの案  
を告げると、案の定またギアアギアいうので……

「それじゃ、「Nameless」をお願いします」……放つて  
置いて、受付嬢には俺が言った。

「かしこまりました」と、紙に「Nameless」と書き、6枚  
のギルダーカード、そしてまた新たな1枚の鉄板とともにギルドボ  
ールに入れる受付嬢。

数秒後、出てきたのは銀色のカードと、それぞれのギルダーカード。

「この銀色のカードがギルダーズカードです。Aランクが4人、Dランクが2人なので、Bランクスタートとなります。

ギルダーカードと同じ様、失くさない様にリーダーが常に携行して下さいね」

ギルダーズカードは、基本的にギルダーカードと同じようだ。Bランクを表す大きな「B」、「Nameless」と刻印された中央。そして下部のドットと。

Aクラス2人は最後までごねていたが、数に押し切られたようだ。

諦めたようで、2枚のカードを受け取ったリスニル。他5人も、それぞれギルダーカードを受け取った。

チーム「Nameless」、此処に誕生。

**第29話：アルトは、学年最高位と再会した。（後書き）**

ネームセンスの無さに脱帽しました。 自分で。

それでは、デメリット募集は打ち切らせて頂きます。  
たくさんのご提案、ありがとうございます。

ご感想やご指摘は、ドンドン感想欄に書き込んでくださいね！

第30話：アルトは、初めての依頼を決めた。(前書き)

まだだ、まだ終わらんよ。 夜来です、こんばんは。

明日の執筆は、疲れ果てて無理かも。

何でって？ 学生には色々あるのさ(キリ

……… しませんでしたorz

### 第30話：アルトは、初めての依頼を決めた。

「さて、最初に受ける依頼クエストくらいは、今日のうちに決めようじゃないか」

名前決めから数分。リスニルはリーダーらしくそう言い切り、俺達も各々に頷く。

……当たり前だが、受けたいクエストは早めに受付を済ませた方が  
良い。

別のギルダーやチームにそのクエストを取られてしまう可能性があるからだ。

この世界には某狩猟ゲームみたいに依頼が無限にあるわけではないので、一度取られた依頼は直ぐ戻ってくるかもしれないし、もう戻ってこないかも。

だから、これに決定！ と思ったクエストは、早々に受付を済ませた方が良いのだ。ギルダーには、そこらへんの思い切りも大事なのかもれない。

6人揃って、依頼が書かれた紙……依頼書が貼られている、通称「掲示板」を見てみることにした。

「掲示板」はそこそこ大きく、「個人用」、「チーム用」、「ランク別」にそれぞれ仕切られている。

さて、「チーム用Bランク」の所を見てみる俺達。……貼ってあったのは、3枚。

1枚目。【コレクト採集】で、「シユロムの森最深部に住む、アースオーガ地鬼の角、3個の採集」納期までの制限時間は、あと3日。

「……地鬼か……」

俺の隣に居たエイナが、考えるように呟く。

アースオーガ

地鬼。

グラウンドクワッシャー

別名、「地砕き」と呼ばれるそれは、体長3mの巨

人である。種類としては、魔獣。

形は人に似ているが、大きな一つ目と土色の肌、同色の大きな棍棒。そして頭頂部から真上に伸びた赤い1本角。

パワー特化らしい。動きは鈍く単純だが、力は地面に向けて拳を振り下ろすと小さなクレーターが出来るほど、らしい。別名の由来はこれか。

拳だけでもそんな力なのに、棍棒なんて持ったら「鬼に金棒」ならぬ、「地鬼に棍棒」。直撃でもしたら、楽々ミンチだな。

「角3つということは、地鬼3体と戦えと言うことらしいな」

「シユロムの森といえば、エクシリアから少し遠くに有る森だな。

あと3日というのは短い、いけるだろう」

リスニルの呟きに、ダントが応えた。

納期までの制限時間は、短くて数日、長くて十数ヶ月。3日間は、結構短いと言える。

だが、チームの1人は学園最高位<sup>トップ</sup>。1人はそのトップを倒した最<sup>ベスト</sup>低位。そのほかにも強者揃い。

ダントはそう思い、言ったのだろう。Bクラス2人の実力はまだ見ていないが、リスニルにスカウトされる辺り（それも曖昧だが）、恐らく弱くはない。

まあしかし、残りも見てみよう。

2枚目。これも【採集】で、「エレンダ火山森付近に生息する、<sup>レッドベアル</sup>焰熊5匹の討伐」制限時間はあと4日。

レッドベアルは、随分前に話したよな。深層魔法で熱さから身を守り、普段は火山付近に生息する大熊型魔獣。ベアルの亜種だな。「熱さから」というより「マグマから」の方が正しく、マグマに身を投げてても温泉気分だという。マグマ風呂とか恐ろしいな。

主食は魚。と言つても普通の魚（型魔獣）ではなく、マグマの中を泳ぐ様々な「<sup>マグマフィッシュ</sup>溶岩魚」を取って食っているという。

さすがこの世界。喰う方が熱さに強ければ、喰われる方も熱さに強いつてか。……普通に木の実とか、魔獣とかも喰うらしい。雑食系熊。

「……火山森周辺に住む人が、火山から降りてきたレッドベアルに驚いて依頼してきたっばいな」

俺が呟いた。前述通り、レッドベアルは火山周辺……火口付近から、山の中腹までに住む。

火山森……火山の周辺を取り囲んでいるだけの森なのだが……には滅多に降りてこない。……「溶岩魚」が少なくなってきたのかな。それで、木の実とか魔獣を食う為に火山林に降りてきた、と。

「はた迷惑なベアル。でも、いけそう」

ラウスが依頼書を見ながら言う。確かに行けそうだな。ベアルなら何度も倒しているし。

このチームなら、そんなベアルの亜種ぐらい、瞬殺できるだろう。なんせ、6人だ。

さて、最後は……っど？

俺は、3枚目の依頼内容を見て、少しだけ驚いた。【これもまた採集】なのだが……。

「ローカルド大平原に出現する双頭龍の翼、1対」 納期までの制限時間は、後4日。

「……ほう、Bランクにドラゴンか。おそらく、この3枚の中で、数を考慮しても一番の強敵だな」

リスニルも驚いているようで、しかし「相手にとって不足なし！」とでも言いたげな顔をしている。

そう。基本的に「龍」という種族はSランク……弱くともAランク用のクエストだ。それほどまでに、全てのドラゴンが強い。

今回の「双頭龍」というのは、首から上が2つあるドラゴンの一種である。首を1つ抜いたキングギド よりもスマートな体をしている。

龍より飛ぶことに特化した、大きな翼が特徴の「飛龍」という種族寄りな気がするが、龍は龍である。

特徴は、1つの頭に付き、1つの属性が宿っているということ。火炎放射のような炎属性や、冷凍ビームのような氷属性がその龍の口から吐き出されるのだ。

今回、その宿っている属性が何かは書かれていないが、大平原に居ることだし、「風」とか「地」辺りだろうか。

……とは言つ物の、属性は余り気にしなくて良いと思われる。何故なら属性攻撃は+であり、龍族に共通する攻撃方法……《龍焰》や爪での切り裂き、等等……俺としては、こちらの方が怖い。

……結論、さすが個人ではSランクに指定されるだろうクエストである。

「このランクでドラゴンと戦えるなんて……！ そのドラゴンの依頼にしようよ！」

「……初依頼は、手応えが有った方が良い」

Bクラスの2人は、もうその依頼に釘付けのようだ。ソフィに至っては分かりやすい声まで上げて。

「ローカルド大平原は……此処から少し離れた所にある平原か。

……見通しは良さそうだな。

だから、本当はAクラス級だった物をBクラスに落としたのかもしれない。見通しが利くとなれば、私達のほうに分が有るだろうからな」

リスニルは冷静にそう分析する。なるほど。数が多い分、見通しが利く平原エリアでは有利なはずだな。

龍の住処は様々だが、巨大な洞窟や火山の火口、遺跡最深部など、RPGのような所に住んでいたりもする。

そのような所では、狭かったり、暑さで体力を消耗したり、未知の罠が待っていたり……。とりあえず、ギルダーには不利だ。しかし平原ならば。だだっ広く、暑さ寒さなど関係なく、罠の可能性も少ないそこならば。討伐には最適ではないだろうか。

「……良いじゃないか。私達の実力を試せる、良い依頼だと私は思うぞ」

そこで口を開いたのは、ダントだった。何だろう、何か学年最高<sup>ベスト</sup>位のカリスマ性というものをセリフから感じる。珍しい。

「……アルト＝シユーバ。貴様、頭の中で私を馬鹿にしただろう」

「何のことだか。俺も良いと思うぜ、その3枚の中で1番難しそうな依頼なんだろう？」

ダントを軽くないなし、俺も同調する。カリスマ何たらは俺の思い違いだっただか。俺にいなされるようじゃ、ダントもまだまだだな。口喧嘩的な意味で。

「何勝ち誇った顔してんだよ？ ……あ、俺もドラゴン狩りに賛成だ。強そうだしな」

……おっと、無意識にそんな顔になってたみたいだ。エイナに言われ、慌てて直す俺。

そして、そのエイナもドラゴンの討伐に賛成のようだ。 ……ドラゴン狩りなんて言うと、ちょっと語弊がありそうだが。

まあ色々あったが、この「双頭龍の翼を採集する」クエストで決定のようだ。リスニルが依頼書を止める画鋏を外し、依頼書を持つ。そのまま、受付へと向かう。いつでもニコニコ笑顔だな、受付嬢。

「この依頼を受けたい」 依頼書をカウンターに置き、そうリスニルが言うと、ギルダースカードの提示を求める受付嬢。先ほど作ったばかりで失くす筈がないその銀色のカードをポケットから出し、カウンターに置いた。

……いつの間にか、カウンターの上にはギルドボールが。

ギルドホールに依頼書とギルダースカードを入れる受付嬢。  
機械的な「ガシャガシャ……」なんて音は聞こえず、ただ静かに情  
報をカードへと打ち込んでいるようだ。

ギルドホールでの処理が終わったのかギルダースカードがホールか  
ら吐き出されてきた。

どうやら、「これこれこういう依頼を受けました」という情報が入  
ったらしい。

「それじゃ、今日はこの辺でお開きか？」

「そのようだ。明日の11時50分にエクシリア西門で集合だ。  
ちゃんと要る物は持ってこいよ？」

俺がリスニルに尋ねると、どうやらそのとおりのようだ。……要  
る物と言えば、3〜4日分の食料位しか思いつかないな。  
寝袋（らしき物体）を持っていても良いが、俺だけ寝袋だと浮き  
そうだな。一応持って行って、皆が野宿ならそのまま寝るか。

……ピクニック気分だな、俺。

というわけで、その後は各自自由。俺は、食料になりそ  
うな物を買集め、明日に備えた。  
買った物は保存食が殆どだ。干し肉とか、塩漬け（この世界にも  
あるんだな）とか、まあ色々。

さて、明日から頑張りますかっ！

……そう気張ってしまって、夜に寝ることが出来なかったのは痛かった。

やはりピクニック気分だな。　少しは緊張感持て、俺。

第30話：アルトは、初めての依頼を決めた。（後書き）

唐突に小説のアイデア浮かんだけど、同時進行無理ですねありがとうございますございました。

……Gクラスのほうのラストはとりあえず考えてるけど、何ヶ月先になることやら……。

とりあえず、アイデア暖めるだけにしておきます。

修正しました。

制限時間 納期までの制限時間 それによる変動も修正しましたよ。簡単に言うと、「〃日間」が「後〃日」になっただけです。

第31話：アルトは、道中で敵に遭遇した。（前書き）

何だかんだで結構日にち開いちゃいました、夜来です。

「Nameless」 出発！

あ、どうでもいいですが……。

感想のご指摘より、リスニルが作ったギルド名を「Nameless」に変更しました。

章の名前を「Dランク。」から「ネームレス。」に変更しました。

### 第31話：アルトは、道中で敵に遭遇した。

S i d e    アルト

王都エクシリアにある門は、全部で3つ。

エクシリア城を正面に望む、方角的には北にある正門。    1番大きく、また1番人の出入りが多い。

2番目に人の出入りが多いのは、東にある1番副門。    通称東門。

東側から来る品が多いのか、商人の出入りは、此処が一番多い。

そして、1番出入りが少ないのは……今俺が居る、2番副門。    通称、西門だ。

1番出入りが少ないといっても、正門、東門と比べての事。    毎日数千の人が門を潜る。

そしてこの門は、ギルダ一の出入りが最も多い。    依頼に行く場所が、西に集中しているのだろうか？

まあそれはともかく。    只今午前11時50分である。

かつちりとしたリスニルだから、正午の10分前を指定したのだから。    分前行動は、学生の基本だからな。

この西門に居るのは、門を潜る者を監視する守衛さんを除いて、5人。

俺、ソフィ、ラウス、リスニル、そして負けず嫌い<sup>ダント</sup>。

……    エイナが居ない。    もう50分になってるから、遅れているのだ。

……    部屋を出るときに声を掛けたんだが……「先に行ってくれ」

って言われて、俺はそのまま来た。  
それで、エイナはそのまま遅れている。何してたんだ？アイツ  
は。

そう思っていると、門に向かって駆けてくる人影が1つ。大剣を  
背に、赤を基調にした服装の……エイナだ。

相当急いできたらしく、俺達の元までたどり着くとゼーハーゼーハ  
ーと息を吐いている。

「……1分38秒の遅刻だ」……淡々とエイナに告げるリスニル  
だが、正直そこまで細かくなくとも良いと思う。

「わ、悪い<sup>わり</sup>。剣を砥いでたらこんな時間になっちまった……」

なるほど、剣を砥いでて遅れたわけね。よく分からないけども。  
リスニルはエイナの理由を聞くと、フンと鼻を小さく鳴らした。

他の3人はといえば、リスニルの時間管理があまりにも厳しい為か、  
エイナに悪いイメージを抱く物は居ない様だ。  
まあ初日だし、気楽に行こうぜ、気楽に。

「……それでは、出発するぞ。目的地は、ローカルド大平原！」  
「9時間歩きつぱなしになるだろうが、気を引き締めて行くぞッ！」

おお、リーダーらしい。子供っぽく「おー！」なんてのは別にや  
らないけど、こういうリーダーがいるから、士気が上がる㏸

「「「「「オー……」」」」」

……エイナ、ソフィ、ラウスの3人が声を上げる。え、やっちゃ  
う系なの？

エクシリアの門を抜けて、俺達は東へと向かう。

西門を抜けると、当たり前のように道が結構な数あるのだが……口  
ーカルド大平原までの道は、シンプル。

なんせ、真っ直ぐに行けばいいのだ。エクシリアから、ずっと真  
っ直ぐ。

人間の歩く速度が時速5kmだったか。9時間で着くと言ってい  
たから……45km先か……。

元の世界なら車ですぐ着ける距離なのだが、車など馬車以外に無い  
この世界では歩きがメジャー。というか、足でしか移動できない  
だから、45km先と言っても馬鹿に出来ないのだ。この調子な  
ら、着くのは午後9時ごろ。

……元現代つ子にとっては、車のありがたみが良く分かる道のりだ。  
勿論、俺以外の5人にとっては当たり前前の事のようにだが。

「……アルト、【クリエイター】で《レポート転移》とか出来ないのか？」

10数分歩いていると、エイナが何気なさそうに声を掛けてきた。  
その疑問に、俺以外の他4人が首をこちらにバツ！と勢い良く向  
ける。あ、やっぱり当たり前前の事とは言え、歩きたくないのね皆。

……あ、そうそう。「Nameless」のメンバーには、もう【クリエイター】のことを話した。初めて知らされたソフィ、ラウス、そしてダントに言われなかったのかりスニルも驚いていたな。とりあえず、このチームの為にも一般以上の力は使わないと約束した。

……まあ、XCMで聖龍をぶっ飛ばしたチートパンチなんかあの双頭龍ニードラゴンが喰らったら、大平原の端まで飛ぶだろうから……。リスニルは食堂で「あんなパンチを使わないと約束してくれたら入ってもいいが」と、やけに偉そうなお願いをするつもりだったらしいが、なんだかんだで忘れていたそうだ。なんじゃそりゃ。

「……んー、出来ないな。いや、出来ると言えば出来るんだが……チームの為にもしたくない」

そう返すと、エイナは「そうか……」と簡単に引き下がってくれた。……実はその理由、嘘だ。俺が【クリエイター】に課した制約のその1、「他人に直接関わる「チカラ」は（軽いこと以外）行使しない」。

簡単に言うと、「死ぬ」って言ったら相手が心臓麻痺なんかで死んじゃうだろうから、そういうのを防ぐ為に課したのだ。

デノートならぬ、デスワード。

因みにそういった制約は、俺がマジで必要としている時にだけ開放される。自動的に開放されるから、【クリエイター】の便利さが良く分かるな。

4人も、「出来ない」と分かった瞬間に黙々と歩き始めた。現金なこと。

……「チームの為に」って言うのも、あながち嘘とは言えないな。

突然だが、こういうテンプレな話の中では、道中いろいろな物が登場するよな。

色々な物と言っても、殆ど決まってる。      簡単に言っと、

「悪者」。      盗賊団とか、盗賊団とか、盗賊団とか。

歩き始めて2時間後。      各々用意した水を飲んだりして、歩き続けている。

深い森をすぐ傍に見た道を歩いている時に、リスニルが何気なく言った一言。      それが、引き金になった。

「……そういえば、此処らへんには良く何とかっていう盗賊団が出没するらしい」

「人のものを盗み取ろうとするクズの集まりか。      ……どうい名前前の盗賊だ？」

リスニルの言葉に反応したのはダント。      うわ、ひっでえ。      否定はしないけど。

「……えーつとですね……      ホワ……      ホワイト……」

……白？      そうやってリスニルが必死に思い出そうとしているときだった。

「そりゃ、俺達『ホワイト・レオフィン』の事かい？」

比較的高い、男の声。　なんだなんだと騒ぐより、まずはその声のした方向……深い森が間近に迫る右を見る俺達。

……誰も居ない……？

「……な、何だ？」

エイナが言うが、「異変」に1番早く気付いたのは、ラウスだった。

「……ソフィが居ない」

はっ？　……その言葉より先に、1人の男が道に立ちふさがっているのが見えた。　……腕には、ソフィ。　刃物を首元に突きつけられている。

「やあやあ君達。　ちょうど良いタイミングで思い出してくれたね。　思い出さなくても、出る予定だったけど」

……男は身長170くらい。　白いローブで顔は見えていないが、きつと笑顔だ。　口調的に。

それよりも、いつの間にか囲まれていた。　身長はバラバラだが、白いローブということは皆同じだ。　ざっと100人ほど。

「ホワイト・レオフィン……なるほど、素早さが売りというわけか」  
リスニルが言う。　男は「大正解」とウザったらしい声で答えた。  
レオフィンは、この世界に住む魔獣の1種だ。　尻尾が丸々ヒレになったヒョウで、地上でも水中でもかなりの素早さで活動出来ると

いう、その魔獣。

何でも深層魔法で水中での活動を可能にしているらしいが……そういうことか。

素早さに定評があるんだな。なるほど。

「このガキを血塗れにされなくなかったら、金目のもん置いてさっさと帰ってね。自分の身の為でもあるだろうしね」

ますますウザくなるリーダーらしき男の言葉。早く殴りてえ……。しかし、リスニルやダント、エイナもラウスも、中には、誰か知らないが歯軋りして男を睨む。ソフィも、相当怖がつているようだ。……よくよく見れば、こいつら1人1人ナイフやら、長剣やら、クロスボウやら武器持ってるじゃねえか。面倒な奴ら。

「……チ、なんかの【チカラ】か。あの素早さ、人間業じゃねえぞ」

「まあね。瞬間移動と言うべきかな……。さてと、そろそろ金目のもん置いて、帰ってもらおうか」

エイナが、ギリリツと歯軋りをしながら言う。フフと晒いながら言う男。

……よし、余るほどイライラさせてもらったし、もう良いよな。

「……で、終わったか？」

「……はっ？」

俺は、その男に向かって言う。

今までに反抗されたことが無いのだろうか。一瞬で目を点にして驚いている（らしい）男。

「……もう終わりか？ そのウザったらしい話。終わったら、さっさとどきな。邪魔だからよ。」

「……ハ、ハハッ！ 何を言い出すかと思えば。余程自分の置かれてる状況が分かかっていないようだねッ！」

うわあ、テンプレだなあそのセリフ。でもさ、そのセリフって大概……。

「フラグだぜ？」

「は？」

おっと、思わず口に（笑） まあ良いや、ムカついたからアイツちよっと殴り飛ばしてくる。

と思うが早い【チカラ】発動。あの脚力で男に近づき、ナイフを持つ手を掴む。

相手は驚いて何も出来ないようだが、そっちの方が都合良いし、続行。今度は筋力<sup>パワー</sup>を強化。

その手を……グシヤツと

「ガッ！？ ああああああ！？」

握り潰した訳だな。ま、そこまで完全にはして無いわけで。

「安心しな、骨にダメージはねえよ。さて、と「ゴアアアッ！？」

……もう人質は無いわけだから、好きにやって良いぜ。お前ら」

ナイフを落とした男。ソイツを直に蹴り飛ばし、ナイフを別方向に蹴り飛ばして、同時にソフィも救出。そして、俺が声を掛けるのは勿論「Nameless」の面々。

「言われなくてもやってるぜ、アルト！」

あ、リーダーの男を一方的にやってたから、人質にされてたソフィと俺以外の4人が何してたかは見えなかったんだよね。

エイナの声に反応して振り返ると、其処には阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっていた。一方的 فقط。

ダントはいつの間にか聖龍を召喚し、XCMでは俺にぶつ飛ばされた為<sup>セントプレス</sup>に放てなかった《聖龍焰》をぶつ放していた。10人は吹き飛んだな。

心なしか、聖龍が溜まりに溜まったストレスを発散するように《聖龍焰》を放っていたのは、気のせいかな。

リスニルは、背中に背負った大剣（『クラッカー』って言うらしいな、あれ）を地面に突き刺し、何か呪文のような物を詠唱していた。すると、地面に衝撃波らしきものが走り、それは直線状にいたホワイト・レオフィンの奴らを弾き飛ばしていく。

エイナも大剣を使っているが、得意とする《伸長<sup>ストレッチ</sup>》の魔法でも使ったのだろうか、刀身が馬鹿みたいに長い。

それをあっさりと操り、切り捨てるといふか、当たった敵を吹き飛ばしていく。うわあ、バットに当たったボールみたいに吹っ飛んでく。力おかしいだろ。

ラウスはつと……？　ん？　何もして無い？　……いや、時々手を動かしてる。それだけで、前にいる奴らは何かにぶち当たったかのように飛んでいく。

……なんだ、「不可視の手」でも使ってるのか？　Bクラスらしく、強力な【チカラ】であることは確かなんだが。

「……へー……皆凄いですね。　XCMで見た以上に迫力ありますよー」

「……だな。　しかし、ゴミのように吹っ飛ばされていくな、奴ら」

「きつと武器で武装したから慢心して、地の力は弱いんですよ、多分」

俺達は要らない人員みたいだ。　ソフィがちょっと興奮したように言い、俺は興味無さそうに言う。　だって、XCMで散々見たし……

……なあ？

なるほど。　武器に頼りすぎたゆえ、ね。　……っっていうか、大剣持ちが2人もいるこのパーティを怖がらなかったのか？　こいつら俺達と同じように考えてたのかもな。

「片付いたな。　やけに弱い奴らだったが」

「気にしないほうが良いですね。　さあ、行きましようか」

ダントがつまらないといった表情でそう言い、リスニルの声とともに歩き出す俺達。

倒れていた奴らはもう居ない。一斉に逃げ去ったのだ。……いやあ、ほんとにつまらなかったな。

そして、ちよつと時間を食ったがあと7時間ぐらいか。俺達は、どンドン進んで行くのだった。

とある大通りでの、とある会話

「なあなあ聞いたか？ あの『ホワイト・レオフィン』が王都警備隊に捕まったらしいぞ」

「聞いた聞いた。盗みの素早さで有名だったのに、ゾロゾロって大胆に歩いている所を見つかって、そのまま牢獄になってな」

「なんかさ、すげえ元気無くしてたらしくてよ。馬鹿みたいだよなあ」

「そうそう。弱いガキの連中かと思ったら、滅茶苦茶強かった」  
「って言ってるらしいぞ。誰なんだろうな、そいつら」

「全くだな。『ホワイト・レオフィン』をお縄にかけた、謎の子供集団登場！」……ってな！

「ハハハ！ 何だそりゃ！」

「ハハハ！」

「……今の話、アルト君じゃ……クエストしに行って来るって言うてたし……」

「アイツとエイナちゃんなら有り得る。　というか、<sup>トップ</sup>最高位と第<sup>セカ</sup>二位も居るからそうだと思う」

「……ぐっじよぶ。　（グッ）」

「……」

第31話：アルトは、道中で敵に遭遇した。（後書き）

最後の奴は、適当に入れました。

最初の2人はモブですが、後の3人は誰が喋ってるか分かりますよねww

報告、って言うか予告を。

土曜日を週の最後と取るならば、再来週の4日間、いつもどおり家に居ません。

つまり、投稿できないわけで。今ぐらいで報告した方が良さかーと思うって。

それじゃ、この辺でー。

第32話：アルトは、1日目を歩きに費やした。（前書き）

今回は、喧嘩して寝るだけです。

正直、1日目終了したですので、あまり読む必要は無いかなーと…

…。

だったらなぜ書いた、俺。

### 第32話：アルトは、1日目を歩きに費やした。

Side アルト

ホワイト何とかという名前も覚えられない嘸ませ犬とうそくだんをポッコポッコにした、その数時間後。  
既に辺りは暗く、近くにある森からは、「ガー！ ガー！」と名前も知らない鳥の魔獣が五月蠅く鳴いている。  
今俺達が歩いているのは、数時間前と変わらない普通の道。当然、舗装はされていない。

「……疲れた……」

俺の隣に居るエイナが、そう言う。……その割には、足はまだ大丈夫そうだけでも。

俺達は、リスニルとダント、ソフィとラウス、そして俺とエイナという2×3の列で歩いている。  
まあ、同じクラスが2人ずつ居るんだからそうなくてもおかしくないけど。おかしいとも思って無いし。  
そして1番前を歩くリスニルが、持ってきた懐中電灯（魔法版）を点け、ただただ歩いているという状況だ。

正直、つまらない。元の世界みたく旅先でも遊べる娯楽がある訳でも無いし、そして歩きなのだ。

疲れの方は別に良い。俺は【クリエイター】で体力回復できるし、「軽く」だが皆にも掛けることは出来る。

どちらかというと、体にクルのは「長々と歩き続けて、娯楽もなし

にあるのは強い龍」という、精神的な問題だ。　これ、結構辛いよ。

……話を戻そうか。

エイナが言った一言は、Bクラスの2人はおるかAクラスの2人にまで届いたようで。

「後もう少しだ。　XCMで私に勝ったのだからその精神を持ち続ける」　……そういつたりスニルの励ましと。

「……チ、少しの我慢も出来ないのか？　この大剣女は。　全く……」　そう此方にまで聞こえるわざとらしいダントの呟きは、同時に聞こえた。

……エイナ、その内の一方を的確に耳で捉えたようだ。

「んだとこの負けず嫌いがッ！　アルトに負けた分際で調子付いた口聞くんじゃねえッ！」

「なッ！？　本気を出せばアイツなど一発で粉碎できるッ！　貴様こそ、舐めた口を聞くなッ！」

「言ったな？　今からやつても良いんだぜ？」

ダントは此方を向き、歩行そっちのけでエイナと本格的口喧嘩を始めてしまった。　俺を使うな、エイナよ。

……まあ……、五月蠅い。　その一言に尽きる。

とりあえず、エイナには軽く脳天チョップしておいた。

ダントの口喧嘩に夢中になっていた所為か、思わぬところからの攻撃に思わず顔を顰<sup>しか</sup>め、すぐさま此方を睨むエイナ。

「アルトツ！ お前が馬鹿にされてるんだぞ？ それでも良いのかよ？」

「……今のは確実に負けず嫌いが悪いから、帰り道に3回ぐらい殴るさ。それよりエイナはすぐ反応するな。

……またご指摘が来るだろうが」

「ご指摘って何だよ……」 割とメタなことを口走った俺を、そんなことを言いながら見るエイナ。

エイナはやっぱり男勝りな俺っ娘でした。1年程前のあの時のエイナに戻ることは、少なくとも数年間は無いな。

「それと負けず嫌い。すぐ嫌味を言うお前は、さっき言った様に帰り道で3回ほど普通に殴る。覚えとけ」

「……ググツ……」 そう唸っていたダントだったが、リスニルに慰められたのか、機嫌が戻ったようだ。

……グズる子供かお前は。

……さて、其処から10分ほど歩いただろうか。道の先には、正面に深い森、その森を迂回するように左右に分かれた二股の道があった。

そして、その分かれ道の中央には、ポツンと1枚、看板が。

その看板に近寄り、何が書いてあるか確認する俺達。リスニルが

魔法懐中電灯を看板に当てると……。

「2 km先、ローカルド大平原」

お、やっと平原が見えてきた。……でも暗いな。懐中電灯が無  
けりゃほとんど見えない。

……懐中電灯持ってドラゴンと戦う？ 雰囲気的にも無理でしょ。

「……仕方ない、あの森の中で野宿するか」

リスニルが言う。 まあ、仕方ないな。 他の4人も、賛成のよう  
だ。

木々の間隔は狭く、野宿できそうな場所はあまり無い。 しばらく  
歩いていると、焚き木+6人でギリギリ大丈夫そうな場所を発見。  
……焚き木が必要ないって言った奴、火は昔から人類に安心を与え  
てくれるってばっちゃんに教わらなかったか？

……教わってない。 さいですか。

「……さて、明日は双頭龍ツェヒミ・ドラゴンの討伐を行う。 その前に、今夜は此処  
を守る「番」を代わる代わる行うぞ。

2人1組で、ある程度番をした後、眠っているどちらかのペア2  
人を起こし、その後眠る。 これを繰り返す」

……俺が【クリエイター】で適当に集めた細い木々に魔法で火をつけ、焚き木にする。そして、その周りに6人が座る。各々持つてきた物を食いながら、リスニルの話を聞いている。

あー、時計が無いから「ある程度」なんだな。……何回も起こされる可能性があるな。……ん？

「それじゃ、おやすみ。 3時間後にBクラスの2人を起こすからな。」

その3時間後に、2人はGクラスの2人を起してくれ。 良いな？」

「はい、分かりました……」

「了解した……」

「おやすみー」

「……あー、眠っ」

上から、リスニル、ソフィ、ラウス、エイナ、俺。

俺が妙案を思いついてから数十分後。 人間、暗いとすぐに眠気が来る物で。

適当な木に引っ掛けた「時計」を見ながらリスニルが言い、それに反応して4人が返事。 ……俺だけ返事じゃないな。

……ん、時計？ ああ、俺が【クリエイター】で持つてきたんだよ。

こつこつという時に便利だな。

只今が9時……早く着いちまったんだな……だから、3時間×3で9時間。最後に回ってくる俺達は、午前3時から6時までか。もうその時には朝だから、皆を起こすことになるな。

はあ、やっと平原まで来る事が出来た。まあ、まだ2km手前だけど。後は双頭龍シムヘリムヘリを倒して、翼を剥ぎ取れば依頼完了だな。……ふむ。ソイツの強さは分からないけども、龍だから強いんだろうな。

問題はどれだけ力をセーブするか、か。皆に迷惑を掛けず、尚且つ着実にダメージを与える加減。

……明日は格闘封印して、魔法で戦うかな。いやでも、それじゃ中級魔法位しか使えないかも。

そんなことを考えていたら、段々と眠気が強くなってきた。いや、何となく眠気が強くなってくるのって分かるんだよね。

そして、俺はそれに逆らわず、意識を闇に沈めた。眠っておかなきゃいけないからな。徹夜は辛いし。

と。そんな感じで依頼1日目は終了した。

2日目は、いよいよ龍ドラゴンと対決。……いやあ、強かったよ。言っておくけど。

第33話：アルトは、双頭龍と対峙した。（前書き）

お久しぶりの夜来です。

意味も無く予約投稿。いや、来れないかも知れないからね。

### 第33話：アルトは、双頭龍と対峙した。

Side アルト

朝だ。深夜3時に強引に起床して、エイナと駄弁つていたら……時間というものは、意外と早く過ぎる物のようで。

森に居る、種類も分からない鳥型魔獣が、ニワトリとはお世辞にも似ているとはいえない「グアー！ グアー！」といったガラガラ声で朝を告げる。

時計を見ると午前6時。太陽はとっくの昔に上がっていた。夏だもんな。

「……龍狩りドラゴン・ハント、か……。今日中に学園に帰ることができれば良いんだけどな」

「……」

一般的に、【採集】目的で龍族ドラゴンを斃たおすことを「龍狩りドラゴン・ハント」と呼ぶ。他の魔獣と区別されるといふのに、龍族ドラゴンを斃す事の難しさを象徴しているのだ。

俺は、半ば呟くように言う。……俺と一緒に起きているはずのエイナからの返事は、無い。

まあ、仕方ないよな。寝てるんだから。

……ああ、「番」の途中でエイナが寝たいって言うもんだから、し

ようがなく寝かしてやったんだ。甘い？ 可愛い女の子からの頼み、1回位叶えてやっても良いだろ。

【クリエイター】で【常時起きている体】を望んだ俺は、エイナが寝てから1時間半、ただただ沈む月と昇る太陽を觀賞していた訳だ。この6人が居る所に、俺がXCMでダント戦に使った聖属性の防御魔法《サンクチュアリ聖域》を結界代わりに掛けて、な。

だって、魔獣やら盗賊やらが来たときに対処するのは面倒だし。だったら魔法で何とかする。

さて、起すと悪いから呟くように言った俺なのだが、直ぐにそれが不必要な物だと悟った。

……いや、起さなきゃならないじゃん？

現在、俺達6人は円形になって座っている。俺の左隣にはラウス。右隣にはエイナ。

ラウスの左にはソフィが居て、その左にはダント。そして、その左にリスニルが居るわけだな。とりあえず、隣のラウスを起すか。

「おい、ラウスー。朝だぞー」 トントンと肩を軽く叩き、声を掛ける俺。すると、意外にもラウスは数秒で意識をとり戻した。

「……もう、朝か」 眩しい太陽からの光で完全に目が覚めたのか、目を擦り、碧色の髪をグシャグシャと搔いて呟くラウス。

そうなんです。今は朝だから起きなきゃいけないんです。人の定めなんです。

ラウスにはソフィを起すように言ってから、俺は右隣のエイナを起

そうと、首を右に向けた。案の定、まだ寝ている。

「おーい、エイナ？ もう朝だぞ、起きろー」

肩を持って軽く揺すり、その声を掛けた俺。なのだが、エイナはラウスほど眠りが浅いわけではないみたいで、中々起きない。

早々と起きる前例ラウスを見ていた俺なので、少しイラツとするのは言うまでも無いだろう。

「……………」

「……………！！ お……………おはよう、アルト」

「おはよう、エイナ。目覚ましビンタならぬ目覚ましチョップのお味はどうだ？」

「やっばお前かよッ！」

まあ、簡単に言うとエイナに脳天チョップしたのだ。あくまで軽くだけれども。

それに反応して起きたエイナ。俺が目覚めの一言を掛けると、エイナは起きたばかりだと言うのに綺麗にツツコミを返してくれた。

エイナにはその隣のリスニルを起してくれと頼もうとしたが、その必要は無かった。

なぜなら、俺とエイナが早朝漫才をしている間に、ラウスから回った目覚ましはリスニルまで行っていたのだから。エイナだけじゃねえか。眠りが深いのか。

「……………何時見ても仲が良いな、貴様ら」 漫才を呆れるように見て

いたダントさん。一言ありがとうございます。

「それでは……食ってから早速ローカルド大平原に行き、ジエミニー・ドラゴン双頭龍を斃し……に行くぞ」

朝食タイムの最中、リスニルが言う。

文が途切れ途切れになっているのは、リスニルが食いながら話しているからだろう。いやいや、行儀悪いって。

「作戦とかは有るんですか？」

そうリスニルに尋ねるのは、食料を早めに食べ終えた（小食なのかもしれないが）ソフィだ。丁寧な言葉遣いは元来の物らしいな。やっぱり。

「はつきり言ってしまうと、無い。下手に作戦を立てて失敗すると元も子もないからな。」

何より初陣だ。まずは力押しで行こうじゃないか。その内このチームで最適な作戦という物が見つかるだろう」

あ、やっぱりゴリ押しなんだ。綿密に作戦立てても、それが破られたら対処するまでに数秒なりともラグが生じるからな。

それを防ぐなら、作戦無しで突っ込んで力押しした方が良いというわけだな。

幸いにも場所は平原。各々周囲に少しでも気を配っていれば、仲間

の魔法が当たって戦闘不能、何て馬鹿な事にはならないだろう。

ソフィも俺と同じく考えたようで、「分かりました」と返事を返した。

数十分後。朝食を食べ終えた俺達は、リスニルの指示通りローカルド大平原へと向かうことにした。

昨日看板が有った位置まで戻ると、その看板は昨日と同じように確認と聳え立っていて。変わらず「2 km先 ローカルド大平原」の文字が書かれている。

それに従い、左へと進路を変更する。

左右の森は、今にもこの舗装されていない道路に覆いかぶさるうとしているかのように空中で繋がり、トンネル状になっていた。

2 kmという物はあつという間で。そのトンネルの森を抜けると

雄大な平原があつた。

ローカルド大平原。広さは、元々巨大なエクシリアが3個人入ってしまふほど。見渡す限りの草と、所々突き出した岩と、そして晴天の空。吹き渡る風に靡く草。

遠くにはカメラで取っておきたいほどの綺麗な光景だ。元の世界、外国は知らないが日本じゃまず見られない、そんな景色。

周りの森が所々削られているのは、龍の攻撃か、それに挑んだ物の攻撃の痕なのか。どっちでもいいや、まあ置いておこう。

「……おお」 エイナが、感嘆の声（と思われる声）を上げる。エイナにもわかるのか、この綺麗さ。

ソフィが「綺麗ですねー」と言っていたり、ダントが「この景色は1度文献で見たことが有るが……」とか何気に博識ぶっているのはまあ割愛するとして。

……広すぎじゃね？こんなんじゃ、双頭龍ツヘミ・カウゴンがどっかで出てきても、見えない可能性あるぞ。  
事実、平原の中央に向かって気付かないほどのなだらかな坂になってるらしいし。地平線を越えてるように見えるから。

「リスニル。此処は中央に向かってなだらかな坂になっているらしい。坂のあちら側で龍が出現しても、私達に見えない可能性があるぞ」

俺がリスニルに言おうとした途端、そのリスニルに話しかけたのは、奇しくも俺と全く同じことを考えていたらしいダントだった。

何なんだ、帰りに殴る量+1発だぞ？とか、理不尽なことを考えている俺。馬鹿みたい。

「……そうですね。比較の見やすい中央に向かいましょう。……それでは、平原の中央に向かうぞ」

やはり、ダントとの会話に出る敬語モードと、その他に出る騎士モードの切り替えが上手いリスニル。

なんだろ、リスニルが《聖騎士》の二つ名持ってても、気にならな  
いよな。

閑話休題。そうして平原の中央に向かおうとする俺達。

正直、何kmあるのか分からないからダルい。ここは空気を読まず

に、馬車でも作ってしまうか……なんて、考えていた時だった。

ガササツという、草同士が擦れあう音。俺達の直ぐ傍の森からだ。全員が、足を止めて森を見た。

数秒後、其処から飛び出してくる影。……数は、4つ。

「ウルフィーネ……っ！ しかも4体ですか……」

突然現れた狼型魔獣、ウルフィーネの群れに驚き、そう言うソフィ。ラウスも驚いているようだ。

此方としては4体なんて楽勝以下の物だけでも……手ならしに倒していくか。

そう思っていた、のだが。

なにかウルフィーネの様子がおかしい。まるで、俺達に意識が向けられていないかのようだ。

俺達と対峙する様子を見せず、森から来る「何か」に怯え、逃げているような印象を持てる。

そして、ウルフィーネ達が一段と早く駆け出したその数秒後、俺達は「何か」の正体を知る羽目になった。

ウルフィーネ達が逃げてきた森。その木々の隙間から、ズバンツ！と、三日月状で薄緑に色づいた大きさ2mほどの物が、ウルフィー

ネ達より数倍早く、群れに突進して行つた。

群れの1体がそれに直撃し、その飛来した物は刃物なのか、骨など無かつたかのようにスッパリと胴体を切り裂かれたその1体。赤い液体が、両方の体から流れ出る。

それぞれどこか、その三日月状の物体は地面に着弾すると小さな三日月に分裂。四方八方に高速で飛び散る。

その無数の三日月は残つた3体のウルフィーネの体に突き刺さつたり、中には貫通した物まであるようで、体中のあちこちから血を垂れ流し、倒れ伏す3体。

ドロドロと流れる紅い血液とか、様々な形を持ってポトリポトリと落ちるように溢れる臍物。グロテスクこの上ない。

……つて、こつちにも飛んでくる！？

「サンクチュアリ  
《聖域》……！」

ほぼ無意識に、先ほどまで使っていた《聖域》を使った俺。6人を覆つように、薄く白に色づいたドームが展開。

さすがにこれは貫けなかつたようで、《聖域》に当たつた三日月はキンツツ！と小気味良い金属音を出しながら弾かれ、空中で消滅した。

「……た、助かつた。ありがとう、アルト＝シューバ」

リスニルが、そう俺に声を掛ける。「無意識に使つただけさ」と流して（ダントが恨む様な目をしていたのが気になるが）もう三日月が飛んでいないのを確認してから《聖域》を解除した。一気に晴れる視界。

何だったんだ？突然三日月が飛んできて、ウルフィーネをぶった斬った。そう思っていると、正解はやはり森の中から来た。

ズン……ズン……。森から、足音らしきものが聞こえる。森は高い木々で構成されていて、その正体を見ることは出来ないが。

ズン……ズン……。そんなことなどお構い無しのように、足音は此方へと近づいてきた。「なんだ……？」そうエイナが言う。

ズンッ！……ズンッ！……いよいよ、近づいてきた。同時に、森の木々が強引にへし折られるバキバキッ！という音も聞こえ、そして

最後にバキバキバキッ！と木がへし折られ、姿を現したのは

やはりと言うか、依頼対象だった。

目立つのは、2つ伸びた長い首。3mほど有るだろうか。その先に繋がるのは、いかにもと言うべきの、『龍』の頭部だった。左は薄緑の頭、右は薄茶の頭だ。

そして、首がもう一方で胴体に繋がって居る。首と同じくらい長さがある胴体はそれなりに太さがあり。色は薄緑と薄茶がまだらに絡んでいた。

その胴体の後ろからは尻尾が伸び、これもそれなりに太い。目一杯力を使って振り下ろせば、小さなクレーターぐらいはできるだろう。胴体下部からは、短く太い足が伸びる。短いといっても、筋肉はあまりほど付いているだろうが。

翼は畳んでいるのか、胴体上部には何かが折りたたまれて鎮座していた。

まあ、あれだ。一言で言うなら、ポケンのーマンダが首を長くし、尚且つ首を二つにした色違い。それで説明は良いと思う。

全体的に、全ての攻撃を弾けそうな輝く鱗が、依頼対象

「ジヘリニ・トラユン双頭龍」を引き立たせていた。

「でけえ……」エイナが呟く。まあ龍だもんな。

他の4人も、あっけに取られているようだ。俺？……元の世界で結構考えてたからな、龍の事。でかさについてはノーコメント。

森の木々をへし折りながら出てきた龍は、俺達に気付いていないのかすぐ前を通過し、行き着く先は、4体の骸が転がる場所。

何か、ギアアギアアと緑の頭が言い、それに反応して茶の頭も騒ぐ。しかし、その争い(?)は直ぐに終結したのか、鳴き声は収まった。緑が胴体を一刀両断されたウルフィーネを食い、血を滴らせながら噛み砕き、嚥下していく。茶も、同じように1頭のウルフィーネを食い始めた。

「……(おい！今がチャンスだぞ。気付かれないうちに勝負を仕掛ける！)」

今まであっけに取られていたリスニルがそう小言でそう言い、剣を構える。

4人も、それに同意のようだ。不意打ちだろうとなんだだろうと、勝てばいいんだからな。勿論俺も同意。

そして、今まさに攻撃を仕掛けようと6人が走り出そうとした瞬間。

【……緑の頭が、ぐるりとこちらを見た】

今までの威勢はどこへやら、凍りつく俺達。いや、あの龍の顔はヤバイ。マジでヤバイ。今にも食い殺されそうだもん。緑は、数秒此方を見つめ、そして茶色に何かグギャアグギャアと話しかけている。すぐに、茶色も此方を向いた。

そして、何をするのかと思えば。

『おーおー！ 何かと思えば人間ではないか！ 久し振りに会ったのう……』

茶色は、人間の俺にも確りと聞こえる言葉で喋りだした。詰まる話、人語を喋っているのだ。

「龍」族という物は、魔獣の中でも「賢」い「獣」……「賢獣」と呼ばれ、人語を喋ることができるほど知能が高い。

そんな頭を持ってして魔人と呼ばれないのは、まあ分かるとおり立派な「獣」だからで。魔人と呼べる龍族の「龍人」も居るにはいるが……それは放っておこう。

楽しげにお爺さんボイスで話す茶色。そして、緑も喋りだす。

『だろ？ ほんとにひっさしぶりだよなあ！ 何十年前だ！？』

………そこで、お前らは一体何しに来たんだ？ この………お前ら人間では「双頭龍」と呼ばれているだろう俺達が住む、この平原によ

此方は若い男の声だ。爺さんとチャライ若者が同居してるって、それなりに辛いよな……。

チャライと言つても、その声は威厳に満ちている。表現しづらいくど、確かにそんな感じなのだ。

「……っ、私達はお前を倒しに来たッ！」

勇気を振り絞ったのか、一瞬躊躇してからリスニルが大声を張り上げる。

他の皆も、立ち向かえないほどブローケンハートしていないようだ。無論、俺も。

『……ハハハッ！おいおい聞いたかよ？俺達を倒しに来たんだってよー！』

『止すのじゃ、ウイン。……なるほど、以前にも私達を倒すといつてこの平原に来た人間はいた。無論、返り討ちにしたが。』

私達は、いかなる挑戦も拒まぬ。性分だからのう。じゃがこのグラン……』

嘲るように笑う右頭の緑……ウインを、左頭の茶色……グランが抑える。

そして、俺達に優しげに語り掛け、一旦話を切ると

『……一切、手加減はせぬ。肉片になろうとも、私は知らぬぞ……！』

『行くぜ人間共！！！あの返り討ちにした奴みたいに、グッシャグシャにしてやるよ……！』

ギヤアアアアアアアアアアアアアツ！

途端、一瞬でグランの口調が豹変。それと同時にウィンも攻撃モードになったらしく、畳まれていた翼を大きく広げ、咆哮を上げる。翼はやはり薄緑と薄茶色。5mほどあるだろうか。……アレを持ち帰るのか……。

「さあ、皆行くぞ！絶対に討伐するのだっ！」

……どうやらそんな心配をしていたのは俺だけの様だ。リスニルがそう叫ぶと、5人は一斉に駆け出す。

そして俺も、心の片隅で先ほどの心配をしつつ、龍を仕留めようと駆け出したのだった。

第33話：アルトは、双頭龍と対峙した。（後書き）

さて、準備するかな……色々と。

第34話：アルトは、双頭龍と戦い始めた。(前書き)

お久しぶりです。沖縄は楽しい所だね、全く。

### 第34話：アルトは、双頭龍と戦い始めた。

Side アルト

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！

双頭龍ツヨク・ツヨクの緑の頭、ウインの咆哮。一瞬の後、ウインの大きく開けられた口から何かが高速で飛び出してくる。

それは、先ほどウルフィーネ達を貫き、切り裂き、一網打尽にしたあの薄緑の三日月だった。なるほど、ウインの技なのか。

ウインはそれを、駆け出した俺達の足元へと撃ち込んだ。先ほどの光景からすると……ヤバくね？

「……！ よ、避けるッ皆！」

言われなくてもそうしてわぁッ！ と突っ込みたくなるリスニルの叫び。

俺のツッコミ通り、その三日月が着弾する前に俺達は横へ後ろへ、さらには空へと飛び、三日月との距離を取る。

そして、三日月が地面に到達するや否や、それは小さく大量の三日月となって、放射状に高速で俺達に迫ってきた。龍の方向には飛んでいかなかったが。

横や後ろへと退いた俺以外の5人は、それぞれ三日月に対処しているように。

エイナやリスニル、ダントは剣。肉をスッパリ切り裂くあの三日月でも、さすがに鋼鉄は斬れない様だ。

一人当たり20個ほど迫る三日月を対処しきれているのは、やはりXCMの準優勝クラスと優勝クラスだな。

さて、それじゃあXCMに出ていなかったBクラスの2人はというと……。

「……」

ラウスは、無言で腕を振る。それだけで、ラウスに迫る10個ほどの三日月が何かに弾かれたかのように進路を変え、四散した。

今度は、違う方向からの10個程度。やはり速いのだが、その方向にラウスが腕を振るとやはり弾かれる。音はしない。

昨日俺が盗賊戦で予測したように、ラウスは【見えない大きな手】を自由に振るい、防御しているようだ。

硬さもそれなりにあるようだし、あの分なら大丈夫そうだな。

……さて、と。ソフィは？

「《晶壁》ッ！」

あ、いたいた。後ろに飛んで、三日月から距離を取っていたようだ。ソフィはそう叫び、腕を突き出して手を交差させた。瞬間、ソフィの目の前の地面が、ドドドッ！と平たい板のように盛り上がる。

三日月は速度があり、かなりギリギリだったのだが……何とかソフィの前面を覆うことには成功したようだ。

でも、相手は肉をスパツと切り裂く三日月。そこらへんの土を集めただけじゃ、ちょっと心配なんだが……。

そう思っていた俺。だがしかし、それは杞憂に終わる。

三日月は、意外にもキンツツ！と金属音と共に弾かれる。土だと思っていたのだが、違ったのか？

すると、その三日月が当たった場所から、土がボロボロと崩れだした。現れたのは　　太陽の光を受けてキラキラと光る、半透明の板。

……あれは、水晶？　　ということは、地中から水晶の成分を集めて顕現させたのか？……【チカラ】だろうけど……うーむ。

疑問は尽きねど、今聞くのは野暮だ。龍を倒してからにしよう。

そして、1人空へと跳んだ俺はというと……。

「せいっ！　そいやっ！」

お祭りかよ、と自分に突っ込みたくなる声で三日月を吹っ飛ばしていた。蹴りで。拳で。

何で切られないの？　と突っ込む人はもういるのかいないのか分からない。言わずもがな、【クリエーター】で強化している。

そうだな、「ちようど鋼鉄レベルの硬さ」と、「あの高速に対応できるくらいの身体能力」。そして、「飛行」の3つ。

おかげで、羽も無いのに空を飛行し、高速で迫ってくる三日月を蹴りや拳で叩き落せる人間になった俺。

……なんだろうか、最早人間じゃないよな。

そんな気落ちした俺を置き去りにして、戦闘は進む。あ、俺はちゃんと地面に降りたぜ？

三日月を回避した俺達は、一斉に龍へと迫る。だが、茶色の頭、グ

ランがそれを許すはずは無く。

『《エンタージャベリン続きを貫く投槍》ッ！』

人語でそう言っつて、グラン側の前足を上げ、一気に地面を踏み抜いた。

ドンツ！と少し揺れる大地。だが、それほどでもない。そう言わんばかりに切りかかるうとする3人、そのほか3人。

だが、やはり龍は龍だった。

俺達とグランのちょうど中間辺り……距離にすると5mほどか？……の大地の一部が、円形に光り始めた。良く見ると、直径20cm程の魔法陣のようだ。

数秒後……その発光した場所から、ズンツ！と形容すべき音と共に何か地面から突き出てくるのを俺達は見た。

それは土色で、三角錐の形をした物。多分、大地の土が形を変えて地面に突き出したのだろう。言うなれば、土の槍か。

だが、突き出たのも1秒ほど。それは、空中へと恐るべき速さで発射される。空気を切り裂いたその槍、視認出来ないほど高く上がったようだ。

……当たったら、もし足裏に当たったとしても脳天まで裂かれそう  
な……。

今ので完全に足が止まった俺達。しかし、グランは其処で攻撃を止め  
めるつもりは無かったようだ。

先ほどと同じ魔法陣が、あたり一面に　それこそ俺達の足元にも数個、発生したのだ。魔法陣同士の間は10数cm。当たり前だが、龍の辺りには魔法陣が展開されていないが……それはともかく。皆の顔に、驚愕の色が浮かぶ。勿論俺も例外ではなく。

ああ、コイツ、本気で俺達を潰しに来てると俺が身を持って実感したのと、土の槍が突き出し始めるのはほぼ同時だった。

そして。

「サンクチュアリ《聖域》ッ!」と、本日何度か目の魔法名を俺が叫ぶのも同時だった。

決して、慌てて同じ物を出しちゃったわけではない。絶対にだ。

《聖域》は、聖属性で、いや、現存する魔法の中でも最強の1つとされる防御魔法。フレイムベール元々は《焰膜》や《氷膜》など、アイスベール「膜」系と、ベール「膜」系という防御魔法を「セイント聖」で再現した物であり。

「膜」系の魔法が体にピッタリ張り付くものであるのに対し、《聖域》は淡く白に発光するドームという形を取っている。

一見地面からの攻撃には効果が無さそうだが　実は地面にも《聖域》は掛かっており。地面なので淡い白が見にくいだけなのだ。

故に。

ガアンツッ！！と、本当に土が当たったのかという鈍い金属音に良く似た音が響き、足元の槍は発射されること無く、そのままの形を取り続けた。

俺達を包んだ淡い白に発光するドームはその形を崩す事無く。大気圏へと到達するんじゃないかと思うほど豪速で空へと飛び立っていった他の槍たちを一瞬見て、そして。

『な、なんじゃとっ！？』

『……グランツッ！ 来るぜっ！！』

ウィンとグランが困惑するのを聞きながら、俺が「解除」と願ったのと同時に俺達は龍の元へと駆ける。

凸凹になった地面に注意しながら、時折細かく跳びながら魔法や剣の射程範囲まで入り込み。

「たあああああっ！！」 ダントは、いつの間に召喚したのか聖エクス剣カリバーを振りかぶり。

「《晶槍》っ！！」 ソフィは、先ほどと同じ系統だろう詠唱をし、途端何も無い空中からグランの物と同程度の水晶の槍が3つほど出現し。

「おらあああああっ！！」 と、エイナは無意識に《伸長ストレッチ》で刀身を長くした剣を振りかぶって。

「グラウンド・ウェーブ《波立つ大地》ッ！」 『クラッカー』を下に構え、地面を削り取ると共に振り上げるリスニルがいて。

「《潰せ、巨人の手》」 とラウスが漸く詠唱（？）すると共に右腕を高く上げて、そして振り下ろし。

「ジ・ヘッド・オブ・アイスまだだぜ、双頭龍！！」 そう言って右腕を突き出し、無詠唱で《氷波》アイスシュートっていう魔法をぶっ放し。

白銀に輝く聖剣が。

キラキラと光る半透明の槍が。

刀身が馬鹿みたいに長い鋼の剣が。

土色の衝撃波が。

無色透明、誰にも見えない巨大な手が。

そして、一直線に延びた、太い水色の線が。

「お前らの自慢技見せつけられただけで、終わってたまるかあああ  
っ！」

何ともおかしな叫び声と共に、一斉に叩き込まれた。

第34話：アルトは、双頭龍と戦い始めた。(後書き)

なんか、「完」って終わりについてもおかしくないよね。

でも、龍との戦いはまだまだ続きますよっ!!!

第35話・アルトは、〈嵐壁〉を練り出した。(前書き)

お久しぶりです。また予約投稿です。

旅行から帰ってきてきてダラダラと書いていたら11月になってました。死にたい。

第35話：アルトは、《嵐壁》を繰り出した。

アルト視点

『ウインドブレス《風龍焰》 ツー!!』

『アースブレス《土龍焰》 ツー!!』

緑色の頭、ウインの口から緑色の炎が。茶色の頭、グランからは茶色の炎がそれぞれ繰り出される。

やっぱり、ダントの聖龍セント・ドラゴンが吐く《聖龍焰》並に速い……けど、避けられないほどじゃない。

それぞれ、右に避け、左に避け、しゃがんで避け……空へと舞い上がったたりして（勿論俺なのだが……）。焰は、地面に着くと膨大な土煙を発した。

さて、今度は此方の攻撃だ。

「《突け、巨人の拳》……1番前に出たラウス。走りこみ、右拳を突き出す。不可視の巨人の拳が、龍へと迫り来る。

「セント・カッター《聖刃》!!」……そう叫び、土煙の向こうにいる龍に一撃を与えようと聖剣エクスカリバーを振り下ろすダント。

剣そのものは届かない。だが、白銀に輝く弧が、拳と共に襲い掛かる。

その2つの攻撃。まともに喰らえば、腹に大きな凹みが出るばかりか、上と下で2分割されるだろう。  
しかし、先ほどの5つの攻撃を全てかわした双頭龍ツェヒミ・トルムンの素早さは、半端な物では無いようだ。

それから数秒後、突如、猛烈な風がこちら側へと吹き込んできた。土煙の中で風に当たり、思わず咳き込む俺。  
だが、土煙は晴れた。今度は俺が……あれ？

「い、居ねえぞっ!?」俺の近くにいたエイナ。周りを見渡すも、そこにいたはずの龍の姿は無い。  
俺も探すが、やはり無い。……しっかしなあ……こういうときには大概……。

「上だっ!」俺が思うが速いか、リスニルが叫ぶ。あ、やっぱりか。

しかし、そう叫んだ時にはもう遅かったようだ。

『喰らいな人間共オ!!』  
ロロ・モス・ドオリ  
『《華風槍》ッ!』

どこの言葉か、そんな詠唱と共にウインの口から発射されたのは、一本の長槍。緑色だ。

……ッ! 《龍焰》とは桁違いに速いッ!

だが、その槍が俺達の内誰か1人を貫くことは無く。俺達の中心へと、ズドン!と突き刺さった。

何だ? いきなり狙いもしない槍を撃ってきて……中心に?

「槍から離れるッ!」俺が叫ぶ。いきなりの出来事で強化は施して

いないが、それでも後ろへと跳んだ。

「ロロ・アノイスト《華開け》ッ！」それと同時にウィンが叫ぶ。

そして、その槍が炸裂した。

ドパアアアン！と豪快な音を伴って。ウィンの声は、どうやら炸裂を起動させるための詠唱だったらしい。

槍は四方八方へとその破片……鎌鼬を飛び散らせる。俺が離れるといったのは、これを予測した為だ。

……何故予測できたか？ いやいや、こういうのなんか分かるんだよな、そういう爆散系使うときの戦法みたいなのが。

離れてもなお、鎌鼬は俺達を襲う。《聖域》はドーム状にしか展開できないから、此処は一人一人で防御するしかない。

しかし、時間的な余裕があった。

俺は反射神経と身体能力を強化、次々に飛来する鎌鼬を最小限の動きで避けていく。右、下、左下、右下、……。

下3連コンボ……なんで下ばかりなんだ……？

「…………ッ！」

その答えはすぐに明かされる。俺の隣に居た黒髪少女……ソフィの動きが急激に鈍り、ついには膝を落としてしまう。

ソフィの脹脛（はらひく）からは、赤い液体がドクドクと流れ出していた。

『ヒヤハハハッ！ 狙い通りだぁッ！…！』

……なるほど、下を重点的に攻めて動きを鈍らせようってか。さすが賢獣、いい頭してる。

それだけじゃない、攻撃に当たった奴を回復する奴も無防備……格好的。

その2人を守るうとし、守備する奴が現れば、後は無双できる……さすがに深読みしすぎか？

即座にソフィに駆け寄る。見ると、結構な量だ。

「大丈夫か？」俺が問う。……いや、大丈夫そうだけど失血多量で死んじゃうと元も子もないからね。

「……痛いです……」辛そうな声でソフィが答える。意識ははつきりしてるが……ふむ。回復魔法の出番だな。

「《福音》<sup>ゴスペル</sup>」と、詠唱しながら右手をソフィの傷ついた左足に当てる。みるみるうちに俺の手には、白い光が集まってくる……。これが、聖属性上級回復魔法、《福音》。最上級の回復魔法もあるにはあるが……ちよつと理由があつて使えない。

しかし、それでもさすが聖属性といわざるを得ない回復力である。これで消毒・洗浄・治癒をやってくれるんだから、魔法万々歳。

さて……後20秒ぐらいかな。完全に治るまで。最上級のほうだったら、10秒ほどで治ってたんだけどな……。……。

『隙ありだアツ！！』<sup>モス・ドオリ</sup> 《風槍》ツ！！！！』

……やっぱり。ウインは俺に向かい、緑色の長槍を発射してきた。他のメンバーで、俺の防御に回れる奴は……いないか。

だから、普通なら俺は串刺し。俺の前に居るソフィにも、当たってしまうかもしれない。

だが。

俺は普通でないことは、皆良く知っているはずだ。例えば、俺が魔法を同時に2つ以上使えることとかは。

ガキーン！！ 金属音がして、俺に向かって一直線に進んでいた槍は木っ端微塵に砕け散った。

その前には、半透明で、薄緑に色づいた四角形の巨大な壁。形は絶えず変わっているが、四角形の形を何とか保っているかのように思える。

ま、これが普通なただけだ。

『な……？』ういん は、あせんとしているようだ！ 槍を吐いたまま固まっている緑頭の龍。

「回復完了……」ストーム・ウォール 《嵐壁》スベルカット って奴だ。無詠唱<sup>アリス・シュート</sup>って、見たことあるか？」

ソフィの傷口が完全に塞がったのを確認し、龍へと向き直った俺。そのまま問いかけた。

『……確かにあの少年、先ほども《氷波》アリス・シュートを何の前触れも無く出しよったな』

『グッ……グッ……！ クソが……ッ……！ 俺の《風槍》は、あん

なチンケな壁で破られるほどヤワじゃねえはずだぞ……」

これでもかというほど猛烈に悔しがっているウィンに、追い討ちというほどでも無いが言う俺。

「あの槍、小さな鎌鼬を風で凝縮して、詠唱で拡散させるんだろ？  
だったら、その凝縮させてる風を解いちまえば良い。

だから、正確には「破った」じゃなくて「解いた」。俺の《嵐壁》は、常に風が下方向を向くように設定したから、周りには飛ばなかった。

……それだけの話だけど、何か質問あるか？」

スーパー解説タイムを終えた俺。……なんだろうこの爽快感。

「……普通、風属性の魔法も、その上級の嵐の魔法でも、風の方向は弄れないと思うんですけど……」

反応したのはソフィだった。目の前に居るつてのに、小さく手を上げちゃってる。

「ま、其処は俺だからな。理不尽だと言われようがリムジンだと言われようが、出来るもんはできるんだよ」

理不尽とリムジンって似てね？ そんなことを思いながら言ったのだが、ソフィは「リムジンって何？」って分かりやすく顔に浮かべてる。

そして再び向き直ると、其処には「怒」って漢字1文字が額に浮かんでそうなウィンさんがいます。

『グランよおおお……アレの準備しろ。「アレ」のオオオ……』

『……よほど殺したいようじゃの……人間共よ。今の内に逃げねば、死ぬぞ』

もう怒りすぎて狂人の様になってるウイン。最初からそれっばいけども。

そして、不承不承といった感じで俺達に忠告するグラン。

「は、何をいっせ、何を言うか、龍。死ぬのは貴様のほうだ。覚悟しろよ」

……グレイトフルなタイミングで俺のセリフを遮ってくれたダント君。帰り覚えてるよ？

『ならば仕方ない。……死ぬ』

ゾクツと。寒気が走った。見れば、首を下げて何かを溜めているかのような二つの首。

「チャンスだ、この隙にッ！」……寒気を感じ取ったの知らないが、リスニルは飛び出し、空中に浮く龍へと《波立つ大地》グラウンド・ウェーブを繰り返した。

「よっしゃ！俺も行くぜっ！！」とリスニル、同時に飛び出したエイナ。またもや《伸長》で伸ばした剣を振り、龍を狙う。

『ギャツハツハツッ！！ 甘いぜ人間共オツ！！』

脳に直接伝わるようなウインの声。……《テレパシー念話》か。

それがどのような意味なのかは、それが聞こえてから直ぐ分かった。

ガンツッ！ギイン！ 土色の衝撃波がその龍へと到達する前に消滅し、馬鹿長い刃はやはり到達する前に、その速度のまま弾かれた。リスニルはともかく、エイナは直接そのダメージを食らう。後ろへと吹っ飛び、倒れる。

……何の属性も加えない、無属性の「波」……。《ショックウェーブ衝撃波》か。

エイナが吹っ飛ばされた方向に偶然居たラウスがエイナを助け上げるのを見届け、そう考察する。

《衝撃波》はチャージ中の自身を守る為に自動で展開され、それで攻撃を相殺すると。そんな感じか。

無属性は何の属性も加えず、属性による有利不利がない代わりに、魔力そのものを打ち出すために威力は高い。

そんな無属性魔法を使えるのは極少数の人間とこういう賢獣ぐらい。……因みにだが、あのメテリアでも無属性魔法は使えないらしいぞ。

スーパー解説タイム2終了、と共に。向こうの溜めは終わったようだ。構える。

『《終わりを告げる風の刃》ッ！！！！』 ウインが叫ぶ。

『《続きを打ち消す土の塊》ッ！！！！』 グランが叫ぶ。

『『ヒキニング・ダストストーム《始まりの砂刃嵐》ッッ！！！！』』

2つの首が同時詠唱をした直後。

ゴオッッ！！ という音と共に、このローカルド大平原一帯が、砂嵐に襲われた。

第35話：アルトは、**〈嵐壁〉**を繰り出した。**（後書き）**

V S シヒミ・ネコノ双頭龍戦、次回決着です。多分。

第36話：アルトは、腕を左に薙いだ。  
(前書き)

お久しぶりです。

gggdしてたらもう12日、死にたい。

というわけで、VS双頭龍戦ツヘミミ・テヲコウ、決着です。

### 第36話：アルトは、腕を左に薙いだ。

Side ヨライ

『《ヒギニング・ダストストーム始まりの砂刃嵐》 ツ！！！！』

ジ・ヘミ・ト・ラゴン  
双頭龍から発せられる、人語の詠唱。

長い2つの首の内、右方に構える茶色の頭……グランは、思慮深そうな、重厚な声。

左方に有る薄緑の頭……ウインは、やけに「今風の若者！」といった軽々しい声。

2つの声は、自らが領域テリトリーに設定した広大なローカルド大平原一帯を、砂嵐で覆い尽くした。

その龍に立ち向かっている人間6人。エクシル魔法学園生徒で構成された、チーム「Names」はいきなりの砂嵐に驚愕を隠せない。

「なつ、砂嵐…… ツ！ 平原で砂嵐だと……！？」

チームリーダー、ウエスレイ・リスニルもその1人だった。いつも冷静なりスニルも、さすがに驚いたよう。

「クソ…… ツ！ 前が見えない……」

視界は、自分が手を伸ばして辛うじて見える程度。つまり、1mも

無い。

というより、大量の砂によってまともな目が開けていられない。今は咄嗟に腕で防御しているが、剣を振り回すとなればそうはいかない。

即ちこれは、この砂嵐を操っているのだろう敵の龍にとっては非常に有利であり、こちら側にとっては非常に……そして非情に不利だ。

「皆、防御だツ！！ 敵はどこから来るか分からないツ！！ 全方位に気をつけるツ！」

砂が少々口に入るのを無視して、リスニルは叫ぶ。勿論、同じチームのメンバーへと。

ゴオオオオ……と、砂を孕<sup>はら</sup>んだ風が空気を切り裂く音が断続的に聞こえ、最早その叫びが通じたのかさえリスニルには判断不能だった。

遠くから「わかった……」と小さく聞こえた気がするが、それが誰なのか、そもそも本当に聞こえたのかすら分からない。

視界が閉ざされた時

そんな時には如何すれば良いか。

幼少期から剣術と共に騎士の精神、戦法を父から学んできたリスニルの記憶の中にあつたその解決策は、防御一辺倒。

目が潰された時、攻撃するのはまず論外である。敵を早く倒そうと焦り、あらゆる方向に攻撃が飛んで味方に当たるのは本末転倒ではない。

そもそも「目が潰される時」というのは「失明した時」と「相手により視界が遮られた時」位であり、最悪、大規模魔術を使わなければ解決できない。

そして、今がその「最悪」であり、少しでもダメージを減らそうと  
防御に転じ、過ぎるのを待つ……。それが理だと、記憶は語る。  
彼女は手に持った『クラツカー』を横に構え、防御に入る。

だが、あれほどの攻撃力を持つ龍が、ただ単に目潰しをするだろうか？

そんな疑問が浮かんできたリスニルだったが、もう遅かった。

ヒュンツ。小さく聞こえたそんな音に、リスニルは「何だ？」と頭  
の中で疑問符を浮かべる。  
それが分かるのは、それから数秒後。

「グツ!? アアアアツツ!？」

ヒュンヒュンヒュンツツ!!! と、先ほどの音が連続して、  
一斉にリスニルの鼓膜の中を通り抜ける。  
風を切り裂く、刀剣類で素振りをする音に良く似ていた。

そして、それがリスニルが認識する辺り、100以上は聞こえる。  
しかも、全方向から、一斉に。



3人は直接身を守るのではなく、持った武器や【チカラ】で一方だけを守っていた。故に、全方位からの攻撃に対応できなかったのだ。

そんな中、エクシル魔法学園、1年最高位のダント・サスティーフまでもが倒れていた。

砂嵐が発生した直後、ダントは即座に《聖域》を発動し、死角からやってくる龍の攻撃に構えようとした。

今まで《聖域》はアルトだけが唱えていたが、元々ダントは【「聖」を操るチカラ】の持ち主であり、《聖域》を使えない道理は無い。そして、その《聖域》は聖属性最上級防御魔法。幾ら龍にしろ、その壁は突破できない。彼は、そう思っていた。

その予測は当たっていた。《龍焰》<sup>フレズ</sup>では、いや、そのほかの攻撃にしても、《聖域》は破れない。その予測は。だから、微かに彼は慢心し、《聖域》のドーム内に入った砂嵐の砂に、全く気を置いていなかった。

龍の奥の手が発動した。

リスニル他4人を傷つけたその刃物は、《聖域》を発動しているはずのダントにまで襲い掛かる。

最初に、脇腹に刃物が突き刺さった。途中まですんなり突き刺さったそれは、途中からザラザラと、まるで傷口の肉をを鑢<sup>やせし</sup>で削るかのよう<sup>やせし</sup>に突き進んだ。

「ゲアアアアアアアツツ!？」

絶叫。その表現が正しいダントの叫びだった。傷はそれだけではなく、右足に2本、左足に1本、そして、背中に2本ほど、突き刺さる。紅い液体が、吹き出、滴る。

砂嵐が吹き荒れているのにも関わらず、《聖域》が解除された。つまりそれは、ダントが意識を手放したということ。

ダントも、視界の端にチカツと光る物を認識しながらも、考える暇はなく。ゆっくりと体を地に沈めながら、闇へと堕ちていった。

一方。砂嵐が吹き荒れるローカルド大平原に1箇所だけ、台風の目のように何時もと変わらない地点があった。

そこは半径10mほどの円形で、先ほどまでリスニル達が戦っていた場所の近くだった。そしてその中心点には、巨大な影があった。

『ギャハツハツハツハツ!!! グランよおおッ! 何時見てもこの光景は楽しいなああっ!!!』

何かに毒されたかのように興奮し、茶色い砂が駆け回る様子を楽しげに見つめる薄緑の首。

『唯一の欠点は、人間共が刃に斬られ、突き刺され、倒れる様子を見られないということじゃがな……』

落ち着き払った様子で、少し悔しげな顔で辺りを見つめる茶色の首。

ジヒミ・フ・フ  
双頭龍のウィンとグランは、彼らの最終兵器「ヒギニグ・ダストストーム《始まりの砂刃嵐》」

で相手が全滅する時を待っていた。

龍が元々体内に宿す、人間にしてみれば多すぎる魔力を存分に使つて放つ、デストラクションマジック殲滅魔法。

この魔法を受け、立った人間や魔獣は居ない。昔この龍に挑んだギルダースも、この魔法でほぼ壊滅状態になったのだ。

『……しっかし、グランよお。アイツ、一体何物なにもんだったんだ？ 無スベルカッ！……詠唱なんて、聞いたこと無ねえぞ』

大きな首を相棒に向け、尋ねるウイン。その声には、若干の怒りが込められている。

風で形作られた槍を、自らの風で超加速させ放つ、《風槍》モス・ドオリ。ウインの十八番おはこだつたりする。

人間の魔法、《風針》ウインドニードルよりも速いそれを知恵で「解いた」あの少年を、未だに根に持っているようだ。対して、茶首のグランはあっさりと言う。

『……わからん。じゃが、とんでもないヤツじゃという事はわかった』

『だが、此処ではくたばってるだろうなあ！！ いかにも詠唱無しで魔法を唱えられるとはいえ、これを避けられるとは思えねえもんなアツ！』

『……………』

嘲るように笑うウイン。しかし、グランはどこか合点がいかないといった様子で、俯く。

『どうしたよ、グラン。あいつ等はじきに死ぬ。あの黒髪が可愛か

「……だから助けたいとか、人でもねえのに人情味に溢れた事、言うんじゃないねえだろうなあ？」

「阿呆が。言うわけ無かろう。……その少年じゃが……、やはり納得いかん」

軽口を叩くウインは、それをあっさりと流されたことにもイラッとしつつ、その内容を尋ねた。

「……何がだよ」

「……魔法を無詠唱で放てるほどの人間が、あっさりとこれでやられた事じゃ。」

「……忘れたか？ あの時の人間達を。……1人だけ、この砂嵐に打ち勝った人間が居た事をな」

「……っ！……その話は止めようぜ、グランよ……。アレで死に掛けたんだぜえ？ 俺は……」

グランが語る過去に、顔を顰めるウイン。

そう、昔の出来事。ある人間の一人が、ローカルド大平原にやってきた時の事。

《ヒキニング・ダストストーム始まりの砂刃嵐》でチームのほぼ全員を沈めたウインとグランだったが、たった一人、それを打ち破った人間がいた。

結局その人間も戦いで死んだが、ウインの額には、今も残る十字の切り傷が入ったのだ。

「……そうじゃな。あの男が使った戦法は多大な魔力を要する。あの少年には出来ぬじゃろう」

『だっ！ さて、もう砂嵐を解いても良いんじゃない……』

ウィンが何かを察知した。言葉が止まる。

「ソイツがどんな事をしたのは知らねえけどよ」

そこで突然聞こえる、あの少年の声。どこからかは分からない。

ウィンもグランも、耳を疑った。

「あの砂嵐を掻い潜れる訳が無いとか、多大な魔力を要するとか」

『……嘘だろ？』

『……』

「そっいう『常識』なんざ 俺には通じねえよ」

瞬間。パシュツという気の抜けた音と共に、砂嵐が「消えた」。一瞬で、何事も無かったかのように晴れ渡るローカルド大平原。

「皆気絶しちゃったからよ……翼、頂くぜ？ 双頭龍……」

『ウインドブレス  
風龍焰ツツ！！』

その言葉を言い終わる前に、ウインが動いた。風属性の《ブレス龍焰》……直撃すれば鎌鼬でミンチになること必死のそれに、少年はというと。

「サンクチュアリ《聖域》」……と、一言呟くだけ。

それだけで、緑色の炎は少年を覆うように現れたドームに阻まれ、四散する。

「なわけだ。それじゃ」

少年は、手を右から左に薙ぐ。

突如龍の横に、ちょうど首を刈る様に現れた巨大な刃は、「少年の手と連動している」と嫌でも直感的に分かるだろう。

スベルカット  
無詠唱された魔法の名前は、無属性上級攻撃魔法《ギロチン断罪の落下刃》。鈍く光るその刃は、無属性で攻撃力が高く、並大抵の壁なら一振りで斬ることができる。

何をするでもなかった。

ただその状況を受け入れなければいけなかった。

刃が動く。まず最初に、1つ首が飛んだ。

『(……ふう。案外、あっけなかったのう……)』

そんなことを思い、目を薄く開けたグラン。

首に何か当たったと感じたときには、既に視界は、大きく大きく傾いていた。

そして、頭が何かに当たった時には、もう「感じる」「事すらも出来なくなっていた。

第36話：アルトは、腕を左に薙いだ。（後書き）

今回は意味も無く作者視点にして、ちょっと息抜きしてみました。  
ホントに訳は無いです。いやホント。

第37話：アルトは、拳で殴り起こした。（前書き）

お久しぶりです。

この話を読む前に、ちょっと注意を。

- ・この話はダントがアルトに叩き起こされた後の十数分間の話です。
- ・ダントとリスニルがともウザイ感じになっています。
- ・というよりなぜかダントの後悔話になっています。
- ・ぶっちゃけ、何故こんな感じなのか分かりません。
- ・どうしてこうなった（＾o＾）ノ

どうぞ、お読みください。

### 第37話：アルトは、拳で殴り起こした。

#### Side ダント

ガスッ！ そんな音と共に「私の腹に」繰り返されたのである。衝撃によって、私の意識は強制的に引き起こされた。

「じあっ！？」

情けなくもそんな声と共に目を開ける私の目の前には、右拳をフック気味に私の腹にめり込ませた宿敵、アルト。シューバの姿があった。

何故この状況で殴るのだ、そう聞こえたと思ったが腹への一撃によって上手く声が出せない。

「……！！」

「……あーなるほど、とりあえず目覚ましにと」

やっと、しかし音にはなっていない私の声を正しい理由で認識したのか（どうやって認識したのかは気になるのだが）、シューバは目覚めの一撃の理由を判りやすく私に言う。

当然、馬鹿らしい理由だった。音にはなっていなかったが、聞こうとした私が馬鹿みたいではないか。

「あと、帰りに約束した3発+1発も兼ねて、だ。ありがたく思えよ？」

……思い出した。確か此処に来る途中、「五月蠅い」という理由で

復路に3発殴られることになっていたか。

当然避けたいのだが、無理だ。彼の拳はどうしようも。そんなことで、割り切って殴られるまでは思い出さないのでおこうと思っていたのだが、コイツは今の一撃にそれを加算するらしい。

どこで1発増えたのかは知らないが、コイツの拳は馬鹿に出来ない、無くなってよかったと内心ほっとした私だったが。

「あ、まだ2発残ってるからな？」

どうやら、期待した私が馬鹿だったらしい。一撃では私は起きなかつたのか、2発目で漸く起きたと言う事か。

本心を言えば、4発を受けきるまでずつと寝ていたかった。先ほども言った通り、コイツの拳は馬鹿みたいに威力が高いのだ。

アルト・シューバの【チカラ】……【創造主】<sup>クリエイター</sup>。神をも超えられる【チカラ】を持つコイツを下手に刺激しない方が良いのは、春のXCMで身に染みてよくわかっている。

XCMという戦闘訓練を兼ねた大会ということもあつただろうが、聖属性最上級一点攻撃魔法……魔法学分類上そう定義される私の魔法、《輝く世界》<sup>シャイニング・ワールド</sup>で半殺しにしようとした私が受けたのは、気絶するほどの凄まじい正拳突き<sup>ストレート</sup>。もう受けたくない。

色々と記憶を掘り起こしてみたのだが、刺激しなければ弊害を受けることは無いというわけでも無さそうなのだ。今の私のように。

「…………ツ！ そうだ、皆はどうしたツ！ 私は確か、<sup>ツェル・ヘンツ</sup>双頭龍の攻撃で脇腹を刺されて倒れたはず…………ツ！？」

あの時の思い出で大事なことを忘れていた。よほどあの時のインパクトが強烈だっただろうか。やっと声が出たことにも気付かなかつた。

そう、朝から<sup>ツェル・ヘンツ</sup>双頭龍を狩りに来た私達は、突然吹き荒れた砂嵐に飲

み込まれ、訳も分からないままナイフで刺されて意識を失ったのだ。無意識に、刺されたわき腹へと手が伸びる。私より早く起きていたということは、包帯でも巻いてくれたのだろうか。

そう思っていたのだが、軽々と常識を打ち砕く彼は、私の予想を70%ほど外しながらこう言った。

「魔法学園の1年最高位トップが大声で恥ずかしいこと口にしてんじゃねえよ。倒れた報告なんかいらねえ。……傷は全員もう治した。心配は要らねえよ」

……は？ もう治しただと？ 思わず唾然としてしまったが、確かに体中にあつたはずの傷は、どこもかしこも消えている。

日はまだ高く、恐らく私達が双頭龍シフト・ドラゴンと戦い始めて3時間も経っていないだろう。それなのに、既に治っているとはどういうことなのだ。

「……【クリエイター】で治したんだよ。お前は《聖域》サンクチュアリで守ってたらしいから傷はあまり多くなかったが、後の4人はひどかったぜ。……ま、そう言っても【クリエイター】で一発だけだな。あと、皆の破れた服も直しておいたぜ」

……絶句する私。やはり【クリエイター】は万能すぎる。神を超え、コイツ自身が絶対神になる日もそう遠くないのかもしれない。

……皆、といえば。「Nameless」(チーム名。私としては非常に不満だが、決まった以上そう呼ぶしか無い)の他のメンバーはどこだ。さつきから見当たらない。

そう思っていると、漸く気がついた。今、私はシューバの拳を自身の腹にめり込ませながら寝ているのだ。視界に彼しか映らない訳だ。

とりあえず退いてくれというとは彼は意外にはすんなりと拳を引き、「後2発、後2発……」と不気味に呟きながら歩いていつてしまった。

そして、私が上体を起すと、其処には衝撃的な光景が広がっていた。まず、恐らく数十分前までは砂嵐だったというのに今は青空が広がるローカルド大平原だ。

私が意識を保っていた時は、確かに腕の先ほどまでしか視界が届かなかった。大規模な幻覚魔術ということでも無さそうだ。

双頭龍ツウカウリウが起した砂嵐は、すっかり消え去っている。不思議なのだが、やはりシューバが何かやったのだろう。

メンバーの倒れ伏す姿。私とシューバ以外の4人は並べて寝かされている。シューバはあそこへと向かったようだ。……私が何故仲間はずれにされたのか、てんで予想がつかないが。まあそれは良いとして。

これではまるで戦死した遺体を並べてあるかのように見える。不謹慎にも程があるぞ、アルト＝シューバ。

そして、1つの大きな、もう動かないであろう体。近くの地面には、それぞれ薄緑と茶色の塊が1つずつ落ちていた。

……双頭龍ツウカウリウの体だった。落ちているのは、おそらく、というより確実に龍の首だ。証拠に、長かった龍の首の中程から先が切断されている。

偶然にも龍の顔はあちら側……奥側を向き、此方からでは表情は見えない。此方としても見たくはないので良いのだが。

切断された体側の首からは、龍族特有のどす黒い血が流れたその跡が残っていた。茶色の頭……グランといったか。グランの首の一部

に、それが掛かっていた。

……倒したのか。双頭龍を。シヒミニ・テ・ドラゴン ……恐らく、アイツが。何をしたのは全く分らないが、砂嵐の中で倒れた私達の中で1人だけ。アルト＝シューバが双頭龍の首を刈ったというのか。シヒミニ・テ・ドラゴン

じわじわと、悔しさが滲み出てくる。XCMに続いて、またしてもあの茶赤髪の少年は、私より高みへと上ったのだ。

……クソッ！ 心でそう叫びながら、思わず拳を地面に叩きつけた。柔らかい土で痛みは無かったが、何より心が痛い。

最高位が何なのだ。現に最低位の彼は私より上にいる。そんな階級ランクなど、全く指標にならない。

此処へ入学した時は。いや、学園長室へと入るあの時までは、私は最高位の誇りを持っていた。トップ

実際、私は強かった。自分ごとながら、王国騎士団のとある騎士と闘い、勝利したこともあった。学業も優秀だった。

エクシリア有力貴族として自分に誇りを持つと言われ育ってきた私は、その言葉に恥じぬ努力の成果と才能を遺憾なく発揮してきた。「はず」なのだ。

そしてそれは……私のプライドは、私があの時までは目にも入れなかった最低位ワーストによって大きく揺らいだ。

学園長室でひびが入り、XCMで一部が壊れ、今、崩れようとしている。

自分に誇りを持って生きてきたはずの私は、いつの間にかその誇りを失おうとしていたのだ。

綺麗に切断された龍の首。大方、《剣》や《刃》の魔法で切断したのだろう。しかし、頑丈な鱗で覆われた双頭龍シヘミ・タリノの首を切断するには、かなりの魔力が必要なはず。最低、上級魔法。それを軽々と、あの砂嵐の中（砂嵐を消した後なのかも知れないが）でやってのけたアルト＝シューバ。

私の中の、「私自身」という存在が霞んで見える彼。もはや、彼への抵抗は、私の遠吠えだったのだろうか。

私は、ずっと彼の背中を見て生きて行くのだろうか。直接見えなくても、精神的な問題として、彼はずっと私の前を行ってしまうのだろうか。

嫌だ。だが、それが現実だと言う事を、今日改めて思い知ったのだ。

私は今、傀儡にんぎょうのように呆然としているだろう。立とうとするも、立てない。そして、頬を何か熱い液体が滑った。

思わず拭ってみると、それは透明で、自分自身、プライド故に目から零す事は一生無いだろうと思っていた物だった。

私は、泣いていたのだった。情けなく。

「 ダント様ッ！ 」

不意に、左から声が聞こえた。

そちらに首を動かすと、まず最初に日光を少しだけ反射する銀色の髪が目に入った。此処に居る「Nameless」メンバーで銀髪

なのは1人しか居ない。

……というより、私を「ダント様」なんて小恥ずかしく呼ぶのも、1人しか居ない。

エクシル魔法学園の1年第2位セカンドで「Nameless」のリーダー

…… ウェスレイ・リスニルだった。

どうやらシューバにたたき起こされ、ここまでやってきたようだ。

「っ！ どうなされたのですか、ダント様……？」

何故か私の顔を覗き込みながら、そう困ったように、違った言い方をすれば、軽く信じられないといった顔で問いかける彼女。

リスニルの言葉を聞いてから、私は頬が湿っていることに気がついた。完全に涙を拭いきれていなかったのだ。

すぐさま腕を動かして、布地で涙を拭いた。そして、彼女に話しかける。

「……少し自分に失望してただけだ。あの最低位ワーストに、誇りを崩されたよ」

けしてほか暈す事無く、率直に自分の気持ちを言うというのは今の状況下ではあまり気持ちの良い物ではない。

だが、言わなければ彼女は納得してくれないだろう。彼女は私が曖昧なことを言うと、根掘り葉掘り聞いてくるのだから。

私の言葉を耳に入れたリスニルは、私がネガティブになっていたのがよほど信じられないのか、目を丸くしている。

「……ダント様らしくありません。そのような事を仰らないで下さい……」

「事実なんだ。私はプライドを崩され、呆然と此処に座っている。君が悲しむのは見たくないが、事実を伝えなければどうにもならないだろう?」

「……ダント様……」

私は右脚を伸ばし、左脚を曲げて左肘をそこについた。ため息も、もう出ない。

リスニルはというと膝立ちで、先ほどと変わらず驚愕の表情を浮かべている。其処には、悲しみも垣間見えた。

普段余り感情を出さないリスニル。私が見る中で感情を表に出すのは、殆ど私が絡んだ出来事だけだ。今回も。

やがて、俯いた私の視界に白い手が映った。首を戻すと、リスニルが手を私に差し伸べているではないか。

声に出さず「立ってください、ダント様」と言っているリスニル。感謝しながら、彼女の手を掴んで立ち上がった。

「……ダント様」

シューバが此方へ来いと手招きしているらしく、歩き出して直ぐにリスニルが口を開けた。「何だ?」と言いながら、私も歩を進める。

「……私は、ダント様に憧れていました。聖属性の魔法を使うダント様は、高貴で、華麗で、とても力強くて、私は、初めてダント様の戦う姿を見た時から目を奪われていました」

……入学の直ぐ後か。魔法の訓練で、初めて魔法を見せた。

その時からだ。私にAクラスの大多数の女子と少数の男子が寄って

きたのは。別に人間恐怖症ではないから、苦痛ではなかったが。つまり、リスニルはその内の1人だったわけか。

「……そして、ダント様の人格にも憧れていました。プライドが高いダント様は、先ほどの魔法も合わせて、私の中で最上級の存在でした……でも」

リスニルは其処まで私に憧れていたのか。嫌ではないが、少し恥ずかしい。

「でも」と一旦区切って、リスニルは再び話し始めた。

「XCMでダント様がアルト<sup>ホームルーム</sup>シューバに負けた際、私は少しだけ、少しだけダント様に失望したんです。あのダント様が、最低位<sup>ワースト</sup>に負けるなんて……と」

「仕方の無いことだな、負けたのだから」

「ダント様はHR<sup>ホームルーム</sup>に戻った後、酷く落ち込んでいらつしやって……また少しだけ失望しました。……しかし、その翌日にはまた何時ものダント様に戻っていらつしやいましたよね」

……表彰式で「次は勝つ」とシューバに言ったから、次の日からは毎朝の鍛錬を倍にした。何時までも落ち込んでいられないから。それと同時に調子も戻ってしまっただけの話なのだが。

「私は、何時もの調子に戻っていらつしやるダント様を見て、前日の失望を激しく恥じたんです。直ぐに立ち直るのも、ダント様らしいから。表面だけで判断し、失望してしまった私は、なんて馬鹿なのだろうと思いました」

……先ほどから、何が言いたいのだろうか。  
とりあえずリスニルが言い切るまで聞くつもりだが、意図が掴めない。

それを過敏に受け取ったのか、リスニルは言った。

「私は、ダント様が自身に失望していらっしやる今回でも、立ち直って……何時ものダント様に戻って欲しいのです。……お願いです、ダント様。」

私は、何時ものダント様が好きなのです」

「……………」

彼女は、そういうなり俯いてしまった。私は、呆然とその様子を見つめるほかなかった。  
自分で言うのもなんだが、私は目が良い。嫌でも、俯く彼女から流れる涙が目に入ってしまったのだ。  
今まで、リスニルが泣く所を見たところがあった。XCMでAクルスが負けたときでも、沈着に見ていたらしいのに。

何故彼女が涙を流すのだ。

そして、何故私は何もしてやれないのだ。

私は、恥じた。最高位トップだからとか、そんな小さな物ではなく、1人の男として……女に涙を流させた男として、私はこんな自分になっていることを今更ながら後悔した。  
そして、彼女が涙を流す原因を、一刻も早く排除しなければと感じた。当然ながら、その原因は私にある。

……そうだ、私はエクシル魔法学園1年最高位トップ、ダント・サスティーフ。……高潔なる上級貴族、サスティーフ家の跡取りとして、私は……

私は、こんな所で俯いてられない。

## Side リスニル

最初の「何時もの」の所から、急に涙腺が緩む。私は思いのままをぶつけた。

入学したての頃から憧れていたダント様このっんに、今、最低位ファストとの力の差を感じて失望するこの人に。

気付けば私は泣いていた。1人の少年に負けたこの人と感覚を共有していると言うか、そんな気がした。悔しい。

そして同時に、勢いで好きだと言ってしまったことが酷く恥ずかしくて、私は涙を見せたくないと言う理由と合わせて俯いてしまった。多分顔は赤い。

憧れの人であるダント様に言ってしまったから、というのもそうだ

が、半分ラブの意味もあつたことが本当に恥ずかしかった。

「……リスニル」

不意に声が掛けられた。勿論ダント様の、男声としては少し高めで、しかし重みのある声。

涙は見せまいと袖で涙を拭い、しかし顔の赤さには気付けずに、私は俯く顔を戻して、前を歩くダント様を見た。

ダント様は、私を見ていなかった。体と、美しい金の後ろ髪が見えるのみ。しかし、先ほどまでとは……ほんの十数秒前とは明らかに違った後姿だった。

しっかりと前を向くその姿は、「何時もの」ダント様だと思った。

「……リスニル。……私は今まで死んでいた。『どうかしていた』というレベルではなく、心の奥底に沈み、死んでいた」

私が「何時もの」ダント様に気付いて声を出そうとする前に、ダント様はもう一度私の名を呼び、そう話し出した。

私は黙り、話を聞いた。やはり、「何時もの」……。

「だが、私は甦った。リスニルのおかげだ。心の底から私を引き上げてくれた君には感謝しよう。ありがとう」

何の前触れもなくそう言い放つ後姿のダント様。何故か妙に恥ずかしくなった。

でも、そういう所も普通の、いつも通りのダント様だった。今までそういった事を何回も聞いているはずなのに、冷静な顔が崩れた気がした。

「や、やめてください、ダント様。立ち直ったのは他でも無いダント様」自身なのですから……」

私が、あまり動かない口を必死に動かしてやっとのことで言い放った言葉を、ダント様は微笑で返した。

「フフ、そうだな。さあ、早く皆の所へと行こう。アルト「シユーバが待っているのはどうでも良いとしても、他の3人が私達の為に待ちくたびれているのはどうも忍びない。」

「はい」と返事をする私も、先ほどまでは死んでいたのかもしれない。

心の底から引き上げてくれたのは、間違いなくダント様なのだ。

「Nameless」のリーダーとして、またはその関係でダント様のお傍に居る事が出来る身として。

私はダント様を支え、腕となり、脚となり、目となり、耳となる事が出来る身として。

私は、こんな所で俯いていられない。

でも、やっぱり恥ずかしいかな……

とりあえず今後のことを決めたいとダントを呼びに行ったらいいリスニルなのだが、2人揃って戻ってこない件について。もちろん直ぐ傍　まあざっと100mほど離れた所。ダントが倒れていたのをそのままにしておいた　で何をしているのかは見えるが、会話までは入ってこない。やっとな歩き始めたと思ったら今度は俯いたり戻したり。一体何してんだ？

直ぐ近くで、ソフィとラウスがなにやら「いや早く呼びに行つたほうが」「バカ何言ってるの良いムードを」「そんなのどうでも良いから」「良いわけ無いでしょ少しは考えるバカラウスがッ!!」とか何とか言い争ってるのも気に掛かるし。……うーん、なんだかなあ。

少し時間がたって、漸く2人が歩いてきた。のだが。

「……リスニル。何で顔が赤いんだ？」

「ッ！　言つなアルト!! シューバツ!!　個人的な事に首を突っ込むと痛い目を見るのは其方あなたの方だぞッ！」

「……えー、俺は単に「顔赤いね」って言っただけなんだけど……まあ、なんか色々あるんだな。」

「……ソフィがいつも以上にニコニコしているんだけど、何か関係あるのか？」

そしてダントは……あー、いつも通りだな。見下すような目。んでコイツを叩き潰すのが俺の楽しみ……ではないけども。

いやあ、何時もの負け<sup>ダント</sup>ず嫌い過ぎてもう見飽きた感があるな。

「……………アルト＝シユーバ」

「んあ？」

俺がそんな感傷に浸っている時に、堂々と割り込むダント。なんだよ、行列に横入りする迷惑おじさんかお前は。

「……………次に戦うときは、必ず私が勝つ。精々鍛えているよ」

「……………」

……………あ、ありのまま今起こった事を話すぜ。

自分を宿敵にしてるらしい同い年の奴に何を言われると思ったら、勝てもしないのに勝手に勝利宣言をされた。

な、何を言っているのか分からないと思うが、俺も何を言っているのか分からない。というより何故このテンプレを使ったのかも分からない。

頭がどうにかなりそうぞ

はないが、とりあえず、何時もの

ダントさんということは分かった。いや、何時もよりすっきりした顔だな。

「お、おお……………」

そして俺は、そんな曖昧且つ言葉になっていない声しか出せないのだった。

……  
一体、何があつたんだ？

第37話：アルトは、拳で殴り起こした。（後書き）

どうも、すみませんでした。

第38話：アルトは、龍を天に召した。（前書き）

お久しぶりです。

考查やらで大変でした。大学生になるまで安定は無理か……。いや大学生になっても無理か。自分の腕じゃ。

### 第38話：アルトは、龍を天に召した。

Side アルト

結局、リスニルの顔が赤かった謎とダントが妙に自信満々だった理由は分からなかった。  
まあ、分からなくても良いんだけどそういう性分だからな……気になる。

「さて、この後は双頭龍ツヘミツ・テ・ヲリユンの翼を刈り取り、骸を天に召させ、エクシリアに帰るとしよう。

……それでは、ダント様」

……おっと。今は話し合い と言ってもただの確認作業なんだけど の途中だった。

そう、依頼目標である双頭龍ツヘミツ・テ・ヲリユンの翼は、まだ体と確り繋がっている。持ち帰るなら、切り落とさなければ。

そしてリーダーであるリスニルは、その切り落とし作業にダントを任命した……というわけだな。

「ああ、それでは 行くぞ」

今俺達は、双頭龍ツヘミツ・テ・ヲリユンの近く……もっと言うなら仁王立ちで息絶えている龍の左足付近にいる。

……《断罪キロチンの落下刃》でスパッと切断された2つの首は左脚と右脚の間辺りに落ちている。体方向を向いているので顔は見えないが、

グロいんだよな……血が出てるし。  
でも、せっかく日陰があるんだから、活用しなきゃな。自然最高。

ダントは10数歩、ジヘミミ・エリコ双頭龍の後ろ、翼の付け根の付近まで歩き、詠唱を始めた。

「  
《セイント・サモン聖召喚》！！  
《エクスカリバー聖劍》ツ！！」

お、アレはクラス対抗戦で俺に使ってきたダントの【チカラ】だな。ダントの手に出現したのは、細やかな装飾が施された、白銀に美しく輝く一振りの剣。

「エクスカリバー」という名前のソレは、聖なる力が宿る「聖劍」。勇者エクシルが手にした一振りの普通の剣も、手に触れた瞬間聖劍へと変わったそうだ。

つまり、本来勇者が持つべきそれを、ダントは【チカラ】で再現しているわけ。《セイント・サモン聖召喚》で召喚した物も、「セイント聖」で再現された物なんだな。

ダントは、自分の身長より少し小さいくらいの比較的大振りな剣を真っ直ぐに構える。切っ先の真正面には、ジヘミミ・エリコ双頭龍の翼の付け根。

「  
ハアツ！！」

えらく長い間を空け、精神統一でもしてたんだろつか、閉じていた目をカツ！と開くなり、エクスカリバー聖剣を大上段に振り上げ、そのまま一気に振り下ろした。

スパン！！なんていう小気味よい音はしなかった。シイン！と「風が斬られる音」だけが聞こえ、その瞬間にはもうダントは振り下ろし終えていた。

少し間が空いて、翼が下にずれた。そのままズルズルとずれていき、最終的には、ドドオン！と小さく音を立てて、2枚の翼が地に落ちた。

此方から見える切り口は、肉を切ったとは到底思えない綺麗な断面。

……いやあ、エクスカリバーは包丁として使うべきだな。

冗談はさておいて。其処から少し時間が経ち、リスニルが持ってきていた袋に翼を入れてさあ帰ろうという時に事件は起きた。

「……………双頭龍の骸は？」

ラウスが、静かに問う。……………そういえば忘れてた。

今も双頭龍ツインヘッドドラゴンの死体はオブジェのように立ったままで。動く気配はない。

ちよっと迷惑だな。

「……！！……アルト＝シューバ。あの骸を塵に返し、天へと召させて欲しいのだが、できるか？」

なんだよ、リスニルも忘れてたのかよ……なんて思っていたら、遺体処理係を俺に押し付けてきたリスニル。まさか、心の声聞いたとか無いよな？ 無いよね？ 内心はらはらドキドキの俺。

「あーはいはい。どうせ俺は面倒事解決係ですよ。……面倒だから、一気に浄化<sup>やく</sup>するけど」

「……できるのか？」

リスニルではなく、エイナが俺に問いかける。待て待て、お前がそれを言うのはおかしくねえか？

今日まで俺の【チカラ】を何回見てきたんだ。とりあえず「出来るか」の以前に「やる」。

「普通に火の属性で燃やしても良いけど、後々臭くなるし……だから、今日は特別なのを使おうかなと」

「『特別なの』？」

変な物質でも撒き散らして綺麗なローカルド大平原（もう血で汚れてるが……）が汚くなったら大変だ。

そこで、「こついう時用」の魔法を使ってみることにする。元々人の火葬用だが、思いつきり出力を上げて龍を火葬だ。

「ああ……………まあこんな感じだ」

そう言つて、右腕を引いた俺。正拳突きストレートと同じような構えだな。だけど、違うのはこれから放つのが拳ではなく、魔法だということ。エイナは「？」を顔に浮かべているが、百聞は一見に如かず。見たほうが速い。

「『汝、清骸を灼く白き焰也。御魂を天へ送り届け、その役を全うせよ』」

今日は気分的な問題で詠唱をしてみる。

詠唱の文面からも分かる通り、火葬は火葬なんだけど、傷をつけずに火葬する。「昇天魔法アスセンションマジック」。

そして、本来の魔法の名前は

「《浄火ヒューリ・ファイア》ツ！」

引いた腕の掌に、白い粒子が集まってきたかと思うと、それは瞬間に小さな炎の様な格好へと姿を変える。色は、普通では考えられない白色。

それを俺が、腕を正拳突きの要領で軽く前に……………直線状に双頭龍ジヘミリー・ドラゴンが

入るように突き出し、炎を飛ばした。

無論、絶命していても動くことが無い双頭龍ジヘミニ・テ・ヲムクにそれを避けられるはずはなく。

避けてもらっても困るけど。遺体限定の魔法だし。

そしてそれが龍に触れた瞬間

ゴオツ！ とその

白火が一瞬で龍の体全体を包み込んだ。

白い火達磨になった龍だが、それも数秒。突然、その身に纏った炎と共にパツと消えた。

ローカルド大平原には、塵一つ残らない。あるのは、龍の血と足跡……生きていた証だけ。

「遺体処理完了……おい？ 何ポカーンとしてんだよ？」

「……すげえな、オイ」

「祖父の火葬をその魔法でもらったことが有るが……ここまで強大ではなかったぞ」

鏡を見なくても分かる、満足げな顔の俺。そして、振り返れば、啞然とした顔の「Nameless」メンバーが居た。ダント除く。エイナ、リスニルがそれぞれ答える。……答えになって無いけど。

《浄火》は、死体を炎で火葬する魔法。火葬だから炎の属性魔法。

元の世界の火葬と違うのは、炎を白いことと、10秒足らずで完了

するって所か。あと、塵1つ残さない。

この世界でもよく火葬は行われるらしく。「火葬屋」がこの魔法で骸を天へと召すらしい。それでも、さっきの龍の火葬みたいなか  
い物は火葬できない。人間が限界なんだな。

俺は魔力を強化、一発で15人ほど火葬できるほどのそれを双頭龍  
に打ち込んだわけだ。

……そういえば、この世界では「同じ魔法でも魔力を込めれば威力  
が違う」ことなんて無いって、言っただけ。

この世界の魔法は「その魔法を使える最低量の魔力」と、「その魔  
法の知識」が必要。最低量以上魔力を込めたって、上級魔法へと進  
化するわけじゃない。

そんなことするんだったら、さっさと上級魔法の知識でも頭に叩き  
込んだだけ！ ということ。

例えば、小さな切り傷ぐらいなら治る《治療》に多大な魔力を詰め  
込んだ所で、欠損が直ったりするわけじゃないって感じだな。

そうだったこの世界の常識を軽々と取っ払う【クリエイター】の汎  
用さは半端じゃないな。改めて思うけど。

双頭龍の翼を袋に詰め、いざエクシリアに向けて出発。

本当は、昨日野宿した場所でもう一泊する予定だったが、予想以上  
に早く討伐が終わった為、もう帰還することにしたのだ。

ところで、まだ明かしていなかった謎があるのに気付いた

のは、ソフィとラウスの会話からだった。  
なにやら「ご」に「ご」に話しているので、何だ何だと寄っていき、「  
何話してるんだ？」と聞いた。

「……………えーっと……………私達が倒された、ナイフのことについて話して  
たんです」

「いきなり現れて僕たちを倒していったから、悔しくて……………アレは  
何だった？」

最後のラウスの問いは、どうやら俺に向けて発せられた物のようだ  
った。

まあ、双頭龍ツヘミ・ト・リュウのあの砂嵐に耐えたのが俺だったから、ラウスは俺に  
問うたようだ。

……………そういえば、確かに不思議がっても不思議じゃないな。あのナ  
イフ……………まあ実際にはナイフじゃないけど。

「なんて言うかな……………アレは言うなれば「砂」かな。もっと言うと、  
滅茶苦茶固められた超硬度の砂の塊」

「砂の塊？」……………？「なんて、各々口に出さなくても（ソフィは  
出しちゃってるが）言いたい事は分かる。  
其処で、俺はもっと分かりやすくして言ってみた。」

「つまりだなー……グランが土を操って集め、それをウィンが風で乾燥、砂にして、砂嵐として大平原にばら撒いた……」

「……そして、同じくウィンがソフィ・マクエルに傷を負わせたあの《風槍》の要領で固め、それを大量に複製して発射したというわけか」

横からリスニルが割って入る。うん、正解とばかりに首を縦に振る俺。

「そういうこと。風だけだと小さな鎌鼬みたいになってダメージが効率的に入らないから、土……砂で質量を上げたんだろっな」

「……嵐の中に入れたことで、その砂のナイフたちは縦横無尽に飛び交い、私達を全方向から攻撃したわけだな」

次はダントが入ってきた。ハイ、不正解とばかりに右拳を握り締め、腕を引き、ダントの鳩尾に向かって渾身の力を使って拳を打ち放った。

後もう一発放てる正拳突き<sup>ストレート</sup>、3発目。

「オゴア!?!」

「それじゃ<sup>サンクチュアリ</sup>《聖域》を使つてたお前が倒れた理由が無いだろうがタコナス。……ウインは、ナイフを形作る土を包む風「自体を」操つて、俺達を攻撃していたんだ。それなら、もし相手が全方位防御しなくてもそのドーム内に砂があれば突破できる」

「……ウグ……なるほど……それでは、私の《サンクチュアリ聖域》は最初から読まれていたわけだな」

「いや、正確には「井お前の「井じゃなくて「俺の」だろうな。《サンクチュアリ聖域》連発してたの俺だし」

「……つまり私は、貴様が勝手に連発した《サンクチュアリ聖域》の所為で勘違いされて倒された、ということか？」

「そういうことだな。」愁傷様

「1発殴らせろ、貴様」

「40倍にして返すがそれで良いなら」

結局ダントは殴ってこなかった。何だ、残念だ。41発殴れたというのに。

まあ平和的解決は良いことだな。双頭龍も居なくなつて、無事に翼も回収できたし。金ももらえるし。

ギルダー良いな。夏休み終わつても、冬休みとかにやれば結構な収入が見込めそうだ。良か良か。

そうして俺達は双頭龍を倒し、「双頭龍の翼」を手に入れることに成功した。

だが、このときは気付かなかった。俺達と龍の戦いを、密かに見て

いるものが居たことに。  
ソイツは凶悪にして狡猾。悪知恵も働き、「魔王の参謀<sup>フレイン</sup>」と呼ばれるサタナー・エリアの住人。

その名は  
。

Side ヨライ

「これは面白い……特に、あの赤茶髪の少年……。我が魔王の為に、一刻も早く処さなければ」

「Nameless」メンバーが居た大平原、その近くの草むら。

其処に、「闇」が有った。大きさはバスケットボールぐらいの球体。しかし、色は双頭龍<sup>ソウカウリウ</sup>の血よりも黒い。

光など通さないその球体は文字通り「闇」だけで出来た物。その近くには、一回り小さな、しかし同じ「闇」で出来た球体があった。

「それでは、私が先ほど言った通りに頼みますよ。目的地はエクシリアにあるギルド、「Heroes Blood」ですからね」

流暢なヒュマン・エリアの言葉を話すのは、大きな「闇」の方だ。  
声は高く、女性的。

「了解です！」

そんな声に反応したのは、小さな「闇」の方だ。此方は大きな「闇」よりも少し低めな少年風の声質。

そして、その小さな「闇」がそういうと同時、その球体は上へと、グングン伸び始めた。

高さ160cmほどの楕円球になった所で、今度は細かく変化を始める。

ぐにゃぐにゃと所々が曲がり、擦れ、折れて……最終的に、その小さな「闇」は、エクシリアの一般的な服装をした、首まである黒髪の少年へと変貌していた。

首を回したり、腕をグルグルと回して感触を確かめると、大きな「闇」の方へ向き直る。

「どうでしょうか！」

「ふむ、よろしい。……あ、それと……これを持って行きなさい。お守りです」

今度は、大きな「闇」が変貌を始めた。球体右上部がグニグニと突き出され……その出っ張りは、やがて人間の腕となった。白く細い、女性的な腕。

そんな腕の先にある手が持っているのは、どうやら、ネックレスのようだった。

細いチェーンと、涙形の輝く宝石がついたネックレス。だがその全

部、涙形の宝石は勿論チェーンに至るまで、限りなく黒かった。

「おお……あ、ありがとうございます！ 綺麗ですね！」

黒髪少年と化した小さな「闇」は、そのネックレスを見て感嘆の息を漏らし、直ぐに大きな「闇」に向かい、ペコペコ頭を下げネックレスを手に取った。

それを首につけると、嬉しそうにはしゃぐ。

「ありがとうございます！ それで入って参りますね！ ハーセ様！」

「行って来なさい、ブレイタ。「全ては、我が魔王の為に」」

腕を引つ込めた大きな「闇」と、黒髪少年になった小さな「闇」の声が重なった。

その二つの声が、「ソレ」の始まりとなったのである。とある少年が「結末」へと向かう、「ソレ」へと。

第38話：アルトは、龍を天に召した。（後書き）

伏線になって無い伏線貼りまくりました。

後半の「闇」の話は、この章の後半部分へと繋がっていきますよー！

さて、第2章後半行ってみましょう！

第39話：アルトは、黒髪少年とすれ違った。(前書き)

もう年末ですね。クリスマス？ 何それ美味し(r y  
さて、「ネームレス」編後半戦です。張り切っていきましょう。

クリスマス・・・( ; ; )グスッ

第39話：アルトは、黒髪少年とすれ違った。

Side アルト

……というわけで、俺達はローカルド大平原から9時間掛け、やっ  
とこさエクシリアに帰ってきた。

復路は、全くといって良いほど何もなく、至って平和だったな。し  
いて言えば、後一発残っていた正拳突きをダントに食らわせたこと  
かな。

ダントのあの顔といったら……今でも笑いそうになる。あれだ、北  
の拳で「べし！」された奴の顔みたいな。まあ、ぐしゃぐしゃ  
にはなつて無いけど。

「アルト＝シューバ。私に対して何かものすごく失礼なことを考え  
てないか？」

「お前がそんなこと考えてるのが失礼だ。詫びろ」

「1発殴「40倍にして返すがそれでも良いならやっていいぞ？」

……クソッ……」

……後悔も反省もしていない。だってあのダントだし。ルビに「ま  
けずぎらい」と振られるあのダントだし。メタ発言は美味しい物だ。  
そうに決まってる。

またも、結局ダントの拳が喰ることは ころやうと格闘漫  
画みたいだが なく。俺の40発も消えた。何だ、残念。

さて、いい加減馬鹿なこと言っていないで、今の状況を説明しようかな。只今俺達は、エクシリア内、もつと言えは、ギルド「Hero's Blood」の中に居る。

右側の「掲示板」では、相変わらず幾多のギルダークエストが依頼内容を吟味し、自分に合う物を選んで……あ、今一人依頼紙を取った。左側の「酒場」では、「Hero's Blood」では何時ものことらしく、クエストを終えた屈強なギルダークエストが祝いだとはかりに酒を飲み干していつている。

「ガツハツハツハ！！ ギルダークエストは楽しいぜえ！ 食堂の仕事なんて忘れちまう！！」

仕事しろおっさん。

いやあ、左と右で雰囲気がいかに違う施設って見たこと無いな。右側に居るギルダークエストが、五月蠅いと左側に斬り込んでもおかしく無さそうなのに。

それは、まあ色々とあるんだろうな。詳しいことは面倒だから探らない。俺クオリティというやつか。

……で、中央の「受付」でも変化無く、可愛く綺麗な受付嬢達が3人、右、左、中央に分かれて可憐な笑顔を振りまいていた。

「……………綺麗」

俺の隣にいたラウスが、惚けたように呟いた。彼の視線の先には右の受付嬢。……ふむ、狼の魔人みたいだな。グレーの長い髪に、上に生えている髪と同色で三角形の耳が印象的だ。

狼らしく気品があつて、綺麗。ラウスが見惚れる気持ちもわかる。……うわ、あの笑い顔半端じゃないな。

「……………」

「……………!! 痛いッ!? ソフィ痛いから!!」

「……………私は何もやって無いけど?」

「絶対やってる!! その笑顔よりも笑ってる笑顔は間違いなくやつてる顔! 痛い痛い!! 止めてソフィ、謝るから!」

「……………」

俺とエイナ、ダントは3人そろって無言になつてしまった。いや、だって何か良く分からない事で2人が喧嘩してるんだぜ? ……ソフィが一方的だが。

ソフィは恐ろしく笑顔になり、ラウスの前で仁王立ちしている。ラウスはといえば、背中から来ているのだろう痛みによつてもがき苦しんでいるらしい。

……そういえば、この2人の関係ソフィとラウスって何なんだろうか。聞いたことなかつたな。

単なる仲良し……いや、もしかして幼馴染とか……まあ、いろんな可能性が当てはまるよな。暇なときに、話題として持つておくか。

……さて、ギルダーズチーム「Nameless」で、今までこの部の中に1回も登場していない奴がいる。皆分かるか？

……まあ分かるよな、分からなかったらネームレス編の最初から読み直してほしい。30%ほどマジで。

答えは、ウエスレイ・リスニル。エイナと同格の力量を持つ、長い白銀髪の女性剣士だ。ダントと同じ、Aクラス所属。

「Nameless」リーダーであるリスニルがまだ1回も登場していないということは……つまり……。

「これが目標の「双頭龍の翼ツウカウリウノトビ」だ」

「確認させていただきますね。」

はい、確か

に双頭龍ツウカウリウノトビの翼ですね。依頼完了となります、ご苦勞様でした！……本当に双頭龍ツウカウリウノトビを狩ってくるなんて驚きました！どうぞ、ギルダーズカードと報酬銀貨120枚です！ちゃんと小分けしましたので、ご確認くださいね！」

「ありがとう。私としても、結構危ない依頼だった。それでは、失礼する」

はい、リスニルは受付に行っていました。おトイレでも忘れ物でも、ましてや死んだわけじゃないぜ？

受付中央……銀髪の快活そうな可愛い少女（見かけだが）の受付嬢とやり取りをしていたリスニル。

リスニルが持つていた大きな袋から龍の翼を1対取り出すと、受付嬢は翼の先端を、例のあのボールへと突っ込んだ。

苦も無く翼の先端を飲み込んだハイテクノロジー・ボール。受付嬢は此方から見えないボールの表面を見て……納得する結果が得られたのだらう、またも可愛らしい笑顔を投げ掛ける。ボールから翼を抜いて受付の下へ置き、用意してあったのだらう銀貨と預かっていたギルダースカードをリスニルへと手渡した。

リスニルのほうはというと、受付からここまで無表情を貫いて戻ってきた。……表情があれば可愛げがあるってもんなのになあ……爺臭いな、このセリフ。

「……というわけで、報酬の銀貨だ。分け隔てなく、皆20枚ずつだな」

報酬は銀貨120枚……日本円換算600000円。ちょうど6で割り切れるので、銀貨20枚、円換算100000円だな。

子供にはちよつと多い？ ……考えてみよう、日本のアルバイト。職に、龍と戦う命がけの物があるか？ いや、ない。

反語で締めた所で、小分けにされた袋を受け取ったエイナが嬉しそうに声を出す。

「龍も狩れたし、金も手に入るし……いやあ、天国だなこは！」

「おいおい……確かにそうだが、一寸先は闇であり天国とは言えなくねえか？」

「いや、そうだがよ……俺はもつと一瞬一瞬を楽しみたいんだよ。だからこういうのでも非常に満足だぜ？」

「……そうかい」

やっぱり大剣使いだけあって、中々の戦闘狂だな、エイナ。XCMから分かってたけれども。俺は諫めようとしたけど、最後には諦めた。他人の性格だからな。周りに危害を与えない限り、そのままにしておくのが良いと俺は思う。

尚且つ友達だしな。こういうのも「エイナ自身」なんだから、無理に強制しちゃ駄目か。そんな権限も無いし。

「さて、もう夜になる。今日の所は解散としようじゃないか。お疲れ様」

今は午後7時を少し過ぎたぐらい。門限は9時だっていうから、エクシルの自由な校風が伺えるな。

子供を午後9時まで歩かせるとかどうなんだろうと思ったのだが、そういうえば此処はファンタジーな世界だった。魔法使って暴漢撃退、か。

全員がリスニルの案に賛成し、後は学園寮に直ぐ帰るかエクシリアの店を見て回るか……ぐらいか？

俺は前者を選択……しようとしたんだが、エイナにせがまれて店を回ることになった。……早く帰って寝たいんだが……。

「……じゃ、じゃあ行くか……っと」

俺が鬱情に浸って（……エイナには申し訳ないが）ギルドを出ようとすると、扉の向こう側から足音が近づいてきた。それは俺達の足音よりテンポが早く、終いには扉をダァン！と開けてギルド内に入ってきた。

「……！！ すっ……すみませんすみません！ 急いでいたもので！ ごめんなさい！」

……入ってきた人間は、エイナに肩をぶつけ、エイナがそれに反応する前にとつもない速さでペコペコ謝り出した。マシンガンか。ソイツは黒髪で、背は俺達より少し低い少年。本当に急いでいたらしく、肩で息をしている。

「……いや、大丈夫だ。こっちの前方不注意もあつたし、気にすんなよ」

お、優しいエイナ。手をヒラヒラと揺らし、「でも次からは気をつけるよー」と笑っている。

黒髪少年はもう一度俺達に向けて深々と頭を下げ、そしてギルドの中央……受付へと駆けていった。

……あんな小さい子もギルダナーなのか？ ……ここじゃ外見〓実年

齡のパーセンテージは元の世界よりも低いし、有り得ると言えば有り得るけども。

「何してんだアルト、さっさと行こうぜ？ …… もしや、アイツに一目惚れとかねえよな？」

「 …… 俺にそっちの気が有ると本気で思ってるんなら、エイナと言えど遠慮は出来ないが …… 」

「 …… すまんかった 」

…… 後悔も反省もしている。確かに中世的な顔で、少年と思ったのもスカートではなくズボンを穿いていたからなのだが。ちよつとだけ首をコキコキすると、笑っていた顔が一瞬で消え、エイナは素直に謝ってくれました。平和が一番だね、全く。 …… エイナ、謝るのはこっちだ、すまんかった。

俺が結局門限の9時ぎりぎりまでエイナに付き合わされた、その翌々日。つまり2日後。

何となく、俺はエクシリアに出ていた。気分転換だな。んで、いつぞや出てきたライオン顔魔人のおっさんに顔を覚えられてみたいのでアポロ（林檎みたいな果物）を一個貰い、ぶらぶらーっと平和を

楽しんでた。……ああ、こういう事を言っただな、暇死するつて。そして、アポロを齧りながら歩いていると、俺の視界には「Her o's Blood」が。……なんか良い依頼クエスト無いかな。

そんな訳でギルド内に入った俺。ああ、まあ2日前と変わらず、いつも通りの風景らしいな。

右にも左にもギルダ。中央には天使達天使達。俺は左側に用は無ないし、右側の「掲示板」へ向かった。

「……まあ、いつも通りといえば、いつも通りだよな……」

ギルドの常連つぼく呟く俺。2回しか来た事無いんだけどな。

さて、俺個人の「Dランク」といえば、やはり「ラリ茸」とか言う途轍もなく食いたくないキノコの採集やら。

「ウイングラビリア」という、風のように走る兎の捕獲ぐらいだった。……戦闘系はどうした、そんなじゃ満足できない。……完全に自己中心的思考だけでも。

そして、「Nameless」のランクであるBランクのエリアを見たとき、俺の頭に稲妻が走った。これは比喩。もっと言えば暗喩。

これは  
？　そう思った俺は直ぐに、受付……空  
いている真ん中の受付嬢へと駆けた。

エクシル魔法学園の寮は、学年ごとに建てられている。

そして、部屋はその学年での順位で決定される。入り口に近い順から1位、<sup>トップ</sup>2位、<sup>セカンド</sup>……そして279位、<sup>ワースト</sup>280位と。

だから、<sup>トップ</sup>最高位であるダントの部屋を見つけるのは簡単よりも簡単だった。意味わからんけどそうなのだ。入り口入って直ぐだから。

「おい、ダントー？」

ダントの部屋の扉を見て、右拳でコンコン、と紳士的に、あくまで紳士的にノックする俺。

……おいおい、ダントに関連したのなら何でもぶん殴ると思っただら大間違いだぜ？ 俺だって良心は有るのだ。というか良心しか無いぞ？

2回扉を叩き、……はんのうがない。ただの……とか言う冗談は置いていて……本当に反応が無いな。

もしかして、寝てるのか？

「……<sup>アローザルスピーカー</sup>《覚声》、領域はこつこつこつして……よし。……おい、負けず嫌いー？」

俺はちよつとだけイラツとし、それを押さえ込んでもう一度確認の為に声を掛けてみる。

ただし、ちよつとだけ魔法を使ってみた。風属性中級広域攻撃魔法、

<sup>アローザルスピーカー</sup>《覚声》。

この魔法は元々、自分の声を増幅、風の弾丸として相手にぶつけるというワ　ヤンも真つ青の魔法だ。

ワギヤ　と違うのは、その速度だな。《風針》ウインドニードルには劣るが、結構な速さだ。……　ギヤンの事は、グーグ　先生にでも聞いてくれよ。

ただこれは攻撃魔法。出来るだけ扉を傷つけない。……のだが、其処は俺。【クリエイター】で攻撃力を失くし、拡声器代わりにすること何ぞ朝飯前。

そこで指向性も変更し、とりあえずダント（の部屋）をピンポイントに狙う。

……え、もうそれは《覚声》アローザルスピーカーじゃなくね？　ってか？　……細かいことは気にしない精神だ。若人。わんぱく

とりあえず声をかけてみた。さて、反応してくれるか……。

最初に、ガバツという音が聞こえた。……ん、何だ？　でも、居るのは分かったな。外出中じゃなくてよかった。

そして次にダアンツ！　という何かをぶっ叩くような音が聞こえた。なんたる、何か殴ってるのか？　筋トレ中？　それは失礼しました。

最後にダダダツ！　と、床の上を走る音が聞こえて

扉が、ガチャリと開いた。

出てきたのは、言わずもがなダントである。今は金髪を下ろし、……なんだ、オールバツクじゃない方がイケメンだぞ、コイツ。

服装は、（この世界では）ラフな格好。いつつも制服だから、結構新鮮だな。あ、俺も私服だぜ？  
額には青筋を浮かべ……今にも怒りそうな表情で、彼は口を開く。

「五月蠅いぞアルト」シューバ！ 貴様は常日頃から目上の相手に対する礼儀というものを学べ！ 話はそれからだッ！」

非常にご機嫌が悪いようで、案の定怒ってくださいました。はいはい。何時ものダントさんですね分かります。

ダントと扉の隙間からチラツとダントの部屋を見てみたが……うん、俺の部屋と変わらない。安心。

どの位の音量だったかって？ ……100dBデシベルぐらいだから、電車が通ったときのガード下級の大きさだな。

だからダントには俺の声が、「おおおおおいっ！！！！！！負けず嫌いいいい！！！！」てな感じで聞こえてた。はず。

「目上の相手」って言うのは今日は見逃してやるよ、次は無えぞ？ ……それよりな、俺にも事情があるんだよ。真昼間から扉を隔てた向こう側の相手の声も届かないくらいに熟睡しているんなら、最高位レベルらしく鍛錬でもしてろ」

そんなダントを死んだ魚のような目で見上げ、吐き捨てる俺。不条理？ 美味しいのそれ。

非常に的を射た（俺視点）指摘は、確実にダントのハートを流鏑馬やいばめで射抜かれる板のようにパカーン！ と割り（俺視点）。

それでも怒りが収まらないのか、青筋は浮かべたまま、大きなため息について再び口を開く負けず嫌い。

「用件は何だ。簡潔に言え、アルト」シューバ」

「個人的に受けたいギルダースクエストが有ったんだが、どうかと思つて」

素直に従い簡潔に言った俺は、ポケットの中をガサゴソと探る。えーと……有った。そうやって俺が取り出したのは、四つ折の紙。

怪訝な顔をしているダントに向かい、その紙をパツと開く。中に書いてあるのは「Wanted!」と上部に赤で大きく書かれた紙。その横には小さく「Copy」と書かれている。

「これは、……依頼書か？」

大正解。依頼書の複製だ。<sup>コピー</sup>こんな風に、「Heroes Blood」では受付に頼めば依頼書のコピーがもらえる。

これは受付嬢と話せるチャンスでもあり、下ランクギルダーの中にはそれを求めて何回もコピーを貰う馬鹿も居るとか。依頼こなせよ。

話が逸れた。そして言いたかったことを言えていなかった。

「そつ。この依頼は

「大悪魔<sup>デーモン</sup>」の討伐だ」

第39話・アルトは、黒髪少年とすれ違った。(後書き)

とりあえず、年内にもう1回は更新したい……っ！  
精進します。それでは。

第40話：アルトは、とんでもない物を目にした。（前書き）

少し遅めのあけましておめでとございます！　そして遅くなってもすみません！

お久しぶりの夜来です！

さて、今回も読者様からネタをもらいました。

reinさん、勝手に使わせていただきます、ありがとうございます。  
す。

## 第40話：アルトは、とんでもない物を目にした。

Side アルト

ダントに依頼の事を話してから数十分後。俺達は、寮の広間へと集まっていた。いろいろ雑誌とかソファとか置いてあって、憩いの場だな。

「俺達」というのは勿論「Nameless」のことで。俺、エイナ、ダント、リスニル、ソフィ、ラウス。6人全員集合完了つと。テーブルを囲んで座る。円陣みたいだな。

「それでは、アルト<sup>クエスト</sup>シューバが持ってきたこの依頼。どうするか決めたいと思う」

リスニルがそういうなり、ガタツと立ち上がって力説する者が1人。このチームに「力説」する奴なんか、普段は1人しか居ない。

「俺は賛成だぜっ！！ 聞けば「大悪魔<sup>デーモン</sup>」の討伐らしいじゃねえか！ 名前だけで強そうな相手と戦えるなんて、剣士の血が騒ぐぜっ！！」

「……やけに元気だよな、エイナ」

「おいおいアルト、よく考えてもみるよ。だって「大悪魔」だぜ？

「『大』悪魔」！！ 名前に『大』が付く奴は、大抵普通より大きかったり強かったりする奴だろうが！」

……いやさ、別に俺無気力って訳じゃないんだよな。だって依頼持ってた俺だし。これでも結構ワクワクしてる。

普通じゃないのはエイナのほう。気合入りすぎだろ……。瞳にサラマンスター（火トカゲ。決して ケモンでは無い）が乗り移ったかのように燃えてるな。

……まあ、エイナの「『大』付けば強い」理論はあながち間違っちゃ居ないけどよ……。それでもこの燃えようは半端無いな。血液煮えたぎってそうだ。

「……はあ。依頼は先ほどエイナ「ユーグリッドが言った様に「大悪魔の討伐」だ。サタナー・エリア近辺、ヴァードの丘に出没したらしいソイツを狩ることが、今回の依頼らしい」

ガフリア国で1番サタナーエリアに近い この場合の「近い」というのは地理的な話だけでなく、サタナーの魔獣が沢山出没すること ヴァードの丘。人間は丘を避けて住んでいて、時たま丘を抜け出してくる魔獣たちがいるが比較的弱く、簡単に退治出来たらしい。

だが、今回の相手は格と言うか、レベルが違った。「魔人」である大悪魔は、『悪魔』という種族の中でも上位のレベルだ。下位互換である小悪魔や悪魔でも厄介だというのに、大悪魔となると全く歯が立たない。そこで、「Heroes Blood」に依頼したと大悪魔を倒し、ついでに丘に蔓延る雑魚魔獣を倒してくれたら追加報酬が出るという。……ざっと、こんなもんだ。

「あのー……その大悪魔って言うのはどういう魔人なんですか？」

「……それは僕も知りたい」

おずおずと、ソフィが質問。それに続くようにラウスが言う。まあ、そんな質問あつても不思議じゃないな。なんせ、大悪魔の容姿は一定じゃないんだから。

ある時は、身長3mを越す角の生えた動く人骨。ある時は、体長5mほどのネズミ。ある時は、身長2mほどの人狼ワウルフだったり。まあ様々。

一説によると、『悪魔』という種族は「変化」を得意としており、1個体で変化しやすい、または力を出しやすい姿が違うのだとか。なるほど納得。

「今回の大悪魔は……大きな角の生えた骸骨スケルトンらしい。大悪魔の姿としては、一般的なタイプだ」

リスニルの言葉からも分かるように、幾ら姿形が様々と言っても同じ姿になる奴は沢山居る。さっき言った骸骨がその典型的な例だな。他にも、頭も良くて「魔王の参謀ブレイン」とも揶揄されることが多々有るという。……種族自体を参謀と言いつて、どんだけ頭良いんだ、大悪魔。

魔法を使うし、身体能力が良い。図体がでかい為、油断してやられる奴も居るらしい。……まあ、要するに強いんだな。

「それでは、今回の依頼を受けるか受けまいか決めよう。受けたくない者はいるか？」

いきなり直球だな、リスニル。受けたくない奴って、イコールビビりだと思われそうなものだけでも。……まあでも、手を上げたりする奴はいなかった。よかった、ビビりは居ないようだ。安心安心。

「大悪魔なんて、滅多に会う可能性がないですからね！ こういう機会に見ておきたいです！」

「……ソフィに同意。……倒せば、何か良い物が手に入るかもしれないし」

「……居ないようだな。それでは、この依頼を受けよう。今日は時間があるし、すぐに「Heroes Blood」に向かおうじゃないか」

「そうだな、他のギルダーに取られる可能性もある。急ごう」

ソフィ、ラウス、リスニル、ダントと続き、皆が腰を上げる。俺は依頼を持ってきた張本人だし、エイナは、最初からやる気満々だ。

……間違えたな、「殺る気」だ。

……今思えば、「Nameless」はホントに肝つ玉座ってる奴しか居ないな。ソフィなんか見た目結構弱気そうなんだけど、ツェヒミ・ド双頭龍戦で果敢に攻撃してたし。この世界、人は見た目に寄らないなあ。

……そうそう、依頼書のコピーを貰ったからといっても別にそのチームで保留にしたわけじゃない。他のチームに取られる可能性もあるんだよな。

じゃあ何故その場で依頼を受けてこなかったのかというと、まあそりゃチームの同意を得られてなかったのと、1度受けた依頼は達成するかリタイアするかしないと終われないからの2つだ。リタイアすれば当然ペナルティで金が減ったり、まあ色々あるからコピーを貰うまでにしたわけだ。

……お前なら金を増やせたり何でも出来るだろ？ ……分かってないな、そこはお前……く、空気を読むんだよ。

かくして「Heroes Blood」にやってきた俺達。

俺はすぐさま右向け右、掲示板の方だな。さてさて、肝心な「大悪魔討伐」の依頼は……っと。

「お、残ってる。ラッキーラッキー」

幸い、その依頼は他のギルダースチームに取られる事無く。「copy」の文字が入っていない「Wanted!」の文字だけが上部に刻まれた紙が微かに揺れていた。

そして、糊か何かで止められていたその紙を手を取った俺。リスニルに紙を渡す。

「……あつ！ 双頭龍殺しの皆さん！ 今回も依頼ですか？」

受付に近づくと、受付嬢……今回は短い金髪の元気な少女（見た目が気付いてそう俺達に声を掛ける。うん、まあそうなんだけど……ん？

なんか、この人おかしい事言っていないか？

「……？ 済まない、私たちのチーム名は「Nameless」のはずだが？」

「知ってますよ！ ですけども、学園生徒とはいえクエスト初挑戦で双頭龍に立ち向かって成功した例はないですから！ 尊敬を込めて、です！」

「……な、なるほど」

……なんだろう、この妙な感じ。恥ずかしいやらむず痒いやらでなんか不思議だ。ちょっと横を向いてみると、エイナ、ラウス、ソフィと、一様に複雑そうな顔をしていた。ダントは……おいおい、

まんざらでも無いって感じだな、おい。リスニルだってちょっと戸惑ってるんだから、こういうときには嘘でもそういう顔をしろよ……なんか論点がずれた。

「まあ良い、とりあえず、この依頼を受けたいのだが」

「はい、……えーと、大悪魔の討伐依頼ですね！ この依頼、とっても魅力的なのに誰も受けないので不思議に思ってたんですよ！」

リスニルが受付台に依頼書を出すと、金髪受付嬢は何故かとても納得したような顔をしてそれを受け取った。

それにしても、「誰も受けない」……か。まあ確かに魅力的だけど報酬が高めだし。Bランクにしては強そうな相手だから、誰も受けなかったのかな。

いや、それ以前に相手がサタナーの大悪魔って所に問題があるのかな。「魔王の参謀<sup>ブレイン</sup>」の名前は伊達じゃないだろうし、負けてサタナーに引きずり込まれたら、何されるか分かったもんじゃないし。死ぬよりも酷い目にあうかも。怖い怖い。

「……それでは、ギルダースカードを預からせていただきますね！」  
リスニルがギルダースカードを出した所で、俺はある感情に囚われた。

それは、15年前に俺がこの世界で目覚めた直後。あの時に感じた赤ん坊の泣き声と同じような感覚。それは。

「……エイナ、ちょっとトイレ行って来るから」

「おう、行って来い行って来い」

トイレでした。そんな大層な物じゃないが人間の生理現象だから結構大事だよな。確かトイレ我慢し続けるとある時ばっくり逝くとか聞いたことあるな（注：ありません）

そんな訳でエイナに声をかけ、掲示板の奥にある通路へと向かう。通路の側面にトイレはあり、通路の突き当たりは事務所らしきところらしい。

受付の奥にも扉があり、其処が事務所に繋がっているらしい。やっぱり受付嬢だけ働いてるわけじゃないのか。そりゃそうか。

まあ、男のトイレシーンなんて完全にそっち方面だから割愛だけど。

数分後、手洗いを済ませた俺はハンカチで手を拭きながら扉を開け、さっさと5人の元へ戻ろうとしていた。

しかし、トイレは現代に近い形なんだよな……不思議だ。神様のな何かが配慮してくれたといわざるを得ない。……まあ、【クリエーター】で形変えりゃいい話なんだけど。

さて、俺が出て行こうとすると、ふと通路の右 奥に、人影が見えた。……あれは、前にリスニルの対応をした銀髪の受付嬢か？

受付嬢は通路の奥、突き当たりにある事務所への扉の前に立っていた。多分掲示板の辺りからは柱が邪魔して見えないが、此処からならギリギリ見える。

何やってんだろ……可愛い受付嬢だから、気になっちゃうのは男性というもの。俺はこういうところだけはテンプレじゃないし。これはこれで良いけど。

……もしかして、知られちゃいけないスキャンダルの何かか！？  
これは酷い、直ぐにカメラを……違うか。

数秒後、俺はトイレの前で立ち止まったことを心底後悔した。

「ふー……危なかったのう……もう少しで制限時間タイムじゃった……」

いかにも老婆といった口調でそう言い放ったのは、紛れもない、先ほどの受付嬢だった。但し、姿はその限りでなく。銀髪と服装はそのまま、曲がった腰としわの寄った優しそうな顔……服装の所為で時代錯誤と思われるそうなお婆さんが、先ほど2秒ほど前　まで受付嬢が立っていた場所に、入れ替わったかのように佇んでいたのだ。

つまり 受付嬢が立っている 受付嬢が一瞬ピカツと光る、俺は眩しくて思わず目を瞑る 目を開けると、其処には同じ髪の色、同じ服装をしたお婆さんが。

という事が行われたわけだ。つまり、つまり……

ガツ、とそんな音がした。俺は無意識のうちに、トイレのドアを開けてしまっていたようだ。通路に響く、大きな音。

それは当然通路の奥に居る老婆にも聞こえているわけで、俺には、老婆が此方に振り向く無音のはずの瞬間に、漫画のような「ギギギギ……」という錆びた金属のような音を聞いた。確かに聞いた。老婆がこちらを見て、驚いたような惚けたような顔をして、一瞬の後に此方へと向かってきても俺は動けず。また一瞬の後に俺は首と肩を掴まれ、完全にホールドされた。

「見たか？」

「はい」

「誰にも言うなよ？ 言えば……分かるな？」

「はい、……ちょっと1つ質問いいですか」

「なんじゃ？」

「貴女のお歳をお聞かせ願えますか」

「75歳です！ それでは！」

ヤクザだ。完全にそっち方面の人だ。多分【威圧】……みたいなチカラ持つてる。絶対持つてる。

最後は間近であの銀髪少女の姿に戻り、いつも通りの可愛らしい笑顔で、胸を当てられながらも少女とは思えないような数字を提示し、受付嬢は通路奥の扉を潜っていった。

俺は動けず、数秒……いや、数分経っただろうか。多分魂とかいろいろな物が抜け出たような顔で5人の元へと戻っていった。……トイレ後で本当に良かった。

「どうしたよアルト。なんか色々抜け落ちてるぞ」

「ああ……まあ色々。で、受付は終わったのか？」

「終わったぜ、明日の正午にやっぱり正門集合。ちゃんと準備を整えとけよってさ」

確かに、他のみんなはもう既に居ない。買い物とかの準備に取り掛かったんだろう。エイナは待っていてくれたのか。優しいエイナだ。俺が  
もし俺が5歳の子供なら、直ぐにエイナに泣きついているな。

……なんか、ため息しか出ない。あんなもん見ちまったもんなあ……  
……こうなってくると、他の受付嬢全員がああいうことになってるのか、とか思えてくる。

流石にそれは無いだろうが……多分あの方は、こうして老後を幸せに暮らしてるんだな。よし、もうこの話はヤメヤメ。

「オーケイ……エイナもちゃんと準備しとけよ」

「おう……本当に大丈夫かアルト、心配なんだが」

「ああ、もうなんか様々な物を割り切った。大丈夫だ……夕食一緒に食おうぜ。じゃあな、また後で」

「お、おう……」

エイナの心遣いは非常に嬉しいが、俺も俺ですること有るし、尚且つ、早く此処から逃げ出したい……そんな訳で、今日は一旦帰るところにした俺。

代わりと云ってはなんだが、夕食を一緒にとる約束を取り付けて、俺は颯爽と「Hero's Blood」を後にした。ギルド内に残されたエイナは、なんだか困惑したように返事をして、明日に向けての買出しに向かったのだとか。夕食に関してはまんざらでもないような顔をしていたらしい。

……夕食の件は、ちょっと独りだとやってられない感じに支配されたので言っただけというのが本音なんだ……すまん、エイナ。

《 へえー、明日正午か! 》

第40話・アルトは、とんでもない物を目にした。(後書き)

ロリババ……ゴホン。

それでは本年もよろしくお願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2837w/>

---

チートな俺は、Gクラス。

2012年1月6日23時16分発行